



名人
名作
人形
淨瑠璃

名人名作人形淨瑠璃



菊花霜に驕るの秋皆様にはいよく御清
 祥に被遊お欣び申上ます。日頃はなみ
 くならぬ御厚情を資はり有難く御禮申
 上ます。

さて。みなさまの文樂座もこの絶好の季
 節に入りて茲に勇躍晩秋を飾るにふさは
 しき絶体的名狂言「假名手本忠臣藏」を
 大序より七ツ目まで打通しにて上演いた
 す次第で御座ゐます。これに巨頭精銳の
 妍を竭し寔に醍醐味の極致を魅了してい
 たいくもの、晩秋の一日まづこの郷土藝
 術の妙諦に蕩酔されんことをお希申上ま
 す。

昭和五年十一月一日

四ッ橋

文樂座

昭和五年十一月一日初日

初日・二日目 午後二時 開幕
 三日目より 午後三時 開幕

二日目よりの

御観覧料

- 一等椅子席 御一名——金三圓
- 二等席 御一名——金一圓五十錢
- 三等席 御一名——金八十錢
- 一等お座席 御一名——金三圓五十錢

一等お座席 一等椅子席 は五日前より

前賣切符發賣致居候

前賣切符 南四七一一番
 専用電話 七四〇八番
 電話南 三七八八番

お草履の準備は御座ゐますが、靴、草履
 はそのまゝ御入場出來ますからなるべく
 靴、草履でお越しを願ひます。

誌本カトツ廣告御掲載希望の向文樂座編輯部へ希す

あゆる印刷所 永井日英堂印刷所

大阪市西区土佐堀一通丁
 長三〇〇番
 四九四番
 四九九番
 四九四番
 (44) 堀佐土

當名殿初八年五月八日田初日
神田多路平路(時海)神田(平)路(時海)神田

鳴樓 交樂齋 香南 乙巳八

交樂齋



夫

本朝代名家

依撰子存
瓶大まき

翁

依

便

急

急

急

急

急

急

急

急

急

急

急

急

腰箱 對太夫

腰箱 對太夫

腰箱 對太夫

腰箱 對太夫

腰箱 對太夫

腰箱 對太夫

腰箱 對太夫

腰箱 對太夫

腰箱 對太夫

腰箱 對太夫

腰箱 對太夫

腰箱 對太夫

腰箱 對太夫

腰箱 對太夫

武田 依

武田 依

武田 依

武田 依

武田 依

武田 依

武田 依

武田 依

武田 依

武田 依

武田 依

武田 依

武田 依

武田 依

結

結

結

結

結

結

結

結

結

結

結

結

結

結

結

結

結

結

結

結

結

結

結

結

結

結

結

結

●人形上りながる



名人作 人形淨瑠璃集目次

國性爺合戦 伊賀越道中双六
 勸進 妹背山婦女庭訓
 攝津合邦辻 生寫朝顔話
 檀浦兜軍記 釋迦如來誕生會
 假名手本忠臣藏 傾城反魂香
 恭太平記白石噺 伊勢音頭戀癡及
 奥州安達原 八陣守護城
 戀娘昔八丈 双蝶々曲輪日記
 道中膝栗毛 三十三所靈坂寺
 本朝廿四孝 戀飛脚大和往來

淨瑠璃沿革史

人形芝居について
 清水町濱興業の賑ひ
 維新前後の淨瑠璃界
 義太夫生る



人形芝居について

◇人形芝居發達のこと

◇文樂座なり立のこと

◇人形頭説明のこと

今から見ては簡單なものに相違なかつたけれども、後世人形と呼ぶ種類の物は、日本でも遠い昔からあつたのであります。其れは傀儡子に

始まつたもので、傀儡子の名は已に十餘年前に『和名妙』や『新猿樂記』『雲州往來』に見えて居り、傀儡子の輪廓は、王朝末期の文章博士大江匡房の『傀儡子記』に傳はつて居つて、傀儡子は遊牧の民で、男は狩を表業に、木偶や土偶を舞はせたご御座います。其當時に、四三ご云ふのが傀儡を舞はせた事が『散木奇歌集』に見えて居ります。手遣ひの幼稚な物には相違なかつたので、多少の糸が附いて居たかも知れない、ご云ふ想像は出来ない事もありません。其後傀儡子は、門附か辻立で命脈を維いで居たらしく御座います。浄土宗の起るに至つ

て、傀儡子の大方は浄土宗の行者になり、特技の人形を舞はして勸化の効を顯はしたもので、所謂首掛け芝居の形式ではあつたが、佛菩薩の本縁や、寺社の縁起、即ち謂ふ所の本地物を語る説經と結んで、人形舞はしは自然と諸國に擴がる様になりました。之れが人形舞はしの擡頭する遠因だつたと思はれます。而して、其内には例の三味線が渡來して來るし又お粗末ながら淨瑠璃といふものも出來た、即ち京都の目貫屋と云へるが西の宮から人形舞しを誘ひ出して、茲に始めて三味線に上した淨瑠璃、又それに合せて舞す人形と此三者が綜合される事に成りました

たのが、慶長年中、即ち徳川の始
頃です。忽ちにして京では四條五
條の如き或は江戸の堺町さか葺屋
町さか、櫓も立つて此人形芝居も繁
昌したのであります。順序として當
然此頃には最う人形の類も増しては
ゐたのですが、然し舞臺などは固ま
り無く其人形で首があるばかり、
遣ひ手の手が人形の着物の裾から袖
口へ出されて舞されたもので、大阪
の石井飛彈櫓も始て其手足の工夫も
したものです。由來此櫓號なる
ものは人形師の所有なりしを後に淨
瑠璃太夫の勢強くこれを専らにす
るに至つたこの事。さて竹田のから
くり人形が出来たり、野呂松のの

る、人形が出来たり、次郎三郎が
おやま、人形を使つたり、殊に彼
の元祿時代になるに大阪へ義太夫が
現はれて竹本座をはじめ、又近松翁
が現はれて此義太夫節のために人形
芝居に最も適切な名淨瑠璃を澤山書
き卸し、しかも其人形遣ひとして
は辰松八郎兵衛さ云ふ名人が出て、
今の出遣ひの如きも此人によつて始
まつたさ云ふのが、始めは此人形を
下の幕の上の顔隠し幕の間から出し
て遣つてゐたので、畢竟人形の動
くに随つて自然遣ひ手の身体も動く
之が見好くないから黒幕の蔭に黒頭
巾して遣つてゐたものを、愈々今度
八郎兵衛が袴を着て手摺を離れ無

量の手妻を遣ふに其全身少しも亂る
事もないさとい評判を取つたので
あります。加之他方また豊竹座の出
來るあり、即ち西と東と同じ大阪の
地に於て太夫三味線、作者から人形
遣ひさ全く競争的に繁昌を來した
のですから、從つて其進歩發達は眼
覺しいものがあり、道具建から人形
衣裳總ては美びしく立派やかな靈
し、舞臺大幕の上に小幕を引くやら
山簾を本山の張ぬきにするやら、
太夫も出語りするやら、例へば人
形にしてから先づ眼も動き、指先
が動き、享保の末には竹本座「大内
鑑」の與勘平彌勘平が腹をふくらま
し、元文になるに豊竹座「武烈天皇

儀」の佐手彦の眉を動かさしはじめると、非常に發達を遂たのであります。即ち言を換れば當時名人の遣ひ手も輩出した次第で、中にも吉田文三郎の如きは享保始め竹本座の「國性爺後日合戦」に初出勤錦舎の出遣ひに片手の暗業を示して以來さいふものは實に此人形について工夫を凝らしたもので、其一例を擧ぐればある「夏祭」の人形に始て帷子衣裳を着せるさか、或は其遣つた一寸女房おたつに桔梗の帷子黒繻子の前帶淺黄の綿帽子を着けさせた如き、今なほ歌舞伎で真似てる所事實此時代さいふものは線盛んを極めて歌舞伎はあれど無いも同然、帷は林立

して其眞負は寝まじい有様であつた云ひます。江戸まで矢張之と同じく、慶長の昔薩摩澤雲が淡路の人形舞しこ此人形芝居を始めて以來、各派の淨瑠璃芝居が誠に繁昌してゐたのです。享保に一端大阪の義太夫芝居が入つて來てから云ふものは又漸次に其勢力範圍を成つてしまひ御案内の同様に歌舞伎狂言などは全く此人形の眞似のみ演てゐたものであります。前云ふ辰松も三郎兵衛も共に江戸へ來て其妙技を揮つた事があるのです。兎も角も此人形芝居の全盛は凡そ百年間、寶曆から明和以後になる。漸次本場大阪でも亦江戸の方でも其勢力は歌舞伎に奪はれ、

結局あの大坂の新興北堀江座すらも大した事には成らなかつたを見るべきであります。然し此間に在つても人形は其一個に所謂黒坊四五人も掛かり、或は出遣ひ二人も掛かる事、其他太夫の引拔早替などのケレン早業は愈々進歩を見せたので、而も操芝居としては前述の如く、其後は盛んならぬ各座の起伏消長が今日に至れり云ふ次第で、それも今や獨り當大阪の文樂座が現存するのみで他には語るべきが無いのであります。さて當文樂座は百餘年の昔淡路の人植村文樂軒が大坂高津區に櫓を起したのに始まり、一時中絶しましたのを十七年終に東區淡路町五丁目

御靈神社境内へ移つたのであります。以來發展を來たしてゐましたが大正十五年晩秋不慮の災禍に喪失し其後本城を見物中このほど四ツ橋に新築いたしました、而も日本にこれ一座ぎり云ふのは心細い次第で、彼の能樂と同様日本の古典的舞臺藝術として、之を永遠に保存すべき、怖らくは國民的義務もあらうかご考へます次第で御座るゐます。序でながら此人形は大體・首・胴・手及び足の四部に分ける事が出来、而も其首あるひは頭につきましては勿論大まかではあるが大體の役々が定まつて居ります。例へばげんびし（檢非

違使）と云ふのは、竹本座の『用明天皇職人鑑』の時檢非違使の役に使つたから此名が出たので其後は廣く世話時代共に用ひられて、例へば『寺子屋』の源藏、『妻八』の八郎兵衛、或は『千本櫻』の銀平、『陣屋』の盛綱のごとき、なほ之の眼目なるはあの盲兵助などに使ひます。今では實盛なども之です。然し南水漫遊などを見るに別になつて居るやうであります。それから矢張南水漫遊には素盞鳴さありますのが今の所謂孔明と呼ぶ頭で由良の助などにも使ふ事があること云ひます。兎もあれ菅相丞や『薄雪』の兵衛、あるひは『紙治』の孫右衛門などを勤める首で、矢張竹本

座へ近松が書いた『日本振袖始』から出た人形だと申します。それから若男といふのは源太さと呼んでゐるごか聞きますが持役としては『朝顔日記』の駒澤に『太十』の重次郎、その眼隅へ張を入れ其眉を引きつめるご『阿古屋』の重忠に成つたりし他種類の若男は敦盛の役などをすると云ひます。又所謂おやまの中にはおむすこと云つて之は勿論娘の事で『野崎』のお染『壺坂』のお里『妹背山』のお三輪などを勤めるのもあります、南水漫遊に傾城さあるのも多分のご同じものかご考へます。斯んな具合で今云ふ南水漫遊には凡そ廿六種の人形品目が擧げられて居るのであります。



仙壇女道行の段

シテ 豊竹 駒太夫
 ワキ (竹本 貴鳳太夫)
 ツ 豊竹 綾太夫
 レ 竹本 陸路太夫
 竹本 播路太夫
 鶴澤 歌助
 野澤 友造
 鶴澤 八助
 鶴澤 友若
 友作

前 國性爺合戦

仙壇女道行の段

樓門の段

獅子ヶ城の段

この床本が書卸されたのは正徳五年十一月一日初日の竹本座で、作者は近松門左衛門。その時の名題は『母は日本國性爺合戦』でありまして、これより先にこの國性爺を材としたものに信濃椽の正本『國仙野手柄日記』があります。元禄十三年頃錦文流の作とあります。この狂言は未曾有の大當りをこつて、三年越十七ヶ月間打通して興行した名作であります

その後享保二年二月十五日初日で國性爺後日合戦が、仍且近松翁の作で上場されました。この時人形遣の名手吉田文三郎が始めて出演し、錦舎の人形を片手にて出遣大好評を博しました。この時より大幕の上に小幕を引くことが始まりました。これか水引幕の始であります。『樓門の段』は三段目の口で竹本内匠理太夫が初演『獅子ヶ城の段』は三段目の切で初演は竹本政太夫であります。全五段の内この獅子ヶ城は最も有名で歌舞伎でも九代目團十郎の當り藝となつたものです。

樓門の段

明朝思宗皇帝の時、右將軍李踏天が

| | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 鶴澤 | 鶴澤 | 鶴澤 | 鶴澤 | 鶴澤 | 豊澤 |
| 友衛門 | 友衛門 | 友衛門 | 友衛門 | 友衛門 | 猿糸 |
| 叶太郎 | 叶太郎 | 叶太郎 | 叶太郎 | 叶太郎 | 叶太郎 |

人
形

| | | |
|---------|----|-----|
| 一住吉大海童子 | 吉田 | 扇太郎 |
| 一仙壇女吉田 | 吉田 | 文作 |
| 一小むつ吉田 | 吉田 | 文之助 |

韃靼王に内通して其の兵を引入れて
 王城を陥れ、ために思宗王は薨せ
 られたので、大司馬將軍吳三桂とい
 ふ者が王の幼い太子を奉じて九仙山
 に隠れました。王妹仙壇女は船で
 この難を遁れ流れ、て日本の平戸
 浦に漂着し舊臣であつた鄭芝龍の子
 和藤内に救はれました。この國難の
 起る前鄭芝龍は日本に亡命して老一
 官ご名を改めて日本の女を妻として
 一子和藤内を生けました。王妹仙
 壇女を救つた老一官は始めて祖國の
 難を知つて、妻と和藤内とを伴ひ本
 國に渡り、芝龍時代前妻との間に生
 けた娘錦祥女を訪れて、その夫甘輝
 を味方にするさいふ前段です。

「仁ある君も用なき臣は養ふことあ
 たはず。慈ある父も益なき子は愛す
 る能はず、日本唐土様々に道の巷は
 別るれど、迷ばで急ぐ誠の道、石壁
 山の麓にて、親子三人廻り合ひ、我
 輩さばかり聞き及ぶ、五常軍甘輝が
 館、獅子ヶ城にぞ着きにける。……
 老一官一行三人連れて樓門にさしか
 くるが要害堅固で入れず錦祥女は義
 ご恩愛の柵にかゝるさいふ苦しい立
 場になります。夫甘輝を味方にする
 その吉左右の報せば川に流す白粉は
 上首尾もし紅なれば不首尾と思へそ
 自ら縛られた和藤内の母親を連れて
 門内に入ります。

樓門の段

獅子ヶ城の段

竹本 鍛太夫

豊澤 新左衛門

人形

一和藤内の母 吉田 文五郎

一老一官 桐竹 門造

一和藤内 吉田 玉松

一錦祥女 桐竹 紋十郎

この『國性爺』はその書卸し當時の正徳、享保頃にはまだ健在で臺灣によつて清朝と對抗して争つた書殘されてゐます。明朝の遺臣鄭芝龍（老一官）ごその子鄭成功（和藤内）のこゝを際物として扱つたもので、鄭芝龍は肥前平戸に亡命して土地の武士田川氏の女を娶つて一子を擧げた、それが鄭成功で狂言の和藤内であります。その後父子は故國に歸り明帝を擁し今の臺灣に據つて清朝に反旗を翻し、その時、徳川幕府に援兵を乞ふて來た、紀州の頼宣卿等は熱心に出兵論を執つたが幕議は容れず不可と決したと傳へられてゐま

す。院本はこの事件を支那本土に持込んで近松翁獨自の流麗な文章で書かれてあります。この『國性爺』は大正十五年五月一日初日で御墨文樂座に出て以來の演物で實に久し振りの狂言であります津太夫も今度の上演で唯二度目の語物だけに皆様にもお珍らしき聴きものと思はれます。この獅子ヶ城の段は先代呂太夫が得意としたものでその合三味線の鶴澤勝鳳に就て津太夫は修得したもので今度の友次郎も初めの線でありませう。この段の内容はご申しますと自ら縛られて城内に入つた和藤内の母は、錦祥女と共に甘輝を説きました。甘輝も義理のある甘輝は承諾しないので錦祥女は

獅子ヶ城の段

切 竹本津太夫

鶴澤友次郎

人形

一 五常軍甘輝 吉田 榮三

一 錦祥女 桐竹 紋十郎

一 和藤内 吉田 玉松

一 和藤内の母 吉田 文五郎

門外に待たした老一官と和藤内へのかけての合圖であるため錦祥女は自害して、紅を流すので、さてこそ和藤内は勢込んで城中に亂入して追ります。和藤内の母も娘の後を追つて自害するので、遠の甘輝も和藤内に味方して明の再興を約し和藤内は國性爺延平王に封ぜらるゝさいふ筋で全曲中最も有名な場面であります。全曲近松翁の麗文だけにその詞章のあや等思はず引入れられて往きます。

同じ鑑の聲にぞつうじ入らざりし錦祥女は孝行深く……：こ國を異へた義理の親子の恩愛の情誼を陳べ、Mなんこ日本の女子見てか、目も鼻も變らぬが可笑しい髪の結び様、變つた衣裳の縫ひやう若い女子もあれであらふ、裾も襷もばらくこ……支那の女が日本の女の服飾を驚異の眼で珍らしく見る條を面白く叙し、更に錦祥女が夫甘輝を親兄弟の忠誠に與させよふこ自害して説き伏せる條など眼に熱い露を宿さずにあるれませぬ、勇士と烈婦の働きに、骨肉の恩愛さては義理人情の粹をつくしたる近松翁傑作中の傑作で當文樂座人形淨瑠璃の粹であります。



中 勸進帳

勸進帳

武藏坊辨慶 竹本大隅太夫
 富樫左衛門 豊竹和泉太夫
 源義三郎 竹本相生太夫
 伊勢次郎 豊竹つげめ太夫
 駿河八郎 竹本源路太夫
 片岡八郎 豊竹富太夫
 常陸坊 竹本富太夫
 梶下佐忠太 竹本長子太夫
 豊竹駒尾太夫
 豊竹隅榮太夫
 竹本津磨太夫
 竹本文字榮太夫
 竹本佐久太夫
 番 卒 豊竹宮太夫

役毎日替

浄曲の勸進帳は遠く貞享三年に宇治加賀椽も西の櫓初代竹本義太夫と名聲を争つた際「凱陣八島」を出しその中にこの勸進帳を出したことがあります、其後番場忠太紅梅館「磔胎内拵」にもあります、今度上場される「勸進帳」は明治二十八年書卸したのが博労町彦六座跡の稻荷座で初代團平の作曲であります。大体に歌舞伎の勸進帳と謡曲の安宅を合せたもので、以来團平師の秘曲として来たもので、御靈文樂座の烏有に歸する前年辨慶を古軼太夫、

富樫を源太夫、義經を當時の靜太夫（今の太隅太夫）で糸は友次郎で辨慶の人形は文三でありました。書卸し當時は富樫を三代目大隅太夫、辨慶を生嶋太夫、義經を當時の伊達太夫（今の土佐太夫）で糸は團平師でその時、道八がツレ引で出たので今度もその時の團平師のまゝを上場いたします。特筆すべきは辨慶延年舞を振付を今度特に舞踊界の新人模茂都陸平氏を煩はして按舞人形の型をつけて戴いた次第であります。全段中の見せ場聴き場の問答の詞章の序を書抜きますと、
 「正廣膝を進ませて、いかに先達そ

人形

鶴澤道八
野澤勝市
竹澤團六
豊澤廣太郎
豊澤猿太郎
鶴澤寛市
鶴澤清二郎

一、武藏坊辨慶 吉田榮三
一、源義經 桐竹紋十郎
一、常陸坊 桐竹政龜
一、梶下佐忠太 吉田玉幸
一、伊勢三郎 桐竹紋太郎
一、片岡八郎 吉田玉市
一、駿河次郎 吉田光之助
一、富樫左衛門 吉田玉治郎

も世に佛徒の姿種々有る中に山伏達の異形の姿はいかなる仔細に候ぞそれ修験の法云ふは胎藏金剛兩部の旨を修し險山惡所を踏開き世に害をなす惡獸毒蛇を退治して難行苦行の功を積み、惡靈亡魂を得脱成佛させ天下泰平の祈禱を修す表は強魔の相をあらはし惡鬼外道を降伏さす、是神佛の兩部にして百八のいら高珠數に佛跡の利益をあらはす。ムイシテ又袈裟を身にまきひ佛徒の姿に有りなむら頭に頂く兜巾はいかに。お、則頭巾は五智の寶冠にして武士の兜に等しく十二因縁のひだをすへて是を頂く。ムイシテ篠懸の因縁は

是そ九會曼荼羅を表はす。黒き脚絆は。胎藏界の黒色なり。八ツ目の草鞋は。八葉の蓮花を踏にかたごる。シテ山伏の出立は則其身を不動明王の尊體にかたごるなり。出入る息は、あうんの二字。ムイ扱又寺僧は錫杖を携ゆるに山伏徴檢の金剛杖に五体をかたむる謂はれば何ぞ。事も愚かや金剛杖は天竺檀特仙の神人阿羅々仙の持給ひし靈杖にて胎金兩部の功德をこめたり纏摩未だ瞿曇沙彌を申せし時、阿羅々仙に給仕して難行の功を積み御名も照善比丘改めて此金剛杖を授かり玉ふ。かゝる靈杖なればこそ我祖先役の小角是を用ひて山野を經歷し玉ふなり……………



合邦住家の段

中 竹本鏡太夫

鶴澤綱右衛門

次 攝州合邦辻

合邦内の段

この『攝州合邦辻』は安永二年二月北堀江座の正本として菅專助、若竹笛朝が合作したるもので、元祿七年竹本義太夫正本『弱法師』の改作であります。上下二段より成り、上の段は住吉で玉手御前が、俊徳丸に毒酒を進める所、高安館の偽勅使、俊徳丸國遠、繪旨取戻して下の段は天王寺西門閻魔王建立滑稽勸化、合邦内の段であります。書卸し當時合

邦内の段の切は豊竹此大夫が語つてゐます。只今では古軼太夫の合邦さへば普く知られてゐるほど古軼太夫の得意の語りものであります。永らく上場を禁ぜられてゐましたので名作も世に出なかつたのです。その禁も解かれて大正十四年十月の御靈文樂座で古軼太夫が初演しました。最近では昭和三年四月道頓堀辨天座で上演して絶大の好評を博しました。越路太夫もまた十八番としてゐた名作であります。内容を申上げますと、合邦の娘お辻は氏無くして玉の輿、藤原通俊といふ公卿の奥方玉手御前と出世した。通俊には先妻

切 豊竹古頼太夫

鶴澤清六

腹の嫡子俊徳丸と外戚腹の次郎丸といふ二人の息がある。次郎丸は壺井平馬等と心を合せて俊徳丸をなきものにして家督を奪はんと計ります。玉手御前は義理ある子の俊徳丸に身

も世もあらぬ無態の横戀慕をします朝香姫といふ美しい許嫁もあるので嫉妬して俊徳丸に毒酒をすゝめて

業病にかゝらせます。俊徳丸は家出して天王寺の非人小屋に籠つたが朝香姫を訪れてゆき手を携へて合邦の家へ行くと其處で計らずも玉手御前と落ち合ひます。合邦は娘の不倫の戀

を怒つて我も及にかけますと玉手は始めて眞實の底意をうち明けます。

俊徳丸に戀慕を見せたは計略で悪者等の爲に一命も危い俊徳丸を助けやう爲であつたのです。

卑しい女から玉の輿に乗せられた夫への報恩と繼子への義理立まであります。玉手御前は寅の年月揃つた

女で、その臟腑の生血を絞つて飲ませる俊徳丸の業病も怒ち治るさいふ人々に喰灸された狂言であります。院本の一節をしるしますと、

Mしんくたる夜の道、戀の道には暗かられ共、氣は鳥羽玉の玉手御前、俊徳丸の御行方、尋ねかれつゝ、人目をも、忍び兼ねたる煩冠り、包みかくせし親里も、今は心の頼みに

人形

一、親合邦 吉田榮三

て、馴れし古郷の門の口、立ち寄る後
 より入平む、御兩所の御行衛、爰こ
 は聞けど奥方の、姿見るより様子も
 こ、戸脇にあつき藪疊、身を潜めて
 そ窺ひ居る。かくさばしらで玉手御
 前、ひわれに洩るゝ細き聲、詞かゝ
 様、か、様と、呼ぶは慥に娘の聲、
 詞ヤアわりやまだ死なぬか、殺さり
 やせぬかこ、立上りしむ心付き、振
 り返り見る女房の方、鉦に紛れて聞
 えぬは、これ幸ひと素知らぬ顔、詞
 か、様、か、様爰明けてこ、叩く戸
 の音聞き咎め詞コレ合邦殿、今こな
 様何とぞ云ふてか。イヤ何共云やせ
 ぬ、そりや空耳であるぞいの。イヤ、
 ヤ、空耳かは知られ共、ちらりこ聞
 えた娘の聲、ハテ合點の行かぬこ立
 上る。詞さう仰有るはかゝ様か、ち
 やつこ明けてくださんせ、辻でござ
 んす戻りましたと、聞いて恠り、詞
 ヤア／＼戻つたとは夢ではないか、
 まめであつたか嬉しやと、かけ出る
 裾を取つて引さめ、ヤイ／＼／＼狼
 狽者、詞肌はふれてもふれいでも、
 我子に不義をしかけた畜生、侍の
 身で高安殿が、助けおかしやる様な
 ければ、何の今迄存命で、うか／＼
 爰へ何にしにこうぞい、ア、隠すま
 り顯はるゝはなし、親はないと云は
 してもある事知つて、娘が手から度

一、合邦女房 吉田 玉七

一、玉手御前 吉田 文五郎

一、奴入平 桐竹 門造

々の合力金、二人の命を養ふたは、コリヤコレ皆高安殿の御厚恩、其夫の目をかすめ、畜生の心さげた娘、譬へ無事で戻つたさて、門ばたも踏まされうか、元來娘は斬られて死んだ。が今もの言つたが娘なれや、夫こそ幽霊、そなた氣味が悪うはないか、肉縁の深い程、死人になれば怖いもの、コレ必らず門の戸明けまいぞと、云ふに女房はイヤ〜、幽霊は愚か、狐狸の化けたのでも一度見たい娘も顔、もしや恐ろしいものであつて、目を廻して死んだら仕合せ、いさしい可愛い子を先立て、生きて業をさらそうより、一ト

目見たいと振切るを、猶引こめて、ハテ扱て悪い合點、詞、狐狸か幽霊なればまだしも、もし誠の娘なら高安殿へ義理の言譯、以前は刀を差した役、親の手にかけて殺さにやならぬ、それがいやさに留めるのぢや泣かれど親の慈悲心を、聞く子や妻は内さ外、顔と顔さは隔たれど、心の隔泣寄りの、眞身の誠ぞ哀れなる娘は涙押し拭ひ、門の戸口に口を寄せ、さゝ様の腹立、お憎しきは御尤これには段々言譯あれど、人目を忍ぶ此身のうへ、マア爰明けて下さんせと、泣く〜願へば母親は、詞アレ聞いてか合邦殿、言譯があるさいの

一、俊徳丸 吉田市松

マ、聞いてやつて下さんせ、ハテ娘
 と思へば義理もかける、幽霊を内へ
 入れるに、誰に遠慮もあるまいぞへ
 ア、いかさまのう、此世をはなれた
 者ならだ、世間を憚る事もないかい
 そんなら早う呼込んで茶漬でも手向
 てやりや、ア、可愛や立寄る所もな
 し、幽霊も嗚ぞひたるからうと、身
 を背けるは泣く百倍、母は悦び門の
 口、戸しやおそしと開く間も、おな
 つかしや。オ、なつかしやと縋る娘
 の顔形、前後見つ肌に入手を入れても
 矢張りほんの娘、嬉しやまめでゐた
 かいのう。然さは知らいで逆様事、
 あたいまくしい百萬遍、甲ひした

夜に無事な顔、ひよつと夢ではある
 まいかさ、抱きしめく嬉し泣き父
 もほごふる娘の顔、見たさに思はず
 立寄れど、以前の詞と世の義理を、
 思へばちやつと飛退いて、手持悪い
 ぞいぢらしき、母は漸う心を鎮め、
 詞世間の噂にはの、そなたは、アノ
 俊徳様とやらに戀をして、館を抜け
 て出やつたの、イヤ不義ぢやの悪
 ふ云へど、そなたに限り、よもやく
 さう云ふ事はあるまいの、コリヤア
 ノ嘘であらう。オ、くオお、
 オ、嘘かくくさ着持つてくゝめる様
 な母の慈悲……………といふ親子の情
 味の溢れた名曲で御座ぬます。

一、淺香姫 吉田扇太郎



切壇浦兜軍記

琴責の段

琴責の段

阿古屋 竹本土佐太夫

重忠 竹本大隅太夫

榛澤 竹本越名太夫

この床本は享保十七年九月九日初日にて竹本座に上場せるもので文耕堂と長谷川千四の合作であります。近松の『出世景清』の改作であるは申す迄もないところで、第三段の口『琴責』が最も優れてゐるので歌舞伎の世界にも移入されました。即ち景清は頼朝を討つて平家の仇を報ぜん。肝膽を砕くに對して箕尾谷四郎とその縁者は景清を捕へて鏡曳の恥辱を雪がんと苦心します。景清は義を重んじて箕尾谷に捕はれて、入牢し

ます。機を見て牢を破り日向勾當となつて西國へ下ります。その景清は遊君阿古屋と深い馴染を重ねてゐるので源氏方では阿古屋を白州へ呼出して景清の行方を詮索します。阿古屋は知らぬの一點張りに毎日拷問をかけられます。岩永左衛門の荒々しい調方に對し、秩父庄司重忠は躬つた調べて榛澤六郎と共に遊君であるからには三曲の糸の調べによつて阿古屋の心底を見極めよふと、三味線胡弓、琴を奏でさせますが、一糸亂れぬ調べに疑惑は暗れるといふ抒情的詩と繪畫美の溢れた名狂言であります。その正本の序曲を記しますと、

岩

永

竹本文字太夫

ツレ

野澤吉兵衛
野澤勝平

琴
鶴澤友平

胡弓
野澤吉左

人形

一、秩父庄司重忠 桐竹政龜

M 覺の脛短しと雖もこれをつかは
憂ひなん、鶴の脛長しといへどもこ
れを断たは悲みなん、民を制する事
此理に等し。然れば治まる九重に、
猶も非常をいましめの、水上清き堀
川御所、當時鎌倉の嚴命に従ひ、秩
父の庄司次郎重忠、禁裡守護の代官
として、兼ては民の公事裁判、私の
はからひなく道にくもらぬ十寸鏡智
仁の勇士とかがやけり。同席に相並
ぶ岩永左衛門致連、南都東大寺の建
立より直様都に押留り、重忠の助役
と號し悪七兵衛景清が、在家をさが
す邪智妄奸、表は忠義に見せかけて
已か意恨を挟む……斯る折から秩父

の耶黨様澤六郎成清、遊君阿古屋を
拷問の、時刻も限る未の刻、六波羅
より立歸り、御門に下す囚人駕籠を
上げて引出す、妾は伊達のうちかけ
や、いましめの綱引かへて、縫の模
様の糸結び、小褌取る手もまなれ
ど、胸はほごけぬ思ひの色、かたち
は派手に氣は憎れ、筒に挿したる牡
丹花の、水上かぬる風情なり。……
即ち其内容はと申ますと、平家に孤
忠をつくす景清は叔父大日坊を奈良
坂で殺して悪七兵衛と呼ばれます。
頼朝が上洛の途中根の井館に立ち寄
るを景清は仇せんぞ大工になつて入
り込みます。同じく左官に身を獲し

一、岩永左衛門 吉田玉松

て入り込んだ箕尾谷に組み伏せられて、鎌倉の土牢に入れられます。い

つとなく景清は牢を破つて逃げたの

一、傾城阿古屋 吉田文五郎

でその行衛詮議のため景清が馴染の遊君阿古屋は堀川御所の白洲に召出

二、榛澤六郎 吉田玉幸

されます。名判官秩父庄司重忠は阿古屋に三味線、琴、胡弓の三曲を奏でさせますが、糸の調は整然として

一、水 奴吉田文作

一絲も亂れませぬのでその心に邪心のない證據、阿古屋は景清の行方知

一、水 奴吉田玉市

らぬばこれに現れたりと許します

一、水 奴吉田光之助

この曲の筋はこうなつてゐますが、この阿古屋の出である床本として、

一、水 奴吉田市松

寶曆十四年の『契情阿古屋松』明和元年の『娘景清八島日記』等があります。阿古屋といへば土佐太夫の語

りものさして極め附けられた十八番

ものですが、明治二十三年に岡山の

千歳座で初代團平師匠の糸で稽古を

したのも、後になつて自家の藝城こ

した次第で、その時の掛合、重忠は

大隅太夫、岩永は故源太夫、榛澤は

七五三太夫でありました、三段目の

は、いでありますがこれ位文章のい

ゝものは珍らしいものです。その文章は論語から多く出てゐます。元來

この阿古屋三曲は琴、三味線の音色

は三味線一挺で皆演じたさうです。團平は明治廿四年高松の巡業地で始

めて琴胡弓鳴物を入れて演じたもので其以來今日上場されてゐる型になつたものであります。



清水町濱興業の賑ひ

文樂今昔譚より

やはり文樂座が中心

社寺境内の興行禁止は、進運のスタートを切らうとしてゐる文樂座にまつて、ざれほど大打撃であつたか知れない。根據地を奪はれた天保の改革以來、どういふ興行状態を續けたかさいふと、北堀江市之側、若太夫の芝居、を借りて、天保……弘化……嘉永……を經てゐる。さうして安政元年一月から西横清水町濱の新埋立地に座を建て、漸やく、自分の家らしいものに戻つて來たが、もちろん永久的のものでは無かつた。けれどもその興行ぶりにはなかく盛んなもので、常に有名な太夫を巧みに招聘して、斯界の先頭に立つてゐたことは疑ひを容れない。かうして此新興行地に約三ヶ年居据つてゐたが、時代と共にさしも嚴酷であつた禁

令もやうやく弛んで來たのを見てまつて、文樂座主植村翁はもこの稻荷境内へ復歸を願ひ出で、許されて、安政三年九月、再び舊地に櫓を上げることが出來た。同九月初日。『鬼一法眼三略卷』『芦屋道滿大内鑑』櫓下の長登太夫が菊畑。湊太夫が大藏卿館。春太夫の葛の葉子別れ。これは無論大盛況。文樂座はかうして次第に確實な地盤を築きながら明治の時代に入つて行く。さて明治に入るまでに、ちよつと此時代を低徊して見て（天保より明治まで）おもしろい出來ごと、淨瑠璃界の變轉を知つて貰ふに必要なことだけを拾つて行くこととする。

その一つは、清水町濱の興行地のことである。

この濱は天保十二年、西横堀の川幅を狭めて、その東岸を埋立てた新築地。地固めの爲めに興行物を許されたのであつた。上繫橋（四つ橋）から道頓堀に至る炭屋橋以南の濱地、南北炭屋町の部分がそれである。

淨瑠璃興行が始めて此土地で行はれたと思はれるのは宮芝居禁止から程なく、弘化二年二月。その頃の番附による、『清水町濱新築地にて』と記して、梶、むら咲、太夫の連中で、『二十四孝』と、それから特に此興行の爲めに書卸されたと思はれる『西横堀築地賑。浪花名所記』を出してゐる。惣塚場といふ一幕をチャリ語りの名人として聞こえた津賀太夫（後に日本第一滑稽物語竹本山城掾となつた人）が勤めてゐるところを見る、おそらく、此時が此土地の拓けた始めて、淨瑠璃座の始まりでもあつたのであらう。さうして此築地はすつと明治へかけて、道頓堀についての繁昌地になつてゐたことは想像するに難くはなく、説教、祭文、淨瑠璃、歌舞伎芝居、講釋、新内、すらりさ並んで見世物や金比羅さんの出し店も賑ふ。と云つたやうな状

態である。文樂座のかゝつた位置はどの邊りかといふと、今の御池橋東詰を南に入りスグ濱側の芝居の横を新築地に曲つたところに西に面して建つてゐた。清水町濱といふ名稱は、即ち御池橋から木綿屋橋までの間をさしての名稱で、此の方四つ橋炭屋橋の間にも芝居見世物はあつて、名高い熊の席なども炭屋橋の詰にあつた。けれども木綿屋橋から南道頓堀川までの間には興行物は無かつたらしい（古老の話）。

この清水町濱興行の時代に、吉田文三郎以來の名人としてこの濱興行の人氣者として聞こえた吉田玉造にかゝる、一つ二つの挿話がある。また二十歳にも足らぬ青年人形遣ひであるが、これもやはり天保の改革に觸れて、人形を遣ふことを禁ぜられて、その天才を惜しまれてゐた頃のこと。そんな改革に觸れるほど此玉造が他の多くの人形遣ひと同じやうに墮落したか、或は風俗を紊してゐたか、それは知らぬが、おそらく、同じ道に在るものとして、共にこの禁制の中に連座したのであらうと思ふが、その邊はハツキリわからない

けれども、この玉造がそんな人物と思はれない點は、かうして禁制の掟を人形遣ふ腕におろされてゐても、一時もちつとしてゐることが出来なくて、ひそかに或る一案を案出して、舞臺へ出ることを試みた。苦心を凝らした彼れの新案まはごんなものであつたかといふと、切抜き繪の押し繪を竹の竿の先に張りつけた人形で、これをいつもの人形の代りに操るのである。けれどもこれとても、もごより人形を遣ふこと即ち舞臺へ出ることを禁ぜられてゐる玉造が平氣で舞臺へ出られる筈はない、無論監視の役人の目を掠めてやつてゐる仕事である。兼て謀し合はしてあるので、木戸番の男は役人の姿がそこらに見へると、すぐ舞臺へ合圖をする。さうすると人形は忽ち影をひそめる。さかういふ手段で毎日くりかへしてゐたのだが、こんな埒もない急拵らへの變てごな人形でも吉田玉造が使つてゐるを見物はすっかり得心してしまつてゐて、『さながら生きた歌舞伎芝居のやうだ』といふ評判。何が人氣になるかわからないものである。ところが、此まゝこれが

役人の耳へ入られば萬歳だがさうばうまく行かない。評判が高くなるにつれて、役人の目は光る。さうく玉造は捕はれた。牢獄へ入れられるといふ騒ぎであるだが幸ひに玉造を惜しむ周圍の人々は百方これを嘆願して、やうく罪を免れることが出来た。

もう一つの話！

玉造はその頃、新町の扇屋の主人三郎兵衛にひぬきを受けてゐた。三郎兵衛は人形芝居に非常に趣味をもつてゐて、巧みに人形を遣ふばかりが自身で人形の頭を彫り上げることを樂しみにしてゐるほどで、時々太夫衆の流れ場（座敷の眞中に廊下のやうな板間をこしらへて通ひ路にした處）へ舞臺をこしらへたりして人形芝居の催しをして、太夫や家内中の者に見せてゐた（孫にあたる中村鴈治郎の話では後に文樂を模造したやうな人形舞臺を作つてゐたといふことである。なほ三郎兵衛遺愛の人形は古びた衣裳と共に同家に保存されてゐる。

ある年の正月、三郎兵衛は太夫衆や家内の人達を慰

める爲め、親類縁者を招いて人形芝居の催しをするこ
こになつた。そこで、日ごろひきゐる玉造を招んで、
自分の遣ふ人形の左手を手傳はせやうと考へたが、困
つたことには廓の中へは藝人は一切出入することなら
ぬといふ掟があつた。そこへ氣のつかぬ三郎兵衛では
なかつたが、どうでも玉造に遣はして見たかつたので
一策を案じて玉造を茶の友人さいふこことにして、ヨッ
ソリと呼びよせて置いた。やがて主人は三番叟を遣ひ
玉造は左手をもつて舞臺へ現された。無論誰れ一人黒
衣を着てゐる玉造が解る筈がないと思つてゐるこ
見物の中に交つてゐた當時全盛の若紫太夫がこれを看
破して、あれは藝人に違ひない、と云ひ出して、太夫
は家内の者に注意をした。皆は三郎兵衛に諫言をした
廓の掟で藝人の出入を禁ぜられてゐるばかりか、ここ
に改革令以來藝人の取締が一層やかましくなつてゐる
のだから、萬一その筋の目に止つたら、それこそ、ど
んなことなるかも知れない、萬一一家名が疵つくやう
なことがあつてはならないから、と注告したので、三

郎兵衛もさうと氣附いて、芝居はそのまゝで中止をす
ることになつた。さうして玉造には記念として、その
時使つた三番叟の人形（三郎兵衛が壹年間苦心して自
作したさいふ頭）をそのまゝ與へて歸へすことになつ
たので、若紫太夫も關はり合の一人として、此日の催
しを惜しんで、玉造さば知らずに貸してゐた袴（これ
は緋鹿子友染縮緬の扱帶）を記念として贈ることにな
り、まづは無事に濟んだ。玉造は此二品を生涯の思出
として死に至るまで自宅の床の間に飾つてゐたさうで
ある。



假名手本忠臣藏

大序より

一力茶屋場の段まで

鶴ヶ岡兜改めより

戀歌の段まで

- 足利直義 竹本町太夫
- 壺谷判官 豊竹つげめ太夫
- 顔世御前 竹本南部太夫
- 桃井若狭之助 竹本浪花太夫
- 高野師直 豊竹和泉太夫

鶴澤園 六叶

この「假名手本忠臣藏」は寛延元年八月の（今から百八十二年前）竹本座の操にかけられたもので、竹田出雲お正、三好松落、並木千柳等が補で書下された日本演劇史を以表する最大傑作である。

足利將軍尊氏公は新田義貞を討つてその兜を鶴ヶ岡八幡宮に奉納するに就て今日社頭に兜改めが行はれたが壺谷判官の妻顔世御前は曾て兵庫司の女官を勤めた故兜改め役として召され多くの兜の内、焚きしめた蘭奢待の名香に直にそれを見分けた。

女好きの高野師直は和歌に事よせて顔世に艶書を送る。短氣な桃井若狭介と意地悪な高野師直と大に論を始め、あはや神前に鯉口を切る所を僅に事なく済む。桃井は師直その口論に無念やる方なくお家断絶を覺悟の上、殿中で刃傷に及げん決心を家老の加古川本藏に打ち明けた。本藏は分別者で、疝癰の殿に逆はず松の枝をすつぱりさ切り落し殿の疝氣を走る所まで行かせてつと脇へ外らす手段を講じた。

この度將軍家接待の役目を承つたのは壺谷と桃井でその禮儀作法萬般の師範役は高野師直である。殿中で桃井が師直に會ふと平伏せんばかりに下に出たので怒も何處へやら消えてしまつた。これは本藏の深慮で賂賄

人形

| | |
|--------|-------|
| 足利直義 | 吉田玉徳 |
| 壺谷判官 | 吉田玉松 |
| 高野師直 | 吉田小兵吉 |
| 桃井若狹之助 | 桐竹紋十郎 |
| 顔世御前 | 吉田文五郎 |
| 大名 | 大ぜい |
| 仕丁 | 大ぜい |

を贈つたからである。壺谷からは賂賄がない上に顔世に對する戀の憎みがある。師直は壺谷を殿中で散々に苛め恥しめた。短氣の壺谷は前後を辨へず鯉口切つて師直を斬りつけた。後から抱き止めたのは本藏であつた。殿中で及傷に及んだ壺谷判官は切腹を申しつけられてお家斷絶といふことになつた。此處に忠臣と不忠臣との色分けが見えた。家老大星由良之助は深い分別を以つて速る若武者を鎮めて城を明け渡し悄然と山科へ去る。金に眼の眩んだ壺谷の不忠臣斧九太夫の子定九郎は浪人の生計に困つて、山崎街道で夜盜を働き通りかゝつたお輕の父與一兵衛はお輕を勘平の爲に身を賣つた金子五十兩と命もろこも定九郎の爲に奪はれ

た。猪撃ちに出た勘平の二つ彈丸は誤つて、美事に定九郎に當る。奪つた縞の財布の五十兩は計らず勘平の手に入る。歸りが遅いと案じられた與一兵衛の宅へはその死骸がかつき込まれた。勘平は縞の財布をそつと取出して見て昨夜闇まぎれに撃つたのは舅と早合點した。姑お萱もそれを推して怒り歎く。勘平はたさひ主君の仇討ち御用金調達の爲さば言へ現在の舅を殺して金子を取つた事言譯立たず、面目なさに切腹した。其處へ千崎彌五郎、原郷右衛門の兩士が来て刀傷と鐵砲傷は違ふとて勘平の冤罪は暗れ臨終に一味の血判状へ加へられた。由良之助は敵討ちの本心を包んで祇園の力茶屋にお輕を相手に日毎放埒な浮れ酒、九太夫は

敵の謀者となつて大星の本心をうか
いふ。力彌が持参した顔世御前から
の密書を大星が讀んでゐるさお輕が
二階でのべ鏡、九太夫は縁の下から
眼鏡越しにのぞく。大星は大事を知
つたお輕の一命を兄平右衛門に命じ
て取らうとしたがその真心が見へた
ので助けた。お輕は九太夫を刺して
勘平の身替りに功を立てるさお破
亂曲折の裡に日本武士道の精華を語
るさおふ不朽の名作です。

(床本) 鶴ヶ岡兜 改め
より戀歌迄

頭後にかほよばつきほなく師直様は
今暫し御苦勞なむらお役目をお仕舞
有ておしづかにお暇の出たこのかほ
よ長居は恐れおさらばさ立上る袖師

摺寄てじつこ扣へコレまあお待ち待
たまへけふの御用仕廻次第其元へ推
参して、お目にかけるものが有幸ひ
のよい所召出された直義公は我爲の
結ぶの神御存じのごさく我等歌道に
心を寄せ吉田の兼好を師範と頼み日
々の状通其元へ届けくれよご問合せ
の此書状いかにもこの御返事は口上
でも苦しくないさ秋から秋へいるい
結び文顔に似合ぬ存参る武歳鑑と書
たるを願見るよりはつご思へ共はし
たのふ恥しめて却つて夫の名の出る
こと持歸つて夫に見せふかいやく
夫では壙谷殿憎しと思ふ心から怪我
過にもならふかさものを言はず
投返す師人に見せじご手に取上げ戻
すさへ手にふれたりと思ふにぞ我ふ
みなから捨も置れずくごうは言はぬ

よい返事聞まではくごいてくご
き拔天下を立ふさふせふ共儘な師直
壙谷を生ふご殺さふ共かほよの心た
つた一つ何んごそふでは有まいかご
願聞にかほよが返答も涙ぐみたる斗
りなり折から來合はす若狭之助例
の非道ご見て取氣轉かほよ殿まだ退
出なされぬかお暇の出で隙取は却て
上への恐れ早お歸りご追立れば師
やつ扱はけごりしご弱味をくはぬ高
野師直ヤア又しても言はれぬ出過ぎ
立てよければ身が立たす此度の役目
首尾よふ勤めさせくれよご壙谷の内
證かほよの頼みそふなくてはかなは
ぬ管大名でさへあの通り小身者に捨
知行誰か陸で取らす師直も口一つ
で五器提ふも知れぬあぶない身代夫
でも武士ご思ふじやまでご邪魔の返

桃井邸の段

口 (竹本長子太夫
竹本陸路太夫)

鶴鶴鶴
澤澤澤
友友寛
二作市

切 竹本文字太夫
野澤勝平

人形

娘 小 浪 吉田文之助
妻 戸 無 瀬 吉田扇太郎
加古川本藏 吉田玉治郎
大星力彌 桐竹紋太郎
桃井若狭之助 桐竹紋十郎

報にくて口若くはつこせき立若狭之助刀の鯉口碎る程握り詰は詰たれ共神前なり御前なりと一旦の堪忍も今一言も生死の詞の先手還御ぞ御先を拂ふ聲々に詮方なくも期を延す無念は胸に忘れず悪事悖て運強く切れぬ高野師直を判あすは我身の敵共知ぬ搦谷も後押へ直義公は悠々こ歩御我賜ふ御威勢人の兜の龍頭御藏に入る数にも四十七字のいろは分かなの兜を和らげて兜頭巾のほころびぬ國の掟ぞ、久方の

(床本) 桃井邸の段

空も彌生のたそがれ時桃の井若狭之助安近の館の行儀はき掃除お庭の松も幾千代を守る館の執權職加古川本藏行國年も五十の分別盛り上下ため

付け書院先、あゆみくる共白洲の下人ナント關内此間はお上にはでつかちないお拵へ都からのお客人きのふは鶴ヶ岡の八幡へ御社参おびたしいお物入ア、其銀の入り目がほしい其銀が有たら此可介名を改めて樂しむにア何んじや名を改めた樂しむは珍らしいそりや又何んぞ替るハテ角助も改めて胴を取て見る氣ナニばかつらなわりや知らないかきのふ鶴ヶ岡で是の旦那若狭之助様いかふ不首尾で有つたげな仔細はしらぬが師直殿も大きな恥をかかせたご奴部屋の噂定めて又無理をぬかしてお旦那をやりこめおつたで有ささかなき口々ヤイ、何をさば、こやかましいお上の取ざた殊に御前の御病氣お家の恥辱に成る事有らば此本藏聞

流し置べきや禍は下部の嗜み掃除の
 役目仕廻たか皆いけくそ和らかに
 女小姓も持出るたばこ輪をふく雲を
 なく廊下音なふ衣の香や本藏おぼん
 さうの一人娘の小浪御寮母のさなせ
 諸共にしこやかに立出ればははく
 兩人共御前のお伽は申さいで自身の
 遊びか不行儀千萬イエく今日御
 前様殊の外御機嫌今すやくそお休
 夫でナア母様イヤ申本藏殿先程御前
 の御物語きのふ小浪も鶴ヶ岡へ御代
 參の歸るさ殿若狹之助様高野師直殿
 こ誂諷ひ遊ばせしこの御噂たがいふ
 さなくお耳に入りそれはくきつい
 お案じ夫と本藏仔細くはしく知りな
 から自に隠すのかやとお尋れ遊ばす
 故小浪に様子を尋ねれば是もわたし
 と同じこそ何にも様子は存じませぬ

このお返事御病氣のさばりお家の恥
 に成る事ならアこれくそなせ夫
 程のお返事なせ取締ふて申上げぬ主
 人は生來御短慮なるお生れ付何の詞
 諍ひなごは女わらへの口ぐせ一言
 半句にても舌三寸の誤りより身をは
 たすむ刀の役目おみも武士の妻でな
 いか、それ程の事に氣も付かぬか嗜
 めさくナニ娘そちば又御代參の道
 すから左様の噂はなかりしか但し有
 たかナニないチ、其苦くハハハハ
 何のべしでもない事をよしく奥
 方のお心休め直きにお目にかへらん
 こ立上る折こそあれ當番の役人罷り
 出大星由良之助様の御子息大星力彌
 様御出なりご申上るム、お客御馳走
 の申合せ判官殿よりのお使ならんこ
 なたへ通せコレこなせ其方は御口上

請取殿へ其通り申上られよお使者は
 力彌娘小浪さ言號の鞆殿御馳走申し
 やれ先奥方へ御對面さ言捨一間に入
 にける。こなせは娘を傍近くなふ小
 浪さ、様のかたくろしいは常なれど
 今おつしやつた御口上受取る役はそ
 なたにさ有りそな所をこなせにさは
 母が心さはきつい違いそもじも又力
 彌殿の顔も見たがる逢たがる母にか
 はつて出むかや、いやか、問返
 せばあい共いや共返答はあからむ顔
 のおぼこさよ母は娘の心を汲アイタ
 り娘せなを押へたも是はなんご遊ば
 せしと狼狽騒げばイヤなふけさから
 の心づかひ又持病の癪が指込だ是で
 はごふもお使者に逢はれぬアイタ、
 娘太儀ながら御口上も受取り御馳走
 も申したもお主と持病には勝れぬ

くそろくこ立上り娘や随分御馳走申しやしたか餘り馳走すぎ大事の口上忘れまいそわしも御殿にアイタ、あいたからうの奥様は氣を通してぞ奥へ行小浪は御後伏拜みく忝い母様日頃戀し床しい力彌様あはゞごふいをかういをこ娘心のぎんぐと胸に小浪を打寄する疊ざはりも故實を糺し入來る大星力彌まだ十七の角髪や二ツ巴の定紋に大小立派さはやかに遠大星由良之助が子息と見へし其器量しづくと座に直りたそお取次頼み奉るご懸念に相述べ小浪は、つご手をつかへじつと見かはず顔と顔互いの胸に戀入る物も得いばぬ赤面は梅と櫻の花相撲に枕の行司なかりけり小浪やうく胸押しづめははく御苦勞千萬によふこ

そお出只今の御口上受取役は私御口上の趣をお前の口からわたしが口へ直きにおつしやつて下さりませと摺寄ば身をひかへハア是はく不作法千萬惣じて口上受取り渡しは行儀作法第一と疊をさかり手をつかへ主人彌谷判官より若狹之助様への御口上、明日は管領直義公へ未明より相詰め申す筈の所定めてお客人も早々にお出あらん然れば判官若狹之助兩人は正七ツ時に屹度御前へ相詰よご師直様より御仰せ萬事間違ひのなき様に今一應御使者に參れご主人判官申付け候故右の仕合せ此通り若狹之助様へ御申し上げ下さるべしと水を流せる口上に小浪はうっかり顔見これさかふ諾もなかりけり、聞た

昨日お別れ申してより判官殿間違ふてお目にかへらす成程正七ツ時に貴意得奉らん委細承知仕る判官殿にも御苦勞千萬と宜しく申し傳へてくれられよお使者太儀然らばお暇申し上げんナニお取次の女中御苦勞ごしづく立て見向きもせず衣紋繕ひ立歸る本藏一間より立かへりハア殿是に御入り彌々明朝は正七ツ時に御登城御苦勞千萬今宵も最早九ツ暫く御まごろみ遊ばされよ成程くイヤ何本藏其方にちご用事有密々の事小浪を奥へくハアコリヤく娘用事あらば手を打ふ奥へくご娘を追やり合點の行ぬ主人の顔色ご御傍へ立寄先程よりお伺ひ申さんご存せし所委細具に御仰下さるべしとさしよればイヤナニ本藏今此若狹之助が言出す一

言何に寄らず畏り奉るる言と
返さぬ誓言聞ふハア是はく改まつ
た御詞畏り入り奉るではござれ
共武士の誓言はならぬといふのかイ
ヤ左にあらす先委細まつく承は
り仔細を言はせ後で異見かイヤ夫は
詞を背くかサア何さハツはつこ斗り
指うつむき暫く詞なかりしが胸を極
めて指添抜かたへにかたなぬきはな
してうくく金打し本藏が心底
かくの通りさめめ致さず他言もせ
ぬ先づ思し召しの一通りおせきな
れず本藏めが胃の腑に落ち付く様
にさつくりと承はらん相述るム
一通り語つて聞かせん、此度管領
足利左兵衛督直義公鶴ヶ岡造營故此
鎌倉へ御下向御馳走の役は摺谷判官
参兩人承はる所に尊氏將軍よりの

仰せにて高野師直を御添人萬事彼が
下知に任せ御馳走申上げよ年ばいと
言い諸事物馴れたる侍と御意に隨
ひ勝に乗つて日頃の我儘十倍増都の
諸武士並居る中若年の某を見込み
雑言過言眞二つに思へ共御上の仰
せを憚り堪忍の胸を押へしは幾度明
日は最早や丁簡ならず御前にて恥面
かゝせる武士の意地、其上にて討つ
て捨る必ず留るな日頃某を短慮成
りさ奥を始め其方が異見幾度か胸に
まつく合點なれ共無念重る武士の
性根家の斷絶奥が歎き思はんにては
なけれ共刀の役目弓矢神への恐れ戦
場にて討死はせず共師直一人討つて
捨れば天下の爲家の恥辱にはかへら
れぬ必と短氣故に身をばたす若狹之
助猪武者ようたへ者さ世の人口

を思ふ故汝にまつく打明すと思ひ
込だる無念の涙五臓を貫く思ひなる
ム、よふ譯をおつしやつたよふ御了
簡なされた此本藏なら今迄了簡はな
らぬ所ヤイ本藏ナ、何んと言つた今
迄はよふ了簡した堪忍したさはわり
や此若狹之助をさみするか是はお詞
共覺へす冬は日かげ夏は日面よけて
通れば門と中かにて行違の喧嘩口論
ないさ申すは町人の誓へ武士の家で
は杓子定規除て通せばほうずかない
さ申すのむ本藏めが誤りか御詞さみ
致さぬ心底御覽に入んさ御傍のちい
さ刀拔より早く椽ん先きの松の片枝
すつばと切つてサア殿まづ此通りに
さつばつと遊ばせんいふにや及ぶ
人や聞く邊に氣を付今夜はまだ九
ツくつたりと一休枕時計の目覺し

下馬先進物の段

豊竹島太夫
鶴澤友友造
平

人形

高野師直 吉田小兵吉
加古川本藏 吉田玉治郎
鷺坂伴内 桐竹紋十郎
腰元おかる 吉田文五郎
早野勘平 吉田榮三

本藏めむしかけ置く早く、チ、
聞入れ有て満足せり奥にも逢ふて餘
所なむらの暇乞モウ逢はぬぞよ本藏
さらばくと言捨て奥の一間に入賜
ふ武士のいきぢは是非もなし御後か
げ見送りく勝手口へ走り出本藏
家來共馬引け早くさいふ間もなくも

いだちしやんさりしげに御庭に引
出せば椽よりひらりま打乗て師直の
箱迄つゞけやつゞけ乗出す響にす
がつてみなせ小浪コレくごこへ始
終の様子は聞ました年こそよれ本藏
殿主人に御異見も申さず合點行かぬ
留ますと母と娘がぶらんく響に
纏留むればヤア小差出た主人のお命
お家の爲思ふ故に此時宜必ず此事殿
へ御さた致すな御耳へ入つたら娘は
勘當さなせば夫婦の縁を切る家來共

後にて諸事を言付んそこ退兩人イヤ
くくくシャ面倒なご鑑の端一ご當
はつしご當られてうんご斗にのつけ
に反を見向もせず家來續けご馬煙追
立打立方足踏立てこそかけり行く。

(床本) 下馬先進物の段

足利左兵衛之督直義公關八州の管領
を新に建し御殿の結構大名小名美麗
をかざる公装束鎌倉山の星月夜ご袖
を列る御馳走にお能役者は裏門口表
御門はお客人御饗應の役人衆正七ッ
時の御登城武家の威光を耀ける。西
の御門の見付の方ハイくくくさい
かめしく提灯てらし入來るは武藏守
高野師直權威を現す鼻高々花色模様
の大紋に胸に我慢の立鳥帽子家來共
を役所くに残し置下部僅に先を拂

はせ主の威光の召おろし鱈の眞似する鷺坂内肩ひぢいからし申しお且那今日の御前表も上首尾く搦谷で候のイヤ桃ノ井で候のさ日頃はさつばさつばさごしめけご行儀作法は豹をやれへ上た様で去りさばく腹のかはイヤ夫に付きかれんく搦谷が妻かほよ御前いまだ殿へ御返事致さぬ由お氣にはさへられな器量ばよけれご氣が叶はぬ何んの鹽谷づれご當時出頭の師直様ミヤイく聲高に口利な主有かほよ度々歌の師範に事寄せくごけ共今に叶へぬ則ち彼が召使かるといふ腰元新参ご聞きやつなこま付け頼で見ん、扱まださりへが有るかほよが誠にいやならば夫鹽谷に仔細をぐばらりご打明ける所を言はぬは樂しみさ、四ッ足門のかたかけに

主従駄頭咄し合折も有れ見付に控へし侍あはたしく走り出我々見付のお腰かけに控へし所へ桃ノ井若狹の助家來古川本藏師直様へ直きに御目にかいらん爲早馬にてお屋敷へ参つたれ共早御登城是非御意得奉らんご家來も大勢召連れたる体いかい斗ひ申さんやご聞くより件内騒ぎ出し今日御用の有師直様へ直きに對面さば推参也某直談さ走り行を待てく件内仔細は知れた一昨日鶴ヶ岡にての意趣ばらし我手を出さず本藏めに言い付け此師直が威光の鼻をひしひん爲ハ、ハ、件内ぬかるな七ツにはまだ間もあらんこれへ呼び出せ仕廻てくれん成程く家來共氣を配れご主従刀の目釘をしめし手ぐすね引て待ちかけ居る詞に隨ひ加古川本

藏衣紋繕ひ悠々ご打ち通り下部に持せし進物共師直が目通りに並べさせ遙下つて躡りハア憚りながら師直様へ申し上げ奉る此度主人若狹の助尊氏將軍より御大役仰付られ下さる段武士の面目身に餘る仕合若輩の若狹の助何んの作法も覺束なくいかいあらんご存る所に師直様萬事御師範を遊ばされ諸事を御引廻し下され候段首尾能御用相勤るも全く主人が手柄にあらす皆師直様の御執成ご主人を始め奥方一家中我々迄も大慶此上や候べき去るによつて近頃些少の至りに候へ共右御禮の爲一家中よりの送りものお受遊ばされ下さらば生前の面目一入願ひ奉る則ち目録御取次ご件内に指出せばふしぎそふにそつご取り押開き目録一つ巻物三十

本黄金三十枚若狹之助奥方一つ黄金
二十枚家老加古川本藏同十枚番頭同
十枚侍中右の通りと讀上ぐれば師
直は明いた口ふさぐれもせずつこ
り主従顔を見合せて氣抜けの様に
きよるりつと祭の延た六月の晦日
見るがごとくにて手持不沙汰に見へ
にける。俄に詞改めて是は
悼入たる仕合、件内こりやごふ
した物ハテ扱てハアお辭宜申さばお
志しに背くといひ第一は大きな不
禮、エ、式作法を教るもこんな折
にはさんごこまるナニものぢやはイ
ヤハヤ本藏殿何の師範致す程の事も
ないがさかくマア若狹之助殿は器用
者師範の拙者及ばぬ、コリヤ件内
進物共皆々取納めエ、不行儀な途中
でお茶さへ得進んぜぬと手の裏返す

あいさつに本藏が胸算用してやつた
りも猶も手をつき最早七ツの刻限早
やお暇殊に今日は猶公の御座敷彌
主人の儀御引廻し頼み存るご立んご
する袂を控へハテあいかいの貴殿も
今日の御座敷の座並拜見なされぬか
イヤ陪臣の某御前の恐れ大事ない
此師直が同道するに誰がづこ
いふ者かい殊にまた若狹之助殿も何
ぞれかそれ小用の有物ひらに、こ
進められ然らば御供仕らん御意を
背くは却て不先禮づおさきへご後に
付き金で面はる算用に主人の命も買
ふて取る二一天作十露盤のけたを違
へぬ白鼠、忠義忠臣忠孝の道は一と
筋眞直に打連れ御門に入にける。程
も有らさず入り来るは壙谷判官高定
是も家來を残し置き乗物道に立てさ

せ譜代の侍早野勘平、朽葉小紋の
新袴ざはん、ざはつく御門前壙谷判
官高定登城成りさ音なひける。門番
罷り出先き程桃井様御登城遊ばされ
御尋、只今又師直様御越しにて御尋
早御入ご相述るナニ勘平最早皆々御
入さや遅なかりし残念と勘平一人御
供にて御前へこそは急ぎ行奥の御殿
は御馳走の連誦の聲播磨がた、高砂
の浦に着にけり、うたふ聲々門外
へ風が持てくる柳かけ其柳より風俗
はまけぬ所体の十八九松の縁のほそ
眉もかたい屋敷に物馴しきごく帽子
の後帯供の奴が提灯は壙谷が家の紋
所御門前に立休らひコレ奴殿やめて
もふ夜も明けるこなた衆は門内へは
叶はぬ爰からいんで休んでやと詞に
隨ひナイ、ご供の下部は歸りける

内を覗いて勘平殿は何してぞごふぞ逢ひたい用もあると見廻はす折から後かげちらと見付けおかるじやないか勘平様逢たかつたによふこそくム、合點の行ぬ夜中さいひ供をも連す只一人さいなあ、爰迄送りし供の奴は先へ歸した。わし獨り残りしは奥様からの御使ごふぞ勘平に逢て此文箱判官様のお手に渡しお慮外ながら此返歌をお前のお手から直きに師直様へお渡しなされ下さりませと傳へよ併お取込の中間違ふまい物でなしマア今宵はよしにせふさのお詞わたりしはお前に逢いたい望何の此歌の一首や二首お届なさるゝ程の間のない事は有るまいとつい一走りに走つてきたア、しんぞやと吐息つく然らば此文箱旦那の手から師直様へ渡せ

ばよいじや迄どりや渡してこふ待つて居いさいふ中に門内より勘平く判官様が召しまする勘平くハイハイく只今それへエ、せばしないと袖ふり切つて行後へ鱈ふむ足付き鷺坂伴内なんさおかる戀の智恵は又格別勘平めさせくつて居る所を勘平く旦那がお召と呼んだばかりつかく師直様もそもじに頼みた事があるとおつしやる我等はそなたにたつた一度君よく抱付くを突飛しコレみだらな事遊ばすな式作法のお家に居ながら狼藉千萬あた不法作法なあた不行儀とつき退ればそれは難面くらがり紛れについちよこくご手を取争ふ其中に伴内様く師直様の急御用伴内様くご奴二人かうろく眼玉でこれはしたり伴内

様最前から師直様も御尋れ式作法のお家に居ながら女を捕へあた不行儀なあた不法法と下部も口々エ、同じ様に何ぬかす頼ふくらして連れ立行。勘平後へ入かばり何んぞ今のはたらき見たか伴内め一つばいくらふてうせおつた。おれもきて旦那も呼ばしやるさ言ふさおけ古いさぬかすも面倒さに、奴共に酒吞せ古いと言はさぬ此術ハ、ハ、ハ、まんまご首尾は仕課たサア其首尾序になちよつさくご手を取ればハテ扱はづんだマアまちやいの。何いはんすやら何の待事が有ぞいなア、もふ頓て夜も明けるわいな、せひにくにせひなくも下地は好なり御意はよし。それでも爰は人出入奥は諸の聲高砂せうこんによつてこしをすればアノ諸で

殿中又傷の段

切豊竹駒太夫

鶴澤重造

人形

桃井若狹之助 桐竹紋十郎

高野師直 吉田小兵吉

茶道珍才 吉田市松

壺谷判官 吉田玉松

加古川本藏 吉田玉治郎

思ひ付たイザこしかけてさ手を引合
打連れて行。

(床本) 殿中又傷の段

脇能過て御樂屋に鼓の調へ太鼓の音
天下泰平繁昌の壽祝ふ直義公御機
嫌斜ならざりける。若狹之助は兼て
待つ師直遅しと御殿の内奥を窺ふ長
袴の紐しめくまり氣配し儕師直眞ッ
二つさ刀の鯉口息を詰め待つ共知ら
ぬ師直主従遠目に見付け是は若狹
狹之助殿扱々お早い御登城イヤハヤ
家折りました。我等閉口イヤ閉
口序に貴殿に言譯致しお詫申事も有
るさ兩腰ぐばらりご投出し若狹之助
殿改めて申さればならぬ一通り日外
鶴ヶ岡で拙者が申した過言チお腹
が立つたで有るふ尤じやわそこを

お詫、其時はごふやらした詞の間違
ひでつい申た我等一生の重愆武士が
コレ手をさげる眞びら〜假令其元
が物馴れたお人なりやこそ外々の狼
藉者で見さつしやれ。此師直眞ッ二
つこばや〜有やうが其節貴殿の後
かげ手を合して拜ましたアハ〜ア
一年寄るさやくたい〜年にめんじ
て御免〜コレサ〜武士が刀を投
げ出し手を合す。是程に申すのを聞
入れぬ貴公でもないはさ。さかく幾
重にも誤り〜件内さ〜にお詫
〜さ金お言はする追蹤さは夢にも
しらぬ若狹之助力きみし腕も拍子抜
今さら抜に抜かれもせず寢及合はせ
し刀の手前さしうつむきし思案顔小
柴のかげには本藏が、嘘もせずまも
り居る、ナニ件内此壺谷はなげ遅い

若狹之助殿はきついで違ひ扱々不行
 儀者、今において煩出しせぬまが主
 なれば家老で候進諸事に細心のつく
 やつが一人もないイザ、若狹之助
 殿御前へ御供致そ、サアお立ちなさ
 れ、サアサア師直め誤つておるぞ
 コリヤ爰な粹め、粹様めイヤ若狹
 の之助最前からち心悪ふござるマア
 先へ何さした、腹痛かコレサ件内
 お脊、お薬進じよかなイヤ、そ
 れ程にもござらぬ然らば少しの内お
 寛御前の首尾は我等がよい様に申
 し上る。件内一間へお供申せ、ミ主
 從寄つてお輩に迷惑ながら若狹之
 助は是思へど是非なくも奥の一間
 へ入りければア、もふ築じやミ本藏
 は天を拜し地を拜しお次の間にぞ控
 へ居る。程もあらず、盃谷判官御前

へ通る長廊下師直呼びかけ遅し、
 何ぞ心得てござる、今日は正七時
 ご先刻から申し渡したでないか成程
 遅なかりしは不調法、去りながら御
 前へ出るはまた間もあらんぞ、秋よ
 り文箱取出し最前手前の家來が貴公
 へお渡し申くれよ、則奥かほま方
 より参りしと渡せば受取成程、イヤ
 ヤ其元の御内室は扱々心懸かござる
 は手前が和歌の道に心を寄するを聞
 き添削を頼むと有る定て其事ならん
 と押開きさなきだにおもきが上のさ
 よ衣我つまならぬつまな重ねそハア
 是は新古今の歌此古歌に添削さばム
 一、思案の内我戀の叶はぬ證扱
 は夫に打ち明しと思ふ怒をさあらぬ
 顔判官殿此歌御らふじたでござらふ
 イヤ只今見ましたム、手前も讀のを

いかにも、アノ貴殿の奥方はきつい
 貞女でござる。ちよつと遣はさる、
 歌が是じや、つまならぬつまな重ね
 そア、貞女、ア、其元はあやかり
 者登城も遅なかる筈の事、内に斗り
 へばり付てござるによつて御前の方
 はお構ないじやさ當こする雑言過言
 あちらの喧嘩の門違ひ判官さらに
 合點行かすむつとせしが押しづめハ
 一、ハ、コレハ、師直殿には御
 酒機嫌か、御酒参つたの、いつもら
 しゃつた、イヤいつ呑ました御酒下
 されても呑いても勤る所はきつと勤
 る、貴公はなぜ遅かつたの御酒参つ
 たか、イヤ内にへばり付いてござつ
 たか、貴殿より若狹之助殿ア、格別
 勤られます、イヤ又其元の奥方は貞
 女さいひ御器量ぞ申手跡は見事御自

慢なされむつきなされなうそはない
はさ、今日御前にはお取込み手前逆
も同前、其中へ鼻毛らしいイヤ是は
手前も奥も歌でござる。それ程内も
大切なら御出御無用惣体貴様のやう
な内に斗り居る者を井戸の鮎だとい
ふ諭も有、これや後學のため聞て置
かして、彼の鮎めがわづか三尺か
四尺の井の中を天にも地にもない様
に思ふて不斷外を見る事がない所に
彼井戸がへに釣瓶に付てあがりませ
それを川へ放しやるも何が内に斗り
居るやつじやによつて、悦んで途を
失ひ彼方の橋板では鼻柱をびしやり
又此方の橋板では鼻柱をびしやりに
びりくくく死にまするサ彼
の鮎めが鮎が貴様が貴様が鮎が鮎よ
く貴様も丁ど鮎と同じ事ハ、ハ、ハ、

い鮎だんく鮎士だわさ出ほうだい
判官腹にすへかれこりやこなた狂氣
めさつたかイヤ氣が違ふたか師直ム
ヤこいつ武士を捕へて氣違ひさけ出
頭第一武藏守高野師直ム、すりや先
方よりの悪言はおみや本性よな、く
ごいんく又本性なりやごふするチ、
かうするご抜討ちにまつこうへ切り
付くる眉間の大疵是げさ怯む身のか
はし烏帽子の頭二つに切り又切りか
いるを抜くつくりつ逃廻る折りも
有れお次に控へし本藏走出て押しこ
いめコレ判官様御短慮さ抱さむる其
隙に師直は館をさしてこけつ轉びつ
逃行けば儂れ師直眞二つ放せ本藏放
しやれさせり合内館も俄に騒出し家
中の諸武士大小名押へて刀もぎ取る
やら師直を介抱やら上を下へこ、

(床本) 裏門の段
立騒ぐ表御門裏御門兩方打たる館の
騒動提灯ひらめく大騒ぎ早野勘平う
るく眼走歸つて裏御門砕けよ破よ
さ打た、き大聲上壘谷判官の御内早
野勘平主人の安否心もさなし爰明け
てたへ早くくご呼はつたり門内よ
りも聲高に御用有らば表へ廻れ爰は
裏門成る程裏門合點表御門は家中の
大勢早馬にて寄付かれず喧嘩の様子
は何んさく喧嘩の次第相濟んだ出
つ頭の師直様へ慮外致せし科によつ
て壘谷判官は閉門仰せ付けられ綱乗
物にてたつた今歸られしと聞くより
ハアなむ三寶おやしきへさ走りか
つてイヤくく閉門ならば館へは
猶歸られじと行きつ戻りつ思案最中

裏門の段

竹本相生太夫

野澤歌助
鶴澤友之助

人形

早野勘平 吉田榮三

腰元おかる 吉田文五郎

鷲坂件内 桐竹紋十郎

腰元おかる道にてはぐれヤア勘平殿
様子は残らず聞きました。コリヤ何
んさせぶごせふご取付き歎くを取
て突退エいめるくさへ頼コリヤ
勘平が武士は捨つたばやいもふ是迄
この刀の柄コレ待つてくだされコリヤ
狼狽てか勘平殿チうろたへた是が
狼狽ずに居られふか主人一生懸命の
場にも有合はさす剩へ囚人同然の
綱乗物お屋敷は閉門其家來は色にふ
けり御供にはすれし人の中へ兩腰さ
して出られふか爰を放せマ、待
つて下さんせ尤じや道理ぢやがそ
のうろたへ武士には誰がした。皆わ
しが心から死ぬる道ならお前より私
が先へ死なねばならぬ今お前が死ん
だらば誰が侍じやと譽ます。爰
をさつくりと聞譯けて私親里へま

づきて下さんせさ、様もか、様も在
所でこそあれ頼もしい人もふかう成
た因果ぢやと思ふて女房のいふ事も
聞いて下され勘平殿さわつこ斗りに
泣しづむ、そふじやもつこもそぢは
新參なれば委細の事は得しるまい。
お家の執權大星由良の助殿いまだ本
國より歸られず歸國を待つてお詫び
せんサア一時なり共急かん身拵へ
する所へ鷲坂件内家來引連れかけ出
ヤア勘平うぬが主人判官師直様へ慮
外を働きかすり疵負せし科によつて
屋敷は閉門追付け首が飛は知れた事
サア腕廻せつれ歸つてなぶり切りか
くがひろげさひしめけばよい所へ鷲
坂件内儂れ一羽で喰ひたらねど勘平
が腕の細ねぶか料理梅楯くふて見よ
イヤ物ないはすな家來共長まつたさ

扇ヶ谷の段

切竹本津太夫
鶴澤友次郎

人形

壘谷判官 吉田玉松
顔世御前 吉田文五郎
大星力彌 桐竹紋十郎
原郷右衛門 吉田小兵吉
斧九太夫 桐竹門造
石堂馬之亟 吉田玉七
薬師寺治郎左衛門 吉田玉市
大星由良之助 吉田榮三
諸士 大ぜい

兩方より捕つたまかゝるをまつかせ
さかいくゞり兩手に兩腕捻じ上げつ
しゝと蹴かへせばかはつて切り込
む切つ先を刀の鞘にて丁どうけ追つ
てくるを襦袢柄にてのつけにそらし
四人一所に切りかゝるを右ま左りへ
一時に田樂返しにはたゝゝと打
ちすへられ皆ちりゝゝに行く後へ
件内いらつて切りかゝる立げしそ
つ首握り大地へどうごもんどり打た
せしつかと踏付けサアどうせふとこ
つちの儘突ふか切らふかなぶり殺し
と振上る刀に纏つてコレゝゝそいつ
殺すとお詫の邪覺もふよいわいなさ
留る間に足の下をばこそゝ尻に
尾のない鷲坂は命からゝ逃て行く
エ、殘念ゝ去りならむきやつをば
らさば不忠の不忠一先づ夫婦も身を

隠し時節を待つて願ふて見ん最早明
け六ツ東がしらむ横雲にねぐらを離
れ飛からすかはいゝの女夫づれ道
は急げど後へ引く主人の御身いかゝ
ぞと案じ行こそ浮世なれ……。

(床本) 扇ヶ谷の段

壘谷判官閑居によつて扇ヶ谷の上屋
敷大竹にて門戸を閉家中の外は出入
をさやめ事殿重に見へにけりかゝる
折にも花やかに奥は媚く女中の遊び
御壘所かほよ御前お傍には大星力彌
殿の御氣を慰めんさ鎌倉山の八重九
重色々櫻花籠に生らるゝ花よりも生
る人こそ花紅葉柳の間の廊下を傳ひ
諸士頭原郷右衛門後に續いて斧九太
夫是はゝゝ力彌殿早い御出仕イヤ某
も本國より親共が參る迄晝夜相詰め

罷り有るそれは御奇特千萬郷右衛門
 門兩手をつき今日殿の御機嫌はいか
 いお渡り遊ばさるゝと申し上ぐれば
 かほよ御前チ、二人共太儀く此度
 は判官様お氣詰りに思し召おしつら
 ひでも出よふかさ案じたさは格別明
 暮築山の花ざかり御らふじて御機嫌
 のよいお顔げせ夫故に自もお慰に指
 上げふさ名有る櫻を取寄せて見やる
 通りの花拵へア、いか様にも仰せの
 通り花は開く物なれば御門も開き閉
 門を御赦さるゝ吉事の御趣向拙者も
 何かなぞ存ずれどかやうな事の思ひ
 付きは無調法なる郷右衛門ヤア肝心
 の事申し上ん今日御上使のお出こ承
 ばりしが定めて殿の御閉門を御赦さ
 るゝ御上使ならん何んぞ九太夫殿そ
 ふは思し召されぬかハ、ハ、ハ、コレ

郷右衛門殿此花さいふ物も當分人の
 目を悦ばす斗り風が吹けば散り失る
 こなたの詞もまづ其如く人の心を悦
 ばさふ逆武士に似合はぬらりくら
 りと後からはける正月詞なせおおい
 やれ此度殿の御越度は響應の御役儀
 を蒙りながら執事たる人に手を負せ
 館を騒せし科輕ふて流罪重ふて切腹
 じたい又師直公に敵對は殿の御不覺
 と聞きもあへず郷右衛門扱は其方殿
 の流罪切腹を願はるゝかイヤ願ひは
 致されど詞をかざらず眞實を申のじ
 やもこそいへば郷右衛門殿こなたの
 格惜しはさからおこつた事金銀を以
 て煩をばり召さるればか様な事は出
 來申さぬご己が心に引當て、怒面打
 けす郷右衛門人に媚諂ふは侍でない
 武士でないナフ力彌殿何んぞそふで

は有るまいか詞の角をなだむる御
 臺二人共に争ひ無用今度夫の御難儀
 なさるゝ元の發りは此かほよ日外鶴
 ク岡で響應の折から道知らずの師直
 主の有る自に無体な戀をいひかけさ
 まんくさくごきしむ恥をあたへ懲さ
 せんご判官様にもしらす歌の點に
 事寄さよ衣の歌を書き恥しめてやつ
 たれば戀の叶はぬ意趣ばらしに判官
 様に悪口元より短氣なお生れ付得堪
 忍なされぬはお道理でないかいのこ
 語り賜へば郷右衛門力彌も俱に御主
 君の御憤りを察し入心外面に現はせ
 り早御上使の御出さ玄關廣間ひしめ
 けば奥へかくと通じさせ御臺所も座
 を下り三人出向ふ間もなく入來る上
 使は石堂右馬の巫師直か昵近藥師寺
 使は治郎左衛門役目なれば罷り通るさ會

釋もなく上座に着けば一間の内より
壺谷判官しづくと立出是は御
上使さ有て石堂殿御苦勞千萬先づお
盃の用意せよ御上使の趣承はりい
づれもと一ツ献酌積うつを暗し申さ
んチ、それよふござる薬師寺もお聞
致さふ。したか上意を聞かれたか酒
も咽喉へは通るまいさあざ笑へば右
馬之亟我々今日上使に立つたる其趣
具に承知せられよ懐中より御書取
出し押ひらけば判官も席をあらため
承る其文言此度壺谷判官高定私の
宿意をもつて執事高師直を及傷に及
び館を騒せし科によつて國郡を沒收
し切腹申し付ける者なり。聞よりは
つと驚く御臺並居る諸士と顔見合せ
柯れ果たる斗りなり判官動する氣色
もなく御上意の趣き委細承知仕る扱

これからは各の御苦勞休めに打ちく
つろいで御酒一つコレ、判官だま
り召され其方が今度の科はしげり首
にも及ぶべき所お上の慈悲を以て切
腹仰付けらるゝを有りびたふ思ひ早
速用意もすべき筈殊に以て切腹には
定つた法の有る物それに何んぞや當
世様の長羽織せべらん、こしらるゝ
は酒興か但し血迷ふたか上使に立つ
たる石堂殿此薬師寺へ不作法さきめ
つくれればにつここ笑ひ此判官酒興も
せず血迷もせぬ今日上使と聞くより
も斯あらん、期したるゆへ兼ての覺
悟見すべしと大小羽織を脱捨てれば下
には用意の白小袖無紋の上下死装束
皆々是は驚けば薬師寺は言句も出
ず顔ふくらして閉口す。右馬之亟さ
しよつて御心底察し入則ち拙者檢使

の役心しづかに御覺悟ア、御深切忝
なしそも又傷に及びしより斯あらん
と兼ての覺悟アうらむらくば館にて
加古川本藏に抱き留られ師直を討も
らし無念骨髓に通つて忘れがたし湊
川にて楠正成最期の一念によつて
生を引くさいひし如く生れかはり死
かはり鬱憤を晴らさん怒りの聲さ
諸共にお次の襖打ちたいき一家中の
者共殿の御存生に御尊顔を拜したき
願ひ御前へ推參致さんや郷右衛門殿
お取次家中の聲に聞ゆれば郷右衛
門御前に向ひいかはからひ候はん
フリ尤なる願ひなれ共由良之助が參
る迄無用、はつと斗り一間に向ひ
聞かると通りの御意なれば一人も叶
わぬ、諸士は返す詞もなく一間も
ひつとそしづまりける。力彌御意を

承り兼て用意の腹切刀御前に直す
 れば心静に肩衣取り退座をくつろげ
 コレ／＼御檢使御見届け下さるべし
 る三方引きよせ九寸五分押戴き力彌
 くハ／＼ハア由良之助は未參上
 仕りませぬフウア存生に對面せず
 残念力彌／＼由良之助はテ残り多や
 な是非に及ばぬ是迄さ刀逆手に取り
 直し弓手に突き立引き廻はす御臺二
 た目さ見もやらず口に稱名目に涙廊
 下の襖踏開きかけ込大星由良之助主
 君の有様見るよりもハ／＼はつと斗り
 にごみさ伏す後に續いて千崎矢間其
 外的一家中ばら／＼さかけ入たり國
 家老大星由良之助只今當着仕りま
 した。ナニ國家老大星由良之助さな
 ア／＼くるしうない近うハア近うハア
 ア近う／＼／＼ハア／＼／＼／＼

ヤレ由良之助待兼たはやいハア御存
 生の御尊顔を拜し身に取て何程かチ
 我も満足／＼定めて仔細開たであ
 る聞たか／＼エ、無念口惜いはやい
 ハアアイヤ委細承知仕る此期に
 及び申し上る詞もなし只御最期の尋
 常を願はしう存じまする。チ、いふ
 にや及ぶと諸手をかけぐつ／＼と引
 廻はし苦しき息をほつとつぎ由良之
 助此九寸五分は汝へ笹ナ、ハ、我儔
 憤を晴らさせよと切つ先きにてふふ
 匆切り血刀投出しうつぶせに／＼と
 轉び息絶れば御臺を始め並居る家中
 眼を閉息を詰め齒をくひしはり控ゆ
 れば由良之助にじり寄り刀取上げ押
 し戴き血に染る切先を打ち守り／＼
 拳を握り無念の涙はら／＼／＼判官

の末期の一句五臟六腑にしみ渡り扱
 こそ末世に大星の忠臣義心の名を上
 げし根ざしは斯くさしられけり薬師
 寺はつゝ立ち上り判官むくたばるか
 らは早／＼屋敷を明け渡せイヤさは
 言れぬ薬師寺いは一國一城の主ヤ
 ナニ旁々葬々の規式取まかなひ心静
 に立退れよ此石堂は檢使の役目切腹
 を見届けたれば此旨を言上せんナニ
 由良之助殿御愁傷察し入る用事有ら
 ば承はらんかならず心おかれなさ
 並居る諸士に目禮し悠々として立歸
 る。此薬師寺も死骸片付ける其間奥
 の間で休息せふ、家來參れと呼出し
 家中共が／＼らくた道具門前へほり出
 せ判官が所持の道具俄浪人にまげら
 れなま館の四方をれめ廻し一間の内

霞ヶ關の段

豊竹綾太夫

鶴澤友若
豊澤猿太郎

人形

大星由良之助 吉田榮三

原郷右衛門 吉田小兵吉

大星力彌 桐竹紋太郎

諸士大ぜい

へ入にける。御臺はわつこ聲を上扱もく武士の身の上程悲しい物の有るべきか今夫の御最期にいたい事は山々なれど未練なご御上使のさげしみが恥かしさに今迄こらへて居たはいのいさをしの有様やご亡骸に抱き付前後もわかす泣賜ふ力彌參れ御臺所諸共亡君の御影を御菩提所光明寺へ早々送り奉れ由良之助も後より追付き葬々の規式取り行ばん堀矢間小寺間其外の一家中道のけいご致されよと詞の下より御乗物手舁にかきすへ戸を開き皆立ち寄つて御死骸涙ご俱に乗せ奉りしづゝさかき上ぐれば御臺所は正体なく歎き賜ふを慰めて諸士のめんく我れ一ご御乗物に引添く御菩提。

(床本) 霞ヶ關の段

御菩提所へ急ぎ行人々御骸見送つて座につけば斧九太夫何に大星殿其元は御親父八幡六郎殿よりの家老職拙者逆も其右には座せ共今日より浪人ご成り妻子を育衛なし殿の貯へ置き賜ふ御用金を配分し早く屋敷をわたさずば薬師寺殿へ無禮ならんイヤ千崎ご存するにはさす敵の高師直存命なるも我々ご鬱憤討つ手を引受け此館を枕さしてアこれく討死さば悪い了簡親九太夫の申さるゝ通り屋敷を渡し金銀を分けて取るが上分別ご評議の中に由良之助黙然として居たりしが只今の評定に彌五郎の所存も我胸中一致せりいば亡君の御爲に我々殉死すべき筈、むざ

く腹切らふより足利の討手を受け討死と一決せり、ヤア何んと言はる、能評証かと思へば浪人の瘦顔はり足利殿に弓ひかふア、夫は無分別マア此九太夫合點いかぬチ、親父殿そふじやく此定九郎も其意を得ぬ此談合には、ふいて貰ふ長居は無益お歸りなされそれよかる、いづれもゆるり居めさ、れ親子打連れ立歸るヤア慈頼の斧親子討死を聞きおぢして逃歸つたる憶病者きやつ構はずと大星殿、討手を待つ御用意くア、騒がれな彌五郎足利殿に何根み有て弓引くべき彼等親子が心底をさぐらん爲の斗略、薬師寺に屋敷を渡し思ひく、當所を立退き都山科にて再會し胸中残さず打明けて評議をしめんと言ふ間もあらせず次郎

左衛門一間を立出ハテべんく長詮議死骸片付たら早く屋敷を明け渡せよ、いごみか、れば郷右衛門ア、成程お待兼れ亡君所持の御道具其外の武具馬具迄よく、改め受け取られよサア由良之助殿退散有れチ、心得たりとさしづく立上り御先祖代々我々も代々晝夜詰めたる館の内けふを限りと思ふにぞ名残り惜しげに見返りく御門外へ立出れば御駭送り奉り力彌矢間堀、小寺追々に馳歸り扱は屋敷をお渡し有たか此うへは直義の討手を引受け討死せんこはやり立てば由良之助イヤ、今死すべき所にあらす是を見よ旁々亡君の御篋を抜き放し此きつさきには我君の御血をあやし御無念の魂を殘されし九寸五分此刀にて師直も首かき

切つて本意をさげん實尤も諸武士の勇屋敷の内には薬師寺次郎門の貫の木はつしと立てさせ師直公の詞を當り扱よいさまく家來一度に手を叩きごつと笑ふ鯨のこえアレ聞かれよご若侍取て返すを由良之助先君の御憤り晴さんと思ふ所存はないか、はつと一度に立出しと思へば無念ご館の内をふりかへりくはつたご睨んで立出る。

(床本) 山崎街道の段

鷹は死しても穂はつまずと醫にもれす入る月や日數も積る山崎の邊りに近き住居早野勘平若氣の誤り世渡るもさでほそ道傳ひ此山中の鹿猿を打つて商ふ種か嶋も用意に持つや袂まで鐵砲雨のしだらでん誰水無月さ

山崎街道の段

(竹本源路太夫)

(鶴澤綱右衛門)

白雨の晴間を爰に松のかげ向ふより
 来る小提灯これもむかしは弓張のこ
 もしび消じぬらさじと合羽の裾に大
 雨を凌いで急ぐ夜の道イヤ申し辛
 爾ながら火を一つ御無心と立寄れば
 旅人もちやくと身がまへしム、此街
 道は不用心とすつて合點の一人旅見
 れば飛道具の一と口商ひふこそはか
 さじ出なをせとびくも動かば一討と
 眼を配ればイヤサ成程盜賊この目
 違ひ御尤千萬我等は此邊りの狩人
 なるが先き程の大雨にほくちもしめ
 り難儀至極サア鐵砲それへお渡し申
 す自身に火を附御借と他事なき詞顔
 付きをきつと眺て和殿は早野勤平な
 らずやさいふ貴殿は千崎彌五郎これ
 は堅固で御無事でと絶て久しき對面
 に主人の御家没落の胸に忘れぬ無念

の思ひ互に拳をにぎり合勤平は指う
 つむき暫し詞もなかりしとエ、面目
 もなき我が身の上古朋輩の貴殿にも
 顔も得上げぬ此仕合せ武士の冥加に
 つきたるが殿判官公の御供先きお家
 の大事起りしは是非に及ばぬ我不運
 其場にも有り合はせず御屋敷へは歸
 られず所詮し時節を待つて御託と思
 ひの外の御切腹なむ三寶皆師直めが
 なす業せめて冥途の御供と刀に手は
 かけたれど何を手柄に御供とんの煩
 さげて言ひ譯せんさ心をくだく折か
 ら密に様子を承はれば由良殿御親
 子郷右衛門殿を始めとして故殿の爵
 憤散ぜん爲寄りくの思召し立ち有
 るこの噂我等連も御勤當の身さいふ
 でもなし手わり求め由良殿に對面
 ぞげ御企の連判に御加へくださら

ば生々世々の面目貴殿に逢もうごん
 げの花を咲かせて侍の一分立て、
 賜はれかし古朋輩のよしみ武士の情
 お頼み申すこ両手を突先非を悔し男
 泣き理せめて不便なる彌五郎も朋
 輩の悔道理と思へども大事むさこ明
 さじミコレサく勤平ばて扱、お手
 前は身の言譯にまじりまぜて御企ての
 イヤ連判などい何の噓ごこ左やう
 な噂かつてなし某は由良殿より郷
 右衛門殿へ急の使ひ先君の御廟所へ
 御石碑を建立せんこの催し併我々迎
 も浪人の身の上これこそ摺谷判官の
 御石塔と末の世迄も人の口の端にか
 くる物故御用金を集る其御使先君の
 御恩を思ふ人を撰り出す爲わざと大
 事を明されず先君の御恩を思はしナ
 合點かくこ石碑になぞらへ大星

の工みをよそにしらせしはげに朋輩
 のよしみなりハア忝い彌五郎殿成
 程石碑さいひ立て御用金の御拵へ有
 る事さつくに承り及び某も何ぞ
 ぞして用金を調へそれを力に御託さ
 心は千々に砕けども彌五郎殿恥かし
 や主人の御罰で今此ざま誰にかうこ
 の便りもなしされ共がるが親與一兵
 衛と申すはたのもし百姓我々夫婦
 が判官様へ不奉公と悔み歎き何ぞぞ
 して元の武士に立かへれとおぢうは
 ともに歎き悲しむ是幸御邊に逢し
 物語り段々の仔細を語り元の武士に
 立ちかへるさといひ聞かさば纒かの田
 地も我子の爲め何しにいなほるもい
 はじ御用金を手かりに郷右衛門殿
 迄お取次一入頼み存するさ餘儀なき
 詞にム、成程然らばこれより郷右衛

門殿迄右の譯をも咄し由良殿へ願ふ
 て見ん明々日はかならずきつご御返
 事則ち郷右衛門殿の旅宿の所書さ渡
 せば取つて押戴き重々の御世話忝
 し何ぞぞ急に御用金をこしらへ明々
 日お目にかいらん某が有り家お尋
 れあらば此山崎の涉場を左りへ取り
 與一兵衛とお尋ね有らば早速相しれ
 申へし夜更ぬ内に早くも御出コレ此
 行く先きは猶物騒随分ぬかるな合點
 く石碑成就する迄は蚤にも喰さぬ
 此からだ御邊も堅固で御用金の便を
 待つぞさらばくこ両方へ立別れて
 ぞ

(床本) ニツ玉の段

急ぎ行く又もふりくる雨のあし人の
 足音さばくこ道は闇路に迷はれど
 子故の闇につく杖もすぐ成る心堅親

二ツ玉の段

豊竹つばめ太夫

野澤勝市

胡弓 鶴澤友太郎
鶴澤小綱

人形

獵人勘平 吉田榮三

千崎彌五郎 桐竹政龜

斧 定九郎 吉田玉幸

百姓與市兵衛 桐竹門造

仁一筋道の後ろからチーイ〜親仁殿よい道づれさ呼ば〜つて斧九太夫が悴定九郎身の置き所しら浪や此街道の夜働きだんびら物を落しざしつきにから呼ぶ聲が貴様の耳へはいらぬか此ぶつそな街道をよい年をして大膽〜連にならふさ向ふへ廻りきよる付く目玉ぞつこせしが遠は老人是は〜お若いに似ぬ御奇特な私もよい年をして一人旅はいやなれどシアいづくの浦でも金程大切なものはない去年の年貢につまり此中から一家中の在所へ無心に居たれば是もびたひらなり才覺ならず埒のあかぬ所に長居はならずごとく一人戻る道と半分言はさすややかましいあり様か年貢の納まらぬ其相談を聞きにはこぬコレ親仁殿おれが言ふ事を

さくさ聞かしやれやア〜かうじやはこなたの懐ろに金なら四五拾兩のかさ縞の財布に有るのをさつくりさ見付けてきたのじや借して下だされ男が手を合はす定めて貴様も何んぞ詰らぬこそか子が難儀に及ぶによつてさ言ふ様な有る格な事じや有うけれどおれが見込んだらハチしよ事かないと諦めて借て下され〜さ懐へ手を指入引きすり出す縞の財布ア〜申しそれは〜さは是程爰に有る物さひつたくる手にすがり付きイエ〜此財布は後の在所で草鞋買ふは端錢を出しましたか後に残るは晝食の握り飯くはく亂せんようにさ娘わくれた和中散反魂丹でござりますお赦しなされて下さりませさひつたくり逃げ行く先きへ立ち廻りエ〜聞き分の

ないむごい料理するがいやさきに手ぬるふいへば付き上がるサア其金爰へまき出せ遅いとたつた一討と二尺八寸おがみうちなふ悲しやさいふ間もなくから竹はりき切り付くる刀の廻りか手の廻りかはづれる抜き身を兩手にしつかさ攔み付きごふでもこなた殺さしやるのチ、知れた事金の有るのを見てするしごここさばかすさくたばれと肝先へさし付くれればマ、い、い、まあ待つて下さりませハアぜひに及ばぬ成程、是は金でござりますすけれ共此金は私がつた一人の娘がござる其娘が命にもかへぬ大事の男がござりまする其男のために入る金ちと譯有る事ゆへ浪人して居まする娘が申しますにはあのお人の浪人も元はわしゆへ何ぞぞして元の

武士にしてしんぜたい、ご嬢さわしごへ毎夜頼みア、身賃にはござりまするごうもしむくの仕様もなくば、ごいさる、談合して娘にも呑込ませ、聳へは必ず沙汰なしとしめし合はせ、ほんに、親子三人が血の涙の流れる金をお前に取られて娘は何んとなりませふコレ拜みます助けて下さりませおまへもお侍の果そふなが武士は相身互ひ此金がなければ娘も聳も人様に顔が出されぬたつた一人の娘につれそふ聳ちや者不便にござる可愛ござる了簡してお助けなされて下さりませ、エ、お前はお若いによつてまだお子もござるまいがやんがつてお子を持つて御らうじませ親仁がい、おつたば尤じやご思召して此場を助さしやつて下さりませ、マア一里行ば私が在所金を

聳に渡してから殺されましょ申、娘が悦ぶ顔見てから死たふござりますこれ申ア、あれ、ご呼ばれ、ご後先き遠く山びこの、既、哀れ催せりチ、悲しいこつちやばまつさい、ごぼへヤイ老ばれめ其金でおれが出世すりや其めぐみでうぬがせがれも出世するはやい人に慈悲すりやわるふはむくはぬア、可愛やさぐつごつうんご手足の七轉八倒のたくり廻るをすれにて蹴かへしチ、いさしやいたかるければおれに恨みはないぞや金がありやこそ殺せ金がなければやんのいの金、たきじやいとしほや南無阿彌陀南無妙法蓮華經ごちらへなりさうせおるさ刀も抜かぬいもさしめぐり草葉も朱に置くつゆや年も六十四苦八苦あへなく息は絶にけりしすましたりま件の財布くらがり耳

身賣りの段

竹本南部太夫

野澤吉彌

のつかみ讀ヒヤ五拾兩エ、久しぶり
の御對面、忝しと首にひつかけ死骸
をすぐに谷底へはれ、こみ蹴込るま
ぶれば、れは我が身にかゝるさもしら
ず立つたるうしろよりいつさんにく
る手負猪、これはならぬと身をよぎる
かけくる猪は、一文字木の根岩角ふ
み立て蹴たて鼻いからして泥も草木
も一まくりに飛行けばあはやと見送
る定九郎も脊ぼれをかけてごつさり
さあばらへぬける二ツ玉うん共ぎや
つ共いふ間もなくふすぼり返りて死
たるは心地よくこそ見へにけれ猪打
ちさめしと勘平は鐵砲ひつさげ爰か
しこさぐり廻りて扱こそと引立れば
猪にはあらずヤア、こりや人ぢや
なむ三實仕損じたりと思へどくらき
眞の闇誰人なるぞと問れもせずまだ
息あらんと抱起せば手に當る金財布

つかんで見れば四五拾兩のあたへ
と押しいたゞきん、猪より先きへ逸
散に飛むとごさくに急ぎける。

(床本) 身賣りの段

みさき踊りがしゆんだる程に親仁出
て見やばいんつばいんつれて親仁出
て見やばいんつ參かつ音の在所歌所
も名におふ山崎の小百姓與一兵衛が
壇生の住家今は早野勘平も涙々の身
の隠れ里女房おかるは寝亂れし髪取
り上りと櫛箱のあかつきかけて戻ら
ぬ夫待つ間もさけし投島田結ふにい
はれぬ身の上を誰にかつげの水櫛に
髪の色艶すきかへししなよくしやん
と結立てしは在所におしき姿なり母
の齡も杖つきの野道さぼく立歸り
チ、娘髪結やつたか美しうよふ出来

たイヤもふ在所はごこもかも蓼秋時
 分でいそがしい今も藪際で若い衆が
 夢かつ歌に親仁出て見やばくんつれ
 てこ諷ふを聞き親父殿の遅いが氣に
 かかり在口迄往たれごようなふ影も
 かたちも見へぬさいなこれやまあご
 ふして遅い事じやわし一走り見て來
 やんしよイヤなふ若い女の一人ある
 くばいらぬ事殊にそなたはちいさい
 時から在所をあるく事さへ嫌ひで搦
 谷様へ御奉公にやつたれごふでも
 草深い所に縁があるやら戻りやつた
 が勘平殿と二人居やればおさましい
 顔も出ぬチーかゝ様のそりや知れた
 事すいた男と添のぢやもの在所はお
 るか貧しいくらしでも苦にならぬや
 んがて盆に成つてささま出て見やか
 んつかゝんつれてさいふ歌の通り

勘平殿とたつた二人踊見にいきやん
 しよ、お前も若い時覺があるささし
 合いくらぬぐはら娘氣もわさくさ
 見へにける。何ぼ其やうに面白おか
 しいやつても心の中はのイエく
 濟でござんすぬしのために祇園町へ
 勤奉公に行くは兼て覺悟の前なれご
 年寄つてさゝ様の世話やかしやんす
 がそりやいやんな少身物なれご兄も
 搦谷の御家來なれば外の世話するや
 うにもないご親子咄しの中道傳ひ駕
 をかゝせて急ぎぐるは祇園町の一文
 字やエ、こつと一家二家、ム爰じや
 くご門口から與一兵衛殿内にかま
 言ついはいれればはまあく遠い所
 をソレ娘たば盆お茶上ましよご親
 子して植でおいへを伯人々の亭主扱
 タアハ是の親仁殿もいかい太儀、別

條なふ戻られましたかエ、さては親
 父殿と連立つて來はなされませぬか
 是はしたりお前へいてから今におい
 てヤア戻られぬかハテめんよふなハ
 ア、もし稻荷前をぶら付て彼玉殿に
 つまゝりやせぬかのコレ中爰へ見
 に來て極た通りお娘の年も丸五年切
 給銀は金百兩さらりさ手を打つた是
 の親仁むいばるゝには今夜中に渡さ
 ればならぬ金有れば今晚證文を認め
 百兩の金子お借なされて下されご涙
 をこぼしての頼み故證文の上で半金
 渡し残りば奉公人さ引かへの契約何
 が其五拾兩渡すご悦んでいたゞきほ
 たく言ふて戻られたたはもふ四ッで
 も有ふかい夜道を一人金持ていらぬ
 物さ留ても聞かず戻られたか但しは
 道にイエく寄らしやる所はなふか

く様な共々殊に一時も早ふそなたやわしに金見せて悦ばさふ進いきせき戻らしやる筈じやに合點かいかねイヤコレ合點のいいかねはそつちのせんさくこちばさびりの金渡して奉公人連れていのみ懐より金取出し後金の五拾兩これで都合百兩サア渡す請さらしやれエ、お前それで親仁殿の戻られぬ中ばなふかるわがみはやらられぬハテぐずぐずと埒の明かぬコレぐつ共すつ共言れぬ與一兵衛の印形證文が物いふじやて、コレ證文がけふから金で買切つたから一日違へばれこづ、違ふごふで斯せさ濟まいと手を取つて引き立る、マア、待てと取付く母親突退勿退無体に駕へ押込、かき上る門の口鐵砲に簀笠打かけもどりが、つて見

る勘平つか、こ内に入り駕の内なは女房共こりやマアごへチ、勘平殿よい所へよ戻つて下さつたご母の悦び其意を得ずごふでも深い譯か有る母者人女房共様子聞かふごお上の眞中ごつかさすれば文字の亭主チ、扱ばこなたが奉公人の御亭主じやの、たごへ夫でも何んでも言號の夫なご、脇より違亂妨げ申す者無之候と親仁の印形有るからはこちには構はぬ早奉公人を受取ふチ、駕殿合點がいくまい兼てこなたに金の入る様子娘の咄して聞た故ごふぞ調へて進んぜたいさいふた斗りで一錢の宛もなしそこで親父殿の言しやるにはひよつここなたの氣に女房賣つて金調やうごよもや思ふては有るまいけれどもし二親の手前を遠慮し

て居やしやるまい物でもないいつそ此與一兵衛が駕殿にしらす娘を賣らふ、まさかの時は切り取りするも侍のならひ女房賣つても恥にはならぬお主の役に立つる金調へておましたらまんざら腹も立まいご昨日から祇園町へ折り極はめにいて今に戻らしやれぬ故親子案じて居る中へ親方殿が見へて夕ア親父殿に半ん金渡し後金の五拾兩ご引かへに娘を連れて遊ふご言てなれご親父殿にあふての上ご譯をいふても聞き入れず今連れていなしやる所ごふせふぞ勘平殿是は、先づ以つて舅殿の心遣ひ、忝いしたごこちにもちつごよい事が有れ共それは追つて親仁殿も戻られぬに女房共は渡されまい、ごはなげに、ハテはいは親なり判が、り尤

も夕ア半ん金の五拾兩渡されたでも有ふけれどイヤこれ京大阪を股にかけ女贖の嶋ほど奉公人を抱へる一文字屋渡さぬ金を渡したとこいふて濟物かいのまだ其うへに慥な事があるてや、これの親仁が彼五拾兩と言ふ金を手ぬぐひにくるくまいて懐にいれらるゝ、それやあぶない是に入れて首にかけさつしやれとおれがきて居る此一重物の縞のきれでこしらへた金財布借たればやんがて首にかけて戻られうヤア何んこなたが着てゐる此縞のきれの金財布がチ、てや。あの此縞じや何と慥な證據で有ふが。ご聞くよりはつと勘平が肝先にひしこたへそばあたりに目をくばり袂の財布見合はせば寸分違はぬ糸入縞、なむ三寶扱は夕ア鐵砲で

打ち殺したは鼻で有つたかハアはつと我胸板を二ツ玉で打ちぬかるゝよりせつなき思ひまはしらすして女房コレこちの人そはくせすさやる物かやらぬ物が分別して下さんせチ、成程ハテもふあの様に慥に言はるゝからはいきやらずば成まいかアノまつ様に逢ひでもかへ、イヤ親父殿にもけさちよつとあふたが戻りは知れまいコウそなりやまつさんと逢ふてかへ夫れならそふさいひもせでかゝ様にもわしにも案じさして斗りと言ふに文字も圖に乗つて七度尋ねて人うたがへじや親仁の有り所のしれたのでそつちもこつちも心むよいまだ此上にも四の五の有ればいや共んでんご沙汰まあくさりりさ濟んでめでたいお袋も御亭主も六條参りし

てちと寄りしやれサアく駕に早うのりやアイくコレ勘平殿もふ今あつちへ行ぞへ。年寄つた二人の親達ごふでこな様のみんな世話取わけてまつ様はきつい持病、氣を付けて下さんせ親の死目を露しらす願ふ便さいぢらしさ、いつそ打ち明け有りのまゝ、咄さんにも他人有りさ心を痛めこたへ居るチ、賀殿夫婦の別れ暇乞がしたかるけれごそなたに未練な氣も出よかと思ふての事て有るイエく何んば別れても主のために身を賣れば悲しうも何共ないわしやいさんで行くか、様したむご、様に逢ずに行くのがチ、それも戻らしやつたらつい逢にかしやるぞいの煩はぬ様に灸すへて息才な顔見せにきてたも鼻紙扇もなけれや不自由な何んに

勘平切腹の段

切 豊竹古鞆太夫

鶴 澤清六

人形

| | |
|----------|-------|
| 百姓與市兵衛女房 | 吉田玉七 |
| 娘おかる | 吉田文五郎 |
| 一文字屋才兵衛 | 吉田文作 |
| 早野勘平 | 吉田榮三 |
| めつぼう彌八 | 吉田兵次 |
| 種ヶ島の六 | 吉田傳之助 |
| 狸の角兵衛 | 吉田瓢壽呂 |
| 原郷右衛門 | 吉田小兵吉 |
| 千崎彌五郎 | 桐竹政龜 |

もよいか、こぼ付いてけが仕やんな
 と駕に乗まで心を付けさらばやさ
 ば何の因果で人並な娘を持ち此悲し
 いめを見る事じやさ商をくひしげり
 泣きければ娘は駕にしがみ付き泣を
 しらさじ聞かさじと聲をも立てずむ
 せかへる。なさけなくも駕かきあげ
 道をはやめて急ぎ行く。

(床本) 勘平切腹の段

母は後を見送りくア、よしな事
 いふて娘も無悲しかるチ、こな人わ
 いの親の身でさへ思ひ切りがよいに
 女房の事ぐく思ふて煩ふて下さ
 んな此親父殿はまた戻らしやれぬ事
 かいのふこなたあふたと言はしやつ
 たのア、成程そりやまあごころであ
 はしやつて何所へ別れていかしやつ

た、されば別れた其所は鳥羽が伏見
 か淀竹田さ口から出次第めつぼう彌
 八種ヶ島の六、狸の角兵衛所の狩人
 三人連れ親父の死骸に裏打ちきせて
 戸板にのせごやぐさ内に入り、夜
 山仕舞て戻りがけ是の親父が殺され
 て居られた故狩人仲間が連れて来た
 と聞よりはつと驚く母、何者の仕業
 コレ舞殿殺したやつは何者じや敵を
 取てくだされのふコレ親父殿くご
 よべごさけべご其かひも泣より外の
 事ぞなき狩人共口々にお袋悲しかる
 代官所へ願ふて詮議してもらはしや
 れ笑止くご打つて皆は我家へ立
 歸る。母は涙の隙よりも勘平が傍へ
 差よつて、コレ舞殿よもやぐさ
 くごさは思へ共合點がいかね何んぼ
 以前が武士じやきて舅の死目見やし

やつたら悔りも仕やるはづ、こなた
 道であふた時金受取はさつしやれぬ
 か、親父殿もなんと言れた、サアい
 はつしやれサア何さごふも返事は有
 るまいものない證據はコレ愛にさ勘
 平が懐へ手を指入れて引出すはさ
 つきにちらりさ見て置た此財布コレ
 血の付いて有るからはこなたが親父
 を殺したのイヤそれはくさばエ、
 わごりよばなに隠しても隠くされぬ
 天道様が明らかかな。親父殿を殺して
 取た其金にや誰にやる金ぢやム、聞
 へた。身贖な勇むすめ賣つた其金を
 中で半分くすれて置いて皆やるまいか
 さ思ふてコリヤ殺して取つたのじぢ
 やな、今さいふ今迄も律儀な人じや
 さ思ふてだまされたが腹が立はいや
 いエ、愛な人でなし、あんまりあき

れて涙さへ出ぬわいやいなふいさし
 や與一兵衛殿畜生のやうな聲さは知
 らすごぶぞ元の侍に仕てやりたい
 さ年寄て夜も寝ずに京三界をかけあ
 るき彌財を投打つて世話さしやつた
 も返つてこなたの身のあださ成つた
 るか飼かふ犬に手を喰るゝさよふも
 〳〵此やうにむごたらしう殺された
 事ぢや迄コリヤ愛な鬼よ此よささま
 をかへせ親父殿を生けて戻せやいと
 遠慮會釋もあら男のたぶさをつかん
 で引寄〳〵たゝき付づだ〳〵に切り
 さいなんだ逆是で何の腹が居よさ恨
 の數々くごき立てかつげさふして泣
 ゐたる身の誤りに勘平も五體に熱湯
 の汗を流し疊にくひ付き天罰さ思ひ
 知つたる折こそあれ、深編笠の侍
 二人早野勘平在宿をしめさるゝか、

原郷右衛門千崎彌五郎御意得たしこ
 音なへば折悪けれ共勘平は腰ふさぎ
 脇袂で出迎ひコレハ〳〵御兩所共に
 見ぐるしき塙生へ御出忝しご頭を
 さぐれば郷右衛門見れば家内に取込
 みも有りそふなイヤもふ些細な内證
 事、おかまいなく共いざ先あれへ、
 然らば左様に致さんさすつこ通り座
 に付けば二人も前に兩手をつき此度
 殿の御大事にはづれたるは拙者が重
 々の誤り申しひらかん詞もなし、何卒
 某が科御ゆるしを蒙り亡君の御年
 忌諸家中諸共相勤る様に御兩所の御
 執成偏に頼み奉るご身をへりぐだ
 り述ければ郷右衛門取りあへず先以
 て其方貯へなき涙人の身さして多く
 の金子御石稗料に調進せられし段由
 良之助殿甚だ感じ入れしが石碑を營

むは亡君の御菩提殿に不忠不義をせし其方の金子を以て御石碑用に用ひられんは御尊靈の御心にも叶ふまじと有つてなそれ金子は封のまゝ相戻さるゝと詞の中より彌五郎懐中より金子取出し勘平も前にさし置けばはつさばかりに氣も轉動母は涙さもろ共にコリヤ爰な悪人づら今こいふ今親の罰思ひ知たか、皆様も聞て下され親父殿が年寄て後生の事は思はず、親の爲に娘を賣金調へて戻らしやるを待ちぶせして、あのやうに殺して取た金じや物天道様がなくばしらす何で御用に立つ物ぞ親殺しのいき盗人に罰を當て下されぬは神や佛も聞へぬあの不孝者お前方の手にかけてなぶり殺しにして下されわしや腹が立つわいのと身をなげふして泣き居

たる聞くに驚き兩人刀追取つて弓手馬手につめかけ、彌五郎聲をあららげヤイ勘平非義非道の金取つて身の科の訛せよといはぬぞよ、わがやうな人非人武士の道は耳に入るまい親同然の舅を殺し金を盗だ重罪人は大身籠の田樂さし拙者が手料理ふるまばんさばつたさならめば郷右衛門かつしても盜泉の水を飲すまは義者のいましめ舅を殺し取たる金亡君の御用金になるべきか生得汝が不忠不義の根性にて調へたる金と推察有つてつきもごされたる由良の助殿の眼力ほ、天晴れくさりながらハア情けなきは此事世上に流布有つて搦谷判官の家來早野勘平非義非道を行ひしさいは、こりや汝斗りが恥ならず亡君の御恥辱さしらざるかこなく

く、うつけ者めなうぬ勘平これ勘平おみやごうした者だ左程の事の辨なきなんじにてはなかりしむいかなる天寃が見入しとするとき眼に涙を浮め事を分け利をせむればたまり兼ねて勘平諸肌押脱脇指を抜くより早く腹へぐつこつきたてア、いづれもの手前面目もなき仕合せ拙者も望み叶はぬ時は切腹と兼ての覺悟我舅を殺せし事亡君の御恥辱と有れば一通り申ひらかん兩人共に聞いてたべ、夜前彌五郎殿の御目にかいり別れて歸るくらまぎれ山越猪に出合二ツ玉にて打ち留かけよつてさぐり見れば猪にはあらで旅人なむ三寶誤つたり薬はなきかこ懐中をさかし見れば財布に入つたる此金道ならぬ事なれ共天より我に與ふる金と直に

祇園一力茶屋の段

| | | | | | | | |
|--------|-------|--------|-------|-------|--------|--------|----|
| 仲 | お | 仲 | 彌 | 喜 | 重 | 力 | 由 |
| 居 | か | 居 | 五 | 多 | 太 | 彌 | 良 |
| 竹本龜久太夫 | る | 豊竹千駒太夫 | 郎 | 八 | 郎 | 竹本さの太夫 | 之助 |
| | 竹本鍬太夫 | | 竹本文太夫 | 豊竹富太夫 | 竹本長尾太夫 | | |

馳行彌五郎殿に彼金をわたし立歸つて様子^{ようす}を聞^きげ打留^{うちどめ}たるは我舅金^{わがぢゆうきん}は女房^{にようばう}を賣^うつた金^{かね}、かほご迄^{まで}する事^{こと}なす事^{こと}いすかのほし程^{ほど}違^{ちが}ふと言^いふも武運^{ぶげん}に盡^つたる勘平^{かんぺい}が身^みの成^なり行^ゆき推量^{すいりやう}有^あれと血^ちばしる眼^{まなこ}に無念^{むねん}の涙^{なみだ}仔細^{さいしゆ}を聞^きくより彌五郎^{やご}ずんざ立^{たち}上^{あが}り死骸^{しかい}引^ひ上^あ打返^{うちかへ}しムウく疵口^{きずぐち}吹^ふめ郷右衛門^{ごうゑもん}是^{こゝ}見^みられよ鐵砲^{てつぱう}疵^{きず}には似^にたれ共^{ども}これ^{これ}は刀^{かたな}でえぐつた疵^{きず}、エ、勘平^{かんぺい}早^{はや}まりしと言^いふに手負^{てあひ}も見^みて恫^{びつ}り母^{はは}も驚^{おど}く斗^{たたか}りなり、郷右衛門^{ごうゑもん}心付^{こゝろを}イヤコレ千崎殿^{ちさきどの}ア、是^{こゝ}にて思^{おも}ひ當^{あた}つたり、御自^{ごじ}分^{ぶん}も見^みられし通^{とほ}り是^{こゝ}へ來^きる道端^{みちばた}に鐵砲^{てつぱう}請^{まが}けたる旅人^{たびびと}の死骸^{しかい}立^{たち}寄^より見^みれば斧定^{おのまたく}九郎^{くわう}強^{つよ}慾^{よく}な親^{おや}九太夫^{たふ}さへ見^み限^{かぎ}

つて勘當^{かんたう}したる惡黨^{あくどう}者^{もの}、身^みのたゞな^{たゞな}き故^{ゆゑ}に山賊^{さんさく}するこ聞^きいたるが疑^{うたが}ひもなく勘平^{かんぺい}が舅^{ぢゆう}を討^うたはきやつか業^{わざ}エいそんなりやあの親父^{おやぢ}殿^{どの}を殺^{ころ}したは外^{ほか}の者^{もの}でござりますかへハアはつこ母^{はは}は手負^{てあひ}に緋^ひり寄^よりコレ手^てを合^あして拜^{まが}みます、年^{とし}し寄^よりの愚痴^{ぐち}な心^{こゝろ}から恨^{うらみ}みいふたは皆^{みな}誤^{あや}りこらへ下^{くだ}され勘平^{かんぺい}殿^{どの}必^{かならず}死^しんで下^{くだ}さるなと泣^{なみだ}詫^われば顔^{かほ}ふり上^あり只^{ただ}今^{いま}母^{はは}の疑^{うたが}ひも我^{わが}惡^{あく}名^なも晴^はれたれば是^{こゝ}をめぐの思^{おも}ひ出^でさし後^{あと}より追^お付^つ舅^{ぢゆう}殿^{どの}死^し手^て三^{さん}途^つを伴^{ともな}はんぞ突^つ込^こ刀^{かたな}引^ひ廻^{まわ}せばア、暫^{しばらく}く思^{おも}はずも其^{その}方^{ほう}が舅^{ぢゆう}の敵^{かたき}討^うつたるはいまだ武運^{ぶげん}に盡^つざる所^{ところ}弓矢^{ゆみや}神^{かみ}の御^{ごん}惠^{めぐみ}にて一^{ひと}功^{こう}立^たつ

仲 居 竹本播路太夫

亭 主 豊竹辰太夫

九 太 夫 竹本貴鳳太夫

伴 内 竹本鏡太夫

平 右 衛 門 竹本大隅太夫

三味線 (豊澤新左衛門 鶴澤道八 野澤吉兵衛)

人形

斧 九太夫 吉田玉幸

たる勘平息の有る中郷右衛門も密に見する物有り懐中より一卷を取り出しさら／＼と押しひらき此度亡君の敵野高師直を討取らんを神文を取かはし一味徒黨の連判かくのごとしも讀も終らず苦痛の勘平其姓名は誰々成るぞやチ、徒黨の人数は四十五人汝が心底見届けたれば其方を指加へ一味の義士四十六人は是をめぐりの土産にせよ懐中の矢立取出し姓名を書記し勘平これさ血判心得たりと腹十文字にかき切り臟腑をつかんでしつかさ押へしサア血判仕つたアいのるなく早野勘平重氏血判たしかに相濟んだぞエ、忝や有難や我望み

達したり母人敷いて下さるな舅の最期も女房の奉公も反古にはならぬ此金一味徒黨の御用金さいふに母も涙ながら財布と俱に二包二人の前に指出し勘平殿の魂の入つた此財布解殿じやと思ふて敵討の御供につれてござつて下さりませ、チ、成程尤なりと郷右衛門金取り納め、思へば此金は縞の財布の紫摩黄金佛果を得よさいひければア、佛果さげがらばし死ぬ／＼魂魄此士さやまつて敵討ちの御供するさいふ聲も早や四苦八苦母は涙にかきくれなむらナフ勘平殿此事を娘にしらしせて死目にあはしてやりたいイヤ／＼

鷺坂伴内 桐竹紋十郎

一力亭主 吉田文作

千崎彌五郎 桐竹政龜

竹森喜多八 吉田光之助

矢間重太郎 吉田扇太郎

大星由良之助 吉田榮三

寺岡平右衛門 吉田玉松

大星力彌 桐竹紋太郎

傾城おかる 吉田文五郎

親の最期は格別勸平が死だ事必ず知らして下さるなお主の爲に賣つたる女房此事聞て不奉公せば主に不忠するも同然只其まゝにさし置かれよサア思ひ置く事なしさ刀の切つ先き咽喉にぐつささしつらぬきかつげさふして息絶たりヤアもふ舞殿は死しやつたか扱もく世の中におれがやうな因果な者がまた一人有らふか親父殿は死なしやる頼みに思ふ舞を先き立ていさし可愛の娘には生き別れ年寄た此母が一人残りて是がママなんご生きて居られふぞコレ親父殿與一兵衛殿おれも一ツ所につれて往てくだされさ。取付ては泣さげびまた

立ちあがつてコレ舞殿母も俱にさすがり付てはふししづみあちらでは泣きこちらでは泣わつさばかりにどうぞ伏聲をばかりに歎しは目もあてられぬ次第なり。郷右衛門つゝ立ちあがりアこれく老母なげかるゝはこそはりなれども勸平が最期の様子大星殿にくはしく語り入用金手渡しせば満足あらん首にかけたる此金は舞と舅の七々日四十九日や五十兩あはせて百兩百ヶ日の追善供養後れんごろにさむらばれよ、さらばさらばおさらばさ見送るなみだ見かへるなみだなみだの涙の立歸る人もはかなき。

(床本) 祇園一力茶屋の段

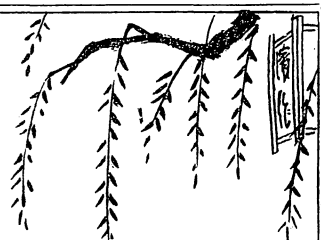
花に遊ばし祇園邊りの色揃へ東方南方北方
西方みだの淨土が塗りにぬり立てびつかり
びか／＼光りか／＼やくはくや藝子にいかな
粹めも現ぬかしてぐざんごろつくごろつく
やワイワイワイトサ九誰を頼まふ亭主は居
ぬか亭主／＼是ばいそがしいばごいつ様
じやごなた様じやヨウ斧九太夫様御案内ご
ばけうさい／＼九イヤ初めてのお方を同道
申たきつふ取込をふに見へるが一つ上げま
す座敷が有るか／＼ヤござります共／＼今晚
は彼由良大盡の御趣向で名有る色達を揃み
込み下座敷はふさがつてござりますれごち
いら亭座敷が明いてござります九そりや又
蜘蛛の巣だらけで有ふ／＼又悪口を九イヤサ
よい年をして女郎の蜘蛛の巣にかゝるまい
用心／＼コリヤきついは下には置かれぬ二階

座敷ソレ灯を燈せ仲居共九何んご件内殿由
良之助が体御らうじたか件九太夫殿ありや
いつそ氣違でござる段々貴公より御内通有
つてもあれ程に有るふさは主人師直も存ぜ
ず拙者に罷登つて見ごごけ心得ぬ事有らば
早速知せよご申付ましたか扱／＼我もへん
しも折れましてござる併し粹力彌めは何ん
ぞ致したな九こいつも折節此處へ参り俱に
放埒指合いくらぬがふしぎの一つ今晚は底
の底を捜し見んご心巧みを致して参つた密
々にお咄し申さふイヤ二階へ件先づ／＼九
然らば斯お出歌じつは心に思ひはせいであ
だなほれた／＼の口先はいかいつやでは有
るはいな／＼彌五郎殿喜多八殿是か由良之助
殿の遊び茶屋一力ご申のでござる誰そち
よご頼みたい仲アイ／＼ごなた様じやへ重
アイヤ我々は由良之助殿に用事有つて参つ
た奥へ往て言ふには矢間重太郎千崎彌五郎

しすりに席即・店北・
理料御席即・店南・
番二六四二町新話電

作瀆

町



竹森喜多八でござる此間より節に迎ひの人

を遣はしますれごお歸りのない故三人連で

参りましたちご御相談申されば成らぬ儀が

ござる程にお逢なされて下されご吃度申て

おくりやれ 仲 夫は何ん共氣の毒でござんす

由良様は三日以來吞みつつけお逢なされて

からたわいは有るまい本性はないぞへ 重ハ

テ扱てまあそふいふておくりやれ 仲 アイ

彌五郎ぞのお聞きなされたか 彌 承

はつて驚き入りました初めの程は敵へ聞か

する計畧ぞ存じましたがいにかふ遊びに實が

入り過ぎまして合點が参らぬ 何んぞ此喜

多八が申た通り 魂 に入れ替つてござらふ

かのいつそ一間へ踏込 重 イヤ 得さ面談

致した上 成程然らば是に 三人 相待ちませ

ふ 仲 手の鳴る方へ 由 さらまよ 仲

由ら鬼やまたい 由 さらまへて酒吞そ

アコリヤさらまへたばサア酒々 鏡子持

て 重 イヤコレ由良之助殿矢間重太郎で

ござる。コリヤ何ぞなさる 由 なむ三仕舞

た 仲 ナ 氣の毒何んぞ榮様ふしくたやうな

お 侍 様 方 御 連 様 かいな 仲 さあればお三人

さもこはい顔して 重 イヤコレ女ら達我々は

大星殿に用事有つて参つた、暫く座を立て

もらひたい 仲 そんな事で有りそな物由良様

奥へ行くぞへお前も早ふお出皆様是にへ 重

由良之助殿矢間重太郎でござる 竹森喜多

八でござる 彌 千崎彌五郎御意得に参つたお

目さまされませぬ 由 是は打揃ふてよお出

なされた何んぞ思ふて 重 鎌倉へ打立つ時候

はいつ頃でござるな 由 さればこそ大事の事

をお尋ね成丹波典作が歌に江戸三界へ往か

んしてハ、ハ、ハ、御免候へたはい 三人

ヤア酒の酔本性違はず性根が付かずば三人

が酒の酔を醒さしませふかな 平ヤレ聊爾な

されまするな 憚りながら平右衛門めが一言

晩秋に

南一温泉料理

獨特の温泉快爽な気分に分
善美な湯宿で一盡を



四ツ橋

お電話の話用は

南
5番・701番・711番
(長) 132番・5291番
西630番

のみさなみ

南一温泉料理

申し上たい儀がござります暫くくくく
 お控へ下さりませふ由良の助様寺
 岡平右衛門めでござります御機嫌の体を拜
 しましていか斗り大悦に存じ奉ります由
 寺岡平右さばエ、何んでえすか前かご
 北國へお飛脚にいかれた足の軽い足輕殿か
 平エ、左様でござります殿様の御切腹
 を北國にて承ばりましてなむ三寶さ宙を
 飛んで歸ります道にてお家も召上られ一
 家中も散々ござり承ばつた時の無念さ奉公
 こそ足輕なれ御恩はかはらぬお主のあだ、
 おのれ師直めを一討さ鎌倉へ立ち越三ヶ月
 が間非人ご成つて付きれらひましたれ共敵
 は用心殿しく近か寄る事も叶ひませす所詮
 どん腹かつさばかんぞ存じましたも國元の
 親の事を思ひ出しましてすごらく歸りま
 した所に天道様のお知らせにや何れも様方
 の一味連判由チホンくくく平サ一味

連判の様子承ばりまするミヤレ嬉しや有
 難やと取る物も取りあへずあなた方の旅宿を
 尋ねひたすらお頼み申上ましたればチ、出
 かしたうい奴じやお頭へ願つてやるこのお
 詞に縋りこれ迄推参仕りましたも師直屋
 敷の由ア、こいよくくコレ平ネイ由コ
 レ平ネイ由コレくく平ネイ由其元は足
 輕でなうて大きな口輕じやの何んごたいこ
 持なされぬか尤もみたくしも蚤の頭を斧で
 割つた程無念な共存じて四五十人一味こし
 らへて見たがア、あぢな事よふ思つて見
 れば仕損じたら此方の首がころり仕負せた
 ら後で切腹。すりやごちらでも死ねばなら
 ぬと言ふば人參吞で首くいる様な物殊に其
 元は五兩に三人扶持の足輕ア、コレくお
 腹は立られなくはつち坊主の報謝米程取
 て居て命を捨て、敵討せふさばそりや青海
 苦貰ふた禮に太々神樂を打つやうな物我等

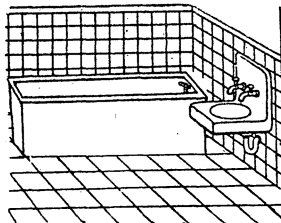
化粧タイル

水道衛生工事

洗面、浴場、

水洗便所設計

汚水浄化装置
 特許無臭便所



西區立寶堀北通一丁目
 新一橋

岡部商會

電話新町一六六九
 二二七六

阪急夙川

岡部商會支店

電話西宮一九七六

知行千五百石貴様さくらべるご敵の首を斗
 升で斗る程取つても釣合ぬ所でやめた
 ナ聞こへたか兎角浮世はコレコレかふ
 した物じやツンツンツンツンツンツンテ
 チチチンテンツンツンツンシヤンなぞごひき
 かけた所はたまらぬ平是は由良之助様
 のお詞共覺へませぬ僅三人扶持取る拙者め
 でも千五百石の御自分様でも撃ぎました命
 は一つ御恩に高下はござりませぬごサ押す
 に押されぬお家の筋目殿様の御名代もなさ
 れますお歴々様方の其中へモ見る影もない
 私めも指加へてごお願ひ申は憚り共慮外共
 ほんの猿も人真似お草履をつかんで成り共
 お荷物をおかついで成り共参りませぶごうぞ
 おさにも召し連れられてナ申コレ申
 へははしたり寝てござるそふなコレサ
 平右衛門あつたら口に風をひかすまい由良
 之助は死人も同然矢間殿千崎殿モウ本心は

見へましたか申合せた通りはからひませ
 ぬか御い様一味連判の者共への見せしめ
 イザ何れもご立寄るを平ヤレ暫くご平右衛
 門押なだめん傍に寄つく思ひ廻はします
 れば御主君にお別れなされてより仇を報は
 んご様々の艱難木にも萱にも心を置く人の
 譏無念をばじつごこたへてござるからは御
 酒でも無理にまいらすは是迄命も續きます
 まい醒ての上の御分別ご無理に押さへて三
 人を伴ふ一間は善悪の明りをてらす障子の
 内影を隠すやカ月の入り山科よりは一里半
 息を切つたるちやくし力彌内を透して正体
 なき父が寢姿起すも人の耳近しご枕元に立
 寄つて響にかける刀の鏗音鯉口ちやんご打
 ちならせば由むつご起てヤア力彌か鯉
 口の音ひかせしは急用あつてか密に
 カ只今御臺かほよ様より急のお飛脚密事の
 御状由外に御口上はなかつたかカ敵由ア

現
代
的



電話 戒三七五六番

コレ敵と見へしは群いるかもめ、ときの際
 としれり大きな聲ぢやのカハ、敵高師直
 歸國の願ひ叶ひ近々本國へ罷り歸る委細の
 儀はお文との御口上、由よし々其方は宿へ
 歸り夜の内に迎への駕往け、カはつとた
 めらふ隙もなく山科さして引かへす由先づ
 様子氣遣ひと狀の封じを切る所へ九 大星殿
 由良殿斧九太夫でござる御意得ませう、こ
 聲かけられ由是は久しや、一年も逢はぬ
 内よつたぞや、額に其しは延しにお出か
 アノ爰な蕤破りめ九イヤ由良殿大功は細
 をかへり見すと申すが人の譏も辯はず遊里
 の遊び大功を立つる基、速れの大丈夫未頼
 もしう存る由、ホ、イ、イ、イ、イ、イ、イ、イ、イ、
 矢さ出かけた去りてはおかれ九イヤサ
 由良之助殿とぼけまい誠實殿の放埒は、敵
 を討衛と見えるか九おんでもない事由ヤ、忝
 ない四十に餘つて色狂ひ馬鹿者よ氣遣ひよ

と笑はれふかと思ふたに敵を討つ衛と九
 太夫殿嬉しいそへ、スリヤ其元は主人
 壺谷殿のあだを報する所存はないか、由けも
 ないこそ、家國を渡す折から城を枕に討
 死さいふたのはアリヤ御臺様への追従時に
 貴様が上へ對して朝敵同然と其場をつい
 立つた我等は後にトしやちばつてゐたいか
 いたわけの所で仕廻りは付かず御墓へ参つ
 て切腹と裏門からこそ、今此安樂な
 樂しみするも貴殿のおかげ昔のよしみは忘
 れぬ、堅みやめて碎けおれ、九いか
 様此九太夫も昔思へば信太の狐、げけ現は
 して一献汲ふか畜生め九ム、由ハ、九ム、
 由ハ、イ、イ、二人ハ、イ、イ、イ、イ、由ハ、
 振だお盃、又頂戴と會所めくのか、九さし
 おれ呑は、呑おれさすは九てうご請おれ看
 をするはさ、傍に有合ふ蛸さかなはさんです
 つささし出せば、手を出して足を戴く蛸看

新大興帝のネキ封切場

おなじみの 辨天座

忝かたじけなくないご戴かぶいて喰くら入ことする九こゝろ手てをじつご
 さらへコレ由ゆゑ其その之の助すけ殿だん明日あしたは主しゅ君くん盛さか谷たに判はん官くわん
 殿だんの御ご命めい日にち取とりわげ速たじ夜やが大切たいせつと申まをす見み事こと
 其その着まか貴き殿だんは喰くらか由ゆゑたべる共とも／＼但ただし主しゅ君くん盛さか
 谷たに殿だんが蝓あぶらになられたと云いふ便宜べんいがあるかエ
 ぐちな人ひとでは有あるこなたやおれが浪なみ人にん仕した
 は判はん官くわん殿だんが無む分ぶん別べつからおこつた事ことスリヤ恨うら
 こそあれ精せい進しんする氣き微ひ盡じんもござらぬお志こゝろさ
 しの看まを賞しょう翫くわんいたすご何なに氣きもなく只ただ一口いちくちに味あじ
 はふ風ふう情じやう九こゝろ邪じや智ち深しんき九こゝろ太た夫ふもあきれて詞ことばも
 なかりける由ゆゑ扱さく此この看まをでは吞のめぬ／＼鶏けい／
 させ鍋なべ焼やさせん其その元もとも奥おくへお出いで女むすめ郎ぢやう共とも誦じゆへ
 九こゝろ足あし元もともしごろもごろの浮うき拍はく子しテレッ
 ぐ／＼ッ／＼テン／＼二人ふたり儂おの儂の末まつ社しゃ共ともめれん
 になさで置おけべきかご願ねがひに由ゆゑま九こゝろぎ二人ふたりれ
 入いりける件くだま始しゆ終しゆ見み届とどけ鷺さぎ坂さか内うち二ふた階かいよりお
 り立たち九こゝろ太た夫ふ殿だん仔ぢやう細こさつくご見み届とどけ申まをす主しゅ
 の命めい日にちに精せい進しんさへせぬ根こん性じやうで敵かた討うち存ぞんじも寄

らす此この通とほり主しゅ人にん師し直ちく公こうへ申まをし聞きけ用よう心しんの門もん
 をひらかせませふ九こゝろ成なる程ほど最も早はや御ご用よう心しんに及および
 ぬ事こと件くだまコレサまだ爰こゝに刀やいばを忘わすれて置おきまし
 た九こゝろほんに誠まことに大おほ馬ま鹿か者ものの證せう據じよ嗜じやうの魂たましひ
 見みませふかな件くだま見みませふ／＼扱さく鏡かがみたりな赤あか
 鬨こゝろ二人ふたりハ／＼／＼九こゝろ彌いよく々ほん々ん本ほん心しん理りはれ御ご安あん
 堵こゝろ／＼ソレ九こゝろ太た夫ふが家け來らい迎むかひの駕か件くだまはつご
 答こたへて持も出でる九こゝろ件くだま内うち殿だんお召めいなされ件くだま先まづ御ご
 自じ分ぶんは御ご老らう体たい平へいに／＼九こゝろ然しからば御ご免めんと乗のり
 つる件くだまイヤナニ九こゝろ太た夫ふ殿だん承しょうはれば此この所ところに
 勘かん平へいが女むすめ房ぼうが勤こゝろめ奉ほう公こう仕しておるご聞ききまし
 たが貴き殿だんには御ご存ぞんじないかな九こゝろ太た夫ふ殿だん／＼
 ご言ことへご答こたへすコハふしぎご駕かの簾すだれを引ひ明あ
 れば内うちには手てごるの庭にわの飛と石いしコリヤごふじ
 や九こゝろ太た夫ふは松まつ浦うらさよ姫ひめをやられたご見み廻まわす
 こなたの縁えんの下したより九こゝろ／＼件くだま内うち殿だん／＼
 九こゝろ太た夫ふが駕かぬけの計けい略りやくは最さい前ぜん力りき彌いよくが持も参さんせ
 し書しよ翰わんが心こゝろ元もとなし様さま子し見み届とどけ後あとより知しらさ

映畫の秋の

松竹座

・道頓堀・

斷然斯界に君臨する

その豪華さよ。

今宵を語る 映畫

明日を話す レヴユウ

秋にして春を想はず

蕩麗なる

松竹座氣分ぞひ

んやはり我等が歸るていにて貴殿は其駕に引添て合點く黙き合ひ駕には人の有る体に見せてしづく立歸る折に二階へ暫も妻のお輕はゐいさまし早里馴れて吹風にうさを暗して居る所へ由ちよこいてくるぞや由良之助とも有る侍も大事の刀を忘れて置たつ取つてくる其間に掛けものもかけ直し燻の炭もついで置きやアソレくくこちらの三味線ふみおるまいぞ是はしたり九太はもふ逝れたそふな父よ母よ泣聲聞けば妻にあふむのうつせし言の葉エ、何んじやいな置しやんせ由、傍り見廻はし由良之助釣燈籠の明りを照し讀長文は御臺より敵の様子こまなくと女の文の後や先きり々ではかざらず餘所の戀よと羨ましくおかるは上より見おるせと夜目遠目成り字性もおぼる思ひついたるのべ鏡出して寫して讀取る文章九下家よりは九大夫かく

りおるす文月かげにすかし讀こは輕神ならすほごげかゝりしお輕がかんざしばつたり落れば由下たにはいつと見あげて後へ隠す文九椽の下には猶あつば輕上には鏡の影隠し由良様か由おかるかそもじはそこに何してぞ私しやお前にもりづぶされ餘りつらさに酔さまし風に吹かれて居るはいナ由ムンハテナフリヤよふ風に吹れてじやのイヤかるそもじにちさ咄したい事がある屋根越の天の川でこゝからは言はぬちよつこおりてたもらぬか咄したいこは頼みたい事かへ由マアそんな物廻つてきやんしよ由イヤく段梯子へおりたらば仲居が見付けて酒にせふア、ごふせふなム、幸ひ爰に九ツ梯子是をふまへておりてたもこ小屋根に掛ければ此梯子は勝手がちがふてチ、こはごふやら是はあぶない物由大事ないくあぶないこはいは昔の事三間づゝまたげて

どうさんぼり

浪花座

行興月一十の

計盛新業新

愉快な

お笑ひ

痛烈な

お笑ひ

素晴らしい

お笑ひ

も赤かうやくもいらぬ年ばへ輕あほう言は
 んすな船に乗つた様でこはいはいな由道理
 船玉様が見へるは輕チ、覗かんすないナ
 由 洞庭の秋の月様を拜み奉るじや輕イヤ
 モウそんならおりやせぬぞへ由 おりざおろ
 してやる阿レ又悪い事を由 やかましいい
 く生娘か何ぞの様に逆縁なからさ後より
 じつさだきしめ抱おろし何さそもじは御ら
 うじたか輕アイいへ由 見たで有く輕何
 じややら面白そうな文由 アノ上から皆よん
 だか輕チくご由 ア、身の上の大事さこそ
 は成りにけり何んの事じやぞいな由 何の
 事さはおかる古いがほれた女房になつてた
 もらぬか輕おかんせ嘘ぢや由 サア嘘から出
 た誠でなければ根がさげぬおふさいやく
 輕イヤいふまい由 ソリヤなぞ輕サアお前の
 は嘘から出て誠ぢやない誠から出た皆うそ
 由 おかる輕アイ由 け出そふ輕エイ由 嘘で

ない證據に今宵の内に身請せふ輕ムンイヤ
 わしには由 間夫があるならそばしてやる輕
 そりやマアほんさかへ由 侍冥利三日成り
 共固ふたら夫れからは勝手次第輕ハア嬉し
 うござんすと言はして置いて笑をでの由 イ
 ヤ直ぐに亭主に金渡し今の間に埒さそふ氣
 遣ひせずと待つて居や輕そんなら必ず待つ
 て居るぞへ由 金渡ししてくる間どつちへも行
 きやるな女房じやぞ輕夫もたつた三日由 そ
 れ合點輕エ、忝ふござんす歌世にも因果
 な者ならわしと身でや可愛い男にいくせの
 思ひエ、何じやいな置しやんせ平ア、遠は
 花の都の祇園町賑しい事だなア、何んぞ
 やらいつたはい入り相の鐘は廊の夜明けか
 なまはよくいつたはい、い、い、ヤそれは
 そうと妹かるが此廊へ勤め奉公致してお
 ると聞たがごふぞあいたい物だがチ、幸ひ
 の女中コレちよま物を尋ねたいわ山崎へん

形花体絶の秋の露映

座 日 朝 いし美
いのじ感

・堀傾道・

松竹キヌマ
封切場

から此廊へ勤め奉公に来て居るから言ふ
 女御存じれいか知つて居ればごふぞ教へて
 くれまへかな。今ま手のはなせぬ事仕て居
 る程に勝手もこで聞て下さんせ。サアそふ
 は思つたが勝手元も何だかこて。こいそ
 がしいごふぞ教へてくれるコレ。友中。エ、
 しらぬはいな。そふすげなく言はずさ。いふ
 ぞ教へてくれるコレ。友中。エ、
 や妹。かるでれへか。ヤア兄様か。恥かしい
 所で逢ました。顔を隠せば。ア、苦しいな
 い。關東よりのも。ごりかけ。母人に逢て。委
 しく聞た。夫のため。お主の爲。よく賣れた。出か
 した。く。な。ア。輕。そふ。思ふ。て。下さん。すり。や。わ
 し。や。嬉。しい。シ。タ。ガ。マ。ア。悦。んで。下さん。せ。思。ひ
 が。け。な。ふ。今。宵。請。出。さ。る。く。答。夫。は。重。疊。シ。テ
 何人のお世話で。サア。お前も御存じの。大星
 由良之助様のお世話で。何んだ。由良之助殿
 に請出される。それは。下地からの。馴染か。何

のいな。此中より。二三度酒の相手。夫も。有らば
 添はして。やる。隙が。ほしく。ば。隙。やる。結。構。過
 た。身。請。け。平。ム。扱。て。は。其。方。を。早。野。勤。平。が。女
 房。と。經。イ。エ。し。ら。す。じ。や。ぞ。へ。親。夫。の。は。ぢ。な
 れ。ば。明。か。し。て。何。の。言。い。ま。せ。ふ。平。ム。ン。ス。リ。ヤ
 本心。放。埒。者。お。主。の。あ。だ。を。報。す。る。所。存。は。な。い
 に。極。つ。た。な。經。イ。エ。コレ。兄。様。有。る。ぞ。へ
 平。有。る。は。何。か。高。ふ。は。言。は。れ。ぬ。コ。レ
 斯。々。と。瞬。げ。ば。平。ム。い。い。經。あ。平。ム。ン。ス。リ
 ヤ。其。文。體。に。見。た。な。經。ア。イ。残。ら。ず。讀。ん。だ。其。後
 で。互。ひ。に。見。合。は。す。顔。と。顔。を。そ。れ。か。ら。じ。や。ら。付
 き。出。し。て。つ。い。身。請。け。の。相。談。平。ア。ノ。其。文。體。ら
 ず。讀。だ。後。で。經。ア。イ。ナ。平。ヤ。夫。で。聞。へ。た。妹。逆
 も。遁。れ。ぬ。そ。ち。が。命。身。共。に。く。れ。よ。と。拔。き。打。ち
 に。げ。つ。し。と。切。れ。ば。輕。ち。や。つ。と。飛。退。コ。レ。兄。様
 わ。し。に。は。何。誤。り。勤。平。と。言。ふ。夫。も。有。り。き。つ。と
 二。親。ある。から。は。こ。な。様。の。ま。い。にも。成。る。まい
 受。出。さ。れ。て。親。夫。に。あ。は。ふ。さ。思。ふ。が。わ。し。や。樂

芝居の秋の

最大豪華

十一月の
座

東西大歌舞伎

しみごんな事でもあやまらふ赦して下んせ
 赦してご手を合はすれば平右衛門抜き身を
 捨て可愛や妹わりや何にも知らねへな
 親與一兵衛殿は六月廿九日の夜人に切られ
 てお果なされたはやい無ヤアそれはまあ平
 アーコリヤ〜〜まだ悔りすな。まだ
 後〜悔りの親玉が有るわい、われが請
 出されて添ふと思ふ勤平はな無兄様勤平殿
 は平サア勤平はな無よい女房様でも出来た
 のか〜平エイそんな陽氣な事じやないはい
 軽そんなら勤平様は平サア其勤平は勤平で
 やつぱり勤平だわい無エーコレ兄様勤平様
 はごふさしやんしたぞいな平ムサア其勤平
 は腹を切つて死だはやい無エー、い、ウソ
 平チ、道理だ〜様子咄せばワアコリヤ大
 へんだ妹が目をまはしたア、誰か居ねへ
 か女郎が目をまはした仲居衆〜エ、誰も
 居ねへ待〜〜チ、幸ひの手水鉢今水なく

れるぞ待〜〜ソラ水だ、おかるやい
 無ア〜、い、い、平コリアごふだ氣が付
 いたか〜ヨしつかりしろ〜無チ、兄様
 平チ、兄だ〜ソラ平右衛門だ無チ、兄さ
 ん勤平様は〜平チエ、情けれへまだ尋ぬる
 かい。其勤平は友朋輩の面暗に腹を切つて
 死んだはいやい無ヤア〜〜それはマア
 ほんさかいのコレなふ〜ご取り付いてコ
 レ兄様ごふせふぞいな平チ、道理だ無ごふ
 せふぞいなア平チ、尤だ無ごふせふぞい
 なア〜〜〜平チ、道理だ〜〜
 無はいやい様子咄せば長い事お勞はしい
 は母者人言ひ出しては泣き思ひ出しては泣
 娘かるに聞かしたら泣き死にするで有る必
 すいふてくれなごのお頼み言ふまいごは思
 へ共進も遁れぬそちむ命其譯は忠義一途に
 凝かたまつた由良之助殿勤平が女房ご知ら
 れば受出す義理もなし元來色には猶ふけら

正午から
 五時から
 二回開演

いづちおもしろ
 いおしほろ

みなさまの 角座

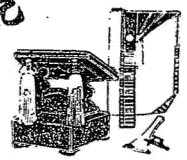
十一月興行

新組 織
 成美 團

す見られた状が一大事請け出して差殺す思案の底さ儘に見へたよしそふなふても壁に耳外より洩ても其方が科密書を覗き見たるが誤りころさにやならぬ此場の宜儀人手にかけふより我手にかけ大事を知つたる女妹さて赦されずこそそれを功に連判の數に入つてお供に立ん少身者の悲しさは人に優れた心底を見せれば數には入られぬ聞き譯て命をくれ死でくれ妹ご事を分けたる兄の詞 おかるば始終せき上へ便りのないは身の代を役に立ての旅立か暇乞にも見へそな物も恨んで斗りおりました勿体ないがこゝ様は非業の死でもお年の上勤平殿は三十に成るやならず死ぬるのは嘸悲しかる口惜かる達たかつたで有るふのになぜ達させては下さんせぬ親夫の精進さへ知らぬはわたし身の因果何の生きておりましたお手にかけらばかゝるが前をお恨みな

されませふ自害した其後で首なり死骸なり功に立つなら功にさんせさらばでござんす兄様さ言いつゝ刀取り上ぐる由ヤレ待て暫しこゝむる人は由良之助平ハツッ驚く平右衛門 お輕は放して殺してさ由あせるを押さへてホウウ兄妹共心底見へた兄は東の供を赦す妹はながらへて未來への追善 サア其追善は冥途の供さ由もぎ取る刀をしつかと持添へ夫勤平連判には加へしか敵一人も敵取らず未來で主君に言ひ譯有るまじ其言譯はコリヤ爰にさぐつと突込疊の透間九下には九太夫肩先めはれて七轉八倒九ソレ平右衛門くらひ酔た其客に加茂川でナ平いかじ斗ひまし由水ごうすいをくらばせい平ハア由イケ平してこいなア。

儀太夫海瀾本做元 見後其情 見後其情



加島屋 新中橋 助

大阪東區唐物町四丁目御堂筋へ入

電話船場
一八六二番



車場の段

松 王丸 豊竹辰太夫
 梅 王丸 豊竹小松太夫
 櫻 王丸 (竹本おぼこ太夫)
 虎 王丸 竹本相壽太夫
 藤 原時平 竹本越名太夫
 野澤吉左

人形

松 王丸 吉田榮三
 梅 王丸 吉田玉幸
 櫻 王丸 吉田扇太郎
 虎 丸 吉田玉徳
 藤 原時平 吉田玉徳
 仕 丁平丸 吉田玉徳
 大 吉田玉徳
 ぜ い

第一 菅原傳授手習鑑

車場の段
 寺入の段
 松王首實檢の段

この淨瑠璃は延享三年八月竹本座初演に初まり作者は竹田出雲、並木千柳、三好松洛、竹田小出雲の合作でこの「寺子屋」は竹田出雲の作と傳へられてゐます。初演當時竹本座はこの淨瑠璃で異常な盛況を見翌年三月迄大入續であつたさいふ名作です。この段の内容を申し上げます、菅公の御世繼菅秀才は芦生の里に寺子屋を開いてゐる武部源藏が我子の如くにして圍まつてゐます。源藏は今この妻戸浪と戀に落ちそのために菅公の

お館を勘當になつたのであるが菅公にその才能を惜しまれて、筆法傳授を受けた大恩は一身を賭しても忘れなかつたのです。この菅秀才のこさがいつか時平公の耳に入り、その首打つて渡せとの殿命をうけて源藏はさぼくそ我家へ歸つて見るさ一人今日入門した伶俐な子供があつた夫婦はお主のためには代えられぬその子の首を打つて身替りに立てた檢視の役は松王丸でありました。病にまぎらして咽ぶのも道理でその首の子は現在の我子、女房の千代と謀つてお主のため我子を犠牲に身替りに立てたのであります。松王丸の本心を見え、菅秀才は御壺と共に河内國へ落ちて行かれるさいふのです。哀音迫るいろは歌の野邊の送りには

天竺山 天竺山 天竺山

普原傳後... 東國... 西國...

東國
 橋 橋 橋
 橋 橋 橋
 橋 橋 橋
 橋 橋 橋

大流所
 豐 豐 豐
 豐 豐 豐
 豐 豐 豐

三十三所
 豐 豐 豐
 豐 豐 豐
 豐 豐 豐

夏祭
 豐 豐 豐
 豐 豐 豐
 豐 豐 豐

中朝
 豐 豐 豐
 豐 豐 豐
 豐 豐 豐

十種
 豐 豐 豐
 豐 豐 豐
 豐 豐 豐

伊達
 豐 豐 豐
 豐 豐 豐
 豐 豐 豐

大夫
 豐 豐 豐
 豐 豐 豐
 豐 豐 豐

東國
 橋 橋 橋
 橋 橋 橋
 橋 橋 橋

大流所
 豐 豐 豐
 豐 豐 豐
 豐 豐 豐

三十三所
 豐 豐 豐
 豐 豐 豐
 豐 豐 豐

夏祭
 豐 豐 豐
 豐 豐 豐
 豐 豐 豐

中朝
 豐 豐 豐
 豐 豐 豐
 豐 豐 豐

十種
 豐 豐 豐
 豐 豐 豐
 豐 豐 豐

伊達
 豐 豐 豐
 豐 豐 豐
 豐 豐 豐

大夫
 豐 豐 豐
 豐 豐 豐
 豐 豐 豐

寺入りの段
松王首實檢の段

竹本源路太夫
鶴澤友衛門
竹本文字太夫
野澤勝平

人形

女房 房千代 吉田文五郎
女房 小太郎 吉田文二郎
菅秀才 吉田文之助
下男三助 吉田文之助
涎男 吉田文之助
武部源藏 吉田文之助
春藤支蕃 吉田文之助
舍人松丸 吉田文之助
御臺所 吉田文之助
百手習子 吉田文之助

誰が臉にも涙を宿す親子恩愛の純情
美が流れてゐます。

(床本) 車場の段

程なく轟く車の音商人旅人も道をよ
きる時平の大臣が路次の行粧さなが
ら君の御幸の如く隨身青侍前後に列
し大路せばしと輾らせたり。兩人こ
かげを飛で出で車やらぬく立ふ
さがるヤア何者なれば狼藉する見れ
ば松王が兄弟梅丸櫻丸ム聞へた
主に放れ扶持にはなれ氣が違ふての
狼藉か但しは又此車時平公ぞ知つて
さめたかしらいでさめたかへん答次
第用捨はせぬさ白張の袖まくり上つ
かみひしがん其勢ひ梅丸丸ふせ笑ひ
へーへーハハハハハハハハハハハハ
いふな、氣も違はれば此車見ちが
へもせぬ時平の大臣齋世親王菅壺相

ざん言によつて御沈落其無念骨隨に
徹し出合所も百年めさ思ひもうけし
今日只今櫻丸さ此梅王牛に手なれし
牛追竹位自慢でくしひ肥た時平殿の
しりこぶら二ツ三ツ五六百くらばさ
れば堪忍ならぬ言はれぬ主のかた持
顔出しやばつて怪我ひろぐなヤア法
に過ぎた案内者アレぶちのめせ引く
くれさ供の侍聲ごえに前後左右に追
取り巻兄弟は事さもせず取つては投
退つかんではおち付けく投付けば
あたり近付く者もなしへまてろふ
くまてろふやい) ヤア命しらすの
あばれ者いづれもおかまひ有な御
主人の目通り御奉公は此時節兄弟さ
一つでない忠義の働きお目かけん
コリヤやい松王が引きかけた此車さ
めらるゝならさめて見よヤイさ鼻づ

ら取つて引出す車ホ、ウ櫻丸梅王丸
 爰になくばいざしらす一寸なりこや
 つて見よヤイ車の内ゆるぐと見へし
 が現はれ出たる時平の大臣ヤア牛扶
 持ちくらふ青蠅めら轅にこまつて邪魔
 ひろぐば轅にかけて敷殺せヤア左い
 ふ大臣を敷殺さんと粹けし轅を銜々々
 提げ大臣を打んさふり上るヤア時平
 に向ひ推参なりさくはつと睨し眼の
 光り大千世界の千日月一度に照すが
 如くにて遠の梅王櫻丸思はず後へた
 ちく五体すくんで働かず無念く
 と計りなり何ぞ我君の御威勢見たか
 この上へ手向ひするご御目通りで一討
 と刀の柄に手をかくればヤア松王待
 々雁金巾子の冠を着すれば大君同然
 大政大臣さなつて天下の政を執行ふ
 時平も眼前血をあへすは社参の穢れ

助けにくいやつなれ共下郎に似合松王
 が働き忠義にめんじて助けてくれる
 ハレ命冥伽なうづ虫めらウ、アハウ
 アハくくくくくくくくくくくくくく
 いと邊ならんですいみ行ふり返
 つて松王丸よい兄弟をもつて兩人共
 に仕合せ者命を捨ふた有がたい忝な
 いと三拜せよさいはれて兩人くはつ
 させき上エ、おのれにも云分有れ共
 親人の七十の賀祝儀濟までナフ梅王
 ナ、其上では松の枝々切折つてかた
 きの根をたち葉を枯さんチ、それは
 此松王も親父の賀を祝ふた後で梅も
 櫻も落花微ちん足もこの明い中早く
 去れくくくくくくくくくくくくくく
 ならはふかごつめ寄く兄弟三人互
 ひに残す意趣遺恨にらんで左右へ、
 別れ行く。

(床本) 寺入の殿
 一字千金二千金、三千世界の寶ぞこ
 教へる人に習ふ子の、中に交はる菅
 秀才、武部源藏夫婦の者、いたばり
 かしづき我子ぞこ、人目に見せて片
 山家。芹生の里へ所替、子供集めて
 讀書の、器用不器用清書を、顔に書
 く子そ手にかくと、人形書く子は頭
 かく、教へる人は取分けて、世話を
 かくぞと見えにける。中に年かさ五
 作が息子、詞コレ皆これ見や、お師匠
 様の留守の間に、手習するは大きな
 損、おりや坊主頭の清書したと、見
 せるは十五の漣くり、若君はおこな
 しく詞一日に一字まなべば、三百六
 十字この教へ、そんな事書かず共、
 本の清書したがいと、八つになる
 子に叱られて、エ、ませよくと指

さして、嘲戯かゝるを残りの子供詞
兄弟子に口過す、涎くりめをいがめ
てやごま、手ん手に壓尺ふり廻す自
然天然肩持つも、傳ふる筆の威徳か
や、主の女房奥より立出で 詞又コリ
ヤ例のいさかひか、おさましや／＼
今日に限つて連合の源藏殿、振舞に
往てなれば戻りもしれぬ。ほんに
／＼こなた衆で一時の間も待かれる
今日は取分け寺入もある筈、晝から
は休ます程に、皆精出して習ふた
／＼ソリヤ又嬉しや休みぢやま、
筆より先は讀聲高く詞いろはに、此
中は御人被下、一筆啓上候べくの、
男の肩に堺重、文庫机を荷ばせて、
例發らしき女房の、七ッ計りな子を
連れて、頼みませうと云ひ入る、
内にもそれと早悟り、こちへお入り

遊ばせと、云ふもしとやか、アイア
イと、愛に愛持つ女子同士、来た女
房は猶笑顔、私事は此村外れに輕
うくらし居る者で御座りまする、
此腕白者をお世話なされて下さりよ
かま、お尋ね申しにおこしましたれ
ば、おこせ世話してやるま、結構な
お詞に甘へ、早速連れてさんじまし
た、内方にも御子息様もござります
げなむ、ごのお子で御座りますぞ。
アイこれが源藏殿の跡取りでござり
ます。コレハ／＼よいお子様や、外
にも大勢の子達、いかにお世話でこ
ざりませよ。アイ御推量なされてく
ださりませ、シテ寺入は此お子で御
座りますか、名はなんと申します。
アイ小太郎と申しまして、腕白者で
御座ります。イーヤイヤ氣高いよい

御子や、折悪う今日は連合源藏も、
振舞に参られました。これはマアお
留守かいな、お待ち遠なら私と呼び
にまぬりませう。いえ／＼幸ひ私も
参つて来る所があれば、其内にはお
歸りて御座りませう、コレ三助、其
持てきたもの、あなたの傍へあけま
せ。アツト答へて堺重、へぎに乗せ
たる一包、内儀の傍へさし出す詞こ
ればマア／＼云はれぬ事を、イヤお
はもじながら、此子が参つたしるし
此堺重は子達への土産、取ひろめて
下されませと、云はれど知れし蒸物
煮染、我子に世話を焼豆腐、つぶ推
茸の入たるは、奔走子とこそ見えに
けれ、詞これはマア何から何まで取
り揃へて、御念の入つた事、戻られ
たら見ませう 詞イヤモほんの心ば

かり宜しうお頼み申し上げます、コレ小太郎ちよつと隣村迄いて来る程に、おさなしうして待つて居や、悪あがきせまいぞ、御内證様、往て参じましょ。お表へ出れば詞かく様、私も行きたいと頼り付くを、ふり放し詞嗜めよ、大きな形して跡追ふのか、御らうじませ、まだ頑是がござりませぬ。ソリヤ道理いな、ドリヤおばがよい物やりましょ、つい戻つてやらんせと、目で知らすれば、アイ、ついちよつと一走り、跡追ふ子にも引さる、振かへり見返りて下部

(床本) 松王首實檢の段

M 引連れ急ぎ行く。ギリヤこちの子近付きに、若君の傍に寄せ、

機嫌紛らす折からに、立歸る主の源藏、常にかはりて色青ざめ、内入悪く子供を見廻し、詞エ、氏より育て云ふに、繁華の地と違ひ、いづれを見ても山家育、世話甲斐もなき役に立す、思ひありげに見えければ、心ならず女房立寄り、詞いつにない顔色も悪い、振舞の酒機嫌かは知らぬが、山家育は知れてある子供、憎体口は聞えも悪い、殊に今日は約束の子が寺入して居ります、さがない人と思ふも氣の毒、機嫌直して逢つてやつて下されと、小太郎連れて引合せど、差俯伏いて思案の体、いたいに手をつかへ、詞お師匠様、今から頼み上げますと、云ふに思はずふりあをのき、きつと見るより暫くは、打守り居たりしが、忽ち面色

やはらぎ詞扱て、器量勝れて氣高い生れ付き、公家高家の御子息と云ふても恐らくはづかしからず、ハテ扱てそなたはよい子ぢやなアと、機嫌直れば女房も詞何さよい子よい弟子でござんしよ。よい共く上々吉、シテ其連れて來たお袋はいづくに。サアお前の留守なら其間に隣村迄いて來と云ふて。オ、それもよし、大極上、先づ子供と奥へやり、機嫌よう遊ばし召され、それ皆おひまが出た、小太郎俱に奥へ、若君諸共誘はせ、跡先見廻し夫に向ひ、詞最前の顔色は常ならぬ血相、合點の行かぬと思ふた所に、今又あの子を見て打つてかへての機嫌顔、猶もつて合點ゆかず、どうやら様子がありさうな、氣遣ひな聞かしてご聞

へば源藏 詞オ、ウ氣遣ひな筈、今日
村の響應と傳り、某を庄屋の方へ
呼びつけ、時平が家來春藤玄蕃、今
一人は菅相 丞の御恩をきながら、
時平に従ふ松王丸、こいつ病者なが
ら見分の役と見え、數百人にて追取
巻、汝の方菅相 丞の 一子菅秀才
我が子としてかくまふ由、訴人あつ
て明白、急ぎ首打つて出すや否や、
但し踏込み請取ふや、返答いかに
のつ引ならぬ手づめ、是非に及ばず
首打つて渡さうと請合ふた心は、數
多ある寺子の内、いづれなりとも身
おばりこ、思ふて歸へる道すがら、
あれか、これかご指折つても、玉簾
の中の誕生こ、菰垂の 中で育つたこ
は似ても似つかず、所詮御運の未な
るか、いたはしや淺ましまこ、層所

の歩みで歸りしが、天道のひかへつ
よきにや 詞あの子を見れば、
萬更鳥を驚こも云はれぬ器量、一旦
身おはりで歎き、此場さへ過れたら
ば、直に河内へお供する思案、今暫
くが大事の場所と、語れば女房、待
んせや其松王と云ふ奴は三つ子の内
の悪者、若君の顔はよう見知つて居
るぞへ、サアそこが一かばちか、生
顔と死顔は相好の變る物、面ざし似
たる小太郎が首、よもや躰さは思ふ
まじ、よし又それさあらはれたらば
松王めを眞二つ、残る奴輩切つて捨
て、叶はぬ時は若君諸共、死出三途
の御供と、胸をすゐたの 一つの難儀
今にも小太郎が母親迎ひに來たらば
なんさせん、此儀に當惑、さし當つ
たは此難儀 詞イヤ其事は氣づかひあ

るな、女同士の口先で、ちよぼくさ
欺して見よ。イヤ其手ではゆくまい
大事は小事より顯るゝ、ここによつ
たら母諸共。エ、イヤこりややい、
若君には替へられぬ、お主の爲を辨
へよと、云ふに胸すゐ、さうでござ
んす、氣よはふては仕損ぜん、鬼に
なつてご夫婦は突立ち、互に顔を見
合せて 詞で弟子子と云へば我子も同然
サア今日に限つて寺入したは、あの
子も業か、母御の因果か、報ひはこ
ちの火の車、追付け廻つて來ませう
と、妻も欺けば夫も目をすり、せま
じき物は宮仕へと、俱に涙にくれ居
たる。斯る所へ春藤玄蕃、首見る役
は松王丸、病苦を助くる 駕乗物、門
口にかき据れば、跡には大勢村の者
つきしたがふて申上げます 詞皆これ

に在る者の子供が、手習ひに參つて居ります。若取違へ首討られては取返しがなりませぬ、どうぞお戻し下されど願へば玄蕃、ヤアかしましたい蠅虫めら詞うぬらの伴の事迄、身共が知つた事が、勝手次第に連失うこ、叱りつくれば松王丸、ヤレお待ちなされ暫くご駕より出るも刀を杖詞憚りながら拙者めが油斷はならぬ、病中ながら拙者めが見分の役務むるも、外に菅秀才の顔見知り者なき故、今日の役目仕終すれば、病身の願ひ御暇下さるべしと、難有き御意の趣き疎かにはいたされず、菅相丞の所縁の者、此村に置くからは、百姓共もぐるになつて銘々が伴に仕立て助けて歸へる手もある事、コリヤやい百姓めら、さばくさぬかさず共

一人宛呼び出せ、面あらためて戻してくりよと、のつ引させぬ釘 鏝、打てば響けの内には夫婦、兼て覺悟も今更に、胸轉かす計りなり。表はそれとも白髪親仁、門口より聲高に、長松よく呼出せば、オツミ答へて出てくるは腕白顔に墨べつたり、似ても似つかぬ雪墨、之れではないと許しやる 詞岩松は居ぬかと呼ぶ聲に、祖父様なんぢやまばしこ出て来て来る子供のぐわんぜんなき、顔は丸顔木みしり茄子、詮議に及ばぬ連うせうと、にらみ付けられ、オニコわや 詞嫁にもくはさぬ此孫を、命の花落のがれしと、祖父が抱へて走り行く。次は十五の涎くり、ぼんよく親仁が手招き 詞さよおれはモウ爰から抱れていのと、甘へる

顔は馬顔で、聲きりくすオ、泣くな、抱いてやらうと千鯉を猫なで親おくはへ行く 詞私お伴は器量よし、お見違へ下さるなと、斷り云ふて呼び出すは、色白々瓜實顔、こいつ胡亂と引さらへ、見れば首筋眞黒々々、墨かあざかはしられども、こいつでないも突放す、其外山家、奥在所の子供残らず呼出して、見せても見せても似ぬこそ道理、土が産した計り、子ばかりよつて立歸る。スハ身の上と源藏も、妻の戸浪も胸をすゑ、待つま程なく入来る兩人 詞ヤア源藏、此玄蕃が目の前で討つて渡そと請合ふた、菅秀才が首サア請取らう早く渡せと手詰の催促、ちつとも憶せず 詞から初ならぬ右大臣の若君かき首、れち首にもいたされず、暫

くは御用捨ご立上るを松王丸詞ヤア
其手はくはぬ、暫しの用捨ごまほど
らせ遣仕度しても、裏道へは數百人
を付け置き、蟻の這出る所もない、
生顔と死顔は相好ががかるなごい、
身代り御首それもたべぬ、古手な事
して後悔すなご云はれて、ぐつとせ
き上げ詞ヤア入らざる馬鹿念、病は
うけた汝か眼玉がでんぐり返り、逆
様眼で見やうはしらす、紛れもなき
菅秀才の首追付け見せう。オ、その
舌の根の乾かぬ内に早く討て、さく
切れと玄蕃が權柄、ハツと計りに源
藏は胸をすゑてぞ入にける。傍に聞
き居る女房は、爰ぞ大事ご心も空、
檢使は四方八方に、眼を配る中にも
松王、机文庫の敷を見廻し詞ヤア合
點のいかぬ、先達つて行んだ餓鬼等

は以上八人、机の敷が一脚多い、其
俵はごに居るぞご、見咎められて
戸浪ははつと詞イヤこりやけふ初め
て寺、イヤ寺参りした子がござんす
何馬鹿な。オ、それく是が即ち、
菅秀才の、お机文庫と、生地を隠し
た塗机、ざつとさばいて言ひ抜ける
詞なんにもせよ隙ごらすか油斷の元と
玄蕃諸共つツ立上る。こなたは手詰
の命の瀬戸際、奥にばつたり首打つ
音、はつと女房胸を抱き、ふん込む
足も、けしごむ内、武部源藏白臺に
首桶乗せてしづぐ、出で、目通りに
さし置き詞、是非に及ばず菅秀才の御
首、討奉る。云は、大切ない御首
性根をすゑてサア松王丸、しつかり
ご檢分せよご、忍びの鏢元くつろげ
て、慮ご云は、切付けん、實ご云は

助げんご堅唾を呑んでひかえ居る
ハ、ハ、ハ、何んのこれしきに性根
所か、今淨玻璃の鏡にかけ、鐵札か
金札か、地獄極樂の境、家來衆、源
藏夫婦を取巻きめされ、かしこまつ
たご捕手の人数十手ふつと立かする
女房戸浪も身をかため、夫はもごよ
り一生懸命、サア實檢せよ檢分ご云
ふ一言も命わけ、うしろは捕手、向
ふは曲者、玄蕃は始終眼を配り、爰
ぞ絶対絶命ご、思ふ内早や首桶引寄
せ、ふた引きあげた首は小太郎、實
ご云ふたら一討ちご、早抜きかける
戸浪は祈願、天道様、佛神様あはれ
み給へご女の念力、眼力光らす松王
丸、ためつ、すがめつ窺ひ見て詞ム
ウコリヤ菅秀才の首打つたは、まが
ひなし、相違なしご、云ふに悔り源

藏夫婦、あたりきよろ／＼見あはせり。檢使の女番は見分の詞證據に、出かした／＼よく打つた。褒美にはかくまふた科ゆるしてくれる、イザ松王丸片時も早く時平公へお目にかけん、いかさま、隙どつてはお咎めもいかゞ、拙者はこれよりおいさまたまはり、病氣保養いたしたし、オ役目はすんだ、勝手にせよま、首受取り、女番は館へ松王は、駕にゆられて立歸る。夫婦は門の戸びつしやりしめ、ものをも得云はず、宵息吐息、五色の息を一時に、ほつと吹出す計りなり。胸なでおろし、源藏は、天を拜し、地を拜し詞ハア、有

難や添けなや、凡人ならぬ我君の、御聖徳が顯はれて、松王めの眼がすすみ、若君と見定めて歸つたは、天成不思議のなす所、御壽命は萬萬年悦べ女房詞イヤもう、もう大抵の事ぢやござんせぬ、あの松王が目の玉へ、菅相巫様がばいつてござつたか、但し首が黄金佛ではなかつたか似たま云ふても瓦と金、寶の華の御運開きと餘り嬉しうて涙かこぼれるハア、有難や尊やま、悦びいさむ折からに、小太郎が母いきせきと、迎ひき見えて門の戸叩き、詞寺入の子の母でござんす、今漸歸りましたと云ふ聲聞くより又恠り、一つ遁れて

また一つ、こりやマア何ぞ、どうせうと、妻が騒げど夫は胸すゑ、詞コリヤ最前云ふたは爰の事若君にはかへられぬ、狼狽者めと戸浪を引退け、門の戸ぐわらり引明れば、女は會釋し詞コレはまあ／＼御師匠様で御座りますか、わるさをお頼み申します、ごに居やるぞお邪魔であらうと、云ふを幸ひ詞イヤ奥に子供と遊んでゐます、連立つて歸られよと、眞顔で云へば、詞オそんなら連れて歸りましょと、すつと通るを後より、只一討き切付くる、女もしれ者ひつげつし、逃けても逃さぬ源藏か、又するごに切付くるを、我子の文庫ではつ

しごうけ止め詞コレ待つた待たんせ

コリヤどうぢやこ、勿る又も用捨なく、

又切付くる文庫は二つ、中より

ばらりこ經帷子、南無阿彌陀佛の六

字の旗、あらはれ出しはコハいかに

こ、不思議の思ひに劔もなまり、す

ゝみかれてぞ見えにける。小太郎が

母涙ながら詞若君菅秀才のお身がは

り、お役に立て、下さつたか、まだ

か様子が聞きたいこ、云ふに悔り詞

シテくそれは得心か。得心なりや

こそ此經帷子に六字の旗。ムウンテ

其許は何人の御内證さ、尋る内に門

口より詞梅は飛び櫻はかゝる世の中

に、なにさて松はつれなかるらん、

女房悦べ、伴はお役に立つたぞこ、

聞くよりわつこせき上げて、前後不

覺に取亂す、ヤア未練者めこ吐りつ

け、すつこ通るは松王丸、見るに夫

婦は二度悔り、夢が現が夫婦かこ、

呆れて言葉もなかりしが、武部源藏

威儀を正し詞一禮はまづ跡の事、こ

れまで敵と思ひし松王、打つて變つ

た所存はいかに、いぶかしさよこ尋

ねれば、オ、御不審尤、存知の通

り我々兄弟三人は、めい／＼に別れ

て奉公、情なや此松王は時平公は從

ひ親兄弟さも、肉縁切り、御恩請け

たる昔相巫様へ敵對、主命さば云

ひ乍ら皆これ此身の因果、何ぞそ主

從の縁切らんこ作病かまへいこまの

願ひ、菅秀才の首見たらば、暇やら

んこ今日の役目、よもや貴殿は討ち

はせまい、なれども身がはりに立つ

べき一子なくんはいかやせん、爰ぞ

御恩の報する時さ、女房千代さ云ひ

合せ二人の中の伴をば、先へ廻して

此の身替り詞机の敷を改めしも、我

子は來たかさ心のめど、昔相巫に

は我性根を見込み給ひ、何さて松の

つれなからうぞこの御歌を、松はつ

れない／＼こ、世上の口にかゝる悔

しさ、推量あれ源藏殿、伴わなくば

いつ迄も、人でなしさ云はれんに、

持つべきものは子なるぞやこ、云ふ

に女房猶せき上げ、草葉のかけで小
 太郎が、聞いて嬉しう思ひましょ詞
 もつべきものに子なるさは、あの子
 が爲によい手向、思へば最前別れた
 時、いつにない跡追ふたを、叱つた
 時の其の悲しき、冥途の旅へ寺入と
 早虫むしらせたが、隣村へ行くも云
 ふて、道までいんで見たれ共、子を
 殺さしにおこして置いて、ごうまあ
 内へいなるもものぞ、死顔なりとも
 今一度見たさに、未練と笑ふて下さ
 んすな、包みし祝儀はあの子が香奠
 四十九日の蒸物まで持つて寺入さす
 と云ふ、悲しい事が世にあらうか、
 育ちも生れも賤しくば、殺す心もあ

るまいに、死ぬる子は媚よしと、美
 しい生れたが、かあいやその身の不
 仕合せ、何の因果に疮瘡まで、仕舞
 ふた事ちやさせき上げて、かつげと
 伏して泣きければ、俱に悲しむ戸浪
 は立寄り、詞最前にナ、連合の身がは
 りと思ひ付いた傍へいて、お師匠様
 今から頼み上げますと、云ふた時の
 事思ひ出せば、他人の私さへ骨身が
 碎ける、親御の身ではお道理と、涙
 添れば、イヤこれ御内證、コリヤ女
 房もなんでほへる、覺悟した御身が
 はり、内で存分ほへたでないか、御
 夫婦の手前もある、イヤ何源藏殿、
 申付けてはおこしたれ共、定めて最

後の節、未練な死を致したでござら
 う。イヤ若君菅、秀才の御身替りと
 云ひ聞かしたれば、いさぎよう首さ
 しのべ。アノ遁げ隠れもいたさずに
 ナ。につこりさ笑ふて。ム、ム、ム、
 ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
 口な奴、利發な奴、けな氣な八つや
 九つで、親に代つて恩送り、お役に
 立つば孝行者、手柄者と思ふから、
 思ひ出すは櫻丸、御恩も送らす先立
 し、嗚や、草葉のかけよりも、うら
 やましがる、けなりがる、伴も事を
 思ふに付け、思ひ出さるゝと、
 流石同腹同性を、忘れかねたる悲歎
 の涙詞のう其の伯父御に小太郎が、

逢ひますわいのと取付て、わつと計
に泣き洗ひ、歎きもれて菅秀才、
一間の内より立出で給ひ、我に代る
さしるならば、此悲しみはさせまい
に、可愛の者やと御袖を、しぼり給
へば夫婦ははつと、俱にひたすら難
有涙、次手乍らに若君様に御みやげ
と、松王つゝ立ち詞申付けた用意の
乗物、早くくゝと呼ばるにぞ、ハツ
と答へて家來共、お目通りにかきす
ゆる、ハア御出でと戸を開けば、菅
相亟の御臺所、ノウ母様か我子か
と、御親子不思議の御對面、源藏夫
婦横手を打ち詞方々御行衛懸れし
に、いづくにか御座なされし、サレ

バく北嵯峨の御隠れ家、時平の家
來の聞き出し召捕りにむかふと聞き
それがし山伏の妾さなり、危い所奪
ひ取つたり、急ぎ河内の國へお供な
され、姫君にも御對面、コリヤく
女房詞小太郎が死骸あの乗物へうつ
し入れ、野邊の送りさいなまん。ア
いと返事の其中に、戸浪が心得抱い
てくる、死骸を綱代の乗物へ、乗せ
て夫婦が上着をされば、あはれや内
より覺悟の用意、下に白無垢麻上下
心を察して源藏夫婦詞野邊の送りに
親の身で子を送る法はなし、我々夫
婦が代らんこ、立寄れば松王丸詞イ
ヤくこれは我子にあらず、菅秀才

の亡体をお供申す、いづれもは、門
火門火と門火をたのみ頼まるゝ、御
臺若君諸共に、しやくり上たる御涙
冥途の旅へ寺入の、師匠は彌陀佛釋
迦牟尼佛、六道能化の弟子になり、
賽の河原で砂手本、いろは書く子を
あへなくも、ちりぬる命是非もなや
あすの夜誰が添乳せん、らむうぬめ
見る親心 劔と死出の山けこえ合あ
さきゆめみし心地して、跡は門火に
ふひもせず、京は故郷さ立別れ、鳥
邊野さして連歸る。



土佐町の段

第二 三十三所壺坂寺

土佐町の段

澤市内より御寺迄

口 豊竹辰太夫
豊澤廣二
豊澤新一郎

人形

女房お里 吉田文五郎

講 中大ぜい

茶店亭主 吉田利男

西國六番の札所大和國壺坂寺觀世音の靈驗を記した名人團平が妻女加古千賀女の筆になり、名人團平が一代の蘆蓄を傾注して節付した名作であります。内容は澤市といふ座頭の女房お里の貞節を叙したものであります。壺坂寺の片ほそりに住む澤市といふ座頭は三つ違ひの美しいお里といたふ女房を持つてゐたが、三年このかた毎夜のやうに家を抜け出して往くので澤市は隠し男があるやうに嫉妬します。實はお里は毎夜夜中に壺坂の觀音様へ參り夫の眼病平癒を祈つてゐたものでした。それを解つた

澤市は女房の貞節に泣いて厚い心に謝しました。所詮は癒らぬ眼病にいつ迄厄介かけるも壺坂寺の谷へ身を投げます。さかつけつたお里も夫の後を追ふて、ついでに身を投げます。その信心の厚さ女房お里の貞節に觀音の利益をたまひ、身は助かり澤市の眼があくといふ夫婦愛を高唱した絶好の世話もので御座ゐます。

(床本) 土佐町の段

機織りてかすかおろしておさまきて身にはつれをまこへ共心の錦おりかみ行儀も人の鏡ぞま貞女の噂日脚さへまだいさ高き八ツ下り土佐町はづれ並木松蔭茶の煙立障子休足所つりわらじ往來の人の足引もけふ縁日の觀世音參り下向に聲かけて茶店

澤市内より

御寺の段

切 竹本 鏖太夫

豊澤 新左衛門

ツ 野澤 勝三郎

人形

座頭 澤市 桐竹 政 龜

女房 お里 吉田 文五郎

観世音 吉田市 松

の嬢が呼さめテモ早い御參詣に花も
 丁度おあんばい休んでおいでござで
 出す花香もよしや吉野膳面々茶碗手
 にさつてチー檀三の嬢精が出来ますの
 ふ今日は十八日でたんさお参り定め
 て茶の錢が上りましょサイナア靈驗
 あらたな観音様のお影で世過をさし
 てもらふ有難いお恵みさ噂まぢ〜
 する處へ春の野もせの若草や寢よげ
 に見ゆる肌の色誰がつみそめし初よ
 めな手織着物のこなしよく歩み來る
 を信者は聲かけコレ〜澤市のお内
 儀ごこへ行かつしやるマア付合に休
 まんせチー是は〜皆様方けふは暖
 たか日和もよし定めて観音様へお参
 りでござりませふモウ私らは日がな
 一日糸を取るやら綿くるやらかせい
 でも〜追付ぬ貧乏ひまなしさいへ

ばこなたは打笑ひテモ澤市は仕合者
 お嬢の器量よい上に第一男を大切に
 お抱片手の貸仕事ア、逆もの事にお
 嬢の顔たつた一目澤市に見せたいわ
 いのチーそれ〜あつたら女房を谷
 間の櫻くらがりのぼた餅でアノ澤市
 は味知る斗りおしい事じや〜さほ
 めそやせばお里は涙あひに紛らしチ
 ホ〜、〜、皆さんの譯もない目か
 いこそ不自由なれわたしに過た澤市
 様まだ目の見へた時分から言號した
 大事の夫わしや嬉しいと思ふて居る
 成る事なら今一度あの目が明てあげ
 たいさほろりと落す一雫貞女の誠こ
 もらん人々も感じ入チー尤も至極
 や貞女かな器量がよけりや心込イヤ
 コレお内儀遠くもあらぬ壺坂の観音
 様を願はしやれこなたの貞女の届い

たら不思議の御利益目の當り随分信心
 心さつしやれやハイ〜有難ふはご
 さんすか賃仕事やら介抱やらで少し
 のひまもない私し又春永にゆつくり
 マチーそふさつしやれ〜やそこふ
 言内七ツ下りそろ〜内へ歸りませ
 うチー歸りませう〜内へ歸つて山
 の神にお里女郎の話しをして男を大
 事にする様にチー言てきかそ〜兎
 角目明の亭主さへ氣儘氣すいの買
 らひ小使錢の出入り目くらに仕おる
 め銘々か仇口〜に右左お里も會釋
 笑顔別れ〜て在所道我家をさして
 歸りゆく。

(床本) 澤市内の段

夢も浮世か浮世も夢か夢てふ里に住
 なむら住ば住なる世の中によしあし

びきの大和路や壺坂の片邊り土佐町
 に澤市さいふ座頭あり生れ付たる正
 直の琴の稽古や三味線の糸より細き
 身代の薄き煙りの管みに妻のお里は
 健やかに夫の手助け賃仕事つれさ
 せてふ洗濯や糊かいものを打盤の音
 も幽のくらしなり鳥の聲鐘の音さへ
 身にしみて思ひ出す程涙む先へ落て
 なむるゝ妹脊の川をチー是は〜澤
 市様けふは何さ思ふてやら三味線出
 してよい機嫌じやのホー、チーお里
 かそなたアノおれが三味線弾をよい
 機嫌に見ゆるかやアイナアハテナア
 おりやそんな氣じやないわいのモウ
 〜〜〜氣が詰つて〜〜〜いつそ死で
 ものけふエーイヤサアノ死んで仕廻
 程氣がふさいでならぬわいのふイヤ
 コレお里わしやそなたにチト尋れた

い事がある。マア〜下に居や〜
 ハテ扱下に居やいのふ外の事でもな
 いかいつぞは聞ふ〜さ思ふて居た
 が丁ご幸ひ光陰矢の如しとやら月日
 の立ばマ、早いものなアソレわがみ
 さおれがコウ一所に成てからモウ三
 年稚い時より許嫁互に心も知つて居
 るにマなぞ其様に隠しやるぞさつげ
 りと打明て言てたもさ何處やら濁る
 詞のばしお里は更に合點行かずふし
 んなからにコレ澤市様そりやお前何
 を言しやんす嫁入してから三歳のあ
 いだモほんに〜露程も隠し立した
 事はござんせぬが夫共に何ぞ又お氣
 にいらぬ事有ば言て聞して下さんせ
 サそれが夫婦ぢやないかいなム、そ
 ふ言やればこつちも言はふチー何成
 共言しやんせチー言ばいでかコリヤ

お里マよふ聞けよわれと夫婦になつて丸三年毎晩七つから先寢所へ手をやつても終に一度も居た事がないソリアもうおれは此様な盲豚にゐらい疱瘡でも見る影もない顔形ごふで我の氣に入ぬは無理なられど外に思ふ男が有らばさつぱりご打明けて言ふてくれたら此様に何の腹を立ふぞい尤もわれとおれとは従弟同士専ら人の噂にもアノお里は美しい〜ごモ聞度事におればもふよふ諦めて居る程に格氣は決してせぬぞやコレごぶぞ明して言てたも立派に言へご目にもるゝ涙吞込盲目の心の内ぞせつなけれ聞にお里は身も世もあられず縋り付てエーソリヤ胸忿な澤市様いかに賤しい私じやさて現在お前を振り捨てゝ外に男を持つ様なそんな女

ご思ふてかソリヤ聞へませぬ〜エ聞へませぬわいなモ父様や母様に別れてから伯父様のお世話になりお前さ一所に育てられ三つちがいの兄さんさいふてくらして居る内に情なやこなさんば生れも付ぬ疱瘡で目かいの見へぬ其上に貧苦にせまれど何のその一旦殿御の澤市様たさへ火の中水の底未來迄も夫婦じやと思ふ計かコレ申お前のお目を治さんご此壺坂の観音さまへ明けの七つに鐘を聞きそつと拔出で只一人山路いさばず三年越せつなる願ひに御利生のないさはいか成報ひぞや観音様も聞へませぬご今もいまさて恨んで居たわしの心もしらすして外の男も有る様に今のお前の一言は私ばげらご立わいのさくごき立たる貞節の涙の色ぞ

誠也始て聞し妻の誠今更何ぞ澤市が訛の詞も涙聲アコレ女房共何にも言はぬ堪忍してたも誤つた〜くわいのふモウそふさばしらすかたわの癖に愚痴計りコレこらへてたもれさ斗にて手を合したる諸淫袖や袂をひたすらんアコレ連添女房に何の訛お前の疑ひ晴たれば私しや死んでも本望じやわいな〜イヤモウそふ言てたもる程わがみの手前目ないわいのふが夫程に迄信心してたもつてもおれが此眼はコレマ治りはせぬかいのエーソリヤマア何を言はしやんすぞいな此年月のうき艱難雨の夜雪の夜霜の夜もいさばぬ私かばだし参りも皆お前の爲じやぞへサア夫程に祈誓をかけ願ふてたもつた志有がたい共嬉しい共其貞節なそなた

かふて来る事は来ても中々に此目は
治りそふなこそはないわいのふエ、
此人はいのふ又してもくそんな事
コレ此壺坂の観音様むかし桓武天皇
様奈良の都にまします時眼病にて御
惱み夫故に此観音様へ御立願なされ
た時早速御眼が明いたげな夫故お前
に勧めるもハテモウ天子様じやさい
ふたさてたさへ虫けらの様な我々で
もあなたに隔てばないはいなモ兎角
信心さいふ物は氣を長ふ歩みを運ん
で心を鎮め一心にお縋り申せば何事
も叶へてやるさのお慈悲じやはいの
ふそんな事をいふ手間で早ふお唱へ
申ませふさ力をつくれればいかさまの
ふほんに言やれば其さほりそんなら
わしは今宵から三日の間爰に斷じき
する程にそなたは早ふ内へいんで何

かの用事仕廻ておじや治るこも治ら
ぬ共此三日の間か運定めチよふい
ふて下さんしたそんなら私も内へ歸
り何かの用事片付て來ませうかコレ
澤市様此お山はけはしい山みち殊に
坂を登て右へ行けば幾何丈さも知れ
ぬ谷間じや程にコレかへまへてごつ
こへもチーごへ行ふぞ今夜から觀
音様と首引じやアハハハハハハハハ
ご笑ながらに女房も後に心ば置露の
散てばかなき別れ共しらでごつかは
急ぎゆく後に澤市只一人ころへし胸
のやるせなくかつご伏して泣居た
るコレ嬉しいぞや女房共此年月の介
抱其上に貧苦にせまるもいさひなく
只の一度も愛想盡さすあまつさへ目
かいの見へぬ此身をば大事にかけて
たもる志それさもしらず色々の疑

立てコレ堪忍してたもノ今別ては
いつの世に又あふ事の有べきか不便
の者やいぢらしやご大地にごふご身
を打伏前後ふかくに歎きしが漸々顔
を上げア、歎くまい、三年の間女
房が信心凝して願ふても何の利益も
ないものをいつ迄生きても詮ない此
身世の謔にもいふ通り退げ長者も二
人のたさへわしが死のがそなたへ返
禮生きながらへていづれへ成さよき
縁付をしてたもやヤム、最前聞け
ばアノ坂を登りて右へ行ば幾何丈共
しれぬ谷間この事は究竟の最期所。
かゝる靈地の土さならば未來は助か
る事もあらんム、幸に俺は更たり人
なき中にチーそふじやくと立上り
亂るゝ心取直し上る段さへ四つ五つ
早曉の鐘の聲、イザ最期時いそが

んこ杖を力に盲目のさぐりくへ漸々こなたの岩にかき上ればいこもすきき谷水の流れの音もどうんく響くは彌陀の迎ぞこ杖を傍に突立てなむあみだ佛も諸共はがほこ飛込身の果は哀成ける次第なり。かゝる事ども露しらすいせき道より女房が取て返すこ氣はそゆる常に馴にし山道もすべり落やら轉ぶやら漸々登る坂の上ヤアコリアコレこちの人が見へぬわいな澤市様くいのふ澤市様のいふと尋ね廻れど聲だにも人がげさへも見へざれば、あなたへうろくこなたへ走り澤市様のいふくこ爰かしこ木の間をもるゝ月影にすかせば人が物ありと立寄り見れば覺の杖ハツト驚き遙かなる谷を見やれば照月の光りに分つ夫の死骸ハアこ

りやマアどふせう悲しやと狂氣の如く身をもたへ飛をりんにもつげさなく呼べど叫べど其からもこたふるものは山彦の既より外なかりける。エいこちの人聞へませぬくくはいな此年月の艱難もいさばぬ私が辛抱はな只一ト筋に觀音様へ願込めて、どうぞ早ふ眼の明きます様お助けなされて下されと祈らぬ間逆もないものなけふに限つてこのしだら後に残つて私しやまあどふなるぞいなアどふせふぞいなくくくくア、是を思へば最前に諷けしやんしたアノ歌はどふやら心にかゝつたが今で思へば其時に死る覺悟で有たのかエ、しらなんだくくわいな斯言ふ事なら何のマアお前を無理に連れて來ませふ堪忍して下さんせくくほん

に思へば此身程はりないものが有かいな二世を契りし我夫に長いわかれさなる事は神ならぬ身の淺ましやかる憂目は前の世の報ひか罪かエ、情なや此世も見へぬ盲目のやみより闇の死出のたび誰か手引を仕てくれふ迷はしやるのを見る様でいさしいわいのさかきくごきくごき立く歎く涙は壺坂の谷間の水や増るらん。漸々涙の顔を上げマ、悔むまい歎くまい皆何事も前の世の定り事と諦めて夫と俱に死出の旅マ思へはかたみの此枕を渡すは此世を去てゆく行先導き賜へや南無阿彌陀佛みだ佛の聲諸共に谷間へ落てばかなき身の最期貞女の程こそ哀れなり。頃は二月中ぞらや早や明け近き雲間よりさつこ輝く光明に速て聞ゆる音楽の音も妙

なる其中にいともけ高き上臈の姿を
假に觀世音微妙の御聲うるはしくい
かに澤市承はれ汝前生の業により
盲目となつたりしかも兩人なむて今
日にせまる命なれ共妻の貞心又は日
頃念する功德にて壽命を延し與ふべ
し此上はいよく信心渴仰して三十
三所を順禮なし佛恩報謝なし奉れ
コリヤお里く澤市くま宣ふ御聲
諸共にかき消す如く失賜へば早や晨
朝の鐘の聲四方にひびきて明け行く
空ほのくくらし谷間には夢もも分
かぬ二人ももむつくこ起てヤアこな
たば澤市様アコレこちの人お前の
眼が明いて有むなエアノほんにコ
リヤ眼が明いて有るチ、眼が明た
くくくくくく眼が明たチエ

観音様のおかけ有難ふござります
くくくくくわいのふム、そし
てアノお前はマアどなたじやへどな
たごは何ぞいのコレ私はお前の女房
じやはいなエ、アノお前がわしの女
房かへコレハシタリ始めてお目にか
りますア、嬉しやく夫に付ても
ふしぎな事まさしくわしは谷へ落ち
死たと思ふて何にも知らぬ其内に觀
音様がお出なされ前生の事細々ご御
しらせサイナア私もお前の後を追谷
へ落たに違はないが身内に一つも疵
付かず其上お前の眼は明ホコリヤマ
ア夢ではないかいなム、そんなら今
澤市くさおつしやつたがコリヤ觀
音様が直々にお呼び生け下さいまし
たに違ひはないハ、ハ、ア有がたや

忝けなや是より直ぐお禮參りは浮木
の龜始めて拜む日の光りは年立かへ
る心地ぞや是ぞ誠に觀音の御利生有
りけるや、見へぬ眼も見へ明らかに
有むたかりける新玉の年立歸る如く
にて水も洩さぬ夫婦の命も助かりけ
るは誠に目出度うさふらひけるけう
は嬉しやく枕を納めて折しも朝の日の
目を拜んでお禮申すや神や佛萬見せ
賜ふは是偏に觀世音これ偏に觀世音
の誓の重きは岩を建水をたへて壺
坂の庭いさごも淨土なるらん御しめ
し有難かりける御法なり。



第三 夏祭浪花鑑

三婦内の段より

長町裏の段まで

三婦内の段

切

竹本相生太夫
豊澤猿糸

人形

釣舟の三婦 桐竹政龜
團七九郎兵衛 吉田榮三
一寸徳兵衛 桐竹門造
女房お辰 桐竹紋十郎
女房お次 吉田小兵吉
玉島礎之丞 吉田光之助

この淨瑠璃は延享二年七月竹本座に上演されたもので三婦内の段は六段目で大体の筋合は元祿十一年歌舞伎に演じられた『宿無團七』を藍本としたものであります。泉州濱田の家の中玉島兵太夫の息子磯之丞が乳守の遊女琴浦に夢中になつて勘當になり團七が世話をする。團七は兵太夫と同家中の大島佐賀右衛門の家來に傷を負はせた爲めに相手双共入牢の身となつたのを兵太夫の扱ひで出牢した恩義からであります。磯之丞は團七の世話で道具屋へ手代に住込むこ

主人の娘さ戀に落ち番頭の嫉妬仲買彌市の殺害、團七の女房お梶の父儀平次の騙りから起る五十兩の引負等の爲めに大阪にも居られなくなり死なうとしたのを釣舟の三婦に助けられ其家に匿まはれてる處へ一寸徳兵衛の女房お辰が訪れて来たので三婦は之に頼んで備中玉島へ落してやり琴浦も後から遣らふこしてゐるこ、豫て琴浦に懸慕してゐる大島佐賀右衛門に頼まれて團七の舅、義平次が團七の名を騙つて琴浦を奪ひ取ります。後で之を知つた團七は舅の後を追つて取り戻そうと馳け出します。これまでが三婦内の段で、長町裏へ追ひ付いた團七がそこで欺して義平次から琴浦の乗つてゐる駕を取り戻し其金の経緯から遂に義平次を殺す

琴浦 吉田文作
儀平次 吉田玉松
こつばの権 吉田玉市
なまこの八 吉田市松

長町裏の段

九郎兵衛 豊竹つげめ太夫
義平次 竹本鏡太夫
野澤勝市

人形

九郎兵衛 吉田榮三
儀平次 吉田玉松
踊り子 大ぜい

さいふのが長町裏の段になつてゐます。世話物にて九段續きさいふ長ものはこれが始めて、また人形に帷子衣裳を用ひたのもこれが嚆矢であります。

(床本) 三婦内の段

鹿ナドリ 賑しき、浪花高津の夏神楽練り込む振り込む擔ひ込む、てうさようさの伊達提燈、門のそろへは地下町の、しるしを見世に伊豫簾、並ぶ家居の其中に、釣船の三婦の家。客は内證預りの、乳守の太夫琴浦と結び合ふたる磯之丞。見世を揚屋の祭見に、口説しかけて拗れ合ふて、ほむらの煙管打たき、煙くらべのびんしやんば、火皿も湯になるばかりなり。三婦の女房は料理拵へ、火鉢に掛けて焼物を、燻ぐ片手に、コ

レ琴浦さん。詞まうよい加減に仲直つたらよかるうがの、道具屋の娘お中殿さやらを、三婦殿が送つて行たも、憎氣しんきな顔がいやさに、夫に何ぞやふしくたやうに、お前も粹のやうにもない。男に勤奉公をさしたまと思ふたがよいわいなさ、挨拶すれば。詞ア、おつきさんのいはんす事はいの。お中どのさ心中に出た清七男仲直つたさて面白うもござんせぬ。じたい娘の有る内へ、奉公にやらんした、九郎兵衛様か聞えませぬアコリヤ九郎兵衛に恨み云ふ氣なら此清七男にいへ。三婦の世話してたもるのも、九郎兵衛の頼みから。サ其恩ある人を恨みさするはお前のわざ。いふなやい、据膳ご河豚汁を食はぬば男の内ではない。ソレ其口が

猶憎く、せせり合ふ中へ主の三婦
 數珠爪繰つて門口より。詞女房ども
 今戻つた。祭の料理出来であるか
 内入よきにおつきもほれ。詞出
 來である。あつらへの饔の焼物
 摺りたて汁にかは贈。ナツト夫で喰
 へる。シテ道具屋の娘女は戻し
 て來てか。ハテ人の大事の娘かどは
 かしたさいはれては、礎殿の男も立
 たぬ。首縊つた傳八めに何もかも買
 ふせ、金の事もさらりと濟み、仲買
 の彌市を殺した事は、彼の書置でし
 てやつたと思ふたか、いやな風説が
 ある。お二人も聞かしやませ。其書
 置の手が傳八の手でないご一門ごも
 がいひ出だし、御詮議を願ふごの噂
 スリヤ礎之巫様を大阪の地には置か
 れまいと、九郎兵衛もいふ。おれも

思ふ。マア當分立退かす相談といふ
 て、あてごなしにやられもせまい、
 よつぼごなげんびき、マア端近へ出
 て人に顔見せるもわるい。殊に琴浦
 殿は、目がける奴のある身の上。女
 房ども、女房共、なぜ表へ出します
 るぞと、叱りまはせば、ソレ見さん
 せの、榮耀らしい格氣所か、事によ
 つたら二年三年、わかれ。ごさる
 もしれぬ、暇乞と仲直りの汗を一度
 にかいておかんせ。うちん。せす
 琴浦様、つれまして去かんせと、粹
 な女房の挨拶も、よい折れ口と。コ
 レ礎様、いふ事かたんさある、サア
 ごさんせと手を取れば、ふいと振り
 切り、不行儀せまい。詞三婦が吃さ
 見てゐやるさ、おどけをしほに二人
 連手を引き合ふて入りにける。ドリ

ヤ焼物を焼立て、祭しんじよご立
 つ女房。表へ二十六七な所目馴れぬ
 笠の中、そこが爰かき見廻して。詞
 下り荷物の世話なさんす、三婦さま
 さいふお方は、爰らではないかへご
 聞ふ門口より。爰でござんす、ごな
 たじや。私じや。私さへ。チよ
 うござつた、アリヤ徳兵衛のお内儀
 じや。是はしたり、サアマア此方へ
 と挨拶を、馴染にして打上り。三婦
 様には先程九郎兵衛様でお目に掛り
 何かのお禮を申しましたか、お前に
 は始めて、私は備中の玉島に在りま
 する辰と申して、徳兵衛女房でござ
 んする。これは。よくよう上らんした
 なサ。アイマア配偶徳兵衛殿。ごは
 僅な科に國を立退かれまして、和泉
 さやらに居られましたを、皆さん方

お世話にして、暫く大阪の住居。生れ付があらこましい喧嘩さいへば一番おけ、はだ刀さいたやうな人、定めて何かお世話がちこ、一禮いへばア他所がましい何のお禮。詞イヤもうあらこましい何方も覺えのある事。手前の人十五六年以前迄は、夫はく喧嘩好きでな、苟且にもちよつと橋詰へ出て貰を毎日毎晩、夫も亦直れば直るもの、今では蟲も踏殺さぬ佛性。アレ彼のように片肢も敷珠を離さず、腹の立つこがあれは念佛で消して参られます。嬢かいふ通り常住これじやく。ハテナア夫は結構なこご、イヤお内儀、徳兵衛も同道で下られますか。サイナア女房の思ふやうにもない、聞いて下んせ。お國の咎めも赦りて迎ひに来

たを、ヤレ嬉しやさいふ氣も無うてマア四五日も後から下り、先へ下れさひつしよなさ。未練さうに付はつてもあられす。是非なう先へ下りますと、話の中に三婦が女房、思ひ付いたる一つの頼み、云ひ出すしほに茶をさし出し。詞イヤ申しお辰様。なれくしいがお前へちこお頼み申したい事がござんす、何ぞ私に頼まれて下んすまいかさうらさへば、立直つて襟かき合せ。詞玉島の田舎に住むでも一寸徳兵衛の女房でござんす。頼むとあれば一寸でも後へよらぬが夫のしにせ、引きはせまいマアいふて見さんせ。マア忝いお禮から申します。定めて徳兵衛さんの話で聞いてござんせう、和泉の國濱田の御家中、玉島兵太夫様さいふお方

の御子息礎之亟様さいふむ、様子あつて町奉公なされてござつた所に若氣の至りて人を、マア大阪に聞かれぬ首尾。今も今こてかけさせまする相談。此お方をどうぞマア、私の方へ預りましょ。アノ預つて下んすかそこを引かぬが一寸が女房、殊に其親御の兵太夫様へ付いてはちつさうちにも由縁もあり、預つて連れまして歸りましょ。そんならさうして下さんせ、ア、落付いた落付いた。テエ呼びまして來ませうと、立つを釣船、コリヤ待て女房、詞女賢しうて牛賣れぬと、要らざる己む差配、頼んでよけりや俺も頼む。礎之亟殿をお辰殿へ預けては此三婦の顔も立たぬ。サア其所を外へ預けるが彼方のお爲。マダぬかす男の一分捨てさす

か、面汚さすかたわけめと、叱り飛ばされどもぢんぐ。うぢんぐ。徳兵衛女房聞咎め。詞イヤ三婦様、無理に頼まれたうていふではないむ、私共其人預ればお前の男が立たぬは何うして、但し女でまさかの時役に立たぬと見すえてか、まんざらひぢりかすりやくふやうなアイ女子でもござんせぬ、一旦たのむのたのまれたさ

いふたからば、三日でも預られれば私も立たぬぞへ。立て、下んせ親仁様と、辛い女房の言葉の山椒、茶びん頭を動かす。詞イヤどういふても預けては此三婦が男が立たぬ、サア其立たぬ譯聞かう。いかさま夫には様子があらう夫やマア何うして立ちませぬ。ホ立たぬさいふ譯は内儀の顔に色氣もある故、徳兵衛も思はう

にも、三婦さいふ者はよい年をして不遠慮な、身に火の付いたが切ないさて、若い女房に若い男を預けてやつたは聞えぬと、思ひばせまいか又思ふまいものでもない。あなうちこなたに限つて爾うした事はあるまいけれど、分別の外さいふことあるに依つて、又疑ふまいものでもないが。ないことじや〜。ないことじやに依つて、結局戸が立てられぬ、腹立つまいぞや〜、いっそ此方の顔が歪んであるか半分削けても有つたら、徳兵衛も何とも思ふまい、また世間も濟む。俺や誓文コレ此數珠にかげ預けたい〜、此方の根性見据えたに依つて、か萬々が一徳兵衛が立たぬ事が出来るぞ、俺は勿論九郎兵衛までか、男も頼たる、さいふ事

はあるまいけれど、外さいふ字で預けにくい。マアさう思ふて下されと事を分けたる一言に、連添ふ女房も理に服し、お辰はもさより言葉も出さず、差俯伏いてゐたりしが、何思ひけん立直り、火鉢にかけし鐵弓の、火になつたのをおつ取つて、我れ我手に我顔へ、べつたりあてる焼金にうんさばかりに反りかへる。是は何故何事と、夫婦は周章抱きかへ、薬よ水よと勞れば、正氣付きしかむつくと起き。詞なんぞ三婦様、此顔でも分別の外さいふ字の色氣があるらうかな。出来した、お内儀、磯之丞殿の事を頼みます。スリヤ預けて下さんすか。唐までなりと連立つて下され。ア、嬉しうござんす、之でわたしも立つた。磯之丞様の親御兵

大夫様は、備中の玉島が御生國、徳兵衛殿の爲にも、わしが爲にも親方筋、其御子息様を預からいでば連合の男も立たず私も主へ立たぬに依つて、親のうみつけた満足な顔へ疵付けて預かる心、推量して下さんせよ語を聞いてお次も涙、三婦も涙の横手を打ち。詞ハテ徳兵衛は頼母しい女房を持つたなア、なぜ男には生れて來ぬぞ、可憐物を落して來た。ソレ女房共奥へ伴ひ磯殿にも引合せ備中へ下さ心拵へ。お内儀、疵は痛みはしませぬか。何のいな我手でした事、チ、恥しい袖掩ふぞ。惜しや盛りを散らせし三婦も女房はいたはりて、一間へ、Mこそは連れて行く。早や暮近くなまなれの、立つるでもなし横に出る、男仲間の跳ね

出され、こつげの權まこの八、獅子に雇はれ赤頭、せんまの形を其儘に、三婦殿内にか宿にかま、つき聲やり聲にじり込む。詞ホコリヤ二人なむら祭の形、まだ仕廻すか、呑み來たか。今看經しかけて數珠の手が放されぬ、そこらに樽もあう一盃せい、南無阿彌陀、膳棚に啗あうぞ、なむあみだ佛、夫を看ま口ではぶつ、つまぐる數珠を挨拶を取混ぜ、後生佛性。こなたは牛頭馬頭惡鬼株、膝打たいて。詞八よ親仁に今の言をかい。ハテぶつくを聞いて居よりいひ出せ、コレ三婦殿、二人が連立つて來たはこなたに貰ふものが有つて來た。花が欲しい、花くだけれ、ヤア、何が、花をくれい。へエ扱は留守の

間に山車でも持つて來たな。チ、獅子持つて來て美しい花を見付けて置いた、さる侍に頼まれ其花を貰ひに來た。ナ八よ。それ、つひつかんで來て進ぜうさいふて、お侍を宮の内待たして置いた。前なら腕づくで貰ふけれど、白髪の生えた人をさうもなるまい。但しこみずいふて見る氣か、金にでもする氣か、仕掛ける喧嘩を數珠でまぎらし。詞エ若い者さいふ物は、づば、こなたなめ。わいらは住吉で始めてあふて夫からの出合。まう根性が直つたと思ふたが、フム其侍さいふは大鳥佐賀右衛門さいふわるであらうかな。マアそんな物。コリヤ去んで云はうには、琴浦には磯之丞さいふて歴きとした男がござるさ行んでいふ

てくれ、コナ親父は、おいらを子供
 のやうに思ふさうな。チ、俺の目か
 らは蝗のやうに思ふ。ドリヤそんな
 ら擱んで行のかさ、立上つて兩人が
 奥を目懸け駈入る所に、襖さつと押
 明け、脇差下げて三婦が女房。詞コ
 レこちの人、私や先きから聞いて
 るたが、こんな様もう堪忍がなるまい
 の、嬢五六年願ふた後生を無にして
 いつそ切つてしまはざるまい。チ
 そんな事もよござんしよ、が、あん
 まり夫は不便なこどもあり。イヤ
 こんな時切らざ切る時もあるまいと
 云ふに二人はうちくきよるく、
 性根を据えて身を固め。面白い切ら
 れう、腰立たぬ老書切りはづさし
 て臺座後光、仕舞ふてくれうと兩方
 より、サア切れくさせかみ立て、

入身になつて待ちかくれれば、三婦は
 すつくま立身になり、詞かまふ是非
 がない切つてしまを。ヤ夫は。イヤ
 俺が切るは此數珠さ、ふつり切つ
 て後へ投げ、サア是からが元の釣船
 己等に及物が要らうかさ、はつしは
 つしと踏み倒し、尻引からげ、詞ド
 レ其脇差。ハテまう及物は要らぬで
 ないか。イヤ此がらくためは爪にも
 立たぬ、根ざしの侍めをばらして仕
 舞ふ、男の丸腰も見苦しいと、大だ
 ら腰にぶつこむ所を、ごつこいさう
 ばさ右左、擱み付く腕ぐつと捻上げ
 詞かまひらに逢ふて來う。チ、行てご
 嬢侍に逢ふて來う。チ、行てご
 さんせさやる女房、行く男より氣の
 強さ、そこへ押出した跡びつしやり。
 三婦に二人を引立て、宮の内へこ
 つれて行く。奥はしばしの別れぞこ

琴浦に呑込ませ、酒酌みかはず折か
 らに、表へ來るは九郎兵衛が舅三河
 屋の義平次が、駕籠釣らして戸をこ
 さく、誰じやさいふて明けに出る
 詞ホ三婦殿の御内室、此中であひま
 せぬ、何時見ても健さうな、お前も
 達者で珍しい何と思ふて。サ年よる
 息子に使はれます、九郎兵衛がいふ
 には、此中から悪者どもに頼まれて
 琴浦殿を盗まんぞ念がける、定めて
 三婦も心遣ひ、四五日こちへ取込ん
 でおいたら、燈臺元暗しと氣が付く
 まい、女夫の衆の氣やすめに、迎ふ
 て來いさいふて駕籠までおこしまし
 た。是までいかい世話を取繕るへば
 ナンノお禮に及ぶこそ。詞今も今こ
 ていけずめがわつばさつば連合は其
 出入にいかれました、いかさま二三

日此家をあらけ、彼奴らに鼻明かすも魂膽。九郎兵衛様も其胸で、俄の迎ひでござんせう。舅御のお前に渡すはたしか、奥にじや呼んできませうと、つひ立ち入れて義平次は、駕籠の衆待つて貰ばうと、門につくばり人顔の、見えぬを首尾さ待ちゐたり。奥は盃とり納め、伴ひ出で、琴浦が、そんなら私も三婦様や、九郎兵衛様に譯いふて、後から行くが合點か。チそりや其時私も又迎ひに来るも辰が挨拶、磯之丞もこもんに一時には目立つ故、猶以つてつれては行かれぬ、兎角彼の衆のいふ様に、宥めて別れ女郎は駕籠、磯さお

辰は船場へと、立ち出づれば、三婦が女房。詞義平次様渡したぞ、お二人様も御無事で、暇乞も挨拶も、互ひの思ひ暮過ぎて、又の便を松屋町南さ北へ引わかれ、足早にこそ歩み行く。宮には喧嘩くも騒ぐ中、若い者共聲々に、詞親父殿、まうよい、高が逃げる侍を相手にするは大人氣ない。マア去なれい戻られない徳兵衛九郎兵衛諸共に、三婦を宥め歸る店先。女房立つてコレ皆様。詞出入の濟口どうじやんと、こちらの退けでござんせぬか。年寄だけで氣遣ひなき、問へば徳兵衛いかなかな、詞昔に變らぬ達者なち、八

ご權さば蓮池へ、何の苦もなくごんぶりいはせ侍はふみつけた。チそんなら入らんせ、祝うてわつこ酒にせう。コリヤ女房氣が付いた、徳兵衛には取分けて内儀の事を話さやならぬ。九郎兵衛にも安堵さそ。サアまあ奥へご先に立ち、ごりや内儀の御馳走を、食べて行のかご徳兵衛は、伴なひ一間に入りける。跡に九郎兵衛立止り、詞お内儀、琴浦殿や磯殿が見えぬが、どこへいかれたか。さればいな、どうやらそぶくいふに依つて、お辰さんに預け、磯様は備中へ遣り、琴浦様はたつた今お前の方から迎ひに来た。ソリヤ誰

が、ハテ親仁様が見えて九郎兵衛が
 いひまする、四五日戻して下され
 駕籠持たして迎ひにお出で。ヤアヤ
 アあの、此九郎兵衛が云ふさいふて
 舅の親仁が連れて行んだか。チイノ
 シテ、其駕籠はごつちへ。たしか
 南の方へ。夫遣つてばと駈出すを、
 コレ待つた氣遣ひな。詞迎ひに來た
 事お前は知らずか、知つた知らぬは
 後の事。イヤ夫聞かぬ中は。エ、面
 倒なさればし、舅の跡を九郎兵
 衛は息をはかりに、三重追ひかくる

(床本) 長町裏の段

神と佛と荷ひ物はやし立たる下寺町

高津青宮の賑に紛れて急ぐ舅義平次
 かこの熊を細引でくる、卷の俄網
 追立行を後よりもチ、イ、呼びか
 け飛くる舞の九郎兵衛なむ三寶き横
 切れにあせ道行けば追つじきかこの
 捧つかんで鼻中ごうご打すへごつか
 ごすわりほつご一息つきあへすコレ
 申親仁さまこの女中は知つての通り
 恩有る方からの預り人それをこなた
 がごこへ連れてござるこれやてつき
 りご悪者に頼れ金にする氣で有ふご
 そふしられてはこの九郎兵衛が顔が
 立ぬわるいぞへ、此中も内本町の
 道具屋で田舎侍に立立麴香爐を以て
 五拾兩のかたりをへエ、見さげ果た

五拾兩のかたりをへエ、見さげ果た

重てきつごさいふてからむ嗜む心も
 有まいコレ駕の衆太儀ながら其駕後
 へ戻してご昇上、すればコリヤ待て
 九郎兵衛嗜む心が有るまい見さげ果
 たごは悉い其あいそづかしを待て居
 たはい六年このかたおれか娘を女房
 にして慰物にしてゐるサア揚代もら
 ふヤイ爰な恩しらすめ儂は元宿なし
 團七さいふて粹方仲間の小あるき貫
 喰で暮しておつたを引上て堺の濱で
 魚賣りさせまだ其上に娘のおかちを
 て、くり市松さいふ子迄へり出さし
 おつた。月々のあてがい取るむよさ
 に目を眠つて居る中乳守の町で喧嘩
 仕出し和泉の牢へかまつて百日の上

仕出し和泉の牢へかまつて百日の上

女房子をたむ養ふたと思ふサア夫れ

は皆其元様のお世話ぬかすな。せめ

て其入り目を入合そふと思ふてもう

け事にかゝれば儂れが道具屋の内に

おつてよふぼく上さしたなアイヤ夫

は其場のつゐ。まだぬかすかけふ琴

浦をちよるまかしてきたのは惚れて

居らるゝ佐賀右衛門殿へ渡し金にす

る氣イヤサ夫では顔の立ぬか、アノ

ながくおまがいを養ふてゐた此此

此顔が立ぬか但しこちらの此、此

ほうげたが立ぬか足蹴にはつたこ

けられても舅は親ご無念を懲へ齒を

喰しぱり居たりしが兎角訛るにしく

はなしさもみ手の上に膝折かめ段

々の仰一つとして返す詞もござりま

せぬ。ながくのお世話の上又して

は金儲けを妨お腹の立は御尤もうふ

つくりさお邪魔は致しますまい。が

あの女中の事計りはイヤならぬ、サ

ア素手でお詫も申すまい友達共が

頼母子を致してくれまして爰に參拾

兩ござりますれば是をお前へ渡しま

しよ身の代に取つたと思召し琴浦殿

を三婦が方へ戻して下され。外へや

つてはこの九郎兵衛が顔もごふも立

ませぬ情じや慈悲じや親仁様一生の

御無心申、申コレ申さ手引き袖引き

膝をつき無念涙の男泣親さいふ字は

是非もなや義平次も參拾兩當分取に

少しはやばらき琴浦をあつちへ渡せ

ば百兩がもの髓に有れ共かゝりやつ

なむる娘の縁たいやつたと思ひ參拾

兩で戻してやるヤコレ駕の衆今乗つ

てきた所まで駕を戻して駕代も存分

先で取れいさ悪る氣付くればこんな

時よいれだり取サアいさきほひい

さみの駕の者きた道へ又荷ひ行く。

サア約束の參拾兩受さる渡せのさい

そくにイヤ其金爰にはござりませぬ

宿へ歸つて才覺さ立たんとするを飛

かゝりがんづか摺んで引たをしエ

腹の立くくくくく。むまく

さ一ばい。何の申左様ではござりま

せぬ、内に歸れば心當てままあく

く爰を放して。ヤアどこへ〜うぬが様なまいすめはかふして腹あよふかイヤかふしてくれうかされぢ廻し引廻し踏たり蹴たりあげくには砂にすり付け石に打付け引廻し〜引廻されても手向ひのならぬも無念さ口惜さこたへかぬれば其つら付何じや肩ひぢはつて其眼付き何じやコリヤヤイ舅は親ア、慮外なむら親に向つて白眼けつぶすぞよ。無念なか口惜いかム、泣くかかばいやなさすりいぢめてやるふこのせつたのはかくらへさにじり付られはきしみはぎり、すかしながめて、おのりや脇指さいてびこ付か面白いきられる

どこへ後へ寄りおると付け廻して引さらへ。見こま此赤いはしでやつて見るかま持そへ引抜き、サア是で切れ〜サア〜切ぬかやい何のわたしがおまへを、イヤ切る氣で有ふ、〜切られう切つて貰ふ一寸切たら一尺の竹鋸で挽返すサア切て見よつて見よま指付け突付けもがき取らん〜せせり合ふ中思はず舅の耳の根すつかりヤレ人殺しよ親殺しよ呼る聲に折よくも祇園ばやしのたいこかれ、九郎兵衛は殺す氣もないに因果と舅の大聲切つた〜ご人寄せの聲を留んと又きつぶり。あたりほそりを見廻してうる付中につかみ

付横にはらへば又すつぱり人はこぬかま氣もそゆる松の内行く提灯のあかりがいやさにごつきりの音ははやしに紛れても紛れぬ命のおわり際うんと返れば是非なくも取つておさへてまゝめの及ぐつささしこむ其内に間ぢかく聞へる御興の太鼓死骸を池へ投込〜血汐を流すはねつるべくむ水則三途八難我身にかゝる罪さむをあらひ落せごにこり井の水より清き夏神樂ちやうさよふさの御興の像は幸ひに紛れ込還出たる千歳樂萬歳樂や極樂橋命のせさの札の辻八丁目へこそ紛れ行く。



十種香の段

越名改メ

人形

| | | | | | | | | | | |
|-------|------|-------|-------|-------|-------|------|------|------|------|--------|
| 上杉謙信 | 原小文治 | 武田勝頼 | 濡衣 | 白須賀六郎 | 八重垣姫 | 野澤吉貞 | 野澤吉芳 | 野澤吉左 | 野澤吉彌 | 竹本南部太夫 |
| 吉田玉治郎 | 吉田文作 | 吉田扇太郎 | 吉田小兵吉 | 吉田光之助 | 桐竹紋十郎 | 野澤吉貞 | 野澤吉芳 | 野澤吉左 | 野澤吉彌 | 竹本南部太夫 |

第四 本朝廿四孝

十種香の段
狐火の段

この淨瑠璃は武田上杉兩家の確執に齋藤道三の謀叛を取合せたるにて『信州川中島合戦』『三軍桔梗く原』等を藍本として更に趣向を立て技巧を凝らしたるものにて近松半二、竹本三郎兵衛、三好松洛等の合作で演ば明和三年正月興行の竹本座。十種香の段より狐火迄は四段目の切でこの段に織込まれたるところを申ますと、上杉武田兩家和睦の爲て義晴の後室手羽女御前が勝頼と八重垣姫とを許嫁とさせます。大切には道三が滅亡し、勝頼八重垣は芽出度夫婦になるのです。十種香の場

勝頼は實の勝頼で先に切腹したのは花造りの簀作であつたのです。仍ち其處に取替子の面白さが湧いて來るのです。濡衣は簀作と通じてゐました。濡衣は齋藤道三の娘であります。道三は菊造りの關兵衛で上杉へ忍び勝頼も亦花作りになつて上杉へ忍び入つてゐたものです。狐火の氷渡りの事は支那西湖の故事であるのを諷訪湖へ持て來たものであります。

(床本) 十種香の段より狐火まで

行水の流る人々の裳作が、姿見かけす長上下、悠々として一間を立出で、詞我民間に育ち、人に面を見知られぬを幸ひに、花作りになつて入込みしは、幼君の御身の上に、若過ちやあらんか、餘所ながら守護する某

それと悟つてか、へしや、ハテ合點の行かぬささしうつむき、思案にふさがる一ト間には、館の娘八重垣姫許嫁ある勝頼の、切腹ありし其日より。一ト間所に引籠り、床に繪姿かけまくも、御経讀誦の鈴の音、こなたも同じ松虫の、鳴く音に袖も濡衣が、今日命日の、甲ひの位牌に向ひ手を合せ、詞廣い世界に誰あつて、お前の忌日命日を、甲ふ人も情なや父御の悪事も露知らず、お果なされたお心を、思ひ出す程おいそしい、嗚や未來ば迷ふてござらう、女房の濡衣む、心ばかりの此手向、千部萬部のお經でぞ、思うて成佛して下さいせ、南無阿彌陀佛くく。誠に今日ば霜月廿日、我身替りに相果し勝頼も命日、暮行く月日も一年餘り

南無、幽靈出離生死頓生菩提、詞申し勝頼様、親と親との許嫁、在りし様子を聞くよりも、嫁入する日を待兼ねて、お前の姿を繪に書かし、見れば見る程美しい、こんな殿御と添臥しの、身は姫御前の果報でぞ、月にも花にも樂しみば、繪像の傍で十種香の、煙も香花となりたるか、回向せうとてお姿を、繪にはかゝしはせぬものを、たましひかへす反魂香名畫の力もあるならば、可愛さたつた一ト言の、お聲が聞きたい聞きたいと、繪像の傍に身を打ふし、流涕りがれ見え給ふ、詞あの泣き聲は八重垣姫よな、我名を呼びし勝頼を、誠の夫と思ひ込み、甲ふ姫と甲ふ濡衣、不慙さともいちらしとも、云はん方なき二人が心さ、そいゝる涙にくれ

けるが、詞ア、我なむら不覺の涙さ襟かき合せ立上る、後にしよんぼり濡衣む、詞申し裝作様、合點のゆかぬばあなたのお姿、ごうした事で此やうに。オ、不審尤、はからずも謙信に、かゝへられたる衣服大小。テモ扱も、衣紋付きなら上下の召様まで、似たさばおるか矢張其まゝ、かたみこそ今は仇なれこれなくば、忘るゝ事もありなんこ、讀みしは別れを悲しむ歌、かたみさへごやに我夫に、みちん變らぬ此お姿、見るにつけても忘れぬ、詞私や輪廻に、迷ふたそうな、御ゆるされてさ伏沈む、泣聲もれて一間には、不審立聞く八重垣姫、そつと襖の隙間もる、姿見紛ふ方もなく、ヤア我妻か勝頼様と飛立つ心を押沈め、正しうお果

なされしもの 似たと思ふは心の迷
繪像の手前も恥しと、立戻つて手を
合せ、御経讀誦の鈴の音。勝頼公は
濡衣が心を察して聲曇り、詞はかな
き女の心から、歎くは理り去りなが
ら、定めなき世と諦めよと、諫むる
詞こなたには、心空なる其人の、若
やながらへおはすかこ、思へば戀し
くなつかしく、又覗いては繪姿に、
見比べるほご生寫、似はせて矢張り
ほん／＼の、勝頼様ぢやないかいの
と、思はず一ト間を走り出で、續り
付いて泣給へば、はつと思へごさあ
らぬ風情、詞こは思ひ寄さる御仰せ
我等糞作と申す花作、漸々只今召し
かへられ、衣服大小改めし新参者
勝頼は覺えなし、御龐相あるなご
突放せば、詞ム、何と云やる、今父

上にかへられし新参者、花作の糞
作さや、自さした事が、餘りよう
似た面ざしの、もしやそれかご心の
煩惱、二人の手前恥しなむら、詞コ
レ濡衣、此糞作さやら云ふ人を、そ
なたは疾うから近付きか。エイ。い
やいの、知る人であらうかの。アノ
お姫様さした事が、たつた今見えた
お人、なんのまあ私ガ。イヤ隠し
やんな今の素振、忍ぶ戀路さいふや
うな、可愛らしい仲かいのこ、思ひ
もやらぬ詞に悔り、詞オ、お姫様の
仰有る事わいの、人にこそよれ、な
んのあなたに勿体ないご云やるから
は、ごうでもそなたのしるべの人か
イ、エ、さうではなけれ共、大事の
お主の目をかすめ、忍び男を拵へる
は勿体ないご申す事で御在ります。

ム、すりやしるべの人でなく、殿御
でもない人なら、ごうぞ今から自
を、可愛がつてたもる様、押付なむ
ら媒を、頼むは濡衣さま／＼と、
夕日まげゆく顔に袖、あでやかなり
し其風情、詞オ、お姫様さした事
まだお子達ご思ひの外、大それたあ
の糞作殿を。サア見染めたが戀路の
始め、後さも云はす今爰で、媒せ
いと仰有るのか。我折れ、ほんに大
名のお姫御とて、油断はならぬ戀の
みち、品によつたらお取持ちいたし
ませうか。コレ／＼濡衣、必らず塵
相云ふまいぞ。サア何もかも私ガ吞
込んで、ナ、吞込んでお取持すまい
物でもないが、眞實底から糞作殿に
御執心でござりますか、ご問はれて
猶もあからむ顔。勤する身はいざし

らず、姫御前のあられもない、殿御に惚れたま云ふ事が、嘘、偽に云はれうか、詞其お詞に違ひなくば、何ぞ適な誓紙の證據、それ見た上でお媒。オ、それこそ心易い事、其の誓紙さへ書いたらば、詞イエ／＼夫もこつちに望むある私か望む誓紙と云ふは、諏訪法性の御兜、それが盗んで貰ひたい。ヤア何と云やる、諏訪法性の御兜を、盗み出せと云やるのは、扱てはあなたが勝頼様、と云ふ口押へて、詞ハテ滅相な勝頼呼ばはり、みちん覺のない装作、産惚ばしのためふなと、云ふ顔つれ／＼打守り。許嫁計りにて枕交さぬ妹眷中、おつみあるは無理なられど、同じ羽色の鳥つばき、人目にそれと分られど、親と呼び又つま鳥と呼ぶ

は、生あるならひぞや、いかにお顔が似ればとて、戀しと思ふ勝頼様、そも見紛うてあられうか、世にも人にも忍ぶなる、御身の上と云乍ら、連添ふ私に何遠慮、つかう／＼と御身の上、明して得心さしてたべ、それも叶はぬ事ならば、いつそ殺して／＼と、縋り付いたる恨み泣き、勝頼わざと聲あら／＼げ、詞ヤア聞きわけなきたばふれ事、いかほどにのたまふとも、覺えなき身は下司下郎餘所の見る目もはかりあり、そこ退給へと突放せば、詞スリヤ何の様に申しても、勝頼様ではおはさぬかハア、はつこばかりに装作が、差添逆手に取給へば、こは御短慮と止むる濡衣、詞イヤ／＼放して殺してたも、勝頼様でもない人に、戯れ事

の恥かしや、心の穢れ繪像へ言譯、ごうも生きては居られぬと、又取直すを猶も押留め、詞オ、遠は武家のお姫様天晴なるお志、其お心見からば、勝頼様に逢はせませう。ソレ、そこにござる装作様も、御推量に違はず、あれが誠の勝頼様、ちやとおあひなされませと、突やられてはさすがにも、始の恨み百分一、聞えませぬが精一ばい、後は互に抱付き、つい濡初に、濡衣も心どきつき折柄に、父謙信の聲として、詞装作は何れに居る。搦尻への返答、時刻移ると立出れば、はつこ装作飛しさり、詞御支度よくば直様參上ホ、委細の事は此の文箱に、返事も早く罷越せ、はつこ領掌文箱携へ、搦尻さして急ぎ行く。謙信後を見送つて

詞ヤア／＼者共、用意よくば早來れ
と、仰せにはつご白須賀六郎、原小
文治、更科なんごの譜代の郎黨、御
前にすゝめば謙信勇んで詞今此諏訪
の湖に、氷閉れば渡海は叶はず、
搦尻迄は陸路の切所、油斷して不覺
を取るな、ハア畏り奉るご、勇
み進んでかけりゆく。
後に不審ば八重垣姫、申し父上、こ
ご／＼しい今の有様、何事やらんご
尋れば。詞ホ、あれこそは、武田勝
頼討手の人数、何に勝頼様を討手ご
は、コハそもいかに何故ぞ驚く二人
をはつたご暇め付、訪敵法性の兜を
盗み出さんうねらが巧み、物かげに
て聞いたる故、勝頼に使者を云付け
歸りを待つて討取さんご、都合はせ
る討手の手配エイそんなら今の討手

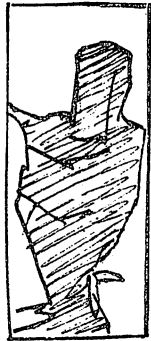
の者は、勝頼様を殺さん爲か、ハア
はつごばかりにござ伏し今日は如
何なる事なれば、過ぎ去り給ひし我
夫に再び逢ふは優曇華と、悦んで居
たものを、又も別れになる事は、何
の因果ぞ情けなや、父のお慈悲にお
命を、ごうぞ助けて給はれご、口説
き歎くに目もやらず、詞ヤア武田方
の廻し者、憎き女ご濡衣引たてうぬ
には尋れる仔細あり、奥へ失せうご
小腕ごり、情用捨もわら氣の大將、
帳臺深く入り給ふ。思ひにや、焦れ
てもゆる、野邊の狐火小夜ふけて、
狐火や、狐火野邊の野邊の、狐火さ
よふけて、幾重もれくる爪音は、君
をもうけの奥御殿、こなたは正体涙
ながら、詞アレ／＼奥の間で檢校が
諷ふ唱歌も今身の上、おいさしいは

勝頼様かゝる巧みのあるごごも、知
らずばかりぬ御身の上、別れごなる
もつれない父上諫めても、歎いても
聞入れもなき胸愆人、娘不惑ご思は
すならお命助けて添はせてたべご、
身を打伏して歎きしが、詞イヤ／＼
泣いてゐられぬ所、追手の者より先
へ廻り勝頼様に此事を、お知らせ申
すか近道の、訪敵の湖船人に渡り
頼まん急がんと、小襦取手も甲斐
／＼しく、かけ出せしが、イヤ／＼
／＼、詞今湖に氷張詰め、船の往
來も叶はぬよし、歩路をいては女の
足、なんご追手に追つかれう、知ら
すにも知らされず、みす／＼夫を見
殺しにするは、いかなる身の因果、
詞ア、翅がほしい、羽がほしい。こ
んで行きたい知らせたい逢ひたい見

たいと夫戀ひの千々に亂るゝ憂き思ひ、千年百年泣きあかし、涙に命絶ゆればさて、夫の爲にはよもなるまじ。此上頼むは神佛と、床に祭りし法性の兜の前に手をつかへ、詞此御兜は諏訪大明神より武田家へ、授け給はる御寶なれば、取も直さず諏訪の御神、勝頼様の今の御難儀、助け給へすくひ給へと、兜を取て押頂き押頂きし佛の、もしやは人の咎んと窺ひ下りる飛石傳ひ、庭の溜の泉水に、うつる月影怪しき姿、はつこ驚き飛退しが、詞今のは慥に狐の姿此泉水に寫りしはハテめんようなきとぎつく胸を撫でおろしく、こはく／＼ながらそろ／＼と、さしのぞく池水に寫るは己も影ばかり、詞たつた今此水に寫つた影は狐の姿、今又

見れば我が佛、幻と云ふ物か、但し迷ひの空目とやらかハテ、怪しやとつおいつ、兜をそつと手に捧げ覗けば又も白狐の形、水にあり／＼有明月、不思議に胸もにこり江の池の汀にすつくりと、詠め入つて立ちたりしが、詞誠や當國諏訪明神は、狐をもつてつかかばしめと聞つるが、明神の神体に等しき兜なれば、八百八狐つき添ひて、守護する奇瑞に疑なし、合カイそれよ思ひ出したり、湖に氷張詰むれば、渡り初する神の狐其足跡を知邊にて、心安う行きこう人塲、狐渡らぬ其先に渡れば、水に溺るこは、人も知つたる諏訪の湖たこへ狐は渡らすこも、夫を思ふ念力に神の力の加はる兜、勝頼様に返へせとある、諏訪明神の御教へ

ハア、忝や有難やと、兜を取つて頭にかつげば、合念ち姿狐火のこゝにも燃へ立ち合かしこにも合亂るゝ姿は法性の、兜を守護する不思議の有様、こなたの間には手嬭女御前、始終の様子窺ふ共、いざしら菊の花番小屋にさつくと關兵衛が、つけまはしても神通力、花のまに／＼見えつ隠れつ神さる狐、南無三寶とせき立つ關兵衛、ねらひの的は手嬭女御前、どつさりひやく鐵砲の、音を相圖に遠近より、俄に響く鐘太鼓亂調に打ち立てば、騒かぬ關兵衛廣庭に仁王立、ほごなく馳來る雜兵輩、我討取らんさひしめいたり、詞ヤしほらしき有財餓鬼、此世の暇さらさんさ、だんびらするりも抜放し、あたる任せになぎ立て／＼御殿をさして三重門追て行く。



第五 伊達娘戀緋鹿子

八百屋お七火の見櫓の段

お七火の見櫓の段

竹本源路太夫
鶴澤友衛門

人形

娘 お 武 兵 七 吉田文五郎
杉 衛 桐 竹 門 造
作 桐 竹 紋 太 郎
吉田榮三郎

この淨瑠璃は「潤色江戸紫」を改作して安永二年四月北堀江座に上演されたのが初演で作者は菅専助、松田和吉、若竹笛躬でこの段は六段目の切になつてゐるこの内容を申し上げます。吉三郎も殉死をせねばならぬので豫て契りを結んである八百屋お七の許に赴きそれなぐ別れを告げよふとして行く八百屋ではお七に戀慕してゐる武兵衛から少からの借金をしてゐるのでお七

に因果を含めて無理に武兵衛と夫婦になれと強要します。椽の下へ忍んでゐた吉三郎はこれを聞いてゐて書置を破して出て行きます。後でお七は悔りしたが天國の劔は武兵衛が所持してゐるので策を以てこれを奪ひ吉三郎の命を救ふために、お松も吉三郎の許へ届けやうとしますが夜中町には木戸が閉つてゐますので、お七は罪を覺悟で火の見櫓に登つて半鐘を鳴らし火事を偽つて木戸を開かせるといふ筈でこの火の見櫓の場のお七の人形は吉田文五郎が絶品としてゐるところであります。

(床本) 八百屋お七火の見櫓の段
跡にお七は心も空、廿三夜の月出ぬ中、体は爰に魂は、奥に表に目配り、餘所の歎きも白雪に、冴え行く

遠寺の鐘かうく、響き渡れば詞ヤ
 ア彼鐘は早九つ、夜中限りに江戸の
 門々を締めては、大切な用ある人も
 往來ならぬ厭しいお觸れ、假令劔か
 て手に入つても今夜中に届ける事か叶
 ばれば、吉三様は矢張切腹。ハア悲
 しや是りや何とせう如何せうと立つ
 たり居たり氣はそやる、更け行く空
 の怨しく、鐘鳴る方を睨み付け、拳
 を握り齒をかみしめ、只うつさりに
 立つたりしが、ふつと氣の付く表の
 火の見。チ、然うじや、アノ火の見
 の半鐘を打てば、出火と心得、町々
 の門を開くは定、思ひのまゝに劔を
 届け、夫の命助けいで置かうか。鐘
 を打つたる此身の科、町々小路を引
 渡され、焼殺されても男故、少しも
 厭はぬ大事無い、思ふ男に別れては

所詮生きては居ぬ体、炭にもなれ灰
 さもなれど、女心の一筋に、帯引締
 めて裾引上げ、表に駈け出で、四辻
 に咎むる人も嵐に凍て、雪は凍りて
 踏滑る、合橋子は即ち劔の山、登る
 心は三惡道の通ひ道、杉は難無く奥
 の間より、劔を盗んで逃げ来る跡。
 ヤイ大盗人めと駈來る武兵衛、引抱
 へて抜き取る劔、遣らしじと縮るを踏
 飛ばす、ごつこい然うはと取付く彌
 作。是や何ひるごと太左衛門、引擦
 りつくるその手を直ぐに、腕搦みに
 こりや〜〜、彼處は見下す雪の
 屋根、其儘三途の瓦葺、睨む地獄の
 鬼瓦、追立て責むる身の因果、廻り
 くる〜〜〜、下には四人が
 挑む中、お七は難無く火の見の上、
 撞木追取りちやん〜、音より

間も無く爰彼處、一度に打出す警鐘
 の、響きに連れて開く門々、嫌はれ
 た意趣暗し、引縛つて訴人するさ、
 お杉を蹴飛ばし上り來る、櫓子を下
 より打返せば、武兵衛は大地へ眞逆
 様、持つたる脇差取落すを、杉は追
 取り吉三が方、駈け行く跡を追掛け
 る、太左が首筋はばいなさ、擔いで
 投げ込む用水樋、腰骨折つて蠢く武
 兵衛、お七も飛んで遠近の、人の噂
 と三重なりにけり。



明石浦舟別れの段

阿曾次郎 豊竹つげめ太夫

深雪 野澤勝市

船頭 竹本南部太夫

人形 豊澤新之助

宮城阿曾次郎 桐竹政龜
 娘深雪 吉田文五郎
 船頭 大ぜい

島田驛宿屋笑薬の段

中

豊竹辰太郎 竹澤清二太夫
 鶴本陸路太夫 竹澤叶大郎

山田案山子作

生寫朝顔話

明石の浦船別れより

宿屋、大井川まで

此の曲は山田案山子の戯號で近松徳叟が熊澤蕃山の作を傳へられてゐる。「露の干ね間」なる朝顔の小唄を原に想を構え「生寫朝顔日記」と題して竹本重太夫のために書卸したのであつた。上演に致らずして文化七年八月病歿した。それを翌年近松柳が「徳叟遺稿朝顔日記」として讀本に刊行した。非常に評判になつたので天保三年耶麻田加々子と云ふ原作者に擬らはしい人が添作して、大内館、松原、宇治川、茶店、岡崎、明石船別、弓之助屋敷、大磯揚屋、

小瀬川、麻耶ヶ嶽、濱松、島田宿、駒澤閑居、山岡屋敷、多々羅濱の五冊十五段の淨瑠璃に仕組んだ。この際の外題は原作のまゝ、「生寫朝顔日記」であつたが、嘉永三年正月上演の際翠松園と云ふ人が竹本重太夫の遣子鶴澤才三、同儀左衛門等と計つて添補潤色し、外題の六文字は縁起が悪いと云ふので、「増補生寫朝顔話」と七字に改題した。それ故に今日流布してゐる正本は此の嘉永三年刊行のものが多い。この曲の筋は、秋月弓之助と云ふ九州邊の國家老の娘深雪が、京都在任中、宇治の盤狩で宮城阿曾次郎と云ふ美男の若侍と契を結び歡樂の幾日かを過す中に秋月一家は急に本國に引上ぐる事となり、深雪と阿曾次郎は明石の浦で

次 豊竹駒太夫
鶴澤重造

奥座敷より大井川の段

切 豊竹古靱太夫
鶴澤清六
琴野澤勝芳

人形

- 一、駒澤治郎左衛門 桐竹 政龜
- 一、岩代多喜太 吉田 玉幸
- 一、朝 顔 吉田文五郎
- 一、戎屋徳右衛門 吉田山兵吉
- 一、萩野祐仙 吉田扇太郎
- 一、手代松兵衛 吉田文之助
- 一、笹久藏 吉田 玉松
- 一、奴關助 吉田 玉市
- 一、下女お鍋 吉田覺三郎
- 一、川越 大ざい

本意ない別れを惜む。その際深雪は朝顔の唱歌を記した扇を後日の筐に阿曾次郎の船に投入して纜を解いた。その後阿曾次郎は仕官し駒澤次郎左衛門を改めて江戸へ出立する。一方歸國した深雪は男の事を忘れかれ本國を出奔して、都へ上ると男は去つたので、その行衛を追ふ中盲目となる駒澤となつた阿曾次郎は同役の岩代と共に東海道を下り、島田宿の戎屋で偶然盲目妾の深雪に邂逅したが、それと明さず出立する。後で知つた深雪は直ぐに其後を追つたが一足違ひで大井川は豪雨で川止まなつたので、失望の結果入水して果てやうとした時、戎屋の亭主と下部の關助が駈けつけて助け、戎屋の亭主は深雪が祖父の家臣と云ふ事が解り、駒澤

が惠んだ眼薬は甲子生れの人間の生血で調劑すれば癒えること云ふので、甲子生れの亭主が切腹して、それが爲めに深雪の眼が開くと云ふ内容であります。名匠古靱太夫が此度初役でこの宿屋の切をつとめます。當代の考證家で一倍研究心の燃えてゐる古靱太夫が院本によつて熱心に苦心した舞臺です。

明石浦船別れの段 (床本)

M 和田海の浪の面に月影も明石の浦の泊り船風待つ程のつれづれを慰めかれて阿曾次郎船先に立出月かげに四方を見晴らす氣げらしの煙草の煙吹きなびく船路の旅ぞものさびし傍にかかりし大船は秋月弓之助が歸國の乗船乗人も水夫も船草臥前後も知ぬ高舳娘 深雪は只一人目さへ

も合はぬ戀人を思ひこがれてうつうつと戀に心を筑紫琴せめて慰むよすがもさかきならしたる糸しらへ露のひぬ間の朝顔に照す日かげのつれなきにテ合點の行かぬアノ調は過つる宇治の螢狩に秋月の娘深雪が扇に、
某が書てあたへし朝顔の唱歌聲さへ深雪に生寫し、ハテいぶかしさよ
と見上ぐればあなたも見下す月かげに顔はまさしく深雪殿ではないか、
ヤア阿曾次郎様逢たかつたぞ我を忘れて乗移るを抱きこつて口に手を當てハテ聲が高い深雪殿思ひもよらぬ
今の對面何ゆへに此所に、さればいな宇治でお別れ申てよりも片時忘れず泣きくらす内國元に騒動起り父母共に俄の旅立所詮逢事叶はぬか、何ぼう悲しう思ふたに爰で逢たはつき

せぬ縁ごふぞ此身を何國へこつれて退いて賜はれさびつたりいだき月の夜の影も隔てぬ比翼鳥放れがたなき風情なり。阿曾次郎も心を察しチ、嬉しいそなたの志忘れは置かぬさりながらそなたを今つれ退いては某が武士道立す殊に此度伯父の頼みにて遁れぬ主用猶もつて女を同道しがたき入譯有縁ならば添時節も有ふ斯して居ては人のさかめサアちやつと元の船へ乗つてたもエ、そりや聞へませぬ阿曾次郎様添れる時節も有ふこは當座遁れの捨詞お氣に入らずば打明けて包ますそれと言つてたべもしもおまへにそふ事のならぬ時には淵川へ此身を投て死ます。ふたゝび外の夫迎へせぬを誓ひし身のけつばくさらばと斗り水底へ既に飛込んこ

立上るを、あはて驚き抱き留、コレ待た早まるまいイエノ放して殺して下さんせ、ア、是非もなしそれ程迄思ひ詰めた娘心、見殺しにマゴふせられふ不義いたづらと世の人の口そしらばそれつれて退くゴレ盡未來迄女房ぞやエ、嬉しふござんす
忝いそんなられむひを叶へて下さんすかチ、武士の詞に二言はない去ながら此まにつれて退ば親達のもしや海川へも身をなげたかとお歎きあらんば定の物委しい様子を一つ筆。チ、よふいふてくださんしたわたくしもそふ思ふてあますがごふぞ料紙をかして下さんせチ、心得しと懐紙腰をすぐつて南無三寶そなたを抱留る拍子海へ何やら落せし水音旅矢立をはめてのけたマ、ごうした

らよからふぞチイそれなら待て下さんせ二親はじめ伴々まで旅草臥の寢入ばなそつこ元船へいんで一筆書置してきませうチイそれよからふがコレかならず物音させて親達の目も覺めぬよふ心得ましたと立上れば阿曾次郎は肩車あなただの船へ乗うつらす音に目さます船頭共チイ地嵐が吹出した碇をあげよ帆を巻けと騒ぎ出せばなふ悲しやとあせる内船は次第にさふさがるコハなにさせんかさせんさせせるはづみに阿曾次郎が船へ投込扇のわかれ後しら浜を隔ての船つなむね縁ぞ是非もなき。

(床本) 笑薬の段 (前)

M 行空の雲の足より雲助が足並早き東海道傳馬人足歩荷物吸付けて行たばこさへ五十三次打續く中に取分け

賑はしくおじやれが髪も嶋田の宿所名うての内證よし名さへ戎屋徳右衛門、老舗も廣き十間間口店は買札講印かけ渡ししたる緩簾も風にひらめき吹付る、繁昌たぐびなかりけり、せはしき中にもおじやれ共同がな油さ寄り譽りナントお鍋ごん此頃旦那さんの世話にさしやんす朝顔と言目くらアリアマア惜い器量じやないかいの併しこちの旦那様が身に引替への深切はごうやらくさいものじやぞやチイ何のいふ何ほこま付ても提灯で餅埒の明かぬ事ぢやはいのや夫ればそふとお泊りのお侍様一人のお方は意地の悪そふな顔付も一人のお方はア、能い男じやわしやアノお侍様には真からそこらほの字チハ、れの字お茶よたばこ盆よこ氣

を付て持て幾度持前の貝焼すへ膳したさじやにそしらぬ顔の其しんきさはがほんのあわびの貝の片思ひノウ小ましごの何さそふではないかいのこ一つに寄るご男沙汰下女の習ひぞかしましきのれん押上手代の松兵衛立出てヨット聞たぞんくコリヤお鍋其様に廻り遠ひすへ膳よりちよつこ手をかしてや、アレ又松兵衛殿いやらしいそんな事はこちやきらいじやわいの何じやきらいじや其又きらいな者が貝やきじやの鮑の貝の片思ひのこなげいふたそれのみならず親方の悪口までアノ朝顔に氣が有はのイヤ提灯で餅じやのこ口から出次第よふ言ふたな旦那へ此通り告るぞよ、ア、コレめつそふな松兵衛殿そんな事告てよいものかいのふイヤ、告

る／＼告てこますぞ何ぞそこ物も相談じやイヤコレお鍋旦那へ告るかいやならば松兵衛山の松茸其片思ひの鮎を焚出しにしてくるなら何もかも沙汰なしにすますぢふじやん／＼さしなだるれば勝手口より徳右衛門此体見るより立出てチ／＼コリヤ女子供又しても／＼小影へよるこわつけもない松兵衛も嗜め／＼や、それはそふ朝顔はまだ来ぬそふな來たらばちよつこしらしやイヤナニ松兵衛奥のお客様は大内様の御家中明七ツのお立なれば家具も取かへ手廻し仕ておきや女子供も合點がドリヤ奥へいて窺ふ松兵衛おじやと徳右衛門人を遣へば後先に心を奥の座敷へと手代引連れ入にけり。かゝる折ふし奥の間より立出る萩の祐仙イヤ

コレ女中奥のお客は武家方そふな印の紋は大内桐定めて山口の家中衆ならん名は何と言ますぞハイたしが大内御近習駒澤様今お一人は岩代様とやら聞きましたム、成程そふで有ふイヤ大儀ながらこなた衆は奥へいて岩代様に萩の祐仙と申者チト内々に御目にかゝりたひさ言てくれまいか、ハイ／＼それはお安い御用ドレ呼まして上ませふと二人は立て入にけり。斯ぞ知らせに岩代多喜太一間の内より立出れば夫と見るより頭を下コレハ／＼岩代様先づもつて御健勝で、チ／＼コリヤ珍らしい萩の祐仙某に逢たいとハいか成事サレバ／＼先達ての御状には新參の駒澤が諫言にて殿には御本心になられ運八殿の最期よし則ち玄蕃様より此御

状と渡せば受取一見しチ、大儀／＼身共とて何かに付けて邪魔に成ば駒澤め何卒密に害せんさきのふ街道にて笹久藏といへる浪人を連歸り委細の工み申付早速奥の下家へ忍ばせ置たやそれは味し／＼が、もしも其手ていかぬ時には下拙手製のコレ此しびれ薬薄茶にまぜて吞す時は一夜の間は死人同全ム、夫れこそ、幸、屈竟併し小しやく者の駒澤め心見なくては食ふまいナツト其氣遣ひは無用々々コレ此丸薬は、則下薬是を先へ吞置けば少しも酔はざる大妙薬時に岩代様申さぬ事は聞へませぬが首尾よふ參れば御褒美をづしりさいたゞきと御座りますわいチ／＼サ／＼夫れにぬかりが有物が事成就の其上はいつかどの褒美なれ共是は先づ當座

の印を懐中より金一包差出せば押いたゞきコレハ忝かたじけなくいして駒澤こまざはめは何れの間にチ、サかれは先刻公用につき村役人方へうせられたればナソレ此間に件の妙薬某は奥の間にて山岡殿へ書面をしたゝめん其方も手つがひ致して後より來やれ祐仙すけせんと詞ことばつこふて立上り岸に曲れる岩代は一間へ

(床本) 笑薬の段 (奥)

M 後に祐仙獨り笑味わらじひぞく富座とみざの褒美ほびが先拾兩さらば是から薬のしかけさ言ひつく傍り見廻して件の薬を湯の中へそつこほり込蓋ふたびつしやり斯しかして置いて駒澤こまざはが戻り次第しだいにふり立て我等が先へ腹加減解薬くわいげんかいやくの力ちからでしらすし入駒澤こまざはめは忽たちまちにぐにやぐ

其處へ奥よりいきせき下女お鍋、申まをく奥のお客様きやくさまがお待ち兼かみ早はやふくこせり立る聲こゑに悔いづり祐仙すけせんはそしらぬ顔かほでエヘン奥へ入る始終しじゆう窺うかがふ徳右衛門とくゑもんそつこ立出後打ながめ最前さいぜんから聞きて居れば何やら怪あやしいアノ藥駒澤こまざは様へ申上まをふかイヤく夫それでは却かえつて當あたり障さはりハアごふそよい思案しあんが有ありそふなものぢやチソレヨ昨日松原きのふまつはらで買かて置おいた笑わらひ藥此湯このゆをかへてチそふじやぐ斯しかして置おてまさかの時ときはチツトよしくこ心こゝろでうなづき徳右衛門とくゑもん勝手かたてへこそは入いりけり。早夕暮はやゆぐりのいそがしく膳部ぜんぶの運はこび寢道具ね道具を間ま毎まいくくに燈ともす灯あかりのきらをかざりて駒澤こまざは治郎左衛門ぢらうざゑもん春高旅はるたかたび中なかながらも武士ぶしの行儀ぎよぎくづさぬ羽織袴はおりはかま家來けらい引連立ひきつれたち歸かへる。待まちもうけたる岩代多喜太いはしたきた一間いっかんの

内うちよりのさばり出いでヤコレハ駒澤こまざは氏うぢお早はやいお歸かへりシテ要用しやうようは相濟あひあみましたかいかにも殿様御歸國どのさまごこくきり觸ふれの手筈てはづ庄屋代官ぢやうやしろだいかんに申付まをす思おもはぬ障さや入いらぬお待兼まちかみねナノく旅たびくたびれもおいさひなく宿々しゆくしゆくのかけ引ひイヤモ御苦勞ごくるらうに存ぞんじまする。エ拙ぢやちやも何なにがなぞ存ぞんずる所ところへ國元くにもとにて昵懇ねいこんの醫者いしや秋あきの祐仙すけせんと申まをすもの當宿あつしゆくに泊とどり合せ先刻せんこく斗たらす對面たいめん致いたせしにこやつ殊ことの外ほか茶好ちやこうみにて道中みちちゆうにても茶箱ちやせうを持もち參まゐり相樂あひたのしみおるこの事貴殿こときみにもお好きおすきの道何みちなんも一腹いぶく呑のんでおやり下くだされまいかヤそれそれは風流ふうりゆうなる心こゝろかけしかし我われも人も旅草りよぐさ臥所ふしど望致ぼうぢすも何なにもやらテ扱さいらぬ御遠慮ごえんりょ薄茶はくちや一腹いぶく所望しよぼう致いたせばさて彼かれも好このの道みちでござれば何なんの草臥くたけをいさひませふひらに一腹いぶくおつき合あひ下くだされ

いとおのが工みの押付薬無理にすゝむる其内に時分はよしと萩の祐仙茶箱携へ心に笑みわざこゝぼけて手をつかへ、コレハコレハ岩代様先程は誠に失禮してあなた様はチーサ其節お噂申した駒澤氏イヤモ文學武藝は云ふに及ばず何一つ抜目ばなけれど生付御遠慮深いお人され共元より茶の道には御熱心ヤ幸是に湯もたぎり有ナソレ薄茶一腹サ所望だコレハ中々あなた方へ上ます様な茶ではござりませぬぞ御所望は身の面目苦しからずば何腹成さ召上られ下されふも追従たら立ち上り茶箱取出し毒薬の工みの裏流かこれ共しらぬ手前のしかつべらしく振立て差出せば岩代は詞を正しイヤ駒澤氏お取次所へヤレ先々暫くミ徳右

衛門恐れながらミ座敷に出障りながら旦那様もいかしい申事ながら譜代お出入りの殿様の御家來たるあなた方私方で煮焚のものば此度に限らず吟味に吟味を致した上差上ませれば千に一つ齋相がござりましては此徳右衛門めが越度泊り合したあなたのお茶サ御如才の有ふ様はなけれ共めつたにはナ申さ目顔で知せば岩代多喜太ヤアいらざるうぬむさし出身が入魂の萩の祐仙茶に毒薬でも仕込有り疑ふての申條かアイヤ全く左様ではござりませぬぞム然らば何故差留た駒澤殿の手前云ひサ今一言言つて見よ眞二つに打放すきつば廻せば祐仙押留アイヤ先々お待下されませエ貴公様の御立腹は御尤なれど徳右衛門の申所も

又一理有ヤ斯致そ下拙が毒見仕り其上にて駒澤様へさし上ませふ何ぞ徳右衛門それで言分は有まいなイヤモ御自分にお毒見なさるゝ程體な事はござりませぬチーそふ有ふく其替り何事もない時は其分では濟さぬが合點じやのヤモ夫れは是非に及びませぬ御存分に成ませふムい、ヤ面白くきつと詞をつがふたぞよドレ毒味を茶碗取上そつと解薬を先へ吞さあらぬ体にて件の薄茶雫も残さず吞下して徳右衛門ちよつあれハサ見たか徳右衛門此通りじやサ是でも別條が有か徳右衛門ごふだハイヤモ私こそ眞平御免下さりませふ何じや御免下さりませふくも氣が強ひはいヤイ徳右衛門戎屋徳右衛門サマゑび徳奴サ約束じや

げこそそれ共得言すむしやくしや腹席
を蹴立て廊下口後に心を奥の間の我
座敷へも駒澤も座を立てこそ入にけ
る。

(床本) 宿屋の段より大井

川の段まで

M 何國にも、暫しは旅さ綴りけん
昔の人の筆の跡、徒然侘ぶる假の宿
夜の襖の透洩りて、風に瞬く燈火の
影も淋しき奥の間へ、立歸る治郎左
衛門。何心なく座を占めて、不圖目
に付く鶴立の、張交の歌讀下し。詞
テ心得ぬ、此の貼交の地紙の歌は
先年山城の宇治にて、秋月が娘深雪
が扇に某も、又逢ふまでの筈にぞ、
書いて與へし朝顔の歌。其後圖らず
明石にて、船繋りせし其砌、琴に合
はして深雪が節付け、折節思はぬ互

の出船、飽かぬ別れを悲しみて、女
の手づから、我船へ投込みし此扇。
然るに今又此家にて、思はずも此張
交ぜ、ア何者が諷ひ傳へて、はから
ず東の驛路に、見るも不思議と獨言
其折からの忍ばれて、詠め入つたる
時しも有れ。襖押開け徳右衛門、小
腰屈めて入り來れば、此方も扇押隠
し。詞オ、亭主、先刻は扱々きつい
働き、危き難を遁れしも、全く其方
志、サ、是へ〜。ハ、冥加に
餘る御言葉、エ、最前此方へ參る砌
何か三人密々話、合點行かす忍び
聞けば、麻痺薬を茶に交て、彼方様
へ差上げんこの、ア、コリヤ、サア
マ恐ろしい巧み、エ、憎さも憎し、
直に申上げうまは存じなれど、夫で
はどの様な科人が出來うも知れぬこ

存じ、へ、幸ひ先日慰みに求めまし
た笑ひ藥、ヤコレ幸ひも、痺れ薬も
取替へたを、知らずに呑んだ先刻の
時宜、此後とても旦那様、御油斷は
成ませぬぞへ。ホ、其儀は某も疾
く承知致した、マ夫は格別、此衛立
にある朝顔の唱歌は、何人の手跡、
何いふことかから御身が手に入りしぞ
エ、夫でござりまするか、其歌につい
てマ哀れな話。エ、元は中國邊歷々
の娘さうなが、何やら尋れる人が有
るさて、親元を家出し、夫より方々
と流浪の上、果はさう〜目を泣潰
し、跡の目までは濱松邊に、其歌を
歌ふて袖乞ひ、所に又國元から、所
縁の女子が尋れて來て逢ひました、
が其女も程無う病死、夫から又獨ほ
し、此邊まで其歌を歌ふて歩きまし

たが、何が盲目でこそあれ、器量は
 長し、聲は上し見る程の者がいぢら
 しかり、朝顔々々と言ふて、其歌を
 知らぬ者はござりませぬ。私もあま
 りの不惑さに、此宿に足を止めさせ
 いまでは宿屋宿屋の御客の伽、何さま
 ア不仕合せな者も有るものでござり
 ますと、涙片手の物語も、心に粋々
 應ゆる胸澤、若し言交せし我妻かこ
 轟く胸を押鎮め。詞ム、夫は扱哀れ
 な話、身も今宵は何さまやら物淋しい
 鬱散の爲其女を、呼寄する事はなる
 まいか。イヤモ何が扱て易い事、只
 今呼びに遣はしましよ、御魅みに琴
 か三味。ム、何分宜きに頼み入るこ
 云ふは仔細の有るぞとも、知らぬ佛
 氣徳右衛門、尻輕にこそ立つて行く
 跡へ相役岩代多喜太、のさく座

に直り。詞ヤア駒澤氏、無御退屈で
 ござらう。コレハ、岩代氏、殊の
 外お早い事でござると、上へは解け
 ても解けやらぬ、前垂掛けの下女お
 鍋、次の間に手を仕へ、詞申し、
 只今朝顔殿が見えました、是へ通し
 ましよかいな。ナニ朝顔さそりや
 何者だ。アイヤ、此道中で琴三味を
 弾き、旅の徒然を慰さむる警女さま
 ら、拙者も何か物淋しうござれば、
 ちこそ琴でも聞かふま存じ、亭主を頼
 み呼寄せましてござる。アイヤ夫や
 止めにされい。トハ又何故な。サレ
 バサ、先刻身共が知音たる萩野祐仙
 同席如何さま云はれた貴殿、乞食をば
 座敷へは通されまいかい。ハテ高の
 座敷へは通されまいかい。ハテ高の
 知れた盲目女、萬更怪しい、ナソレ
 茶箱も持參致すまいと、しつべい返

しにぎつくりと、言句に詰れば減す
 口。詞ア左程御所望ならば兎も角
 も、併し座敷へは叶はぬ、庭へ呼出
 し、琴なご三味なご、弾かし召され
 て、早く此場を追返されよと、飽ま
 で意地持つ執拗者、寄らず障らず駒
 澤が、羞圖にお鍋は心得て。詞朝顔
 殿召しまする、朝顔殿々々々呼立
 つる。むざんなるかな秋月の、浪深
 雪は身に積る、歎きの数の重りて、
 城失ふ目無鳥。杖柱も頼みてし
 浅香は腕く朝露を、消残りたる身一
 つた、遺に捨ても縁先の、飛石探る
 足元も、危なき木曾の丸木橋、渡り
 苦しき風情にて、漸々座して手を仕
 へ。詞召しましたは此お座敷でござ
 りますか、拙い調も御笑ひ種、おば
 もじ様やご會釋する、顔も深雪の成

れの果。不惑の者や急り来る、涙呑込みひかへ居る。岩代は夫さも知らず。詞ヤア見苦しい其形で、我々が目通りへうせせば、ム、聞及んだ朝顔めな、エーきりく立つて失せ居らう。アイヤく岩代氏、さうもぎさうに仰せられな、此方に呼寄せたればこそ、思ひ掛のう、アイヤ思ひ掛け無う来た者を、叱るは武士の情に非ず。コリヤく女、大儀ながら其朝顔さやらの歌、サー早う歌ふて聞かせいさ、望む心は千萬無量、知らぬ岩代頰脹し。詞扱々駒澤氏には、イヤモ強い御熱心だけい。コリヤく盲女、何なりとも、エー歌へく、サー早くく、ハイくハイ歌ひまするでござりますす、焦る、夫の在るぞとも、知らぬ盲の探り手

に、戀故心盡し琴。誰かは憂きを斗爲吟の、絲より細き指先に、指爪さへも八ッ橋の、寒れ果てたる身を啣ち、涙に曇る爪調べ。ウタツ露の干ぬ間の朝顔を、合照す日かげの難面きに、合哀れ一むら雨の、ばらくこ降れかし。詞ム、夫を慕ふ音律の、我々が身にも思ひ遣られて、思はず感涙致した、のう岩代殿。如何様、琴を謂ひ器量を謂ひ、イヤモ中く感心仕る、てイヤナニ朝顔さやらそこは定めて冷えるであらう、身ごもむ傍で今一曲、サアく所望だく、ア、イヤく岩代殿、最う許して御遣りなされい。去さては駒澤氏、身共が望みを止めさつしやるはソリヤ意地の悪いさ申すもの。イヤさうではござられど、彼女も定めて

疲れませうと存じて。ハイアヤ然らば曲は止めにして、コリヤく女、汝もはらからの非人でもあるまい、身の上話も亦一興、話して聞かせヨ如何だい。ハイく能う問うて下さります、お言葉にあまへお話し申すも耻しなから、元私ば中國生れ様子あつて上方住居、すぎし卯月の中空に、都の辰巳宇治の船、こがれよるべの螢狩に思ひそめたる戀人さ語らふ間さへ夏の夜の、短い契りの本意ない別れ、所尋ぬる便りさへ、思ふに任せぬ國の迎ひ。詞親々に誘はれ浪花の浦を船出して、身を盡したる憂思ひ、泣いて明石の風待に、偶々逢ひは逢ひながら、つれなき嵐に吹分けられ、國に歸れば父母の、詞思ひも寄らぬ夫定め、立る操を破

らじこ、屋敷を抜けて數々の、憂目を
 凌ぎ都路へ、上つて聞けば其人は
 東の旅に聞く悲しさ。又も都を迷ひ
 出で、何時かは巡り逢坂の、關路を
 あこに近江路や、美濃尾張さへ定め
 なく、戀しく目に泣き潰し、物
 の文色も水鳥の、陸にさまよふ悲し
 さは、何の世如何なる報にて、重々
 の歎きの數、憐れみ給へさばかりに
 て、聲を忍びて歎きける。詞テ扱哀
 れな話、併し男日早も無い世界に、
 マ氣の狭い女だ、イヤもうしゆん
 だ話で氣が滅入つた、寢酒でも食べ
 氣を暗さう、イヤナニ女、暇を呉る
 立歸れ。ハイ、有難うござります
 左様なれば御客様、最う御暇申しま
 す。オ、朝顔さやう大儀であつた、
 初めて聞いた身の上話、若し其夫が

聞くらば、嘸満足に思ふで有る。
 ノウ岩代殿。左様々々。ハイア是は
 マア御親切なお言葉、有難う存じま
 す。杖探り取り立ちなむら、虫
 知らすか何さやら、耳に残りし情の
 詞、名残惜しさに泣くくも、心は
 あこに探り行く。折節奥より若侍
 詞最早餘程深更に及び候、御兩所さ
 もに早やお休み。如何様、明日は正
 七ツの立、イヤ拙者は今暫し用事もご
 られば、御構ひなく御先へ。左様な
 れば御先へ臥せらう、ドリヤム、
 ヤ御免下されさ、立上りしむ、胸に
 一物、心をあこに奥の間へ、伴はれ
 てぞ入りにける。行く間遅しと駒澤
 手を鳴らして女を呼び。詞ア、コリ
 ヤ、徳右衛門に急々對面したし、

呼んでくりやれさ云ひ付けやり。旅
 硯の墨搦流し、以前の扇開いて、何
 か書付け用意の金子、藥の包。取認
 める目の先へ疊を貫く白及の切先、
 氣轉の駒澤有合ぬく刃にそ、げば下
 には血汐さ心得てしてやつたりさ疊
 刎上現れ出る笹久藏、駒澤覺悟さ切
 付る、又を恐れぬきせるのあしらひ
 廊下傳ひに來かゝる亭主コハ何事さ
 窺ふ内苦もなく刀打落し後なり切る
 なりまたんの拍子首は遙に飛散つた
 り。ヤレ連れお手の内ア、コリヤム
 ハ、イヤ出來ましたイヤ申且那樣
 一体此奴は何者でござります、ホ、
 ウ某を欺討にせんさ飛で火に入る
 夏の虫ハ、死骸はよきに頼み入。
 ハ、お氣遣なされますな。シテ只今
 召しましたは何の御用で御座ります

オ、徳右衛門、折入つて頼み度きは
先刻の朝顔云ふ女、今一應呼び寄
せて給るまいか。ハイ畏まりました
ござりますすが、彼女は直ぐに清水さ
申す方へ参りました、御用事ならば
呼びには遣はしませうが。マーどう
で今夜のお間には。ム、ハテ残念至
極身は正七ツの出立、マ能々縁の。
エ、何んぞ御意なされます。アイヤ
ナニ徳右衛門、今の女に謝禮の爲、
此三品を其方に確りと預け置く間
朝顔も参らば渡して呉りやれ。ハイ
く、オ、コリヤマア、夥しいお金
其上結構な女扇、お薬までも。オ
、サ、其薬は大明國秘法の目薬、甲
子の年に出生せし、男子の生血を取
つて服すれば、如何なる眼病も即座
に平癒、朝顔に渡して呉りやれ。コ

レハく何から何まで、お心を籠め
られた下され物、参り次第相渡し、
ハイエへ、悦ばしますでござり
ましよさ、受取る折しも時計の七ツ
詞ム、アリヤ最う七ツの刻限さ、敷
ふる内に岩代多喜太、装束改め旅
出立、同勢引連れ立出で。詞イザ
駒澤氏、出立仕らうと、勸むる言
葉に治郎左衛門、衣紋繕ひ立出づれ
ば、見送る亭主が暇乞ひ、心そぐは
ぬ駒澤岩代、打連れてこそ出で、行
く。跡見送つて徳右衛門。詞ハ、同
じ侍でも黒白の違ひ、意地くれ悪
い岩代に引替へ、情深い駒澤殿、ア
、天晴れの侍じやなヤ。夫ばさう
さ、朝顔に、今夜の禮にはそぐはぬ
下され物、ハア何ぞ様子の有りそな
事と、思案の折から、深雪は何か氣

に掛り、座敷しまふてうさくさ、
又立返る切戸の内。徳右衛門目早に
見て。詞オ、朝顔が、遅かつた。宵
の御客様が最う一度呼びに遣つてく
れいさ仰しやつたれど、清水へ往つ
たさ聞いた故、お断り申したれば、
今の先お立ちなされた。併しまア悦
びや、大枚のお金も扇、又結構な目
薬、我身に遣つて呉れいさ、コレお
預けなされたわいの。是はマアく
冥加に餘る事、ハお禮申さいで残り
多いが、申し申し且那樣、此扇に何
ぞ書いてはござりませぬか、ばいか
りながらちつと見て下さりませ。オ
、ドレく、エ、金地に一輪朝顔
ア露の干の間が書いてあるゾヤ、裏
に宮城阿曾次郎事駒澤治郎左衛門と
書いてあるぞや。エ、アノ宮城阿

曾次郎事、駒澤治郎左衛門と其扇に

オイノ。エ、ハ、アはつさばかりに

俄の仰天。詞し 知らなんだ、知らなん

だ、知らなんだわいな、道理で能う

似た聲と思ふたむ、そんなら矢つ張

阿曾次郎様で有つたかいの、申し申

し旦那様、其お客様は何時お立ちな

されたへ。オ、今の先の事じやが、

我身は又お馴染か。馴染所か、年月

尋ぬる夫でござんするわいな、斯う

云ふ内も心が急く、追付いて只つた

一言。と、行かんとするを引止め。

詞ア、コレ、コレマア、待ちや

く、エ、折悪う雨も降出し、此暗

いに一人は危い。く、イエ、イエ

假令死んでも厭ひばせぬ。ササ、

夫はさうでも言の身で危い。イ

ヤ、放して、と、突退け、退け

杖を力に降る雨も、合いつかな厭は

ぬ女の念力、跡を慕ふて。三重追ふ

て行く。名に高き、街道一の大井川

篠を亂して降るあめに、打交り鳴る

はた、神、漲り落つる水音は、物凄

くも又すさまじき。夫を慕ふ念力に

道の難所も見えぬ目も、厭はぬ深雪

が倒つ轉びつ、漸々爰に川の傍。詞

ノウ川越達、駒澤治郎左衛門様と云

ふ御侍、最う川をお越しなされたか

未か、聞かして、と、云ふ聞さへ

も息切れの、聲に川越口々に。詞オ

、其侍は今の先渡つたが、俄の大

水で川は止つた、笑止笑止とばかり

にて、皆散々に行過ぐる。詞ナアナ

ニ川が止つた。ハ、ア、悲しやも張

詰めし、力も落ちて伏轉び、前後不

覺に泣きけるが、又起き上がつて見

えぬ目に、空を睨んで。詞天道様、

エ、聞えませぬ、く、わいな。此

年月の艱難辛苦も、何卒最一度其人

に、逢はしてだべと片時も、祈らぬ

間さては無い者を、今日に限つて此

大雨、川止とば、エ、何事ぞい

の、思へば此身は先の世で、如何な

る事の罪せしぞ、扱も扱も味氣無や

焦れ、く、た其人に、逢ふても知らぬ

盲目の、此目は如何なる悪業ぞや、

夫の跡を戀慕ひ、石になつたる松浦

瀉、中領振山の悲しきも、身に比べ

ては數ならず、三千世界を尋ねても

こんな因果が又と世に、有るべきか

はと口説き立て、拳を握り身を震は

し、流涕焦れ歎きしは、餘所の見

目も哀れなり。ヤ、有つて起直り。

詞オ、さうじや、と、とても添はれ

ぬ身の因業、此の川水の増さりしは、
所詮死れこの事なるべし、未來で添
ふを樂に、爰を三途の川さ定め、弘
誓の船に法の道、急むん物と泣く泣
くも、合志戀し小石の數、袖や袂
に拾ひ込み、南無阿彌陀佛の聲諸共
既に飛ばんす其所へ。ヤレお待ちな
され深雪様、と聲にびつくりけしと
む内。駈け來る關助、徳右衛門、斯
くぞ見るより抱き留め。詞マア〜
御待ちなされませ。イヤ〜誰かは
知られど、放して〜。マア〜待
つしやれ朝顔殿、コレ關助殿とやら
が見えたぞや。ハ〜ア下郎めでござ
ります、まづ〜氣をお静めなされ
ませと、無理に手を取り抱退くれれば
詞ム〜さう云ふ聲は關助か。遅かつ
たく〜くわいの、此年月艱難して

尋れ焦れた阿曾次郎様に、折角逢ふ
たに言の悲しさ、夫とも知らず別れ
たれど、何うやらお聲が氣に掛り、
戻つて聞けばやつぱり其人、おのれ
やれ追付かふと、跡追ふて來れば此
川留、關助如何せうぞいのう〜
〜。オ〜お道理だ〜、御尤
で御座居ます、何か拙者めも貴女様
の御行衛を尋れ廻る内、一昨日の夜
の夢に淺香殿に逢ひ、即ち貴女様は
島田の宿、戎屋徳右衛門方にござる
と、云はしやると思へば目も覺め、
シヤ何でも不思議と、夜を日に繼い
て參つた甲斐有つて、既ての事に危
い所を、ヤレ〜嬉しや〜な
ハ〜、イヤモ下郎めがお目に掛る
上げ、お氣遣ひなされますな、駒澤
様にお添はせ申す、併し淺香殿は、

坂東順禮となつて、東海道へ尋ねて
見える筈、お逢ひなされましたか
な。サレバイノ其淺香に跡の月、濱
松で廻り逢ふたが、其夜悪者に出逢
ひ、數ヶ所の手紙、死ぬる今端に私
を呼び、中山の邊には私が生みの親
古部三郎兵衛と云ふ人あり、此守り
刀を證據に尋れ行き、秋月弓之助が
娘と名乗つて、逢へと云ふ教へ、可
哀や終に死にやつたわいの。ム〜ス
リヤ淺香殿には最後とや。ホイ、は
つとばかり驚く内、始終聞き居る徳
右衛門。詞ム〜そんなら御前は、秋
月弓之助様の御息女様、又淺香と云
ふは我娘であつたか、ムンと心に點
き件の短刀拔手も見せず、腹へぐつ
と突立てば、コハ何事と驚く兩人。
お、御不審は尤だわ、先づ〜一

通り聞いてたべ、ハア私事は其お尋れなさるゝ、古部三郎兵衛ご申す者、即ち貴女様の祖父、秋月兵部様には三代相恩、若氣の誤り、奥女中も忍び合ひ、お手討になる所を、弓之助様に助けられ、女諸共國を立退き産落せしは女の子、貧苦の中に育つる中、二つの年に母は病死、男の手で育てもならず、伯母の方へ此短刀を添へて養子に遣りしむ、廻りくへて思はずも、親む命を助けられし、秋月様へ御奉公、死んでも忠義を忘れず、この親を導きをつたか、オ

の薬に調合し、早く彼方へ、サ、早くく。實にもち關助用意の水呑取出だし、手賃の血汐受留めく。泣入る深雪が懐の、妙薬取出し差寄せれば、深雪受取り、我夫の情に餘る賜物と、押戴きく、只一口に呑み干せば、不思議や忽ち兩眼開き、ありく傍りの見え透くにぞ、深雪が嬉しき關助も、悦び合ふぞ道理なる。詞ア、嬉しや、最早此世に望みなし、何れも去らば去らばさ刀引廻し、笛の緒を刎切つて、名のみ流るゝ大井川、水の泡とぞなりにける。跡や骸に取り纏り、わつこばかりに泣く涙、露の干み間の朝顔も、合開きし此目は盲龜の浮木優曇華の、花に勝りし夫の賜物、二つには我故此世に亡き人かと、取りつき歎く後よ

り思いがけなく萩野祐仙、深雪やらぬこ取付を、首筋掴んでかつぎ上、川へさんぶこ水けむり。早や明渡る鷄の聲、山田の恵み彌勝り、茂れる朝顔物語、末の世までも著るし。



檀特山道行の段

近松門左衛門作

釋迦如來誕生會

悉達太子道行の段
太子難行の段

床本 檀特山道行の段

會者定離愛別離苦の、ここわりも分

かて輪廻の宮の中、宮も藁屋もおし

なべて、假のやざりをいつまでもこ

五濁に迷ふ、うたかたの轉迷を導き

て、忝なくも悉達太子十善王位を

振捨て、王宮を忍び出で給ふ。御慈

悲心ぞ有難き、實に宵までは錦の褥

王の床、思へば夢のたのしみと、の

がれ行方は、法の道、健脱駒の諸手

綱、車匿舍人は御供を、うつりこも

いさ白雲の、山また山に埋もれて、

暮ぬ日影や夕陽山、訶羅陀の池に駒

こめて、つくづく、物を案するに、
無爲の故郷を離れ出で何を頼まん婆
婆世界、法の教にあらすんば、苦界

- 竹本 綴太夫
- 竹本 文字太夫
- 竹本 町太夫
- 竹本 源路太夫
- 竹本 龜久太夫
- 豊澤 新左衛門
- 豊澤 仙糸
- 豊澤 猿糸
- 竹澤 團六
- 野澤 歌助
- 野澤 勝平
- 鶴澤 綱右衛門
- 豊澤 猿太郎
- 鶴澤 友衛門

この淨瑠璃は元祿八年四月八日初日の竹本座に書下されたもので作者は近松門左衛門。第一段摩耶夫人懐胎より悉達太子誕生迄、第二段太子の出家、第三段太子檀特山道行、第四段難行苦行、開悟、出山説教、第五段入涅槃を叙したものであります。この度上場いたしますのは太子道行と難行の段で道行は、綴太夫が語り難行の段は土佐太夫が独自の藝城を開いて語ります。

鶴澤 叶

人形

悉多太子 吉田榮三
車匿童子 桐竹政龜

悉多太子難行の段

切 竹本土佐太夫
野澤吉兵衛
レ ツ 鶴鶴鶴鶴
澤澤澤澤 寛
吉友友友 市
左二作市

人形

一 悉多太子 吉田榮三
後ニ釋迦如來 吉田榮三
一 烏陀夷 吉田玉七
一 阿羅々仙人 吉田玉次郎
一 耶輸陀羅女 桐竹紋十郎

に沈みし衆上は、さていつか生死を
出小舟、乗りおかれては、誰か渡さ
ん、立ち上る春の霞の幾七重、また
十重廿重千重百重、今日に近きこす
ふ、も時の間に、萬里の餘所に隔
たれば、今朝も千歳の昔ぞや、我が
王宮はいづくぞぞ振返り、御涙に
くれ給へば車匿も共に涙に沈み、か
くまで世の中を思召し切りし上にさ
へ、恩愛妹脊の御名残御衣を濕す御
涙ましてや残る人々の、御歎はいか
ばかり、先づ此度は還御もやご御馬
の口を引き返す、いやごよ車匿、欣
求大法の修行には戀しき人もあらざ
れば、何に名残の惜しからん歎きて
も、父大王を始め參らせ、あやし

の賤のすさみまであだの火宅の樂し
み、知らで過ぎなんあはれさに、止
め兼ねたる涙ぞご、重れて絞る袖の
雨、一村雨にしげしごてかづく袖笠
脇笠や、森の雫に染めなして同じ線
の昔衣、霞を經に霧の緯の絲筋おり
かけて月をさらすかさら、らに、人首摩靈山、雪山蘇摩山靈鷲山
峯を越え谷におり、一千三百五十餘
里迷へば遙かに隔つれご、思へば近
き悟の道檀特山にぞ着き給ふ、悉達
太子御馬を乗放し、あら面白の山水
や、峯に戒定惠の稍をならべ、谷に
は常樂我淨の川波にかゝれる橋は西
東、彼岸此岸の柳のかみは長く亂る
れご、南枝北枝の梅の花、開くる法

の我が師はこれ、住むべき山はこゝなるぞ、汝は歸れし宣へば車匿承り思ひよらずの仰や候假の御遊の御幸にも御供は離れ參せず、人跡絶えたる山中に捨置き歸りあすよりは、御太子も若君も誰をかさして宮仕へ、御願ばせも拜すべきいかなる深山の奥までも、只御供さばかりにて聲も、惜まず泣きあたり、悉達太子も憐みの御涙を浮へ給ひ、やさしき今の涙やな、去りながら、是を別と悲しまば妻子珍寶及王位、親しき友もしたがいはず土となり灰となる、無常の別れはいかゞせん。我成道して主従の縁つきず、不退の友となるべきぞ、あゝ此の駒よ此の駒よ汝は

法の道しるべ挫れし鞭のかけ迄も、一佛乗の縁ぞかし未來を伴ふしるしぞと、王の冠石の帶御衣諸共に脱ぎかけて、名残りば盡きずと宣まへば畜類ながら聞きわけて頭をうなだれ耳を伏せ御足に舌をつけ黄なる涙を流せしは目も當てられづ哀れなり、あれ御覽せよ畜類さても心あり賤しき下臈の身なりとも、いかでか見捨て奉らん、と又さめざめ泣きければ、愚の者の云ひごこや、獨生れてひそり死す、誰をか友と云はま水ごとく歸れと宣へば、ひそり入らせ給ひては衆生濟度の結縁は何と、出で入る月の光こそ我が無始無終の伴侶よ、いや月には友もなきぞとよ

衆生を照らさば月は友、曇る衆生は扱ていかに、曇らば曇れ其のまゝに月は昔の友なれや、いはじや聞かじむつしかや、本来出づべき家なければ山まで入るべき山もなし是ぞしめしの御詞そばだつ巖踏み分けて猶山深く入り給ふ、車匿は主の御別れ止めかれたる憂き涙、伏し沈み伏し沈み、驢呢駒も諸共に、諸膝折りて身慄ひし三度嘶き行きなづみ見返り、見送る主従の、山路の名残ぞ哀れなる別れ別れに成りにけり。

切 太子難行の段

風破窓を射て燈火消安く月疎屋を穿て夢成難し秋の夜すむら物凄まじき山影に岩木を友と墨衣驚の御山の峨

々こそびへ雪山の雪嶺に満心もすみ
 て頼もしき御悼はしや悉達太子御法
 の爲に御身を捨檀特山の山籠り瑠璃
 の御髮そりこぼし御名を瞿曇沙彌と
 改め阿羅々仙人の御弟子と成師を尊
 みの宮仕へ難行苦行こけ衣裾を結ん
 で肩に掛肩を結んで禪野の澤の菜摘
 み水汲谷に下り嶮しき峰に上りては
 薪を樵せ給ひつゝ三伏の暑き日も座
 しては足を伸べ給はず私の夜の長き
 にも一日に胡麻一粒供御さて聞召さ
 れず冬の夜は寒しと申せども衣を重
 れ給はれば御肌をさし通す風は劔の
 如くにてやつればてさせ給ひける。

谷々を尋れ迷ひ給へ共間べき人の跡
 もなく疲れ果たる唄傳ひ谷を隔て岩
 かげに人こそ見へしは山賊かこ烏陀
 夷は聲を張上てノウ物問はん淨飯大
 王の御太子世を遁れ給ふ御山住何處
 の程ぞ教へてたべノウくこそ有けれ
 ば耶輸陀羅女も延上りごふぞ教へて
 くこそさけび賜ひし御聲は谷を隔て
 し谷の風谷の風の吹連てよその梢も
 嘆くべし。太子は夫と聞き召しおも
 ひ離れし御身にも遠恩愛不能斷飛立
 つ斗りふり返らんご仕賜ひしがア、
 無明の惡魔我心を誑かすなかなやな
 愚かやな笛に寄る鹿火に入る虫愛慾
 故に苦しむる我百敷に在りし時は太
 子こそ言はしいへ身は墨染の山烏瞿

曇沙彌には妻子もなし園に植えては
 花紅葉深山にあれば柴薪暇も惜しや
 少時しもご柴荷かたげて下露を打は
 らひく猶山深くぞ入賜ふ後は遙か
 に見賜ひてなうあれこそ御太子有し
 に替る御婆綾や錦の花の袖墨には誰
 が染ぬるぞ風にもあてぬ大事の御身
 重き薪を肩に置きそもお命も有もの
 かせてわらばご替らんご谷におり
 んごし賜ふを烏陀夷秋を引止め御發
 心の御底意凡夫の智恵には量り難し
 御修行の妨げイヤくくく逆も
 此儘見捨にしておなかにやごりし若
 宮へ御詞有りし其上は未練も残りじ
 コレ申し聲を限りに泣給へご雲間遙
 に隔りてこたふるものは松ふく風詮

女烏陀夷一人を力にてさかしき嶺々

方かたもなき御おん有あり様さま瞿くく曇どん沙しゃ彌みは仙人せんじんの窟くつの前に頭かぶを下さげ法はつ性せう無む漏ろうの智ち惠ゑの火ひは石いしに有あるか燧たいに有あるか何なにを以もつて焚た薪ま師し匠じやう如何いかと宣のたまへば寂寞さびやくの扉かた押お開ひらき現あられ出し阿あ羅ら々々仙人せんじん木この葉は衣えに肌はだ荒られて亂みだれし髪かみは白はく銀ぎんの鏡かがみの如ごとき兩りやう眼がんにてはつたまにらみ聲こゑあらまげ本ほん覺かく大だい悟ごの智ち惠ゑの火ひは一切いっせの煩ぼん惱ねうを燒や盡つくす汝なんじ迷まよふたり故こ郷じやうの妻さい子しの縁えんによつて一念いん愛あい慾よく起おこりし故ゆゑ修しゆ行ぎやう却かへて罪ざい障じやう其その業ごうにひかれて薪ま枯かれてもこの生なま木ここなる。生なま木こを切きつたる殺ころ生せい罪ざい法ぽうに與あふる三十さんじゆ棒ぼうと柱ちゆう杖じやう振ふり上げ丁てい々々悟ごつたるか瞿く曇どん棒ぼうに耳みみあり舌したありと、押おッ取と直ちやくして又また丁てい々々打うち杖じやうは師しの心しん法ぽう打うちたるも弟子でしの六ろく根こん淨じやう御おん目めもくらみ

御おん息いきも早はやたえんくに見みえければ谷たにを隔へてし安あん陀だ羅ら女にょ見みるに見み兼かね聲こゑを上あレ見みや烏う陀だ夷い情じやうなや錦きん繡しゆう綾あや羅らを身みに纏まとひ荒あき風かぜにも當あ賜たまはぬ御おん有あり様さまを打うち捨すて衆しゆ生じやうを助たすけん思おぼ召めしつらき苦く患わづらを御おん身みにうけ今いま打うち杖じやうを我わが身みにかへごんぞ詫わづらしてくも烏う陀だ夷いに取と付つ泣な賜たまふ理りせめて勞ろうはしき師しの仙せん人じんの杖つゑの音ね符ふに響ひびく大おほ音ねにて清せい淨じやう水すいを汲くみ來きたれご言いひすて窟くつに入い給たまふ、漸しだ々々として瞿く曇どん沙しゃ彌み起おこ直ちやくり給たまへごも打うちたれ給たまひし杖つゑあらく御おん衣えも寸すん々に破やぶれ亂みだれし玉たまかづら藤ふじにて結むすべる水みづ桶おけを又また御おん肩かたに打うちかけて九く十じゆ九く折せりなる谷たに道みちをよるりくも御おん幸さい有ありる御おん有あり様さまぞ勞いたはしき烏う陀だ夷いも今いまは忍しのびかれないかに御ご修しゆ

行ぎやう成じやうれば逆さか御おん身みに過あちある時ときは胎た内ないのお子こには誰たれを父ちち御おんと呼よぶべき薪まも水みづも我わがくが汲くみ運こんて參まらせん泣な々々流ながれに立たち寄よれば太たい子し御おん涙なみだを浮うべながら水みづ汲くみみ薪ま樵しやうる斗はかり憂うれき苦く思おもふあさましさを。無む常じやうの刹せつ鬼き身みを離はなれず追お來きたる事ことの速すみやかさ嶺ねより落おつる車くるまの如ごとく繫つなぎ留とどめざる玉たまの緒おのの樂たのしみ願ねがひつて苦く患わづらなる又また胎た内ないの胤なげかり我わが子こは思おもはぬぞ一切いっせ衆しゆ生じやうは我わが子こ也なり洩もさず救すけふむ大だい慈じ大だい悲ひ。菜さい摘とく水すい汲くみ難がた行ぎやうは衆しゆ生じやうに替かへる法ぽうの水みづ三さん界かい流りゆう轉てんの濁にごり江わも底そこ澄すずむ水みづを汲くみんきてだんぶんく汲くみ上げて濡ぬれ袂たもとに影かげうつる月つきも山やま路じを登のぼり坂さかはつしくも打うちければ何なにか持もちてたまるべき忽たちち呼よ吸いき切きれ果はそ

て絶へ賜へば遠目にも見るに忍びず
 耶輸陀羅女うんと斗りに息絶えれば
 烏陀夷は何と詮方も氣付よ水よこ立
 騒ぐ師の仙人は目もやらず倒れ伏た
 る罫臺の脊エしつかさ踏へ端座をし
 め一念不記滿虛空中本來不滅白道阿
 字と瀉水の法を心に觀じ又も蹴返す
 太子の体息吹返す見へけるがすん
 と立つて桶の水大地にがばと打あけ
 給ひ窟の内に入り替り諸法從本來生
 死寂滅相十方佛土中唯有一乘法無二
 亦無三と高らかに成道正覺悟りの金
 言定印たし座し給へば仙人しさとつ
 て禮をなし善哉く釋迦牟尼如來天
 人師佛世尊昔の諸願満足し衆生を導
 き賜ふべし我は大通智勝佛劫成世界

の契を違へず阿羅々仙人と現じたり
 と宣ふ御聲蕭しく光を放ち失せ給ふ
 釋尊微妙の御聲にていかに烏陀夷承
 はれ斯成道をなす上げ御母夫人の御
 爲に祇園精舎の結果よりこふり天に
 登るべし我姿を殘さんにはげつしや
 國の主なる烏天大王此弓手に生茂る
 栴檀香木を斧なしてひしうかつまに
 作らしめ未世の衆生に殘すべし我は
 程經て涅槃の空闊浮に滅す語も有べ
 し筐に殘す我像は南瞻不淵大日本嵯
 峨清涼寺に止まつて有縁の衆生を再
 度すべし然ば生身寸替りはなくと仰
 は今に都路や北野の嵯峨に尊くも衆
 生再度の御誓ひ實有難き、耶輸陀羅
 女は禮拜し悟りの道に入給へば強者

の功德身に餘り我も我子も衆生し迷
 ひも暗れて有難やと仰に烏陀夷も實
 理衆生は元來草木迄迷ひのゆめの
 幻しと悟りの詞に釋迦無尼如來オ
 殊勝也出かしたり娑婆の往來八千度
 我れ無量劫昔より娑婆の往來八千度
 今こそ開く智惠の門出山の釋迦無尼
 如來大恩教主の御惠み御法の程こそ
 尊けれ。



將監閑居の段

近松兼林子作
傾城反魂香

土佐將監閑居の段

人形

土佐將監
將監閑居
吃房又
女樂之
雅樂之
修之
百理之
姓助之

桐竹門造
吉田榮三
吉田文五
吉田玉松
吉田光助
大田光之

中
竹本貴鳳太夫
竹本文太夫
鶴澤芳之助
鶴澤友平
鶴澤友次郎
切
竹本津太夫
鶴澤友次郎
レツ
鶴澤友造

この淨瑠璃は寶永五年の作で時代物
と世話物の中間を行つた作柄で近松
翁影作中の雄篇としてこの四段目吃
又平の條は歌舞伎にも古來上演せら
れて來たものです。只今では中村鴈
治郎の極め附さも成つてゐます。こ
の度竹本津太夫が御靈文樂座以來七
年振で上場する津太夫得意のだしも
のでありますが盛りれたる内容は高
嶋家を浪人した土佐派の巨匠土佐將
監が山科わたりに閑居して繪筆にい
そしんでゐるが、藪蔭に現はれた虎
は名畫に魂も入つたものさ判り、こ
れを弟子の修理之介が繪筆で書き消

して師より苗字を許され光澄となる
これを知つたる兄弟子でその日のた
つきにも困つてゐる浮世又平も苗字
を乞ふが師の不興を蒙つて許されず
兄弟子の打ついでの出世に引かへ自
分の薄倅を女房さ嘆くあまり、今生
の想出に手水鉢に自畫像をかき、裏
へ通つた一念に師より光起の苗字を
賜はり暗れの、大頭舞を女房づれに
て舞諷ふて主家の姫君取戻しといふ
大役を師より仰付かつて、喜勇ん
で行くといふ、近松翁獨自の名作で
あります。

床本 將監閑居の段(口)

爰に歌君の一靈が山野にはびこり草
木を踏折り田畑を荒す事なくめなら
ず近郷の土民聲々に三井寺の渡より
藤の尾までは見届けた此山科の藪影

へ逃込だに極つた擲き殺せ打殺せこ
 取々わめき騒ぎ立庵りの内より修理
 の介刀引揚げ立出てヤア騒しい何者
 じや打ち殺せこはあはれ者か但し夜
 盗の押入かコリヤ此屋敷を誰かと思
 ふ土佐の將監光信が閑居なるぞ仔細
 有て先年勸氣を被り此所に身退く某
 は當家の門弟修理の介光澄といふ者
 案内もなく卒爾千萬盜賊の類ひなれ
 ば一こに打止めんぞ反打て詰かくれ
 ばアコレ申私等は矢橋粟津邊の百
 姓信樂山から寅か出て荒る故隣郷か
 言合せ此藪へ追込だ探させて下され
 ミ口々に呼ばれば修理之介あざ笑ひ
 ヤア虎と言ふ獸か日本に出た例し
 なしむだ言言はずに早歸れ〜〜
 早く〜〜と争ふ聲土佐の將監障
 子押明け聞た〜天地の間に生ずる

もの有まい共極めがたし皆打寄てさ
 がせ〜と聲にソリヤかり出せこ
 ぬい〜と聲明松ふつてかり立る一む
 ら竹の下影にそりやこそ出たはこ火
 を上れば荒れに荒れたる猛虎の形人
 に恐るゝ氣色なく脊をたはめてぞ休
 み居る將監はたこ横手を打あらふし
 ぎやがんびの筆の竹に虎其筆勢に少
 しもまむふ所なしやはは誠の虎にあ
 らす名筆の繪に魂入て現はれ出しに
 極まつたり今是程に繪畫し者はム
 狩野之祐が末葉四郎元信ならで覺へ
 なしオ〜聞へたり高島が御館騷動の
 場に四郎次郎有合せ難を逃れし筆の
 徳血汐を以て畫書し毛色こりや何に
 もせよ其證據には歩みし足の後有ま
 いと聞てこは〜百姓共草かき分け
 て尋れ共虎の足形あらざれば是は不

思議なお目利こ心なき土民等も拜む
 斗りに信をなす修理之介師匠を拜し
 ア〜有難や忝や今此虎を見て繪の
 道の悟りをひらき候其印我筆先に
 てあの虎を消留て御覽に入んこ硯引
 き寄せ押いたゞいて筆を染め虎の頭
 にさしあて筆引方に隨ひて頭前脚
 後脚腕より尾先に至る迄次第に消て
 失けるは神變術共言ふべし將監悦び
 オ〜通れ〜げふより苗字を許し土
 佐の光澄と名付べしご印可の筆を與
 ふれば百姓共舌を巻き孫子の末迄話
 しの種ノウサの衆やあの上手な繪畫
 殿によいよおやまを十人程畫いてもら
 い金もうけがして見たいイヤそれよ
 りまだ外に借錢さりの帳面を爰から
 消て戻ふものお暇申すぞ打笑ひ在所
 さして……。

床本 將監閑居の段(切)

爰に土佐の末弟浮世又平重起といふ
繪師あり、生れ付て口吃り言舌あき
らかならざる上家貧しくて身代は薄
き紙子の火燧箱朝夕の煙さへ一度を
二度に追分や大津のはづれに言たり
して妻の繪の具夫は書く筆の軸さへ
細もこで登下りの旅人の童むかしの
上産物參錢五せんの商ひに命も錢も
繋しひ日蔭の師匠を重んじて半道餘
りを夫婦づれ夜な／＼見まふぞ殊勝
なる夫はなま中目禮ばかり、目禮ば
かり女房傍から通辭してハア、また
是はおよりませぬか誠にめつきりさ
暖かに日も長ふ成まして世間は花見
の遊山のござは／＼／＼致しま
するこなたは山陰御浪人のおつれ
／＼をいさめのため嫁來のひたしに

豆腐のにしめさゝへでも致しまして
關寺が高觀音へお供して春めく人で
も見せませうと女夫申して居ります
れども心で思ふたばつかり道者時分
で店はいそがし洗濯物はつかへる爲
業には、いかす日かな一日立すく
み何をするやらのらくらと急げば廻
る勢田鰻只今せゝから貰ひまして練
貫水の天津酒ゆめ／＼しうござりま
すれ共此春からお仕合が直つて鰻の
穴から出る様に御世にお出でなされ
ませほんにつべこべとわたしが言ふ
事ばつかりこちの人の吃りさわたし
がしやべりさ入あはせたらよい比な
女夫が一組出來ませふア、おはもじ
やと笑ひける奥方も御挨拶よう祝ふ
てたもつた今宵は奇妙な事あつて修
理は苗字を許され土佐の光澄と名乗

るぞよ、又平も随分筆に心をつきや
我名を上れば則師匠の名も出る道
理ノウお徳そふぢやないかまあ／＼
よい所へ酒肴幸ひ／＼盃もいた
いてあやかりやいのこ有ければ又
平時節と女房を先へ押出しせなかを
突我身も手をつき頭をさげ訴訟有げ
に見えければ女房お徳心得て誠に道
すから百姓衆の噂を聞き身は貧也不
具なりおさゝ弟子に土佐を名のらせ
兄弟子ほうか／＼といつ迄浮世又平
で藤の花がたげたおやま繪や鮎おさ
へた瓢箪のぶらん／＼生ても甲斐なし
と身をもんでの無念かり尤共哀れ共
連添ふわたしが心の内申も涙かこぼ
れまする奥様迄は申せしがお直の願
ひは此時節今生の思ひで死で、後の
石塔にも俗名土佐の又平と御一言の

お赦しは師匠のお慈悲と斗りにて涙にむせび入れれば又平も手を合せ將監を三拜し疊にくひ付泣居たり將監も不惑さに俱に心は亂るれどわざと聲をあらうげヤア又してもく叶はぬ願ひコリヤよつく聞け此將監は近江の國高嶋の御家來筋、則ち禁中の繪所小栗宗丹と筆の争ひ其上高嶋家の重寶雲龍の硯を宗丹達て所望すイヤきやつに持せじ我にたべさ互ひに意地を言ひつものりついに御前のお聞きに立つて某は勸當受て此浪人住居今でも小栗に従へば富貴の身も榮ふれ共一人の涙おみつを君傾城の勤させ子を賣つてくふ程の貧苦を凌ぐは何故ぞ土佐の苗字を惜むにあらすや修理之介は只今大功有そちには何の功も有る琴碁書畫は、れの藝貴

人高位の御座近く參るは畫人物を得言はぬ身を以て及ばぬ願ひ似合ふた様に大津繪畫いて世を渡れ茶でも呑んで立歸れとあいそもなくしかられてお徳ははつミ力を落しコレ又平殿こなたを吃に産付けた親御を恨さつしやれと頼みなくく又平も我咽ぶえをかきむしり口に手を入舌をつめて泣けるは理り見えて不惑なる折節表に人音して將監殿やおはする光信殿と呼ばりく、拔刀簀戸押開きすつこ入る將監目早くお身は狩野の弟子歌之助ならずや姫君を御供せしか何さくされば館の騒動いふに及ばず存知のごさく姫君の御供仕り漸々切ぬけ爰かしこに忍びしむ主人四郎次郎行方しれず是第一の氣づかひさ心迷ふ其内に敵手ひびく追かくる

じや任せて置きと眞向に太刀さしかざし向ふ敵の腕骨脚骨嫌ひなく四角八方に切りらせしむ敵は大勢こなたは一人なんなく姫君奪ひ取られ下の醜態は雲谷が館なり伴左衛門を始めとして門をかためて寄付す刀のばがれつつかん迄さかけ入らんさせしむイヤくく主人の身の上心元なし後をしたふて尋る所存姫君の御事は將監殿宜しく頼み存するご詞も足も血氣の若者後をしたふて走り行く將監心も心ならずサアく我爲の一大事いかはせんご思案顔奥方も氣づかしくイヤくくせいては事の仕損じあらん殊に其伴左衛門姫君に心をかけむたいにくごく聞か上はお命には氣づかないしごぞ辯舌のよき人に將軍家の御意さたばかり取かへ

す分別はござらぬかさいふに將監け
に誠せく事はない何れもいふておみ
やれご額に小鞆煩杖つき各々小首か
たむくる又平何ぞ言たげに妻の袖引
せなかつき指さしすれ共合點行かす
しんきをわかし女房を引退てすつこ
出師匠の前に諸手をつき唾を呑込で
コゝゝ此對手にはセ、拙者が参り
姫君をウゝうばひと取つて歸りま
しよ將監きつみ見ヤア面倒な吃め思
案半に邪覺入るそこ立てうせぬかこ
呵られてもおぢるにこそイヤ膝共ダ
談合さ申す口こそ不自由なれ心も
腕も天下にコゝゝはい者がない拙者
か分別致し叶はぬ時はゑんせう助定
あつちへやるかコゝゝつちへ取るか
首かけのバ、ばくち命の相場が一分
五リン浮世又平と名乗つては親もな

い身から一身命ははきだめの芥名は
順彌山と釣かへ悴の時から舊功なし
命にかへて申し上るも師匠の苗字を
繼たいばつかり拙者めを遣はされて
下さりませ申しゝさり速に御承引
ないか吃でなくば斯は有るまいエ、
くくうらめしい咽ぶゑをかき破
つてのけたい女房共さりとばつれな
いお師匠ちやと聲を上て泣き居たる
將監猶も聞入なく不具の癖の述懐
涙不吉千萬相手に成て果しなしこれ
く修理之介御邊向つて思案を廻ら
し審返し來られよ早くく長つたこ
刀提立出る又平むづと抱きこめマ、
マンマン待つてくれ師匠こそつれな
く共弟子兄弟の情けじやコゝ此又平
をやつてくれ後とも言はぬス、ス、
すぐ様コリヤ又平某やだけに思ふ

ても師の命は力なし爰を放せイ、イ
イヤハハ放しやせぬ放さればぬい
て突ぞツ突コゝゝ殺せハツハ、ハ、
放しやせぬぞ修理之介も持あつか
ひ放せ、と捻合たり將監夫婦も氣
をあせり放せ、とこゝゝむれ共耳に
も更に聞入れず女房お徳纏り付あれ
お師匠様の御意が有るおさましの氣
ちがひやともぎ放せば女房を取て投
げ踏付けくじだんだ踏みナ、ハ、ハ、
何じや儕迄かキ、キ氣ちがひさばエ
女房さへあなごるか不具は何の因
果ぞやとごうと座を組み疊を打て聲
も惜ます歎きける心ぞ思ひやられた
る將監重れて汝よく合點せよ繪の道
の功によつて土佐の苗字を繼でこそ
手柄共いふべけれ武道の功に繪師の
苗字譲るべき仔細なしならぬ、と

言切れば女房はつゝ居直つてサア又平殿覺悟さつしやれ今生の望は切れたぞや此庭の手水鉢を石塔と定こなたの繪像を畫きこゝめ此場て自害し其後の贈號を待つ斗りと硯引よせ墨すれば又平駄き筆を染め石面に指向ひ是生涯の名残りの繪姿は苔に朽る其名は石魂にこゝまれど我姿を我筆の念力やつしみん厚さ尺餘の御影石裏へ通つて筆の勢い墨もきへす兩方より一度に畫いたる如く也將監大きに驚き入り異國の王義之趙子昂が石に入り木に入るも和畫において例なし師に勝つたる畫工ぞや浮世又平を引かへ士佐の又平光起と名乗るべし此勢ひに乗て姫君を奪ひかへせと有ければつゝ斗り夫婦が悦び又平は忝し共口吃禮より外は涙にくれ踊り上り飛上り嬉し泣こそ道理なれ將監重ねて心剛にて心ざし厚けれ共敵に向つて問答せん事いかやあらんこ有ければ女

房聞もあへず常々臺頭の舞を好きはらば諸共れつ脇にて舞はれしがふしの有事は少しも吃申さずサア又平殿悦びにめでたう舞て立まいかヲツト答て立上り古き舞を身の上になぞらへてこそ舞たりけれ去る程に鎌倉殿義經の討手を向へし武勇の達者をふらばれし夫は土佐坊是は又土佐の又平光起が師匠の御恩を報ぜんも身にも應ぜぬ重荷をば大津の町や追分の繪にぬるごふんは安けれど名は千金の繪師の家今墨色を上げにけりかくて女房いさみを付又もや御意のかはるべき早御立ちとすいめけるチーいしくも申されたり身こそ墨繪のさんすい男紙表具の体なり共朽て朽せぬ金砂子極彩色におさらじと勇すみし勢はゆへし頼もし我ながら適繪筆の健氣さよ唐繪の樊噲張良を楯についたと思し召イザお暇と立出る將監庭に飛びおり待マ兩人吉左右の饒別せんこ

松竹本社 各劇用達 秋替提灯 傘販賣

大坂南區通橋芝門前
宇津屋
 電話一八七番



刀拔間も見せばこそ又平も像を畫し手水鉢
 二ツにござ切破つたり一座の人々あきれ
 顔女房お徳惚りしコレ申將監様大事の門出
 命づく身を祝ふての舞謡何かお氣に入ませ
 ぬ又平殿を二つになされしは不吉を願ふお
 心か但しは狂氣遊ばしたかオウ疑はしく
 ば言ひ聞かさん昔都誓願寺の御佛は賢聞
 子芥子國さいひし人親子名乗の其しるし片
 形作り合せし御佛なりしに然るに此佛体朝
 暮兩眼より御涙頻成しに時の名醫是を考へ
 五臓を作り込だる佛体なれば正しく肝の臓
 の損じならん二ツに分けて是を直せば忽
 涙止りし事今の世迄も割符の彌陀と隠れな
 し此理を以て又平が魂込し此繪姿繪は吃ら
 れど吃るは舌舌は元來心の臓其心の臓調
 はざる故に吃る今石面の又平を二ツに切破
 此將監繪師の手の内中々思ひよられ共コレ
 此刀は主人より給はる名作其名作の奇特を

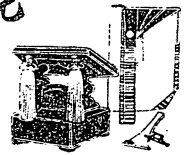
うて心の臓を斷切たれ、ば吃る事はよも有
 らじと言ふに又平頭を下げハ、有わたりし
 く、いよ、首尾能姫君の御供申し立歸ら
 んと詞すしき一言に奥方始め人々も二度
 悔りに又平は我でに我口疑はしく、らりる
 れる、まみむめも、さしすせそ、かきくけ
 こありやく直つた、いふは、何を言
 ふ狸百疋棒百本天王寺のたう、念佛十チ
 申せば佛に成る誓願寺の佛の誓師匠の御恩
 を頭に戴き、ごう、力足踏又平は今ぞ
 出世の金願、あつばれ諸人の繪本ぞ、ご勇
 いさんで急ぎ行く。

元阪本橋海夫太儀
 具道り昌澤州共良為信見

電話船場
 一八六二番

助信中竹屋島加

入へ西筋堂御目丁四町物唐區東市阪大





油屋十人斬の段

近松徳叟作

伊勢音頭戀寝刃

油屋十人斬の段

| | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 下 | 下 | 仲 | 小 | 泊 | 女 | 喜 | 仲 | 料 | 女 | 女 | 福 |
| 女 | 男 | 居 | 女 | り | 郎 | 多 | 居 | 理 | 郎 | 郎 | 岡 |
| 竹 | 竹 | 豊 | 竹 | 竹 | 豊 | 豊 | 竹 | 豊 | 竹 | 豊 | 竹 |
| 本 | 本 | 竹 | 本 | 本 | 竹 | 竹 | 本 | 竹 | 本 | 竹 | 本 |
| 隅 | 長 | 千 | 文 | 浪 | 綾 | 富 | 鏡 | 島 | 相 | 和 | 大 |
| 榮 | 子 | 駒 | 太 | 花 | 太 | 太 | 太 | 太 | 生 | 泉 | 隅 |
| 太 | 太 | 太 | 夫 | 太 | 夫 | 夫 | 夫 | 夫 | 太 | 太 | 太 |
| 夫 | 夫 | 夫 | 夫 | 夫 | 夫 | 夫 | 夫 | 夫 | 夫 | 夫 | 夫 |

この伊勢音頭の内容を申し上げます
 こ、阿波の國家老九郎右衛門の息、
 今田萬次郎は青井下坂の刀證議の爲
 め伊勢に來たが古市油屋の抱女郎お
 岸と馴染んで放埒をつくし折角手に
 入れた刀も胸脉金兵衛に質入して金
 に代え折紙も相の山で騙取られてし
 まふ。後見役の小舅藤津左膳は之に
 意見を加へその家來筋にあたる御師
 福岡孫太夫の養子貢に刀を折紙の詮
 議を依頼します。貢は其の手がかり
 の爲めにかれて馴染の油屋のお紺の
 許へ繁々通つたが、かれて國家老
 を陥れんと旨を受けた徳島岩次と

いふ侍と藍玉屋北六といふ商人も
 油屋で豪遊してお岸とお紺を身請け
 の相談となる。貢は伯母お峰の情で
 尾首よく刀を手に入れ萬次郎に手渡
 そうと油屋へ来てお紺と口説のうち
 に刀の中味を岩次にすり替られあま
 つさへお紺には愛想づかしをされ仲
 居の萬野やお鹿女郎にまで伊勢乞食
 の男傾城の罵られて突き出される
 かつとした貢は腰の物を抜き放つて
 岩次、北六、お鹿、萬野と手當り次
 第に斬つたがお紺が二階から投げた
 文を見るご岩次になびいたと見せた
 愛想づかしも實は折紙を手に入れる
 爲と知れた貢が今大勢を斬つた刀が
 實は正銘の青井下坂で料理人喜助の
 働で更に裏をかくてすり替られて
 るたのであつたが、そうさば知らぬ

徳島岩次 竹本長尾太夫

鶴澤道八

人形

福岡貢 吉田玉松

女郎おこん 桐竹紋十郎

仲居萬野 吉田小兵吉

料理人喜助 桐竹門造

徳島岩次 吉田玉幸

藍玉屋喜多六 吉田文之助

女郎お鹿 吉田扇太郎

泊り客 吉田市松

女郎若菜 桐竹紋太郎

料理人男 吉田瓢壽呂

仲居 吉田覺三郎

小女郎 桐竹紋司

下男 吉田傳之助

下女 吉田利男

買は人殺しの科人さ刀の申譯に鳥羽の伯母の家で切腹するさいふのがこの筋合で御座ぬます。

油屋十人斬の段

M 後にお紺は、うつさりに、暫し思案に暮告る、遠寺の鐘も身にしみ、心さき付胸の闇、や、有て顔を上、折角思ひ、思はれて、二世さかはした貢さん、退ればならぬ浮世の義理、訶昨日伯母御様のお詞には、言號の榊様さ、祝言をさくれば、養子親へ義理が立たぬ故、思ひ切つてくれいさ、モ事を分けてのお頼み、さば言へ是も何さまア、一夜流れのあだ夢も、別れば惜しき、明けの鐘炎の中に暮さうか、あなたを退いて片時も、浮世の日影が見られふか、むごい、つれない、胴慾な、別れさ

言聲を聞てさへ、胸にしみる悲しいさ、恨み涙にくれ居たる。詞モ此中からもくれぬさ、頼ましやんした折紙の、詮議。アノ奥の客が慥に持て居るさば思へども、帯紐解れば肌身は赦さず、ア、マごふせふぞ。チ、それよ、此身を任すも夫の爲め折紙を取かへし、潔よふ自害して、未來の契りを待ぶ樂しみ、せめては死後の言譯さ、泣くく硯引寄て、書置く鹿の巻筆も、合今宵限りの命毛さ、またし沈み泣居たる。詞お紺さん、お紺どのは何處にぞさ、言つて出てくるやりての萬野。見付られじさ文巻取り、心もうはの空封じ。しらぬ萬野は聲高に。詞お紺どの、チ、お紺さん、そこにかいな、そんな事知らずに、一遍尋ね

ましたわいな、イヤコレシコレお紺さんへ
 モ今更いふじやないが、此間からも、す
 めて居るアノ岩次様、大体よいお客じやな
 いぞへ、夫れにお前も物好きないかに心
 中立てるまで、アノかす禰宜の買づら、チ
 ホ、ホ、お紺様堪忍しておくなはいや
 ホ、ホ、モ今も今まで、お鹿様が、買
 様から、度々の無心状、誠かと思ふて、身
 の皮剥いて打ち込だが、そら悔しい、私へ
 の懺悔、コレシコレ、此文を見やしやんせ
 アノ口先で、ちよぼくささ、古市中の女郎
 の油をねすり廻る油虫、モ其油虫の事は、
 さんご思ひ切、岩次様に靡かんすりや、お
 前も出世、コレシコレお紺様へ、此萬野は
 悪い事はすゝめませぬぞへ。モウくふつ
 つりさ思ひ切らしやんせと、奨付けかける
 詞のわら、それさば知れど眞顔に請けて。
 詞チゝなるほど、此状の様子では、興の醒

めた買様、そんならお前の言はしやんす通
 り、岩次様に乗り替ふはいない、エ、アノお
 紺様、そんならお前様ほんまに岩様に、乗
 替る氣かへ。何の嘘をいふ物かいな。お紺
 様、チゝ好きやよやく、ホ、ホ、
 い、コリヤコレ近年の大出来じやはいな、
 お紺様、チゝよさや、よやく、ホ、
 い、そんなら直ぐに奥へ往て、改めて固め
 の盃、サア、お出さ無理やり、引立ち
 れて詮方も、涙かくして入にけり。斯きは
 知らず、うさくさ、懣には心引かれ来る
 身の災難に福岡買、みや角案じ扱みける。
 詞ム、ウアノ歌は油屋の二階座敷、阿波の
 客が居續け騒ぎ、テモマ面白そふに諷ひお
 るなア。が夫に引かへ心ならぬは萬次郎様
 のお身の上、今宵につまる御身の難義へ
 お紺に頼んだ折紙の詮議、今に何の返事の
 ないは、岩次の手でないのか、マア何にも



座王の一 ヌヴレとマネシ
 備完の置装風冷こ氣換

座竹松 堀頓道

せよ、お紺にちよつと逢たいと、見廻す内
より出来る喜助、出會頭に。詞ヤア若旦那
様。チ、喜助が、ヤ幸ひく、何ふぞ首尾
して、お紺に一寸逢したも、ヘイ畏りま
したと、奥口見廻し。詞イヤ申し若旦那様
憚りながら、一寸あれへ。喜助わしにか。
ヘイ。何の用ちや、モ今改めて申上げます
るはいかんなれども、日外お國の騒動より
此伊勢路へお引越なされまして、あなた様
には、福岡へ御養子、それ故親共も奉公引
て此古市にて僅なくらし。其後大病を煩ひ
今端の枕元へ私を呼、アノ福岡孫太夫様の
御養子買様は、我々親子が古主の若旦那様
随分さにも心を付て、忠義を盡せと、遺言
でござります。夫で私も、何ふぞ御恩を送
りたいと存じますれども、モ高が料理人風
情の私、其大切なあなた様か、毎日毎夜の
遊所通ひ、お紺様との浮名は、古市中一ぱ

い。福岡様には言號の奥様も有り、御養子
の御身分で、あゝいふお身持ではお爲にな
らぬ、何時ぞは御意見申したいと思ふ折か
ら、此お出會。イヤ申し若旦那様、あまり
せきくお出なされます所ちやござりませ
ぬぞへ、何をちよございなと思召ませふが
モ斯様に慮外を申しますも、つゝまる所
は、貴郎様のお爲、ホンニ私ば夜のみも會
ず、案じてばかり居りまするはい、ハ、ハ、
い、ヤ是はしたり、何事も御存じの貴郎
様、必ずお氣にさへられて、ヘイ下さりま
すな。ム、スリヤそちは喜兵衛が悍で有
たまな。ヤコレハシタリ、モさすれば我爲
にも家來同然、古主を忘れぬそちが意見、
悪ふは請ぬ、忝ない、ガマア夫は格別、コ
リヤコレ大切な一腰、私が持て居ては人目
に立つ、歸るまで預かつてたも。ヘイ私か
しつかりさお預り申しました。ア、コレ、

七月の浪花座

夏を涼やかに

志賀廻家淡海

のお目見得す

其の腰は青井下坂。エ、そんなら是か。いかに、刀は手に入さも、是に付たる折紙を街られ、毛色々々詮議をすれ共、今に於て行方知れず、何卒折紙を取り返さんご、毎夜此處へ入込むも、若や詮議の手がかりも有うかご、心を碎く某、コレ、必ず他言は無用ぢやぞや。ヤ是は、左様も存ぜず、慮外の段は、眞平御容赦。シテ其折紙を街つた奴が、此油屋の内に。サ儘にそれさも知られども、客やご思ふはアノ奥のコレ喜助一寸耳を貸しや。エイ、そんならアノ岩次。コレシイ、密かに、何かは奥の大騒ぎに、首尾を作るは最悪。そんなら喜助、若旦那様、サア、こちへご先に立、案内に連て福岡貢、暖簾の内へ入りにけり。此方の障子引明けて、窺ひ出たる徳島岩次、何か心に打ちうなづき、差足拔足暖簾の内、忍び入て二腰の刀をそつこ

前後見廻し、己も刀を貢が刀、手早に目釘コツチ、身を摺り替へる即座の悪智恵暖簾の影より窺ふ喜助、それと白及の二腰を、元の如くにさし納め、又も納戸へ持つて入る。お紺は過す無理酒の、酔に心も亂れ足、岩次様、呼立てられて出て来る岩次。詞チ、岩様さしたごさご、座敷を外してお前は何處へ。ア、イヤ一寸手水に。アノマア嘘ばつかり。エ、何の嘘を云ふてよいものか、證據人は北六、萬野。ソレ用意よくば早是へご、いふ内奥に聲高砂詞相々相生の松こそ目出度かりけれ、北六萬野がこり、道具屋節ごさん盃硯蓋、鉦々に携へて。詞サア、申しお紺様岩次様の固めの盃、色直しは直ぐに床入。詞ササア媒介役は此北六、嫁君から呑んで差し給へご、無理に突き付け注ぎかくれば堪へ兼て、馳け出る貢。お紺も盃引つ

得見目おの例吉

劇郎五家廻我會

座 中 りぼんさうご

たくり、落花微塵ご投げ付けたり。詞ヤイ
 お紺、おのりや此盃仕ては濟むまいぞよ
 ナ、誰かと思へば貢様、お客ご盃するが
 何うして濟ぬへ、イヤサー一通りの盃なら
 格別、此盃ばかりは、さす事はならぬわ
 い、コリヤお紺、おのりや是まで言替した
 事、皆忘れたな、モ最前から見居れば、
 ほてくろしい座敷ぶり、エ、まう了簡がこ
 立ちかゝるを、岩次は引き退け詞ヤア、
 かす禰宜の大馬鹿者め、身が揚詰の女郎に
 指でも差さば、頬でも脛も打折るぞよこ、
 云ふに萬野が、しやくり出で。詞コレイ
 ナア、是々貢様、お前はマア此方の内へ、
 誰か許してござんしたへ、お前のやうな油
 虫はナ、顔見るのも胸が悪い、アイ縁起が
 悪い、サア、疾つぎ、去んでもらひまし
 よこ、すつかり云はれて猶急立。詞コリヤ
 萬野、マあじなここ云ふな、此貢が女郎の

油を何時吸たこごも有る、サア、夫聞ふ
 アノマア白らしくしい顔わいな。ヤ是く
 コレお紺様、最前の文見せてやらんせご
 云ふにお紺が懐より、取り出し渡す以前の
 文。一一貢が見て吃驚。詞ヨウコリヤおれ
 が名を街つて、女郎のお鹿へ無心の状。何
 ん覚えが有うがな。イヤ知らぬ、元より譯
 有る仲ぢやなし、こんな文やつた覚えな
 い穢い、アノお鹿、風俗ご云ひ、顔さい
 ひ、悉皆猿芝居のおそめ、あんまり呆れて
 物が云れぬご、悪口聞て馳せ出るお鹿、貢
 が前に臺白なり。詞コレく貢様、最前か
 ら聞て居れば、餘りじやぞへ、アイ私
 しゃ何うでお紺様のやうに、美しくうばな
 いけれご、顔でお客は取らぬぞへ、コレ肝
 心の時にはな、ぐつたりさお客につくすに
 よつて、終に一日お茶引た事ばござんせぬ
 お前も夫を見込に、アノ萬野様を頼んで付

夏を忘るる爽快なお芝居

新國劇の公演

あなとの角座

正午と五時半
二回開演

文、其度々に、コレ／＼見なされ、此通り
 になア、二歩ちよつとお借、ソレ又此狀に
 三歩借り、まだ此處に有る、ソレ見なされ
 又一兩入るのこ、モ親にも聞ぬ無心をば、
 五度十度の事かいな、エイ何を夫に今更知
 らぬさは、ソリア卑怯ぢやわいな／＼。筆
 先で蕩しこみ、身の皮はいだ生盗人、エ、
 腹の立つ／＼と、云ひつゝ兩手に胸づくし
 引摺む手をもぎ放し。詞エ、様々のたは言
 身不肖なれども福岡貢、そちらに無心云ふ
 やうな己ぢやないわい、コリヤお紺、是に
 は何ぞ譯が有らふ、譯をいへ、何うぢや
 ない、チ、お前の内證の文が、私の手に
 入、腹の立つは、コリヤもつこもでござん
 す。お、申貢さん、お前と私か仲は、人も
 知たサ仲ぢやぞへ、金の入事があるならば
 打ち明けて、かう／＼と、いふて下さんし
 たら、何んぼ甲斐性のない私でも、三十兩

や五十兩の金、まんざら否とも云ふまいに
 僅二歩や三歩の端た金、お鹿様に無心云ふ
 さは、モみす／＼知れた。イヤサ、見下げ
 果てた心ぢやな、モウ／＼と、色も戀も
 さめ果てたわいな、サ夫ぢやによつてふつ
 つりこ、お前の事を思ひ切、岩次様になび
 くのでござんす、アイそう思ふて下さんせ
 せ、けんもほろ／＼に言ひ放す。詞コリヤや
 いお紺、おのりや氣が違ふたな、おのりや
 モ流れの身にも誠ある者と思ひ、取交した
 起請蓄紙、まだ其上に大切なイヤサ大事の
 事まで請合ひながら、わりや夫ぢや。エ、
 イあだごんな違ひました、アイ性根がくさ
 りましたわいな、モまい／＼と、まい付か
 ずと、早う去で下さんせと、口には云へど
 心には、チ、道理でござんす、チ、道理じ
 やと、云ふに云われぬ此場の時宜、血を吐
 く思ひ押隠す。知らぬ貢は腹立涙、傍に北

南 一 温 泉 料 理

電 話 南 }
 七 一 五 六 }
 〇 一 三 三 } 長
 一 一 二 九 }
 番 番 番 番 }
 番 〇 三 }
 西

大阪四ッ橋



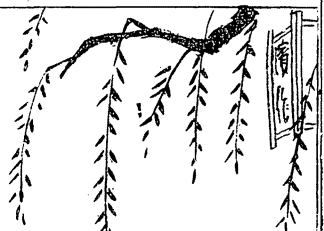
六高笑ひ。詞ハ、コリヤ可笑しいわい
 客の女郎に物誑して取るこは、コイツは新
 らしいわい、コリヤ新版じやわい、ハ、
 是の本の伊勢乞食じや、何、何、何、
 憎て口、岩次も片頬にせ、ら笑ひ。詞ア
 イヤモ聞けば聞くほど馬鹿な詮索だわい
 お紺も心底聞く上ば、今夜中に身請して身
 の女房、ドレ金の威光を見せうかい、お
 紺の膝を假枕、脛ふんぞらす傍若無人。見
 るに貢は齒きしみ齒切。詞エ、見違ふた、
 あのこ、なごう畜生、其根性は知らず、
 大事を明かしたが、エ、無念なわい、アミ
 は云へおのれに限つて、よもやそんな根性
 さば知らなんだくわいと、睨む眼にはら
 ばら涙、お紺も胸は猶百倍、張り裂くばか
 りのせぐるしさ、涙紛らす煙草さへ、焔ほ
 にむせる思ひなり。納戸に始終立ち聞く喜
 助、刀を持って走り出で。詞貢様、モウお歸

りなされませ、悪い事は申しませぬ、サお
 預り申したお腰のものと差出す刀引つたく
 り、腰に差す間も氣はしゆつくり、刀の違
 ひに目も注かす。萬野は傍へ立寄つて。詞
 コレシ貢様、お前はまう喋り仕舞かへ、チ
 、氣の毒やの、ヤコレシ貢様、ちよつこ
 ちらへ御出でななせ、サア、早うごんせ
 エ、早うおいななせ、ヤナニ貢様、最前か
 ら段々の失禮、サアお腹が立ふ、尤もでこ
 ざんす、私に免じて、ごうぞ堪忍して上て
 おくれなさんせ、ヤコレシ貢様、何ぼお前
 がやき、思わんしても、錢の切目が縁の
 切れ目じやわいな、アノお紺さんを恨みな
 さる、事は微塵もないぞへ、お前の其素寒
 貧を恨まんせ、モほんに、お前のやうな
 貧乏神、片時置のも家の不吉、サア疾さ
 お歸り、ようお出なさつたへ、エ何、
 煙草入お忘れたのかへ、ドレ、取て

文楽座のお歸りおはつ
 濱作の前で一盞お召上

濱作

新町



来て上ませう、サア〜お歸り〜、エ、去にやがれさ、突出す門口、堪へ兼ねて又の柄、手にかけてながら忠孝の、二字に引かれて喰ひしげる。詞チエ〜うぬ。何ぢやへ齒を剝出し、そふらひしをひねくつて、何かへ、私を斬る氣かへ、面白いく、サア〜斬られようサ、何所から切りなんす。コリヤ萬野おのれはな。サアお斬りなんせエ、勝手にさらせと、道を蹴立て、立ち歸る。萬野は跡を見送つて。詞サアサア油虫の暮む切れた、サア岩次様、北六様、是からは色直し、お床入の玉子酒、お紺さんも一所に、サア〜二階へ〜と、云ふもそれ者の高調子。詞イエ〜私じやまだ岩様に帯紐は得解ぬわいな。ム〜スリヤなゼ〜、サイナア、お前の持て居やしやんす帛紗包、定めて色の起請か文、それ見ぬ内は疑ひは晴れぬわいな。ナニ是か。アイ、

コリヤ大切なア、イヤ、大切な〜金比羅様の御守、サ金比羅様のお守にもせよ、私に見せて下さんせにや、眞實心が解ぬわいな。テモ扱も女郎さいふ者は疑ひ深ひ者、ハ〜、ア、是非に及ばぬ、大切な品なれども、其方にしつかり預けるぞ。アイ、アイ〜合點も一寸遅れ、嬉しや恐さ胴俵ひ、足を踏みしめ段階子、二階へこそは上り行く。岩次は跡に聲ひそめ。詞コリヤ萬野、身も刀を早う是へと、いふに心得腰簾の内、刀抱へて走り出で、渡すを取て打なぐめ。詞コウ〜、コリヤは身も刀では無い。エ、それなら買取り違へて去んだに違いはないさいふに、北六勇み出で。詞何じや、買取り違へて去んださば、天の與へ、是こそ望む青江下坂。ア、イヤ〜夫が大間違ひだわい、最前密かに買取り身も刀、中子を摺り替へ置たに、取違

座王の界斯は理料お

店本家るつ

六二 一五 三三 三二 } 局本話電 目丁五橋今

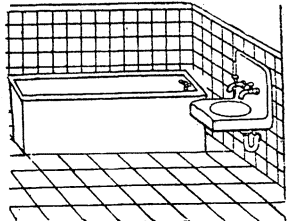
へて去に居つたが本の下坂。エ、ごんな、私うちよつこ一と走り、ア、イヤ、申し其お使は私が参りませふと、云ひつゝ納戸を出る喜助。詞チ、喜助か、よく気が注いた、貫に追付き、腰の物をかへてこい、サ早う、手に渡せば。ヤまつかせ合點と馳り行く。萬野は俄かに心付き。詞コレ、申し岩次様、お前はマアめつそうなお方じやわいな、アノ喜助はな、慥か買も譜代の家來じやさいなと、聞くより岩次は興醒め顔。詞サア、壺じや、岩次様、壺とは何壺じや、水壺か、搦壺か。エ、子壺じや、コリヤ、萬野、あわてなく、と云ふて身共もあばて、居るわいコリヤ、萬野、そちは喜助に追付いて刀を取り、買も刀と替へてこい。ハイ、心得ました、貫に逢ふて刀をたくり、急度お渡し申しませふ、ドリヤ一走り身繕ひ、襖

引き上げて。詞チ、イヤ、喜助殿、聲は先き、體は跡に心も空、足を早めて、走り行く。岩次は跡を見送つて。詞萬野が戻つてくるまでは、皆を相手二階で飲ふ、サア、こちへと引き連れて、二階へこそは行跡へ、又引返へす福岡買、合取違へたる脇差の、身は正眞の下坂とも知らず、知られば氣もそゝる、門の戸引明け内に入り詞コリヤ喜助、萬野は居らぬか、エ、居らぬか、見廻す折しも、遣手の萬野、息もすたく、立ち戻り、顔見合せて。詞ア、買様、お前もいかに周章るまで、腰の物を取違へるさいふやうな、産相な事がある物かいな、其刀こつちへと、取りにかゝるを突放し。詞イヤ身が刀から先へ渡せ、エ、マア渡さぬまで取らずに置ふか、エ、此刀を、取にかゝるを續げさま、打てばつしり鞘割て、思はず知らず一と刀。詞ア、

ちめた。チーウ貢様、お前斬りなげつたな
 アレイ、ご泣き叫ぶ、聲立てさせじご口
 に手を當て、見れば血汐に身は紅い。詞ヨ
 ウヤ、い、南無三手お廻つたか、モウ百
 年目ご又つかり、斬られながらに逃行く
 を、警擲んで引き戻し、肋骨をぐつこ一こ
 むぐり、其儘息は絶え果てたり。折しも奥
 より北六、岩次、跡に續いて出てくるお鹿
 詞、岩次様、北六様、北六様と尋ねる向ふに
 立ち塞がる。詞ヤア貢様、アレ人殺しじや
 く、アレくご云ふ聲に、コリヤさせぬ
 はご北六、岩次、留にかゝるを、身をかは
 し、左へ廻る北六を、肩先下りに切付くれ
 ば、コリヤ叶はぬと氣轉の岩次、奥庭さし
 て通れ行く。お鹿は足も地に付かず、こけ
 つ、合轉びつ這ひ廻る、おのれお鹿ご云ふ
 聲に、思はず知らず立ち上り、逃行く後を
 遁さじと、躍りあがつて、合唐竹割し物音

聞き付け勝手より、起番男、仲居、下女、
 物騒むしきは何事と、差出す仲居が手燭の
 光り、ふり向く拍子、貢も顔、見るより三
 人足わなく。詞ヤレ人殺し、く、く、
 ミ云ふ間も待たず左より、右の腕を斬落す
 うんご仲居が即死の有様、見る兩人がうろ
 たへ廻り、奥さ表へ逃げ行く男、外へ出な
 ば面倒と、聲をまかけず後袈裟、返す刀に
 下女が首、水もたまらず斬り落す、音も分
 らぬ寢さぼけの、小女郎が出る足元に、血
 に迂つて、合ばつたりと、こける拍子にお
 鹿が傍。詞チ、此やうな所に、水を流して
 チ、冷た、チ、爰に寝てじや誰じやいな
 ア、コレ起んかいなくと、云ひつゝ、立寄
 り見て悔り。詞アレお鹿さんが斬られてじ
 や、アレくご云ふ間もなく、片足丁ご斬
 放せば、片足立に、一、二、三、い、よろ／＼
 く、鉢前の、手洗鉢に取り付て、其儘

化粧タイル
 水道衛生工事
 洗面、浴場、
 水洗便所設計
 汚水浄化装置
 特許無臭便所



西區立寶堀北通一丁目
 新一橋

岡部商會

阪急 夙川
 電話新町一六六九
 二七六九

岡部商會支店
 電話西宮一九七六

息は絶果てし、無惨さいふも餘りあり。サ
 ア此上は岩次一人取逃しては、刀の在り家
 詞此の間こそ、ム夫さ、窺ふ内より泊客。
 詞ア一べい機械にぐつたり寝て退けた
 酔醒の水の心地や朝櫻かハ、ハ、ハ、ハ、コ
 リヤ灯が消えて有るはい、さ云ひつゝ出る
 廊下口、窺ふ貰ふ又の光り、コリヤ堪らぬ
 さ逃げ行く庭先、逃る人影岩次さ心得、追
 つて行く。寢間より出る合方女郎、貰を客
 さ心得て。詞申し此ひつさんはいな、ごこ
 へ往きなんす、申しそちらは前裁さますよ
 落ちなんすなへ、あぶないさますよ、水さ
 いますか、コレシ水はこちらに有るわいな
 さ扱帯も脇へしごもなき、褌もほらく追
 行女郎。合振り返りて拜み打。客はほう
 ん、樹木の蔭に、息を詰てそかみ居る。
 コハ心得ずさ燈籠の影に透して、儘かに岩
 次、ごさんなれさ、襟髪瀧み引出し、土に

さし付け、にじり付け。詞サア下坂の刀は
 何處へ遣りしぞ、眞直ぐに白狀ひるげさ、
 ひしぎ付けられ。詞ア、申し私は何人にも
 知ませぬ、ヤア今になつて知ぬさは卑怯至
 極、云はぬさて云はさいて置ふかさ、云ふ
 内に來る人音に、南無三と、ためらふ隙に
 匆れ返し、逃げ行く後を横なぐり、直に立
 寄顔見れば。詞ヤアコリヤ岩次ではなし。
 チエ、取逃せしか残念さ、拳を握り居た
 りける。お紺は驚き心も空、こけつ轉びつ
 走り寄り。詞貢さん、ヤアお紺か、覺悟致
 せさ突かける。詞マアマア待つて下さんせ
 いなア、サア、腹の立は尤もなれど、是
 には段々譯のある事。ヤア何の譯の事さ、
 又振上る刀の下、コレイナア、詞マア氣を
 鎮てさつくりさ、是見て疑ひ晴らしてさ、
 投げ出す包手に取上げ。詞ヤアコリヤコレ
 折紙、ム、それなら宵の難面は。サイナア

高級文房具
 暑中贈答品

堂々生田黒

大阪・心齋橋順慶町
 船場 136・4128

お前に忠義を立てさせたまさ、ごうやら斯うやら岩次を騙し、首尾よふ手に入る此折紙さ、云ふに買ばハ、ア今更に後悔、涙の折から、喜助は心ならざれど、もしやご思ひ立ち戻る。詞喜助か。フウ若旦那、シテ此有様ば、ごうも堪忍ならぬ故、喜助赦してくれいご、刀の柄に手をかくれば、其手を押へて。詞コリヤ狼狽何さなされませ。チ、狼狽た。最前そちに預けた刀、サ夫は其處に持てござるのが眞の下坂。ヨウそんなら是れが、エ、有難や／＼な。サア申し二種ごもに揃ふ上は、一時も早う萬次郎様へ早う早うお渡しなされませ。喜助、お紺段々の心遣ひ、何にも云はぬ、チエ、忝いシテ此場の首尾は。ヘイ私を呑込みました跡構はずご萬次郎様へ。ム、然らば喜助、跡を頼むご云ひ捨て、立出入とする所へ小蔭をわつご徳島岩次。ヤアごこへ、

詞大事の刀こつちへ渡せご、打てか、れば身を替はし。シヤよい所へ徳島岩次、己れを方々尋ねしに、こへ出たは百年目ご、打つてか、れば切り拂ひ、切り結び、透を見合せ一ご刀、うんご倒るをのつかり、恨身の刀受取ご、さし通されて七轉八倒、心地よくこそ見えにけり。傍にお紺は心せき、夏の夜なれば早や明方、少しも早う其刀を。チ、云ふにや及ぶ。詞忠義をたると二人の情ご、心も勇む足勇む、忠義に心勇み立ち屋敷をさして、急ぎ行く。



大及御池橋
茶筌
電話新町三二番



桔梗ヶ原の段

前 本朝廿四孝

高坂彈正 豊竹駒太夫
 越名彈正 竹本文字太夫
 妻唐織 竹本鏡太夫
 妻入江 竹本源路太夫
 慈悲藏 竹本長尾太夫
 草薙奴 竹本貴鳳太夫
 鶴野澤重平 竹本龜久太夫

人形

慈藏 吉田玉松
 悲藏 吉田光之助
 唐織 吉田光之助
 妻 吉田光之助

この淨瑠璃は武田上杉兩家の確執に齧藤道三の謀叛を取合せたる作にて『信州川中島合戦』『三軍桔梗ヶ原』等を藍本として更に趣向を立て技巧を凝らしたるものにて近松半二、竹本三郎兵衛、三好松洛等の合作で初演は明和三年正月興行の竹本座。桔梗ヶ原の段は三段目の口で内容は直江山城の慈悲藏が母の命令で信州桔梗ヶ原に我子を捨るこゝ通りが、

つた信玄の家來高坂彈正と長尾景勝の家來越名彈正(實説の保科彈正)が勤助の名に魅せられて、互ひに捨ひ取らふと争つたが高坂が妻唐織の入智恵で、遂に高坂が拾ひ得て歸るこゝに趣向でこれに越名の妻入江の廣言と逃彈正と槍彈正の俗諺の由來なごを絡ませてある筋であります。景勝下駄の段は三段目の中で桔梗ヶ原で捨子をした慈悲藏が勤助の名跡を嗣ぎたい一心で老母の難題を逆らわずに仕へるこゝ老母は圖に乗つて、杖で打擲するはづみに下駄を飛ばすこゝ其れを捧げて長尾景勝が訪れて横藏を軍師として迎へやうと頼む筋で景勝も下駄を捧げる件は支那の張良が下邳の橋で黄石公に香を捧げた故事を取入れたもので、信玄が雪中に勤

妻 入江 吉田文之助
 高坂 彈正 吉田玉徳
 越名 彈正 吉田玉市
 草薙 奴大 勢

景勝下駄の段

豊竹 つげめ太夫
 野澤 勝市

人形

慈 悲 藏 吉田玉松
 母 越 路 吉田小兵吉
 長尾三郎 景勝 吉田玉幸
 女房 お種 桐竹紋十郎
 百 姓 大 勢

勘助住家の段

竹本 鍛太夫
 豊澤 新左衛門

勘助を訪れるのを玄徳も孔明の慮を叩いたのに型どつたと同じ趣向であります。

勘助住家の段勘助物語の段は三段目の切で内容の概括を申し上げます。美濃の齋藤道三が足利義晴を亡ぼして天下を掌握しやうと思つたが上杉武田のために妨げられて行衛を晦します。前年から法性の兜で争つて居た上杉武田は三年間休戦して反叛人の道三を索すここに盡力しそのためには上杉は景勝武田は勝頼と各々一子の首を暗けます山本勘助の子の横藏は義晴將軍の夫人と遺子を扶けて信州更科に匿つて置いたが夫人が病死したので遺児の松壽丸を我子に仕立て、武田信玄の軍師にならんとして故意と非道な行爲をして一家に辛く

當ります。武田家の高坂彈正の妻唐織は桔梗ヶ原で慈悲藏も兄の無理な詞を背きかけて捨てた峯松を抱へて勘助の住家を訪れ慈悲藏を武田方へ召抱へやうとする。慈悲藏は景勝の家臣なので其頼みを拒みます。妻のお種は我子の愛にひかれて決心を鈍らすので慈悲藏は手裏劍を投げて我子を殺します。慈悲藏は愛兒を殺して兄の首を得やうとしたが横藏は其心を察して眼を疵つけ、先きに雪中の筈掘りに托つて探がさうとした六韜三略を慈悲藏に與へ自分は父の名山本勘助を繼いで武田家へ隨身します。慈悲藏は直江山城守に歸つて互に忠勤を勵むさいふ筋であります。

十種香の段より狐火迄は四段目の切

勘助物語の段

竹本大隅太夫
鶴澤道八

人形

女房お種 桐竹紋十郎
弟慈悲藏 吉田玉松
後に直江山城守
妻唐織 吉田光之助
母越路 吉田小兵吉
兄横藏 吉田榮三
後に山本勘助

十種香の段

竹本土佐太夫
野澤吉兵衛

でこの段に織込まれたるところを申
ますと、上杉武田兩家和睦の爲さて
義晴の後室手羽女御前が勝頼と八重
が姫とを許嫁させます。大切には
道三が滅亡し、勝頼八重垣姫は芽出
度夫婦になるのです。十種香の場の
勝頼は實の勝頼で先に切腹したのは
花造りの養作であつたのです。仍ち
其處に取替子の面白さが湧いて来る
のです。濡衣は養作と通じてゐまし
た。濡衣は齋藤道三の娘であります
道三は菊造りの關兵衛で上杉へ忍び
勝頼も亦花作りとなつて上杉へ忍び
入つてゐたものです。狐火の水渡り
の事は支那西湖の故事であるのを諷
訪湖へ持て来たものであります。

桔梗ヶ原の段

M 名も山深き信濃路に、優しき花
の名に呼び、爰そ桔梗ヶ原とかや
甲斐と越後の領分に、分けて立てた
るさい目の塙所、秣を刈りにやつこ
らさ、一本きめた刀より、研立つ鎌
でぐわツさぐわさ、踏みあらしたる
名々が、主の威光を薊塙の領。是も
同じく二人連、籠に柎を指荷ひ、見
て憐りのごつてう聲。詞ヤ下主め
うらむ部屋では、ついに見た事もな
いしやつ煩共、誰に斷り此秣を刈ほ
した。悪く言譯ひるいだら、二人共
に首が飛ぶ。盗人めらと云はせも立
てず。詞ヤア下主の口から下主呼ば
り、しやらくさい。恭くも甲州の
主、信玄公のお馬の飼料、うねらが

狐火の段

竹本南部太夫

野澤吉彌

鶴澤友平
鶴澤右衛門
鶴澤清二

琴野澤團三郎
野澤勝三郎

人形

娘八重垣姫 吉田文五郎

腰元濡衣 桐竹政龜

長尾鎌信 桐竹門造

白須賀六郎 吉田市松

花造り簀作 吉田扇太郎

原小文治 吉田文作

知つた事でない、すつこんでけつか
れど、猶も引きぬく手先を捉へ。
詞ヤイ此印か目に見えぬか、甲斐の
領分は是より東、西は越後領分を書
て有るは、うぬらが目にかゝらぬか
盗人さいふたが誤りか。サア、何
さゝきめ付られ、返答こつり後か
ら、握り拳を二つ三つ。詞ヤア傍輩
をふたれては、後日に主君へ云譯立
たぬ。やぶれかぶれと二人の奴、い
ごみ争ふ折こそあれ。詞兩人共にし
づまれと、鞆の裾げはらし、高
坂彈正が妻唐織、越名彈正の女房入
江、夫と指圖に娼共、用意の腰か
け奥家老の女房と見るより下部共、
わかつてこそは躡まる。入江邊に心
を付け、詞誰ぞと思へばお蔵の沓藏
百内、何故の争ぞ、事によりては

聞捨てられず、包ます語れと尋ね
ば。詞ハイ、喧嘩の元は馬の飼
料、信玄殿の家來さぬかし、此方の
領地へ踏込み、刃あらせし狼藉者、
我々に見付られ、云譯なさの揃合さ
語る中より最うよい。詞夫れで
さつぱり様子が知れた。國が變れば
心迄、變れば變はる。甲斐の國は、
すべて盜賊はやりしと、人の噂も嘘
ではないと、當てこすられて唐織も
勃とせしが押しづめ。詞互にお主
の確執より、おのづこ隔たる兩家の
中、家來の仕落は幾重にも、お詫申
す筈なれ共、只今のお詞に、すべて
甲州には、盜賊有りとおつしやつた
其一言も承りた。チ、唐織様と
した事も、何の根間に及ぶ事。元此
信濃は村上左衛門義清殿の領地なり

しや、謙信様さ信玄様、兩人して切
り取り給ひ、此所にさい目の印、夫
れを知りつゝ狼藉せしは、あなたの
御家來、國の守の扶持人さへ是じや
物、ましてや町人百姓は、猶以て狼
藉するは知れた事。イヤおつしやん
な、印有りさは云ひながら、一つに
續し原なれば、過て踏み越えしも
いはゞ下郎の苧取る草。イヤ下郎
にもせよ、誰にもせよ、其過失をさ
せまい爲め、建てたる樺木は國家の
禁制、花咲く木々の枝までも、折取
るまじと記せしを、手折れば則ち落花
狼藉、此領分の印に限らず、譬へ白
紙に書くまでも、事を制する理に等
しく、是皆國の教として、掟を守る
は貴人より、下々の掟とする、詞謙
信様の息のかゝつた領地へ踏込、草

一筋でも苧り取つたは、國を盗むも
同じ事、其儘に指し置ては、夫彈
正の落度、女房の身として見て居ら
れず、高坂様はともあれ私が夫彈
正殿、ついに一度も名を穢せし事な
ければ、お前の殿御さ一口には、ほん
に言ふても下さんすな。詞コリヤ面
白い聞所、お前の殿御が執權なら、
私や夫も執權職。イエ／＼そりやお
前の胸一つ、深い様子は知られ共、
侍衆の口癖にも、高坂様は逃彈正
こちらの夫は鎗彈正、人に勝れた鎗の
上手さ、逃足早いお侍さば、異名
さへ違ふ物、まして心の内外も違ひ
やんすさ、ほのめかす。詞イヤコレ
入江様、武士の身は情によつて、退
くも逃るも軍のならひ。チ、好い口
な事おつしやるな、情でそんな異名

を取る、武士の法がござんすかさ、
いはれて唐織堂惑の、何ぞせんかた
此の場の無念、廣言憎しと思へ共、
入込だ落度さいひ、夫をさみする詞
の端、聞くにつらさも彌増さる、涙
隠して入江様。詞花によそへ、名に
顯はし、非を改るお前の存分、か
へす詞も家來の仕落、今は此儘歸る
共、滿れば缺る道理にて、今日のお
禮は重れて急度。詞チ、そりやおつ
しやる迄もない、私や方に非太刀は
受けぬ、此以後主人の領分へ、露程
もお障り有らば、二度さ赦しは致さ
ぬぞ、殘す詞も針の先、眞綿に包む
唐織が、立ち寄る所をさむる下部
是非も涙の道筋を、左右へ、こそは
別れ行く。爰に信州、筑摩郡の邊に
住む、慈悲藏さ云ふ者有り、生得親

に孝心の、道は昔の郭巨にも、かはらで積る年の數、三十路の上は漸々たる懷の、内曇なる冬の空、寒さを凌ぐ種ならで、歎の種之形振も、茫然として予めり。詞ハ、誠や人間の吉凶は、生るゝ時の運に任すといふ、母の胎内を出でしより、誕生の祝儀さて、ざんざ諷ふ悦びは、貴人高位はいふに又ばす、下萬臣の我々迄も、悦びを悦びを重るが親子の縁、夫に引かへ其方は、わつか慈悲藏が作さ生れ來るもそちが因果、親の心子知らずと、我肌付くれば現なく、結ぶ榮華も夢の夢、頑是なければ聞いてくれ。詞親として子を捨つるは、人間ならぬ境界と笑ひし此身に廻り來て、今といふ今、其方を爰

に捨置き、此親が獨りの母へ孝の爲め、捨つれば拾ふ神佛の、力をかつて成長せよ、親と思ふな、子でないご、思ひ切つても切り兼ねる、産みの母が歎きといひ、我も不愍さ身にせまれど、そちをかばへば不幸と成り、孝を立てればそちが難義、理にせまりたり思ひ子を、捨つる此身の孝行より、捨てらるゝおこごが孝行惨いごばし思ふなよ、云譯涙目も明かれば、そつご傍に置く土の、上に臥したる稚子が、わつご泣き出す、聲に恫くり抱き上げ、泣くを道理と此所かしこ。詞山を越えて里へ往たり土産の見納めと、抱きしむればすやく顔、遠む童の氣散じと、打ち守りく、名は慈悲藏の慈悲もなく、今目前に捨て置いて、歸るごし

らぬ心根を、思ひ出だせば不愍やごいご涙のやるせなき。詞ハア我ながらあやまつたり、心弱くて叶はじご、包み廻せ衣の香の、思ひば二重胸の闇、元の所へ押直せご、知らぬ子供の寢入ばな、一世の別れと絆言を、跡に残して雪國の、つもる歎きごしられたり、かゝる折ふし、田妻の國の執權、高坂彈正時綱、供人數多引具して當所筑摩の御社へ、詣の道も棒木の傍、件の捨子に眼を配べり。詞人首稀な街道に、捨られし稚子は、犬狼の餌食は治定、見捨るも本意ならずと、家來をさゝめ歩み寄り。詞ム、最早嬰兒といふでもなく、男子ご見えて氣高き寢顔、卑しからざる者の作、何故爰に捨置き、仔細はいかにと、見廻す小袖の付紐

に、付けたる下札手に取上げ。詞何々甲州の住人山本勘助も、讀みも終らず不思議の顔色。詞此山本勘助といふは、生國は三河の者、山賊に見えて魂は異國の韓信、孔明にも劣らぬ軍者、主人豫て御懇望、かゝる亂世の其中でも、諸方に招く今日只今、此稚子に名を記し、捨てたる主こそ芳しき。勘助を味方に入る、信玄公へよき土産。ヤア／＼者共、身も屋敷へ連歸れど、詞にはつこ若黨仲間、抱き取らんとする所。詞高坂殿暫くこ、聲をかけたる立派の侍家來につかせし鎗印、長尾入道謙信が耶黨、越名彈正忠政、我領分に打ち通れば、高坂は甲斐の領、榊木を中に挟箱、不和成る中の兩執權、すは事こそ下部迄、片唾を呑んで聞

き居たる。詞イヤなに高坂殿、只今物かけより承れば、是なる捨子お提げ札に、出本勘助書付しゆ、お拾ひなさるゝ御所存、尤も存すれ共、見ます所双方の領分へ、かゝり合せし上げ、貴殿のまゝにも成ますまい、手前の主人長尾謙信、日頃望みし折に幸ひ、其姓名を書き顯し、爰に捨てしは某が、願ふてもなき忠義の一品、貴殿に遣つては武士が立たぬ。是非連れて歸りたくば、彈正が首諸共、左もない中はいつかな叶はぬ。ホ、さい目の論なら金輪際捨ばにやならぬ稚子も、踏んだる足は手前の領分。イヤ左に非ず、物の始めを頭と云へば、此方の領分を枕としたる山本勘助、越後の國の旗大将、見事貴殿は拾ひめさる

か。チ、云ふにや及ぶ、我方へ踏延したる足元が、肝心要の甲斐の國、高坂彈正も拾ふて見せう。イヤ越名彈正が連れ歸る。イヤならぬこの刀の柄、理を非にさせぬ言葉詰。争ひ爰に二人の女房、こくより立聞く此場の時宜、見やる眼も角菱の、めい／＼夫を押し隔て、高坂が妻威儀繕ひ。及ばぬ私の一思案、女の差出がましけれど、彈正殿聞かしてやんせ。詞甲斐と越後の領分へ、捨置きし稚子は、兩家に望む山本勘助、是を手筋に召抱える、お前方の胸の内、一方へ拾はれては、是非一方の國の恥其争ひの基となり、肝心の此子に乳も呑まさず、若しもの事が有つたらば、お望みも水の泡、何にもせよ兩方より、乳房含まし其時に、いづれ

へなりこそ呑付く方、夫を印にお拾ひあらば、ごちらにひけも劣りもないこ、私や思へども後や先、思案してたべ我夫と、流石女の智慧の海、實に高坂が妻なりし。詞女房出かした。争ひ止むる乳房の鬪取、幸ひ其方が持合せし、乳を與へて試せん彈正殿も相應な、乳母でも有らば出だされよと、入江に當てたる言葉の端。聞くより嚇させき立つ入江。お

かもじ様の御思案に、鼻毛延した今のお言葉。詞越名彈正忠政も女房、乳母奉公は致さぬぞ、今一言おつしやつたら、赦しはせぬと腹立聲。詞ヤイ／＼馬鹿者、大事を前に聞きながら、無益の舌の根動かすな。イヤなに高坂殿、貢ふた子に教へられるさやらで、内室の言葉に服し、女房

々々乳を勧め、ごちらへなりとも方を付け、此場の別れば如何ござらう。ホ、そりや此方も望む所、呑むか呑まぬは互の運づく。唐織早くこすいめられ。だくつく胸も押しづめ抱上ぐれば目をばつちり、明けて三つの稚子が、わつこ泣出す口の内、乳房含めて嘘しても、呑む體更に見えざれば、見合す夫婦も顔と顔。詞コレ申し唐織様。何ぼう勧めさしやんしても、子供はごうでも正直な、私か代るご抱る取る入江。心に拜む神よりも、頼みに思ふ此乳を、たつた一口呑んでたもこ、揺振り歩けごけがな事、猶も正體泣叫けぶ。聲を止めんご手に汗を、握り詰めたるいたいけも、憎やご拗れて置く露の、頼みも綱も切れ果てし、入江が思ひ

唐織も、残り多きに又立寄り、嘘し宿めて抱上ぐれば、泣止む不思議女房より、高坂彈正大に悦ぶ。詞軍師山本勘助、信玄公の御味方、言はせも立てず。ヤア／＼くらい、詞兩方共に呑付かれれば、未だ善悪知れざる中、其方が連れ歸へる。其譚聞かんご詰めかくる。ホ、合點行かすばよく聞かれよ。入江殿も抱上ぐれば、泣くは治定。あの如く身も女房が手に在る中、泣かぬも縁有る是證據。又二ツには、甲州の住人、山本勘助ごあるからは、紛ふ方なき手前の領分。最前ちらご承りしむ、越後領へ指さば、此後は赦さぬこやら、ナソレ、御内實の言葉も有れば是連もまづ其如く、稚けれごも甲州の町人、其元がお構ひあらば、却つ

て狼藉國賊の、名を取るか彈正殿に
先にかけてたる言葉の裏釘、折返され
てさしもの彈正、返答せき切る女房
入江。思へば無念と唐織が、抱きし
稚子無理やりに引取れば、わつと泣
く。是は無禮な入江様。詞さつきの
喧嘩に負けたるかばり、其子ばかり
は叶はぬと、彼方此方と挑み合ふ、
裳ほらく妻と妻、顔はほのめく薄
櫻、亂れ散つてぞ争ふ風情、一度に
わくる夫と夫。中にも高坂聲勵まし
實にやいたつて正直は、頭に宿る神
の慈悲、一陽の春を待つ。雪中の梅
にも優る主君の悦び、此身の忠義。
さればいな、お慈悲深い信女様の、
御威勢が顯れて、私か無念もたつた
今。サア申し入江様、最前のお言葉
に、お前の殿御を何とやらおつしや

つたが、今一言御所望と、囀る女房
詞ホ、聞きたくば名乗つて聞け
ん。長尾入道謙信の郎黨、越名彈正
鎗彈正。イヤモ天晴れ手練の此鎗先
受けてはたまらぬ大事の稚子、連れ
て手前は逃彈正。唐織來れと立別る
、胸に一物二人の彈正、爰に捨子
の隨一と、其名も高き山本氏、伴ひ
歸るぞ、ゆゑしけれ。

景勝下駄の段

M 秋の末より信濃路は、野山も家
も降りむ、雪の中なる白髪の雪、女
ながらも故有つて、男のすなる名を
名乗る、山本勘助と人毎に、岩間の
水の首絶えて、木葉の笥二つ三つ、
年も幼げ稚子を、嫌すお種か手枕に
寢兒か守は何處へ行つた、山の薪を

ふいさつき、さらば爰らで一休。詞
お種女郎冷えますの。チ、正五郎様
月助様、雪吹で外は歩かれまい、お
茶も沸いてござんす。いやく構ふ
まい。子供は手か放されぬ。慈悲藏
殿は留主か、今日もけうと寄り合ふ
と彼の人の噂、お袋への孝行は申す
も愚い。兄への深切、ほんの子は次に
して、兄貴の息子の其次郎吉を、大
切にしらるゝ、女天の衆の心意氣、名
も慈悲藏といふは道理。サレバイノ
夫れに又兄の横藏殿、兄弟とてあの
様にも違ふ物か、親への不孝さ、弟
へのむごさ、親兄弟にさへあれちや
もの、村中で持餘すが道理、外を家
と出歩いて、隣邊へだれれ込、人
の娘、下女婢、當り合ひに孕まし、
其のおこもりのあの小伴も、親に似

た子の鬼子であらうと、口はさがない
 山道を、ゆがまぬ武士の梓弓、胸
 の袋に押し包む、孝をはづさぬ慈悲
 藏が、獵漁も母の爲め、流れに添
 みて立歸る。詞ナ、孝行者お歸りか
 佛性な慈悲藏殿、殺生に出られたも
 お袋への養ひか、夫程にさしやつて
 も、氣に入らぬあ婆様は、さりさは
 強つい片意地者。ア、これ、勿
 體無い事言ふて下さんすな、假令身
 を粉に碎いても、胎内に有るから、
 今日迄の親の苦勞に、比べて見れば
 百分一、あの鳩部屋の鳥でさへ、鳩
 に三枝の禮有るまで、諸鳥に勝れて
 孝行な鳥、何處からとも無う此家の
 軒に集つて来たのも、慈悲藏が心少
 しは通じ、類を以つて集つたかと思
 ふて、嬉しう思ひます。成程夫はこ

ちさらも、さる書物で見置いて。
 鳥は親の養ひを、育くみ返すといふ
 本文、俺が毎晩女房に、孝行にする
 心も通じて、烏ちがあくくかの顔
 去んで見やうと、出で、行く。詞母
 者人は最前から、未だお休みなされ
 てか、炬燵でお風引かしますな。お
 目の覺めぬ其中に、お肴料理して上
 げん、次郎吉も寝入つたか。ハイ此
 子が機嫌よふ育つに付けても、氣に
 かゝるは峰松も事。詞ほんに兄御の横
 藏様。いかに我子でないまで、捨て
 仕舞へど無理ばかり、お前が外へ
 出やしやんすよ、私を女房にせうの
 何のこ、辛い悲しい事聞くと、お前
 の孝行立てる爲さ、辛抱するにもし
 られぬは、眞實な子を胸慈な、餘所
 へ遣つたさ云はしやんすが、まあ其

先は何國の誰。詞ハテ夫を問ふが最
 う未練、氣遣ひしやんな、此貧家に
 置かうより、乳母に乳母を付ける結
 構な内へ養子にやつた、彼奴はきつ
 い果報者。最う思ひ出ださずと、こ
 んと捨てたと思ふて居や。病患ひと
 いふ事も有る、萬一先で死んだら、
 無い昔ちやと諦めて、俺や居る氣ぢ
 やと、云ひながら、犬狼の餌食と
 も、なりはせぬかこ子を思ふ、心は
 一つ一間の中、そつと窺ひ、是は扱
 詞寝入つてござるかと思へば、裏へ
 出て御氣丈千萬、お炬燵に火も有る
 か、追つけ御膳の用意もしやと、片
 時忘れぬ孝心は、又も類は嵐吹く、
 音も雪吹に高足駄、踏分け尋れ来る
 人は長尾三郎景勝、萬卒は求め易く
 一將は得難しと、此隠れ家の弓取を

幕ふて一人門の口、二重の腰の白妙に、枝も撓げの雪折竹、杖さ我子に助けられて庭に佇む老女の風情。詞申し、此大雪に、さりさては冷えまする、蒲團の上にござつてさへ、御老體の身の上、平にあれへと取る手を拂ひ。詞七十に餘つて愚鈍にはなつたれど、子供に物は教へられぬすべて親に仕へるに、起伏の介抱は誰もする、何事に寄らず、親の心に背かぬ様に、するの眞の孝行。寢てばかり居るも氣詰りに、雪の景色を見やうと思ふ、母が心を妨ぐるは何ぞ不孝で有るまいか。ア、一々誤り奉る。其段には心付かず、お年寄られて一日々々、御氣力の落ちるが悲しく、今日も猶に出で、元氣を養ふ谷川の、ますくお達者なる

様と志を捧げ物、賞翫なされて下されかし。詞イヤ、物の命を取る、夫が何の養ひ、眞實親の養ひなら、遠い山川の珍物より、つい裏にある竹藪の、筍を掘つて来い。ハア夫れは御意ではござれども、此寒の中に筍が。サア有る物を取つて来るは、子供でもする事。無い物を取り寄せるも眞の孝行。斯ういはい母の難題、吩咐ると思はふも、此位の難題に困る様な器量では、智者さ呼ばれて人に知らるゝ、弓取りにはならぬそよ。わらばお夫は天下に聞えし軍師、一生主人を取らず、過ぎされた忘僅、兄弟の子が器量を見定めるまでは、女ながらも夫の名を付け、山本勘助と名乗る此母。二人の内に勘助といふ名を譲り、父の軍法

奥義の巻を傳へやうと思へども、夫では中々勘助にはなれぬ。サア其苗跡を受たさに、心を盡す此の慈悲藏ソレ、其名が欲しさに孝行を盡すは、眞實の孝ではない。上皮の偽りは表裏。コレ夫はお情けない、苗氏の望むも出世して、母人の悦び顔、拜みたいばかり、兄者人の心入れさ、一つに思し下さるゝは、餘り無情い御心さ、雪に喰ひ付き落涙に老母は猶も腹立て聲。詞コリヤ、何ば利巧に言ひ廻しても、此の年月膝元を離れ、他國して、今日此頃俄かの親切はれが偽りといふ證據。儻も心に引競ら、兄を不幸さ云ひなす悪心、思へば見るもいまはしき、杖振り上げて打んます。老の力身に踏み挫く、駒下駄飛でよるめく足。コハ危なや

抱きこむれば。詞イヤくく、儂が世語は受ぬわい。其處退き居れ親と子の、心合さる片端の下駄、景勝隙さず拾ひ取り、御召物は候と、老女が前に押し直し、しごつて頭を下げらる。母つくくご打ち守り。詞じん骨柄只人さも見えぬお侍、賤しい婆に履物を直されしは黄石公に沓を與へし張良が俤。ハテ奥床しい御方ちや、お近付にもなつて、篤とお禮も申したい。詞コリヤ慈悲藏、其方に用はない。立つて行け。ハアはつこ、何か仔細は有磯海、母の心を計り兼ね、是非なく奥へ入りにける。いざ此方へと請すれば、辭する色なく座に直り。詞御推量少しも違はず、黄石公にも劣らぬ軍者、山本氏の御子息を召抱へて

一方の大將と頼まんため、身不肖なれども、越後の城主長尾謙信が嫡子三郎景勝、是まで參上仕らる、禮儀正しく述べられれば。詞扱こそく始めより自然と備はる御眼相。シテ御望みなさるは、兄弟の中、兄か弟か。イヤ景勝が望む所は惣領の横藏。ハテナ最前より御覽の通り、孝行な弟慈悲藏を差し置き、不幸な兄の横藏を、家來になされふと、おつしやるお前のお心は。イヤそりや其方に覺え有る事、諏訪明神の社内にて、面體恰好まつくりと、見届け置いた横藏、是非に身共が所望いたす。ム、左様おつしやれば思ひ當る。よくくと思召さばこそ、大名のお手づから、否やさいはさぬ此の

婆に、下駄を預けたまひしは、天晴敏き殿そかし。詞兄は只今他行なれど、此母が成り變つて、御家來に差上げふ。過分々々、其箱是へご取り寄せて。いかに老女。詞主従さなるからは、一命を捨て、忠義を勵む武士の慣らひ。言ふに及ばず、此方こそ一身を任す云ふ、固めの一品受け取られよ、若し異變あらば身の上たるべし。詞御念は及ばず、其時母が鬘首差し上げるか。家來にするか、二つの安否。後程々々。老女さらばご詞詰め。威風尖き北國武士、越後縮の物馴れて、引かぬ其場の信濃路や、別れてMこそは歸らる。

勤助住家の段
勤助物語の段

「こそは歸らるゝ。木曾山木立あらくれて、無法無徹を老舗にて、名も横藏の筋かい道、草鞋のひも降うづむ、餌竿かたげて門口より、母者人今戻りましたと、聲に老母かほやく顔。詞チ、兄、待兼ねました、此間はまア何處へいて居やつた。ハテこな和郎は、俺も足で俺があるくに、何處へなご飛び次第、飛びついでに戻りがけ、小鳥十羽ほど捕らうと思ふて、顔も足も切れるやうな。道理々々、サ、ちやつこ上りや、草鞋の紐、手づから母の慈悲藏も、足の湯をこる機嫌さる。詞兄者人、お足洗ひましょ。イヤコリヤ

、孝行な兄も體に不孝な弟が手をさへるは穢ららしい、母も洗ふてやりましょ、一人に娘らく一人には甘い女の鼻の先、泥脛突付け。詞エ、若い女の手の觸はるは好いものじやが、乾物の様な母者の手で、情の罪科じや、いか様おれは孝行者此小鳥も晩の夜食に、こなさんに食はずのじやない、焼いて貰うておれが食ふ氣、兎角おれも口さへ養へばこなさんの氣が休まるなう母者人、さうさも、あのまあ孝行な事わいの、サア、炬燵に火もして置いた、ム、こなさんが今迄あつて居て何の恩に着せる事、エ、こりやぬるい水炬燵じや。イヤ、あんまり強つい火は上つて悪い。それがたわけさいふもの、まう此方も追付け火

屋へ行く體、稽古の爲にきつい火にもあつて置かしやれ、サア足もんで下されさ、踏出す兩脛、慈悲藏見兼ね。ドレ私も立寄れば、また差し出るかこしやく者、兄や、斯うかくさ撫でさする、ほんそ息子のくはがら足。詞ア、逆もなら、美しいお種が採んで呉れりやよいに、ハア貴様子守か、峯松は何うした。ハイお差圖の通り、思ひ切つて、一昨日主か何處へやら。ム、捨てしまうたか、よい事々、一體おりや貴様に惚れて居る、時に幸ひも嫌のそげめはてこれて仕まひ、跡に残つた小悴の其の次郎吉、邪冤な餓鬼め、締殺さうかと思ふたれど、あぢなもので、子さいふ者は親よりちつこ可愛いものじや、又た大きくなつたら俺に似

て、孝行をも仕るるかと思ふて、貴様に育てますからば、ノウ慈悲藏、畢竟我身と相合の子、さてもの事に女房も相合にする合點、お種顔らずとウ言やいの、それを否やいふと、慈悲藏が大事なる、この母に當るぞよ、コレしつかしつかも揉ましやれ、エ、まだ火もぬるいと戀の意趣を、炬燵に當る非道者、持てあましてぞ見えにける。折ふし表に先走り。詞山本勸助殿に用事あつて、大僧正武田信玄參上なりと案内に、思ひがけなき夫婦が不審、仔細あらんこ横藏が、起きも直らず空寝入り、ハテ扱て思ひよらぬ大身のお入り、卒爾には母も會はれまい、慈悲藏もてなせ、コレ横藏、是ばしたり何やら言ひく寝入つたさうな、

風邪引きやんなと一問の障子、引立て窺ふ表より。匂ふ留木の高坂が、妻と知られてうづ高き、雪の懐幼な兒を、抱いて幾重の柴の庵、家來を先へ追歸し、行儀正しく打通る訝しなから手を支いて。詞信玄公のお入りと思ひの外なる女中のお名はチ、成る程御不審もつとも、偽りならぬ信玄公の、コレこの寝顔に對面なされと、いふに女房立寄つて。ヤア峯松が、戻つてかき、飛立つばかりの胸押しづめ。詞これは御苦勞さまや、そんなら峯を貰ふて下さりましたはお前様か、いかにお世話さまに。コレく慮相いふまい、甲斐の國へ養ふからは、最早一國の世繼、即ち今日の信玄公、孝心深き慈悲藏ごの、殊に軍術の達人と聞及び

師範もお頼みなされん爲め、わざく見やしやんせ、コレ愛らしい此の信玄が抱へに來た、お受け申されて宜からうと、恩をかけた名將の情は胸にこたゆれど、まぼけた顔で詞コレはしたり、私は此の在所の山賤、鋤鋌の外何も存せぬものを、軍術の師範などは、勿体ない事、おつしやります。コレくこちらの入お前の器量を聞及んでさあるからばきつい譽な事じやぞへ、卑下するも事による。ハテ軍法奥儀は、母様の傳授の巻を譲り受けて。さればいい、夫を貰ふて山本勸助に成つたれば、抱へられまいものでもなければいまだ生もかへぬ中に、軍術の大將のさ、そりや山の芋を蒲焼にするやうなもの、名さへ慈悲藏さて、虫さ

へ得^わ踏^ふみ殺^{ころ}さぬ者^{もの}も、戦^{いくさ}に出て^で人^{ひと}の首^{くび}が、何^{なん}と^として^くこ、取^とつても付^つかぬ顔^{かほ}付^つに、唐^{から}織^{おり}ばつこ胸^{むね}迫^{せま}り。不^ふ調^{てう}法^{ぽう}な女^{おんな}の使^{つかひ}、氣^{いき}に入^いら^いいで被^{おほ}仰^{おほ}るのか。詞^{ことば}何^{なん}うあつても味^{あじ}方^{かた}に付^ついて貰^{もら}えれば、ならぬといふその譯^{わけ}は結^{むす}梗^{きやう}ヶ原^{はら}に此^{この}捨^{すて}子^こ、山^{やま}本^{もと}氏^ぢとある書^{かき}付^つを、印^{しるし}に拾^{ひろ}ひ取^とりは取^とつたれど、サア何^{なん}うも力^{ちから}に及^{およ}ばぬは、肝^{かん}心^{しん}の乳^{ちゆ}に吞^のみ付^つかず、なんぼ抱^だいてつぎ付^つけても、あつちくご指^ささして泣^ないてばかり、此^{この}大^{たい}將^{しやう}に兵^{ひやう}糧^{りやう}が無^なければ命^{いのち}も危^{あや}ふし。その兵^{ひやう}糧^{りやう}をついけるたつきは慈^じ悲^ひ藏^{ざう}ごの、お前^{まへ}の心^{こころ}に有^ありさうな事^{こと}、甲^か斐^ひの國^{くに}へ味^{あじ}方^{かた}についで、夫^{つま}婦^{よめ}して守^{まも}育^{そだ}てうと思^{おも}ふ心^{こころ}は御^ご座^ざせぬか、此^{この}のまあちつこの間^まにコレ何^{なん}處^{どこ}もかも細^{ほそ}つた事^{こと}を見^みやしや

んせ、道^{だう}理^りでもあり、眞^{まこと}實^{じつ}の母^{はは}御^ごの懐^{なごら}を離^{はな}れて、他人^{たにん}の手^てに何^{なん}の育^{そだ}たう、夜^よは得^わ寝^ねず、晝^{ひる}はうつく泣^なき寝^ね入^いりに、寝^ねた顔^{かほ}のいぢらしさ、ほんの見^みる目^めが悲^{かな}しいと、語^{かた}る中^{うち}より女^{によ}房^{ぼう}が、チ可愛^{かわい}や左^さ様^{さま}でござんせうと、ワツと泣^なき出す母^{はは}親^{おや}の、聲^{こゑ}に目^めさまし、しきみ付^つき、縮^{すぶ}る乳^{ちゆ}房^{ぼう}は一人^{ひとり}にて、この手^て柏^{かしは}の二^にた面^{めん}、まゝならぬこそ恨^{うらみ}なれ。一間^{いっけん}に母^{はは}の聲^{こゑ}高^{たか}く。詞^{ことば}コリヤく慈^じ悲^ひ藏^{ざう}、子^こ供^{ども}を餌^えに恩^{おん}にかけて、味^{あじ}方^{かた}にせんご後^{うしろ}きたない信^{しん}玄^{げん}に奉^{ほう}公^{こう}しては武^ぶ士^しが立つまい、さりながら、軍^{ぐん}法^{ぽう}奥^{おく}儀^ぎも傳^{つた}はらず、家^{いへ}の名^な跡^{あと}を繼^つぐ氣^きがなくば、勝^{かつ}手^て次^じ第^{だい}と没^{ぼつ}義^ぎ道^{だう}に言^いひ捨^{すて}て障^{しやう}子^しはたござす。ハアはつと立^たち上^あり、我^{わが}子^こを取^とつて引^ひ離^{はな}し。詞^{ことば}須^{しゆ}彌^み山^{さん}滄^{そう}海^{かい}の恩^{おん}

を受^うくればとて、母^{はは}の恩^{おん}にはいつかなく、信^{しん}玄^{げん}公^{こう}に仕^{つか}ゆる事^{こと}存^{ぞん}じも寄^よらず、變^{へん}改^{がい}申^{まを}す。コリヤ女^{によ}房^{ぼう}、一旦^{いつたん}捨^すてた此^{この}の悴^{せがれ}に、見^みぐるしい何^{なん}ほへる、縁^{えん}に引^ひかれて知^ち行^{ぎやう}取^とつては、末^{すえ}代^だまでの名^な折^せれ、親^{おや}子^この縁^{えん}をさつべりご、切^きつてしまへば信^{しん}玄^{げん}に、恩^{おん}もなく義^ぎ理^りもなし、これ此^{この}竹^{たけ}もその本^{もと}は、竹^{たけ}に雀^{すずめ}も離^{はな}れぬ中^{うち}、今^{いま}餌^えざし竿^{さな}さなる時^{とき}は、鳥^{とり}の爲^{ため}にば仇^{あだ}敵^{たかり}、事^{こと}に依^よつたら親^{おや}子^こ兄弟^{けいぎ}、敵^{たかり}味^{あじ}方^{かた}さなるも武^ぶ士^し道^{だう}、お返^{へん}事^じはこの通^{とほ}り、幼^{ごう}兒^じつれて早^{はや}や歸^{かへ}られよと。詞^{ことば}するごに言^いひ放^{はな}つ。詞^{ことば}ハ此^{この}上^{うへ}は力^{ちから}なしとほ言^いへ、歸^{かへ}つて御^ご主^{しゆ}人^{にん}や夫^{おとこ}に何^{なん}と詞^{ことば}さへ、泣^なく抱^だき立^たち出^でづる。コレノウ峯^{みね}松^{まつ}一世^{いっせい}の別^{わか}れ、せめてイア、此^{この}の乳^{ちゆ}が一^{ひと}口^{くち}吞^のましたいと、慕^{した}ふ女^{によ}

房を引退けて、柴折戸がしやりの表にも、心は残る雪中へ、頑是涙の子を抱きおろし、襦袢の下くさり、括り添へたる後紐垣に結ぶは義理の綱、神や捨て置く竹の子笠、いたいけつむりに打着せて。詞山本の氏を繼ぐ慈悲藏ごのを、軍術の師ご頼まんと、これまで來給ふ信玄公、何うも此まゝでは歸られず、是非とも味方につくさいふ一言を聞くまでは、此信玄は、其許の門口を立去らず、雪に凍えて死すまでも、こゝに座を占め返事を待つ、大將の命助けうご殺さうご、御思案次第、よい返答を頼み入るご、鎮をかけたの雪の笠、思ひを殘し捨て、行く。詞ヤアそんなら坊はまだ行かぬか。コリヤく門には誰もない、よし居てからがあ

かの他人、今傍へ寄るごな、信玄の恩を受けた事になつて、母の一言が反古になる、此實戸の外へ一寸でも出るや否や、夫婦が縁も之きりご、腰さげの紐鐙をくくる酷さは我ながら、いかなる悪魔鬼か蛇か、六韜三略の望ある慈悲藏、慈悲もなさけも知つては居れご、母の詞ばそむかれぬ。詞で、何うで乳房に放れたもの、逆も無い命、凍えて死なば死次第、そちもソレ其子を袖にしては、兄貴への義理が立たぬぞ、ハア何かにまぎれて、大事の孝行怠つたり、ドレ裏へ行つて雪の中の、筒掘つて進ぜうご、篋笠取つて打ちかつぎ、あつき親子の縁を斷つ、緞ふりかたげ。詞、此の寒氣に荒男でさへたまらぬもの、餘尺もない身体に、ア、子を捨

つる敷は有れご、親の詞は捨て難き文彌、裏の敷へご踏分ける、雪より先へいごし子の、埋もれ死なん不慰やご、見合す顔に降る涙、鬩争ふ濡れ翅、情る、夫の後ろ影。いかに望めあればさて、天にも地にも一人子を、ようむごたらしう捨てられた。詞、今の女中も氣の強い、置いて去ぬ程なら、お家に寢さして去んだがよい、可愛やく、餓じからうに、ちつごの間など抱きたいご、任せぬ辛さ次郎吉を、漸々そつご下に置きさし足ながら庭に下り。覗けば門にしようぼりご。詞ヤレ坊よ、それがまあ何ご命もあるものご、明けんすれご、鐙に、錠の代りの眞結びは、酷やつれなさあせる程、雪にしめつて開かぬ戸に乳たいくも絶えく

の、風にうたてや次郎吉が、ワツミ泣く聲、ハア悲しやこ、またかけ戻り抱き上げて雪やころ、ん霞やころいん、こはそも何んたる因果ぞや、此の子憎いぢやなれども、我子に乳が呑ましたい、コレちつこの間く、寝入つてたもいのこと、心も空ばかきくらし、又降りしきる白雪に外に泣く聲八寒地獄、劔を呑むより身にこたへ、思はず知らずまるび下り、砕けよ破れよの念方に、外る、戸より身は先へ、コリヤ坊よく我子を肌はだに抱き締め、流涕なみだこがれ泣く聲に、唐織小蔭からむすをつゝと出で、詞信玄公しんげんこうを抱き上げ、乳房ちちうぶをふくめ参らすからは、慈悲藏じひざうは最早此方の味方、夫かたに知らせ喜ばせんと、勇んで館へ立歸る。はつこお種も心づき

うろつくひまに何處より、懐劔なつかいてうご峯松みねまつが、肝先貫ぬき息絶えたり。コハ何事なにごとと驚くうち、次郎吉引立て横藏よこざうが、一間をさして駈け入れば。詞ム、扱せば我子の害がいがいになるも横藏よこざうの所爲しわざぢやの、義理も情も最うこれまで、敵を取らいで置かうかと、死骸しががいを小脇こわきにかい込んで、常には弱き女氣も、怨うらみに強き力帶ちからおび、奥へうかいふ忍しのび足、早や日も暮くれに近づきて、鐘かね孝行かうぎやうの道みちぞとて、古きためしの跡を追ふ、干故かぬごとの闇やみに白妙しらたえの、道も涙に見え分わかかず。詞なんば拙ちやくつても筒たけのこがあらう様さまはなれど、親を思ふ一心しんをあはれみ、天より授かる事もやさ心にこめて一尺二尺、底そこは白羽しろはの鳩一羽とび、飛んで折しも飼ひなれし鳥も心こゝろや有るやらんと、又掘り返せ

ばまた一羽、友呼ともよび誘まよふ生類なまがたの、有様ありさまつくづく打守うちまもり。詞最早入相いちばんいりあひ、諸鳥しよ塘たにに歸かへる頃とき、一羽ならず二羽三羽集あつり來きたるはハテ心得こころえず、誠まことや兵器へいきある地ちには、鳥群とりぐらをなすさいへり、我父わがちちは日本の軍師ぐんし、此所このところにて世よを去り給たまふ。一生いっせいそらんじ置おかれたる、六韜りくたう三略さんりやくの秘密ひみつの巻まき、此の下に埋うづめ置おかれしやらん。扱せば我が孝心かうじん天てんに通つうじ、鳥類とりるいこれを知らせしか、ハア有難ありがたい忝かたじけなし、心勇こゝろいさんで拙ちやくうがつ、雪ゆきも散亂さんらんむら雀すずめ、はつこ立つたる數かずの中なか、うかやふ兄あにが煩わづら魂たま。詞ム、野のに伏勢ふくせいある時は、歸雁きげん列れつを亂みだる、油あぶら斷たの塘たにを窺のぞふ悪鳥あくちよ、殺さうと生かさうと手ての中なかの雀すずめ、鎚たに手てこたへ此下このしたを。コリヤ待まちて慈悲藏じひざう、埋うづんである傳授でんじゆの一巻いっくわん、我われには遣わやぬ、兄あにが出

世の種にするわい。兄者人、そりやお前無理でござりましょ。サイヤイ無理いふも兄の威光、阿呆鳥の孝行でかし、邪魔な汝から仕舞ふて取るごつこいさうばなりませまい、苗字を繼ぐは此の慈悲藏、見事われむ。ついで見せう、小癩な退けと鋤と鍬落花微塵の雪飛んで、合掘出す箱の二人が争ひ。合道と非道の二筋を、さぐりこけつ掴み合ふ、はずみにがばさ取り落し、池にざんぶと水烟り騒ぐ群鳥、兄弟も、不思議と見ざる後より障子ぐわりと母の老女、兩人待て。詞兄弟共に武士となり、主人を取るべき時節到来、雪の中の笥を掘出したる慈悲藏、今こそ母も心に叶ふた、天晴れ孝行出かしたくそちは最前言ひ付けた通り、裏口四

方に氣をつけよ、ナ合點か。ハア委細承知仕るさかけ入る弟、横藏は池中の箱を引上げて、母の御前にさし出だせば、詞サア、兄、そなたには分けてよい主を取らする、即ち主人より下されし、装束も改めさせんさ、しづく、奥の白臺に、無紋の袴、白小袖、かたへに三方九寸五分、我子の前に直し置く。詞母者人こりや何じや、いやさコレこの白装束は何の爲。チ、それこそは冥土のはれ着、只今そちが首打つて、身代りに立てるのじやばやい、エ、イ滅相な事ばかり、此の首を身代りせば、そりやまあ誰か。今日そちが主人さたのみし、長尾三郎景勝公の御身代り聞及ぶ武田信玄、越後の謙信室町の御所に於て、互に我子の首打つて、

心底をあらはさんさ、契約ある由、最前そちを召抱へんきて來られし、景勝が面体そちが顔にさも似たり、扱はさ母が推量違はず、箱の中に殘されし、此の一通に委細の様子、詳かに記されたり、主従なるからば命は君に捧げしもの、武士の因果さあきらめて、潔う死んで呉れ、コレ、よう思うてみやしやれいかに主じやきて、まだ知行も呉れぬ内に、殺そうさいふやうな、胴慾な主があるものか、イヤ、どうこの主従さんと變改。イヤ左うはなるまい、いつぞや諏訪の森に於て、殺さる、そちが命、助け置かれし景勝の恩、忘れはせまい、その時の情は今身代りに立てんため、智謀の良に罹りしこそ知らざるか、恩を知らぬ

ば人ではないぞよ、たこへ逃げてもし
此の家のぐるりは、景勝の家來取巻
いて、一寸も遁ればない、切腹する
か、但しは母の手に掛けうか、サア
く何さく詰めかけられ、籠中
の鳥の目ばうるく、透を見て逃
だす、膝にはつしと手裏剣に、尻居
にごつたり詮方なく。詞是非に及ば
ぬ、もうこれまでと腹切り刀取るよ
り早く、右の眼に突込んだり、さす
がの老母も不審顔、流るゝ血を押拭
ひ押拭ひ。母者人、景勝に似たに依
つて身代りに立てたがる、小面倒な
此のつらに、斯う疵付けて相好變へ
れば、もう身代りの役には立つまい
今日只今父が苗字を受けつぎ、山本
勘助晴義、軍法奥儀を胸に貯へ、三
略の巻より大切なこの命、ヤアく

謙信が家來直江山城之助種綱、それ
へ出よ、言ひ聞かす仔細ありと、呼
ばる聲に一の間の内、見参さうと慈
悲藏も、優美の骨柄長上下爽やかに
詞某長尾の家臣たる事、深く包ん
で故郷へ歸りし其の仔細、母人には
密かに語り、兼て申し受けたる兄者
人の命、現在の子を捨てたも、否應
言はさぬ命の無心、去ながら、眼を
くつて身を全うする大丈夫の魂、
あつたら勇士を殺すは残念、長く謙
信に仕へ、忠勤を盡さるべし、と言
はせとあえず嘲笑ひ。詞おろかく
謙信づれが家來には、汝等も分相應
身が主には釣合はぬ、まこと山本勘
助があむむる主人は、悉くも足利
十三代の公達、松壽君、これへ誘ひ
申されよと、詞の下に高坂が、妻の

唐織次郎吉をかしづき申せば。山城
親子、ハアはつこばかり飛びしと
恐れ入つたるばかりなり。勘助まん
中にどつかま直り、詞ヤイ山城、只
今打つたるこの手裏剣は、先年室町
の館にて、此の公達の御母、賤の方
を奪ひ取り立退、折から、景勝目あ
てに打ちかけたる我小柄、只今我手
へ慥に落手、山本の苗字を引興さん
と軍學に心をこらす所に、武田信玄
大僧正、妾をやつし只一人、密に庵
へ來らせ給ひ。詞足利の行末覺束な
し、汝我が力さ成つて、事を媒れと
名將の一言心魂に徹し、ハア畏り
奉るも、即座の領筆、兵矢の誓ひ
詞チ、其時に此母も只人ならずと思
ふたが、扱は武田信玄公と主従の契
約仕やつたの、チ、サ、大魚は小池

に任ます、鶴は枯木に巢を喰はず、
 智勇兼備の大將に、頼まれ申せし身
 の面目、直ぐ様都に馳せ上り合
 う時しも箱の騒動、詞義暗公はあ
 えなき御最期、ハツア詮方なし、懐
 胎の賤の方、人手には渡さじと、忍
 び入つて御家の白旗もろ共守り奉
 り、合立退く箱は八方に、提灯炬火
 散る花の、合都をあこに遠近の、雪
 の信濃路こ、かしこ、合月の更科の
 片山里に、人知れずかくまうとば、
 さしもの母も御存じあるまい。詞知
 らなんだく、コレ／＼左うして、
 御母賤の方の在所は何國、サ、い、
 さうじやん。ハテ申すも便なきこ
 さながら、憂きこもつもる産後のな
 やみ、果敢なくこの世を去り給ふ、
 詞あこに残りしあの公達、勿体なく

も我子と偽り、治郎吉よ治郎吉よと
 呼ぶ度々の空恐ろしき口惜さ、弟
 嫁が乳を幸ひ、我子を捨てさせ、他
 家のあの子を養育する我心底、我
 儘無法は一物ありと悟りし老母、雪
 の中の筈、を掘つて見よとばあつ
 ばれ明察、げに勘助が母人ぞや、穢
 をいさひ今日まで、埋み置きたる雪
 中の、筈これにありと箱おつとつて
 さし上ぐる、源家正統武將の白旗、
 詞神明を頭にいたやく善兵の旗擧げ
 謙信親子只今より、此勘助も幕下に
 付けと立ち歸つて言ひ聞かせよと、
 一つの眼に天が下、見下す富士の山
 本勘助、三國無双の弓取りなり。山
 城大きに感じ入り。詞信玄景勝不和
 なるも、互に心を疑ひ合ふ、忠臣觀
 符を合すが如し、君御在家知る上は

景勝公の言譯立ちて、身代りにばも
 う及ばぬ、追付兩家和睦の基。成程
 々々最前裏で直々に、様子を聞いた
 信玄公も勘助様、言ひ合せのある事
 は、一家中へもお隠しあれば、夫高
 坂も露知らず、抱へに來た慈悲藏殿
 は、思ひもよらぬ長尾の御家來、君
 の御事始めて聞いた使の面目、此上
 なしと喜びの、中に歡きは一人の孫
 かう心かたけるなら仕やうもやうも
 あらうもの、詞此婆が偏屈から、信
 玄方の恩うけては、立たぬと云ふた
 一言で、直江も手にかけて殺しやつた
 は、即ち母も殺したも向然、コレ／＼
 嫁女、ゆるして。ア、勿體ない
 乳房にはなれて死ぬ命、思はず知ら
 すお主様のお役に立つたも因縁と、
 泣かぬ顔するいちらしき、母は一間

の一巻たづさへ。詞不幸と見えし勸助は、却つて父の名を上げる。二十四孝にまさりし孝、器量もそろふ二人の子供、軍法傳授のこの一巻、頂戴しやささし置けば。勸助取つて押戴き。詞、父の苗字をたまれば、勸助が身の規模は立つ、母方の氏をつぐ弟直江の母への孝、其徳によつて此の一巻は、其方に下さるゝ、御恩を忘れず猶この上、孝行忘るゝ事なかれ、景勝の忠臣は、我胸中に徹したれども、詞心得がたき親謙信、君に弓引く逆臣ならば、汝も従ふ心やいかに、言ふにや及ぶ、我子を切つて二君に仕へぬ此山城、兄とば言はさぬ敵味方、この三略の恩を仇、一合戦仕らん。チいさもあらん出かすく、我また主君に仕ふる甲斐

の、天目山にたて籠り、出合ふころは川中島、運に乗じて越後の出城諏訪の城まで押寄せ、さも目ざましき勝負をせんす。詞、はいさぎよし、さりながら、かりにも一旦景勝に、受けたる恩は何と何と。チ、日月にたさへたる、右の眼は越後へ進上、二心なき勇士のかため、母に與へしかたしの下駄、景勝のこゝろざし、捨つるば武士の道ならずと、左の足にしつかさ履き、下り立つ庭の高ひくも、道はゆがまぬ弓取り、直なる竹の根元より、はつしと切つたる旗竿は、詞勢運めでたき大將の合さそふはかしこき御笑顔、眠れる花の死顔に、抱いてゆぶつてすかしても、返らぬ普唐土の、二十四孝をよのあたり、合孟宗竹の筍は、雪

さ消え行く胸の中、氷の上の魚をこる、それは王祥これは他生の縁と縁合黄金の釜より逢ひ難き、この子寶を切りはなす、弟が慈悲のどうよくと、兄が不孝の孝行は、我が日の本に一人の勇士、今に名高き山本氏武田の家の礎と、事跡を世々に残しける。

十種香の段より狐火まで

行水の流さ人の業作む、妾見かばす長上下、悠々として一間を立出で、詞我民間に育ち、人に面を見知られぬを幸ひに、花作りさなつて入込みしは、幼君の御身の上に、若過ちやあらんかき、餘所ながら守護する某それと悟つてか、へしや、ハテ合點の行かぬささしうつむき、思案にふ

さがる一ト間には、館の娘八重垣姫許嫁ある勝頼の、切腹ありし其日より。一ト間所に引籠り、床に繪姿かけまくも、御經讀誦の鈴の音、こなたも同じ松虫の、鳴く音に袖も濡衣が、今日命日の甲ひの、位牌に向ひ手を合せ、詞廣い世界に誰あつて、お前の忌日命日を、甲ふ人も情なや父御の悪事も露知らず、お果なされたお心を、思ひ出す程おいごしい、嗚や未來ば迷ふてござらう、女房の濡衣が、心ばかりの此手向、千部萬部のお經ぞ、思うて成佛して下さんせ、南無阿彌陀佛、誠に今日ば霜月廿日、我身替りに相果し勝頼が命日、暮行く月日も一年餘り南無、幽靈出離生死頓生菩提、詞申し勝頼様、親と親との許嫁、在りし

様子聞くよりも、嫁入する日を待兼れて、お前の姿を繪に書かし、見れば見る程美しい、こんな殿御と添臥しの、身は姫御前の果報ぞ、月にも化にも樂しみは、繪像の傍で十種香の、煙も雪花となりたるか、回向せうさてお姿を、繪にはかゝしはせぬものを、たましひかへす反魂香名畫の力もあるならば、可愛さたつた一ト言の、お聲が聞きたい聞きたいご、繪像の傍に身を打ふし、流涕ごがれ見え給ふ、詞あの泣き聲は八重垣娘よな、我名を呼びし勝頼を、誠の夫と思ひ込み、甲ふ姫と甲ふ濡衣、不慙さもいぢらしさも、云はん方なき二人が心と、そゆる涙にけれむ、詞ア、我ながら不覺の涙と襟かき合せ立上る、後にしよんぼり

濡衣が、詞申し藝作様、合點のゆかぬはあなたのお姿、どうした事で此やうに。オ、不審尤、はからずも謙信に、かゝへられたる衣服大小、テモ扱も、衣紋付きなら上下の召様まで、似たさはおろか矢張其まゝ、かたみこそ今は仇なれこれなくば、忘るゝ事もありなんぞ、讀みしは別れを悲しむ歌、かたみさへちやに我夫に、みぢん變らぬ此お姿、見るにつけても忘れぬ、詞私や輪廻に、迷ふたそうな、御ゆるされてご伏沈む、泣聲もれて一問には、不審立聞く八重垣姫、そつと襖の隙間もる、姿見紡ふ方もなく、ヤア我妻が勝頼様と飛立つ心を押沈め、正しうお果なされしもの、似たさ思ふは心の迷繪像の手前も恥しと、立戻つて手を

合せ、御經讀誦の鈴の音。勝頼公は濡衣も心を察して聲曇り、詞ばなき女の心から、歎くば理り去りながら、定めなき世と諦めよと、諫むる詞こなたには、心空なる其人の、若やながらへおはすかき、思へば戀しくなつかしく、又覗いては繪姿に、見比べるほど生寫、似せて矢張りほん／＼の、勝頼様ぢやないかいのと、思はず一ト間を走り出で、續り付けて泣給へば、はつこ思へごさあらぬ風情、詞こは思ひ寄ざる御仰せ我等藝作と申す花作、漸々只今召しかへられ、衣服大小改めたし新參者勝頼とは覚えなし、御簾相あるなご突放せば、詞ム、何と云やる、今父上にかへられし新參者、花作の藝作とや、自さした事が、餘りよう

似た面ざしの、もしやそれかき心の煩惱、二人の手前恥しなから、詞コレ濡衣、此藝作とやら云ふ人を、そなたは疾うから近付きか。エイ。いやいの、知る人であらうがの。アノお姫様とした事が、たつた今見えたお人、なんのまあ私か。イヤ隠しやんな今の素振、忍ぶ戀路さいふやうな、可愛らしい仲かいのさ、思ひもよらぬ詞に悔り、詞オ、お姫様の仰有る事わいの、人にこそよれ、なんのあなたに勿体ないさ云やるからば、どうでもそなたのしるべの人か、イーエ、さうではなけれ共、大事のお主の目をかすめ、忍び男を捨へるは勿体ないさ申す事で御在ります。ム、すりやしるべの人でなく、殿御でもない人なら、どうぞ今から自

を、可愛がつてたもる様、押付なむ媒を、頼むば濡衣さま／＼と、夕日まばゆく顔に袖、あでやかなりし其風情、詞オ、お姫様とした事がまだお子達と思ひの外、大それたあの藝作殿を。サア見染めたが戀路の始め、後とも云はず今爰で、媒せいと仰有るのか。我折れ、ほんに大名のお娘御さて、油断はならぬ戀のみち、品によつたらお取持ちいたしませうか。コレ／＼濡衣、必らず塵相云ふまいぞ。サア何もかも私か吞込んで、ナ、吞込んでお取持すまい物でもないが、眞實底から藝作殿に御執心でござりますか、ま問はれて猶もあからむ顔。勤する身はいざしらす、姫御前のあられもない、殿御に惚れたま云ふ事が、嘘、偽に云

はれうか、詞其お詞に違ひなくば、何ぞ儘
 な誓紙の證據、それ見た上でお媒、オ、
 それこそ心易い事、其の誓紙さへ書いたら
 ば、詞イエ〜夫もこつちに望がある、私
 が望む誓紙も云ふは、諏訪法性の御兜、そ
 れが盗んで貰ひたい。ヤア何と云やる、諏
 訪法性の御兜を、盗み出せと云やるのは、
 扱てはあなたが勝頼様、と云ふ口押へて、
 詞ハテ滅相な勝頼呼ばはり、みぢん覺のな
 い糞作、兪忽ばしのたまふなと、云ふ顔つ
 れ〜打守り。許嫁計りにて枕交さぬ妹存
 中、おつ〜みあるは無理ならねと、同じ羽
 色の鳥つばさ、人目にそれと分られと、親
 と呼び又つま鳥と呼ぶは、生あるならひぞ
 や、いかに顔が似ればとて、戀しと思ふ
 勝頼様、そも見紛うてあられうか、世にも
 人にも忍ぶなる、御身の上と云乍ら、連添
 ふ私に何遠慮、つかう〜と御身の上、

明して得心さしてたべ、それも叶はぬ事な
 らば、いつそ殺して〜と、縋り付いたる
 恨み泣き、勝頼わざと聲あら〜げ、詞ヤア
 聞きわけなきたはふれ事、いかほどにのた
 まふとも、覺えなき身は下司下郎、餘所の
 見る目もは〜かりあり、そこ退給へと突放
 せば、詞スリヤ何の様に申しても、勝頼様
 ではおはさぬか、ハア、はつとばかりに
 糞作も、差添逆手に取給へば、こは御短慮
 と止むる濡衣、詞イヤ〜放して殺してた
 も、勝頼様でもない人に、戯れ事の恥かし
 や、心の穢れ繪像へ言譯、どうも生きては
 居られぬと、又取直すを猶も押留め、詞オ
 、遣は武家のお姫様天晴なるお志、其お
 心見るからは、勝頼様に達はせませう、ソ
 レ、そこにござる糞作様が、御推量に違は
 ず、あれが誠の勝頼様、ちやつとおあひな
 されませと、突やられてはさすむにも、始

いふは、
 勝頼様
 御推量に違はず、
 あれが誠の勝頼様、
 ちやつとおあひな
 されませと、
 突やられてはさすむにも、
 始

の恨み百分一、聞えませぬが精一ばい、後は互に抱付き、つい濡初に、濡衣も、心ごきつく折柄に、父謙信の聲さして、詞義作は何れに居る。搦尻への返答、時刻移るに立出れば、はつと義作飛しさり、詞御支度よくば直様参上。ホ、委細の事は此の文箱に、片事も早く籠越せ、はつと領掌文箱携へ、搦尻さして急ぎ行く。謙信後を見送つて、詞ヤア／＼者共、用意よくば早來れと、仰せにはつと白須賀六郎、原小文治、更科なんどの譜代の郎黨、御前にすゝめば謙信勇んで、詞今此諏訪の湖に、水閉れば波海は叶はず、搦尻迄は陸路の切所、油断して不覺を取るな、ハア畏り奉るこ、勇み進んでかけりゆく。

後に不審は八重垣姫、申し父上、こそん／＼しい今の有様、何事やらんと尋れば、詞ホ、あれこそは、武田勝頼討手の人數、何に

勝頼様を討手とは、コハそもいかに何故こ驚く二人をはつたと睨め付、詞諏訪法性の兜を、盗み出さんうぬらが巧み、物かけにて聞いたる故、勝頼に使者を云付け、歸りを待つて討取さんと、牒合はせる討手の手配、エイそんなら今の討手の者は、勝頼様を殺さん爲か、ハアはつとばかりにどうさ伏し今日は何なる事なれば、過ぎ去り給ひし我夫に再び逢ふは優曇華と、悦んで居たものな、又も別れになる事は、何の因果ぞ情けなや、父のお慈悲にお命を、どうぞ助け給はれと、口説き歎くに目もやらず、詞ヤア武田方の廻し者、憎き女ご濡衣引たてうぬには尋れる仔細あり、奥へ失せうと小腕ざり、情用捨もあら氣の大將、帳臺深く入り給ふ。思ひにや、焦れてもゆる、野邊の狐火小夜ふけて、狐火や、狐火野邊の野邊の、狐火さよふけて、幾重もれくる爪音

大坂市南區大津門外一丁目番四番

商號 **屋津今** 登記

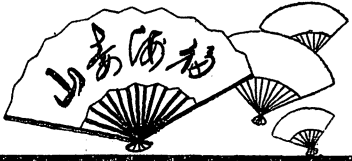
大坂市南區大津門外一丁目番四番

は、君をもうけの奥御殿、こなたは正体涙
 なから、詞アレ〜奥の間で檢校も、諷ふ
 唱歌も今身の上、おいこしいは勝頼様、か
 いる巧みのあるぞこも、知らずばかりぬ御
 身の上、別れとなるもつれない父上、諫め
 ても、歎いても、聞入れもなき胸怒人、娘
 不惑と思はすなら、お命助けて添はせてた
 べと、身を打伏して歎きしが、詞イヤ〜
 泣いてあられぬ所、追手の者より先へ廻り
 勝頼様に此事を、お知らせ申すも近道の、
 諏訪の湖船人に渡り頼まん急かんこ、小
 袂取手も甲斐〜しく、かけ出せしが、イ
 ヤ〜、詞今湖に氷張詰め、船の往
 來も叶はぬよし、歩路をいては女の足、な
 んと追手に追つかれう、知らすにも知らさ
 れず、みす〜夫を見殺しにするは、いか
 なる身の因果、詞ア〜翅かほしい、羽かほ
 しい、さんで行きたい知らせたい、逢いた

い見たいと夫戀ひの、千々に亂るゝ憂き思
 ひ、千年百年泣きあかし、涙に命絶ゆれば
 きて、夫の爲にはよもなるまじ、此上頼む
 は神佛と、床に祭りし法性の兜の前に手を
 つかへ、詞此御兜は諏訪大明神より武田家
 へ、授け給はる御宝なれば、取も直さず諏
 訪の御神、勝頼様の今の御難儀、助け給へ
 すくひ給へと、兜を取て押頂き、押頂きし
 佛の、もしや人の咎んぞ窺ひ下りる飛
 石傳ひ、庭の溜の泉水に、うつる月影怪し
 き姿、はつと驚き飛退しが、詞今のは慥に
 狐の姿、此泉水に寫りしは、ハテめんよう
 なごぎつく胸を撫でおろしく、こば
 くながらそろ〜と、さしのぞく池水に
 寫るは己が影ばかり、詞たつた今此水に、
 寫つた影は狐の姿、今又見れば我が佛、
 幻と云ふ物か、但し迷ひの空目とやらか
 ハテ、怪しやとつおいつ、兜をそつ手に

各間種扇 戸田商店

大阪南區道堀下大和橋
 電話六九二番



捧げ、覗けば又も白狐の形、水にありく
 有明月、不思議に胸もにこり江の池の汀に
 すつくりと、詠め入つて立ちたりしが、詞
 誠や當國諏訪明神は、狐をもつてつかはし
 めと聞つるが、明神の神体に等しき兜なれ
 ば、八百八狐つき添ひて、守護する奇瑞に
 疑なし、合オ、それよ思ひ出したり、湖
 に氷張詰むれば、渡り初する神の狐、其足
 跡を知邊にて、心安う行きこう人場、狐渡
 らぬ其先に渡れば、水に溺るこば、人も知
 つたる諏訪の湖たさへ狐は渡らずとも、
 夫を思ふ念力に神の力の加はる兜、勝頼様
 に返へせとある、諏訪明神の御教へ、ハア
 一忝や難有やと、兜を取つて頭にかつけ
 ば、合忽ち姿狐火のこゝにも燃へ立ち合
 しこにも合亂るゝ姿は法性の、兜を守護す
 る不思議の有様、こなたの間には手弱女御
 前、始終の様子窺ふ共、いざしら菊の花の

番、小屋にこつくと關兵衛が、つけまばし
 ても神通力、花のまにく見えつ隠れつ神
 さる狐、南無三寶とせき立つ關兵衛、ねら
 ひの的は手弱女御前、ごつさりひやく鐵砲
 の、音を相圖に遠近より、俄に響く鐘太鼓
 亂調に打ち立れば、騒がぬ關兵衛廣庭に仁
 王立、ほどなく馳來る雜兵輩、我討取らん
 さひしめいたり、詞ヤアしほらしき有財餓
 鬼、此世の暇さらさんさ、だんびらするり
 と抜放し、あたる任せになぎ立てく御殿
 をさして三重門追て行く。

座王の界斯は理料お

店本家るつ

六二 一五 三三 三二 } 局本話電 目丁五橋今



沼津里の段

豊竹古鞆太夫
鶴澤清六
ツ
豊澤猿太郎
レ
鶴澤友衛門

平作内の段

竹本津太夫
鶴澤
豊澤新之助
胡弓
豊澤勝之助
鶴澤小綱

人形

親平作
吳服屋重兵衛
娘およね
荷持安兵衛
池添孫八
吉田玉次郎
吉田榮三
吉田文五郎
桐竹紋太郎
吉田玉七

中
伊賀越道中双六

沼津里の段

この淨瑠璃は天明四年二月竹本座へ近松半二、近松加作の合作で書下されたもので、安永七年近松東南作の『乗掛合羽』を補綴したと傳へられてゐます。この沼津の段は全曲の六段目になつてゐましてこの敵討のありましたのは寛永十一年十一月七日處は伊賀上野の鍵屋の辻にあつた事實で日本三大敵討の一で時の幕府も手古摺つたといふ旗本と大名の對峙であつたものだそうです。序本に出て来る澤井股五郎は河合又五郎、和田志津馬は渡邊數馬、唐木政右衛門は荒木又右衛門でおよれの瀬川は只

筋合の都合で取り入れた人物で享保三年頃京都生れの大森たかさいふ女も吉原へ来て瀬川と名乗つたおまの夫の敵を討つたといふ事蹟をこゝへ持つて來た作者の寓意であります。志津馬の父渡邊鞆負を殺した澤井又五郎を討つべく志津馬は唐木政右衛門の助太刀を得て其行方を探しまはつてゐた。平作はおまの親で沼津在で雲助をしてゐた。志津馬はこのおまの瀬川と吉原で敵を探れてゐる中に馴染んだお志津馬の破傷風を癒さんとおまは日夜心を痛めてゐましたお圖らず平作がつれて戻つた旅の客重兵衛は實は平作の實の子でおまの兄に當り幼い時に子にやられたもので今は股五郎方のものであつたが印籠からそれぞ知つたが親子の名乗もあへず

苦しい別れをして立ち行きますが、後追かけた平作の實の親父も今生の頼みを入れて腹を切つて落ゆく平作に引導替りに股五郎の在所をきかせますの有名な詞章の『落付く先は九州相良、道中筋は參州の、吉田で逢ふたご人の噂さ』であります。

沼津里の段

M 東路も爰も 三下りうた名高き沼津の里、富士見白酒名物を、一つ召せ召せ駕籠に召せ、おかごやるかい参らうか、おかごおかご稻叢の蔭に葉を張り待ちかける蜘蛛のならひご知られたり。浮世渡りは様様に草の種がや人目には、荷物もしやんと共廻り、泊りを急ぐ二人連れ、立場も見かけ立止り詞コレハしたり大

事の用をさんご忘れた、大儀ながら私が寄つた所まで、一走往て来てたもご、急ぎの用事走り書、さらさらご書認め、早うご手に渡せば、主に劣らぬ達者もの、心安兵衛逸散に、元來し道へ引きかへす。稻叢の蔭より 旦那申、お泊りまで参りませうかい、申旦那様、何卒持して下さりませ、今朝から一文も銭の顔を見ませぬ、どうぞお慈悲。さひかけられ 詞 イヤ〜わしは今夜は夜越に行く、サそこお慈悲で御座ります。ご頼みかけられ是非も無く 詞 サそんなら吉原まで何ぼぢや。エ、おまへ様も、私が頼んで持つぢやもの、えい程に下さりませ。サそんならやらしやれ、年寄のよしにせいでのもんなら持たして下さりませか

チエ 忝ないサアお出でなされませ。ヤツト任せば聲ばかり、一肩往いてば立留り 詞 アノけふは結構な天氣ぢやな、ヤツトまかせ二肩往いては息を繼ぎ 旦那申、向ふの立場に鱧の名物が御座ります、ヤツトまかせ 岡崎杖する度に追従口合 深田に下りし白鷺の、餌びみをするに異ならず、見るに氣の毒 親仁殿ちつと持つてやりませうかア、それ〜危ない〜、イエ〜勿体ない勿体ない。ア、氣の毒な足元、最前から見居るに、氣しんどでならぬ。これはわしが足の癖でござります。旦那のお蔭で、けふも内入がようござります。モウこなたもいくつぢや。七十に手が届いてござります。ア、ソレ〜合點の行かぬ足取。

お氣づかひなされますな、若い時は
 小相模の一番もさりました。ヤツト
 まかせまなア、さいふ下道の爪先上
 り、氣の根につまづきひよるひよる
 く詞ソレ見やしやれエ、きつい事
 をしたの、親指を蹴かいたかヨシ
 く早速に直してやる。さ用意の薬
 取出し、付けるさ其儘、詞何さごう
 ぢや、痛みは止るが、コレハ結構な
 お薬でござります、痛みはこんと直
 りました。サアく御出でなされま
 せ。イヤコレく荷はおれが持つて
 やる。ア、旦那様滅相な。イヤサ駄
 賃はやる、氣遣ひさしやんな、こな
 たの足元、最善から危なうて危なう
 て荷を持つ方がやつこ氣楽な咄し、
 もつて行きませう、サアくござれ
 と先に立つ 三下り 平作は千鳥足合し

んごち利になる蒟蒻の、砂に成るか
 と悲しさに、小腰かゝめて、旦那様
 一肩やりませうかい。イヤく是で
 大分歩きよい、マ、こなたの足元茶
 めいた物ぢやの、その足取りを狂言
 師に見せたいわいの、亂れなご言
 ふて、傳授事に成りそうな事。イヤ
 旦那のおつしやる通り、大樞亂れか
 くつて居りますわい、ハイハイと
 道の伽する笑ひ艸、踏み分けて來る
 道草に、菊の折草持ち添へて、見合
 はす顔はこゝ様か 詞 およれぢや無い
 か、けふは結構な旦那の供したので
 荷は持たずにお世話になつた。御禮
 申してたも。コレハく有がたい、
 もう爰がわたしが内、暫くお休み遊
 ばせよ、昔の残り風俗も、お羽打枯
 れし松蔭に、伴ひ入るや西日影。わ

びたる中に二人住、門の柱に記しの
 笠、おかけなさるりや庭一杯いっそ
 座敷へマアお上りよ、親仁が馳走娘
 の愛、前垂の藍薄くとも、マアお茶
 ひとつさ差出す、こぼれかゝつた藁屋
 葺、折悪う湯もわかず、水でなりお
 みあしな 詞 ア、イヤくもう行きま
 する、扱娘御はよい器量、不躰なが
 ら此内には、せ、なげに咲いた杜若
 よい床へ生けたいのう。ハイごなた
 も左様におつしやります、自慢で作
 つて置きましたれど、近頃は手入れ
 が悪さに、いこふ田地も荒れました
 何か身に構はず、賃仕事、貧乏は苦
 にもせず、それにそれは孝行にして
 くれます、それで私か年寄つての蜘蛛
 助も、せめて三文なご肩休めよ、
 餘りあれがいちらしさで御座ります

コレも、様初めてのお方に、其様な
さもしい咄を。ホンにさうぢや、ハ
い、イヤおよね、けふは大きな怪我
をしてな、コレくく是見よ、爪
が起きてある、ア、薬もあれば有る
ものぢや、あなた様の薬きつい妙薬
ありや何ぞ申す薬で御座りますへ。
此薬は大切な物、第一金瘡では此
場で治る妙薬、武家方には尋ねれど
も、金銀づくでは手に入らぬ妙薬、
ぞ語れば娘は猶ほたく、詞ご、様の
命の親、一日や二日で御禮は云ひも
盡されず、ならう事なら今宵は爰に
逗留遊ばして詞マ、娘何云ふぞい、
こんな内に泊まして、着は干鯛が一
匹無し、虱より外あなたの方に付物
は無い。イヤく不自由は仕付て居
ます、娘御ああの様に、しなつこら

しういばしやるので、どうやら爰に
根が生へた、大事なくばいつそ泊め
て貰ふかいご目の鞘抜けし商人も、
上手な娘のもてなしに、ころりとな
ればお枕さ、油氣は無い真味の馳走
これも一樹の笠舎り、尋れる軒の目
印當に内に入り詞旦那是にござりま
すか、サお立ちなされませんか。ホ
安兵衛か、早かつたく、そなた
は其荷物を持って吉原の鍵屋で宿を取
りや、日和が知れぬ早う行きや、雨
具の用意は吉原の、鍵屋をさして急
ぎ行く。跡見送つて十兵衛は詞コレ
親仁殿此娘御より外にもう子供衆は
無いかこの。ハイ此およねの上に、
男の子が一人あつたれど、二つの子
養子にやりましたが又其の親の手を
離れ今は鎌倉の屋敷方へお出入、よ

い商人になつ居るてこの噂、それ聞
いてごんご思ひ切りました。ソリヤ
又何故に。ハテ一旦人にやつたれば
捨たも同然我子乍らも義理あるもの
今其悴か身上がよいきて、尋ねて行
て箸かたし貰うては、人間の道が濟
みませぬ、今出合ふてもあかの他人
子ご云ふは此娘一人。ム、それも尤
も、其兄貴は今いくつ位ぢやの。ハ
イかうつ、恰度今年二十八、鎌倉八
幡宮の氏地の生れ、母の名は豊と書
付け、守袋に入れてやりました、
その後このおよねを生んでかゝも相
果て、即ちけふか命日で、孝行娘か
水手向け、花の立て方ごろちやいて
下さいませと、何心無き咄の合致、
一々胸にこたゆる十兵衛、思ひ合は
せば覺えあり。扱は産の親父様、血

を分けた我妹が貧苦の有様、有合はせた路用の金、なま仲親子の名乗つては、受けぬ氣質を何まかな、金のやりたい屈託に、胸を痛めて詞コレ親仁殿、何んも物は相談ぢやが、此娘をわしに下されぬか。エ、奉公にあげますのか。イヤテヤ未だ女房のない男、利發な娘御、商人の婢に極上々の羽二重地、得心して下さるなら、仕こしらへばこつちから、旅商人のこまなれば、よびむかへる日限は、まゐいつとも定められぬ、嫁入りのこしらへ料、爰に少々持あはず、是をおいて行きます、得心かいの、どうでござんす、コレ女房面目無いか最前から、わしやこなきんに惚れたわいのこ、しな付きかければついと退き詞と、様あの方もう

いなして下さんせ、いかに貧しう暮して居るさて、あたまめすぎた阿呆らしいと、打つてかばりし腹立顔エ、たしなめ、よい女房と言はれるが、何のそれ程腹が立つ事、我が器量がよい故ぢやと、おりやうれしいイヤ申あなな様、よう御親切に惚れさしやつて下さりました、ぢやがこれのおよれば、女房といふては、やらぬ譯がござります。ム、そんなら御亭主があるのか、これは、イヤ實は只今のぼほんの座興、主のある人共存せず、齋相申した、眞平御免にあづかりませう、コレ娘御、機嫌直して貰ひましたよアノ痛み入つたお詞、ほんに思へば在所者を、おなぶりなさるを眞受にして、お恥しやまにつこりこ、笑ひに心打解けて、

咄に紛れてすつぷりこ、日の暮れてあるに氣がつかなんだ詞三日月様か上つてござる、宵月夜で行燈は入らぬ、その明を伽にして、辻堂の雨舎り、お客様もうお休み、足延すこ壁につかへる奥座敷、ゆるりこちやまつて、御寢なりませ、わたくしは此臺所、コリヤ娘はそちらに寝い、旦那様はお小さいけれど、時のぼづみでは、主のある池へふんごみなさりよも知れぬ。用心には綱を張れぢや今夜はおれが股引はいて寝や、寒けれどあなたには、わしとごんざを福になご、追風もて来る鐘の聲、いとしん／＼と聞へける。およれば一人物思ひ、心にかゝる夫の病氣、我手で介抱する事も、浮世の義理に隔てられ、秋の螢の消え残る、佛壇の灯

も細々ミ、嵐にふつと氣のつく娘詞
奇妙に治つたまゝ様のあの疵、今で
も敵の手掛りが知れてから、あの病
氣では思ひもよらず、ムゝと心で黙
頭き胸を据へ、灯の消へたるは天の
與へ夫の爲さ拔足差足探り寄り、印
籠取り上げ立退く足、躑く音に目覺
ます十兵衛、思はず高聲、何者ミ、
裾を捕へて引きこむれば、わつと泣
き入る娘の聲平作も恟りし、起上つ
ても眞暗かり、およれく云ひつ
くさかす籠の埋火、附木にうつし顔
見合はせ、娘ちや無いか。旦那様が
何故に此有様。エ、何の因果で此
様な情無い氣になつたぞいやい、コ
リヤ此親は其日暮しの者ぢやけれご
な、人様の物もじきな盗も云ふ
氣は出さぬわいやい。エ、親の顔迄

穢し居つたまゝ、わつと斗りに泣き居
たる。十兵衛は氣の毒顔詞金錢を取
つたミ云ふでは無し、是には譯の有
りさうな事ミ、問はれておよれば顔
を上げ詞恥かし乍ら聞いて下さりよ
せ、様子有つて云ひ交はせし、夫の
名は申されぬが、私故に騒動起り、
其場へ立合ひ手紙を貰ひ、一旦本腹
有つたれど、此頃は頻りに痛み、色
々介抱盡せども効無く、立寄る方も
旅の空、此近所で御養生、長しい間
に路銀も盡き、其責に身の廻り、
籬笄まで賣拂ひ、悲しい金の才覺
も、男の病ひが治したさ、先程のお
咄しに、金銀づくでは無いとの噂
燈火の消えしより、あの妙薬をどう
かなと、思ひ盡しが身の因果、ごっ
ぞお慈悲に是申、今宵の事は此場切

お年寄られしお前に迄、苦勞をかけ
し不孝の罪、けふは死なうか翌の夜
は、我身の瀬川に身を投げんミ、思
ひし事は幾度か、死んだあこでもお
前の歎きさ一日ぐらしに目を送る、
どうぞ御慈悲に御了簡ミ、東育ちの
張もぬけ、戀の意氣地に身を砕く、
心ぞ思ひやられたり。歎きのばし
くつくく聞き取る十兵衛詞ッ
レ姉御、そんならこなさんは江戸の
吉原で、全盛の松葉屋の瀬川殿ぢや
の。ハイテモよう御存知。スリヤ瀬
川殿の夫の爲にムウムウと心の目算
思案を極め詞イヤコレ太夫殿、夫の
手疵を治す藥慾しいは尤、それ聞いて
進ぜたいものなれど、是は人の預
り物此事は思ひ切らつしやれ、今こ
なた衆の咄しの通り、わしも亦た恩

を受けた、サ、其恩を請けた人の爲に、い
 づれの寺へも苦しくないが、石塔一つ寄進
 がしたいが、何と世話して下さるまいか。
 夫は御奇特結構な寄進でござります、何時
 成り共御世話致しませう、私も來年は嫌ひ
 年忌、勤むる功德俱に成佛みやら、是非お
 世話致しまするで御座ります。ごうぞ今度
 の下り迄、違はぬ様に頼みます。豫ての願
 ひに書付も、此内に委しうござるご、金一
 包取出し詞コレ必らず頼んだぞや親子の衆
 最早夜明けに間となし、随分無事に親仁殿
 と、立出れば平作も、必らず御下り待ちま
 する。姉御さらばさばかりにて、心に一物
 荷物ば先へ、道を早めて急ぎ行く。跡に親
 子は顔見合はせ金取上げてコレおよね、詞

随分大事に掛けておきや、夜明迄は間もあ
 る、其方も休みやみ水入らず、見廻はす筈
 に落ちたる印籠詞ア、是は今の旦那のぢや
 定めて尋ねてござるで有るご、云ふにおよ
 ねが手に取つて、此印籠は何うやら覚えの
 ある模様、ハテ合點の行かぬ、それが是か
 ミ能々詠め詞本にそれよ、是やコレ澤井殿
 五郎が常々持ちし覚えの印籠、ハテ不思議
 なご平作も、金取出しよく見れば詞金子參
 拾兩、此書附は鎌倉八幡宮の氏地の生れ、
 稚名は平三郎母の名はお豊、コリヤコレ我
 子に付けて置いた書付。そんなら今のお方
 ば、私も爲には兄様。オ、我が子の平三で
 有つたかい、
 そんなら最前からの深切は、夫さば言はず

町水清東區南市阪大
 番九三三八南話電

義 太 夫 本
 肩 衣 袴 式
 附 品 一 式

野村青雲堂



此金を、買いでくれた石塔代、不思議な縁
 と親子は、暫し呆れて居たりしが、およ
 れは印籠手に取つて、裾はせ折つて駈け出
 す詞コリヤ待て娘、コリヤごへ。ごへ
 とはさ、さん、此印籠を持つてゐる、その
 兄様は敵の手まゝり、追掛けて股五郎が、
 在家を尋ね志津馬様へ。尤ぢや尤ぢや、
 われでは往かぬ、年寄つたれど此平作、理
 を非に枉げて言はして見せう、吾も續いて
 後から来い、ごの様な事があつてもな、必
 らず出なよ、敵の在家聞く迄は大事の場所
 木陰に忍んで立聞きせい、必らずさも慮忽
 すな合點か、本海道は廻り道、三枚橋の濱
 傳ひ、勝手覚えし拔道なを、子故に迷ふ三
 悪道、轉げつ倒びつ走り行く。跡にはおよ
 れ身ごしらへ、續いて出でんとする所へ、

折から來かゝる池添孫八 詞瀬川様か、孫八
 殿好い所へござんした。今夜爰に泊つた客
 で、敵の手筋が知れさうな、詮議の爲に吉
 原まで、さゝさんが行かしてやんした。エイ
 忝ない、シテ其行先は、吉原までばよも
 行くまい、何かの様子は道にて聞かんと、
 瀬川に續く池添も、足に委せて三重幕ひ行
 く。實に人心様々に、町人なれ共十兵衛は
 武士も及ばぬ丈夫の魂、夜深に立ちし獨旅
 千本松にさしかゝる。オオイ、杖を力
 に息すた、詞申々旦那様、ヤレ、お早
 い足元。ムウ今呼んだはこなたか、あはた
 いしく何の用、イヤ只今のお金を、お戻し
 に参じました。石塔料を名をつけて、大枚
 の金子参拾兩、其の日暮しの蜘蛛助に、下

本日映齋の統帥権を握る
 松竹キヌマの新版封切場

ごうばんり

朝 日 座

さるも譯がある、又た請けまするにも譯がある、雖然此金を請けましては、去る人が立たぬ義理がござります、是をお返し申します代りに、あなたにお頼みも御座りますお聞きなされて下さりますか。ムハテ一夜さ泊るも何んその約束、様子に寄つて頼まれまい物でも無い。夕闇月夜の聲知るべ跡より窺ふ池添瀬川、肩唾を呑んで聞き居たる詞シテ其頼みの様子は。ハイ被仰つて下さりませ、此印籠の主の在家を、承ばりたう御座ります。これを尋れて知りたいたかりに、様々の流浪致す人、夫故娘も廓を出て憂き艱難、是も知れると本望成就、娘につれて私までも、モ、此上の悦びは御座りませぬ、貳拾や參拾の端た錢で、露

命を繋ぐ私、死ぬる迄安樂に、暮される程の參拾兩、其金銀にかへてのお願ひ、七十に成つて蜘蛛助が、魂に叶はぬ重荷を持ち、夫は未だ休みもする、子の可愛こいふ重荷は、寢た間も休まぬ一生の、苦痛を助ける藥の名、お前様に親御あらば、子故には愚痴に成る物ぢやと思召しやられて、願ひを叶へて下さりませ、コレ申旦那様。ご血筋と義理と道分石、分けて血の緒の三界に、踏み迷ふこそ道理なれ。親の心を察しやり詞ム、さう有らう。心底至極尤ぢやが、是ばかりは何うも言はれぬ、おれも頼まれた男づく、其方の人が大切なら、此方にも亦大切、譬へ又た在家を聞いても命がなくては本望が遂げられまい、ソレそ

場樂娘の一阪大

地 天 樂 前日千

の信義橋高・子信月五

演 公 座 代 近

樂娘の館モドコ
畫映の館マネキ

ちの内に落して置いた、主し無い印籠の其妙薬で、疵養生達者になつた其上では、望みの叶ふ時節もあらう。親仁殿、サ左様ぢや無いかと、心の替匣、一重明けぬ十兵衛が情の詞、詞サ、夫程お慈悲のあるお方、逆もの事なら其薬の持主、イヤサコレ悪い合點、此薬の持主は、其病人さば大敵薬、参拾兩の其金、敵の恩を請けまいため、戻したでは無いかの、此持主の名を言へば、敵の薬で疵本復、恩を受けては眞逆の時、切先むなまらうぞや、猶且拾ふた薬にして、心置きなう養生さしたか、よささうに思はるゝと、聞いて平作感じ入り詞ア、さうぢやあつた、エ、御前様は恐ろしい發明なお人ぢやの、左様聞きましては、申様もござ

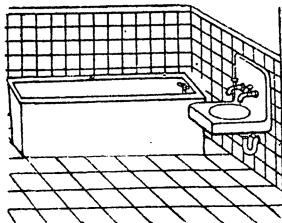
りませぬ、左様なら歸りましよ、旦那様おさらばと云ひつゝ、探つて十兵衛が、脇差抜きさり腹へぐつと突立る詞ヤア、何んとした何んとした、コリヤ自害か、何故に誰を恨んで、勿体なやさうろく、涙驚く娘を、手に手當る池添が、鳴音止むる響虫草、に食付泣く斗り。平作苦しき目を開き詞、おりや此方の手に掛つて死るのぢやわいの、ハテ、此方さ巳さば敵同士、志津馬殿の縁のある、此親仁を殺したれば、頼まれた此方の男は立つ、コレ、此上の情には、平作も未來の土産に、敵の在家を聞かして下されいの、外に聞く者は誰も無い、今死ぬる者に遠慮はあるまい、不思議に始めて逢ふた人、何うした縁やら我子の様に思ふ者

化粧タイル

水道衛生工事

洗面、浴場、

水洗便所設計



西區立賣堀北通一丁目
新一橋

岡部商會

電話 一六六九
一一二七六

何んのこなたに引け取らす様なここの親
 が、サア此親仁も致しませうぞ、是が一生
 の別れ、一生の頼み、聞かずに死んで、
 迷ひますわいのくコレ、拜みますく且
 那樣と、子故の闇も二道に、分けて命を塵
 芥、須彌大海にも勝つたる、誠の親に初め
 て逢ひ、名乗もならぬ浮世の義理、孝行の
 仕納め 詞どに誰か聞いて居まいものでも
 無けれど、十兵衛が口から云ふは、死んで
 行く此方さんへの餞別、今端の耳によう聞
 かつしやれ、股五郎が落付く先は九州相良
 道中筋は參州の、吉田で逢ふたご人の噂
 エー忝ないくく、アレ聞いたか、イヤ
 誰も無い誰も無い、聞いたは此の親仁一人
 夫で成佛しますわいのく、名僧智識の引

導より、前生の我子に介抱請け、思ひ残す
 事は無い 詞早く苦痛を留めて下され、親子
 一生の逢ひ初めて逢ひ納め、親仁様、平三
 郎でござりますく。チ、兄かい、エ、顔
 が見たいくく顔も見たいはいやい。チ
 、御尤でござりますく親父様。モウ御臨
 終でござりますぞへ、御念佛を申されませ
 チ、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛くく
 と唱ふる十年十兵衛か、こたへかれたる悲
 歎の涙 始終うかふ池添む、小石拾ふて
 白刀の金、合はす火影は親子の名残り、跡
 に見捨て 三重 M 別れ行く。

御期待の映畫が易見い

松竹座の姉妹館

座 天 辨

歐米映畫の粹と

はなやかな演實



道行戀の小田卷

おみわ
求女
橋姫
(役毎日)
豊竹
豊竹
豊竹
豊竹
豊竹
豊竹
豊竹
豊竹

和泉太夫
相生太夫
島太夫
富太夫
綾太夫
浪花太夫
辰太夫
千駒太夫
陸路太夫
播路太夫
仙系
猿系
豊園
豊園
豊園
豊園
豊園
豊園
豊園
豊園

切
妹春山婦女庭訓

道弓戀の川庄巻

この道行は妹春山の四段目奥の次で書下しは明和八年正月で近松半二、三好松洛等の作の一つで、初演の時は春太夫、禊太夫、和太夫等が語つてゐます。この段の様様を申上げます。求女の風雅な姿に戀ひ焦れて入鹿の娘、橘姫と杉河屋の娘お三輪がその後を追ひます、二人して思ふ男を争ひます。求女は腹に一物あり橘姫の裾に緒環の糸をつけ、お三輪はまた求女に緒環の糸を結びます。その戀の緒環をたぐりく行きついたのは一代の榮華を極めた入鹿大臣の三笠山の御殿であります。橘姫

と淡海が祝言の手拍手が奥から聞えるのでお三輪は氣も狂はん許り、鱧七はお三輪を凝著の相ある女と見てさつてたゞ一突きに刺します。お三輪はその生血が戀人の役に立つと聞いて満足に死んでゆくさいふ筋合で御座ゐます。

道行戀の小ト巻 (床本)

M 常闇の夜々毎に通ひてはまた歸るさの道もせきもせそれも何故戀故にやつるゝ所體はづかしと佛隠す薄衣についぬと薫り橘姫、思はぬ人を思ひ託心のたけをくごれどもつれなき松の下紅葉こがれてたへんたまのをも殿故ならば捨草も暫しはいかふ芝村の賤の男も置手拭で忍び忍びの出あいづま晩にござらばナコンのんやほんにさ春戸の柿の木の枝こ

人形

お 橋 求
 三
 輪 姫 女
 吉 桐 吉
 田 竹 田
 文 紋 文
 五 十 五
 郎 郎 郎
 三 榮 三

野野鶴 鶴鶴 鶴豊豊 野鶴鶴
 澤澤澤 澤澤 澤澤澤 澤澤澤
 吉喜友 叶寛 友猿廣 八友友
 代之 太 二太 之
 左助 郎市 若郎郎 助造助

へて連理を契る言の葉はそれも戀中
 爰はまた箸中村よ一もつの長者が後
 名にひやく釜口をも出放れてあ
 ゆむにくらきくれ竹のしげれる中を
 分行ば葉毎の露もほろ／＼さほろ、
 打なる雉子の聲思ひくらべていさ
 猶心細野に立つくすにくやかましに
 おびさるゝわれが姿にまたおぢてはつ
 こ立行羽風につれてちり／＼ちるや
 柳本流るゝ水に裾ぬれて物思へこや
 帯さけの里 羨し自はついに一度
 の情さへないて身をしる涙雨ふるの
 社の御燈の影か松の木の間ちうち
 ちさ見へつ隠れつ歸るさの後を求女
 がしたひ来て互にはたさ行合の星の
 光りに顔と顔ヤア戀人が何故に爰迄
 後を追鳥ばもしや塘の契りをも叶へ
 てやるこのお心か胸にはいへど詞

には面はゆぶりの袖几帳なるほごせ
 つなる心ざし仇に思はじさりながら
 さほごこがるゝ戀路にて晝をば何さ
 うげ玉の夜斗りなる通ひ路はいさふ
 しんなり名所を聞いたる上はこなた
 まり二世のかためは願ふ事明させ賜
 へさひたすらに問はれて實にも恥か
 しのもつて餘れる爰身の上語るにつ
 らき葛城の嶺の白雲有ぞともさだか
 ならざる賤の女と思ふて深い疑ひの
 雲を晴して自ら思ひも晴らして賜は
 らばごんな仰も脊くまいたさへ草葉
 の露霜と消ても何のいさやせぬこれ
 程思ふに胴慾なさけぬお前のお心は
 餘りむすぶの神様を祈り過したさか
 めかやつれなの君やご恨詫思ひ亂る
 薄かけそれさお三輪は走り寄り中
 を隔てゝ立柳立退く秋引さやめエ

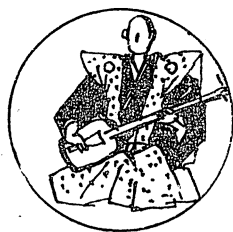
聞へませぬ求女様ソリヤ氣の多い悪性なそ
 もや二人が馴れ初めは始めて三輪の過し夜
 に葉ごしの月の俤はお公家様やら侍様や
 らしれぬ形ふりすつきりさ水際の立よい男
 外の女は禁制さしめてかためし肌さ肌主あ
 る人をば大膽な断りなしに惚るさばごんな
 本にもありやせまい女庭訓驥方よふ見やし
 やんせエ嗜なされ女中様イヤそもじ逆たか
 ちれのゆるせし中でもないから戀は仕か
 ちよ我殿様イヤわたしがイヤわしがこゝ
 のに縋りつ手を取て團に色よく咲草時は男
 女になぞらへいは言はれぬ物か夕顔の梅
 はものゝふ櫻は公家よ山吹は傾城杜若は女
 房よいろは似たりや菖蒲はめかけ牡丹は奥
 方よ桐は御主殿姫百合は娘ざかりさなでし
 このサアなるぞへくなるさならずさなら
 坂や兎手柏の二人の女にらめげにらむ萩さ
 萩中にもたるゝ男べし放ちはやらしさ縋り

付こなたむ引ばあなたをさめ戀の桐萬
 葛付まこばれてくるくく廻るや三つの
 小車の花よりしらむ横雲のたなびき渡りあ
 りく三笠の山も程近く鳴鐘の音におご
 るく姫歸る所ばいつくぞも求馬が氣轉振袖
 の端にぬふてふ取りかはす縁のおた巻いさ
 しさの餘つて三輪も倍氣の針男の裾に付る
 共しらすしるしの糸筋をしたひしたふて



座王のユウレとマネシ
 備完の置装風冷さ氣換

座竹松 堀頓道



維新前後の淨瑠璃界

文・樂今昔譚より

明治初年を境界線として

維新の曙光が漸やく見へ出して來た明治初年前後のこと、這がに商業地の大阪も、物情は騒然たる有様であつたが、それでも芝居や淨瑠璃などの興行物は別天地の觀があつて、可なりな成績で打ち續けてゐたのは一つはまだ、斯界に名人や巨匠が多かつたからの故でもある。竹本長門太夫所持の『忠臣藏』九段目の床本の終尾にこんなことが書いてある。

安政元年九月十八日、天滿北西角芝居にて、忠臣藏通しに九段目を語るまゝ、此日異國船來る故、よんどころなく芝居休業まなる。

黒船來が直接興行物に及ぼした影響の一つである。

明治元年一月（實は慶應四年）稻荷社内になつた文樂座は、初春狂言に『金門五三桐』を出さうとしてゐ

た。世間は御維新の騒ぎで、なんぞなく落ちつかず、不安の空氣に満ちてゐる時に、而かも大阪城に戦雲が棚曳き、伏見鳥羽の敗戦で、徳川慶喜公辛くも天保山沖から江戸へ遁れやうとする、かうした場合、舞臺では例の石川五右衛門が、春宵一刻……でも麗らかな眺めぢやなあ……など、遣りかけたが、あまりにも、世間と懸け離れすぎてゐたので一月は興行中止。二月の十二日になつて、もうそろ／＼麗らかな眺めになつてもよさそうなものだが、こつそり初日を開けたが、むろん駄目、十二日間より芝居は打てなかつた、此時の一座顔觸れが、六代目染太夫、七代目咲太夫、四代目彌太夫、五代目湊太夫、越路太夫、實太夫、三味線團平、濱右衛門。人形辰造、玉造などである。而かし三

月からは、さうした騒ぎも稍平常に復して、四十六日間も打ち續けることが出来たのは大阪の土地らしいやほり豊かなところがある。狂言が『一の谷嫩軍記』と『四つ谷怪談』であつた。かうして文樂座は引續き一年に五回または六回宛の興行を打つてゐる。

明治元年十二月、大阪府は西區松嶋町に新たに遊廓の設置を許可し、從來各町に散在してゐた公許地以外の小遊里を此所へ移轉集合させて、遊廓整理を行ふことになり、土地の發展を圖る可く、凡てを江戸吉原に模して、仲之町を中心に、可なり大規模な設置をするこゝとなつたが、土地の偏した爲になか／＼急には思ふやうな實が揚らない、そこで、府では土地繁榮の一策として、道頓堀の歌舞伎芝居と、文樂座の人形淨瑠璃を此處へ移す可く計畫したのである。歌舞伎の方は道頓堀の仕打三榮へ、文樂はその座主へ、共に命を下した。この兩者は直ちに旨を含んで松嶋興行の準備にかゝつた。三榮の歌舞伎は不入りの爲めすぐ退轉したが文樂座は永續することになつた。明治四年新築の工を起し、五年正月、文樂座開業の興行を始めたのである(現今の松嶋八千代座の前身がそれである)文樂座

はこれで博勞町稻荷からこゝへ移轉してしまつたのである。かくて文樂新築記念興行は花々しい盛況で、而かも五十三日間打ち續けの大當りを取つたのであつた。狂言は大功記の通しと御祝儀三番叟。

一座の太夫は、春、越、古靱、越路、染等。

三味線は團平、新左衛門、吉兵衛、人形は玉造、辰造、喜十郎、玉之助、玉治等の番附面の顔ぶれ。春太夫の尼ヶ崎、越の杉の森、古靱の妙心寺、越路が大徳寺。

此時湊太夫が櫓下を去つて、春太夫これを繼ぎ、吉田玉造始めて人形櫓下となつた。

この明治五年には、明治新政府からは、曆の改正を始めとして、さまざまの改革令が相次いで出た、斷髮令、徴兵令、娼妓解放令、などがそれで、文樂座の淨瑠璃やその他の興行物にも十月二十一日附で左のやうな布令が下つた。

壬申十月二十一日布令

申第三百七號

從來能狂言其他音曲歌舞の類者古の嘉言善行世の模範となり、奸惡淫褻人の懲及みなるものを擧げ、之

れを音曲に鳴し手之れを舞ひ足之れを踏み人の耳目を歡ばしめ事情深切にして無學文盲のもの觀感いたし易きを主とし勸善懲惡の一端なるを以て大に世に行はれ候處近來其本旨を失ひ徒に觀美のみに相流れ人心を蠱惑し風俗を紊亂する弊害不就者兼而相達し置候處今度教部省より別紙の通り達有之候間其營業のものは深其旨を體し可申候事

右の趣其營業の者へ相達候間爲心得管内無洩相達する者也

壬 申 九 月 大 阪 府

能狂言始め音曲歌舞の類は人心風俗に關係する處不尠候に付き左の通り管内營業の者共へ可相達事

壬 申 八 月 教 部 省

一、能狂言以下演劇の類

御歴代の

皇上を模擬し

上を褻瀆し奉り候體の儀無之様厚注意可致事

一、演劇の類専ら勸善懲惡を旨とすべし

淫風醜態の甚しきに流れ風俗を敗り候様にては

不相濟候間弊習を洗除し漸々風化の一助と相成

候様可心懸事

一、演劇其他右に類する遊藝を以て渡世致し候を制外者杯と相唱へ候從來の弊風有之不可然儀に候條自今は身分相應行儀相慎み營業可致事

以 上

また翌六年には更に以上の布令に基いて文樂座の樂屋へ左の注意書が貽り出された。

一、從來御上様御布告の趣急度可申相守事

一、皇上様御歴代の御名前又は差支の文句有之候淨瑠璃一功語り候儀は不相成候事

一、世話淨瑠璃心中物都而風儀不可宜場者能々調べの上可語候事

一、時代派にても風俗に拘り候場又はサワリ杯にも心を付あしき處は急度相除候事

一、旅棹に罷出候人々其砌世話人に届出候處近來多く等閑に相成以後者上下の無差別其年の世話人に届出候事

に届出候事

一、出勤中銘々禮儀第一に致し樂屋等にても風儀あしき事無之様且風俗衣服等も随分質素を相守藝

道出精第一に可勤事

右の條々急度相守營業可致候若相背者連外可致候事

明治六年改

明治新政府の事業は細心の注意を以て行はれ次第に人心も安定し、世間の景氣も回復した。かうした期間長門大夫歿後の我淨瑠璃界は、やはり長門黨育の香りが高く、澤山な名人を擁してゐたのである。即ち長門大夫直系からいふと四代目長門、専門藝以外に學才があつて、淨瑠璃大系圖の著作があり、古實考證家として斯道を益した。天王寺村七千五百石の大庄屋といふ名譽の位置にあつて、淨瑠璃を語り、高座に登る爲めに名譽の職を捨て、顧みなかつた異色ある長尾大夫豪音で端場を専門にした名人四代目彌大夫。意氣な聲で無類の艶語りと稱され、入れ墨の左官の子として聞えてゐた六代目綱大夫。豪傑肌で至藝の持主、慘殺されたので一層名高い古靱大夫。世話物語りとして、日神月神と云はれた五代目湊大夫、七代目咲大夫。又少し後には盲人の美音家四代目住大夫、人情語り世話物の名手五代目彌大夫。などを數へることが出來一門繁榮の跡を見せて居る。

また長門系以外の人々には。時代物の第一人者と云

はれた六代目染大夫。門下の八代目染大夫も早世したが大將の器を備へてゐた。鷹揚大量な曲風に一流を立てた五代目春大夫はその門下に越路後ちに攝津大掾といふ大物を出してゐる。或は又高野の僧で大兵大音の怪物三光齋といふのや滑稽淨瑠璃専門で賣出した奇人山城掾など、多種多様にいづれも淨瑠璃界を縦横に馳驅してゐる有様はまことに花々しいとも何んとも云ひ様がない。それといふのも當時斯界は自由な空氣に満ちて、一能あるものは何んの束縛もなく、思ふ存分その腕を揮ふことが出來て、各々特色ある藝風をズン／＼延ばして行くことが出來たのであつた。そこで以上列記したやうな、一家の特色を鮮明に顯はした人々が澤山に出たのは、もうその以後には見られない圖である。



淺草雷門の段

前 碁太平記白石噺

淺草雷門より

新吉原揚屋の段迄

手品師豆造事
九郎 豊竹島太夫

勤 六郎 竹本長尾太夫

宗 六 竹本浪花太夫
おのぶ 竹本長子太夫

享 主 竹本播路太夫
(鶴野澤芳歌之助)

人形

手品師豆造事
吉田玉幸

この淨瑠璃は安永九年正月江戸外記座に上場されたもので作者は烏亭馬、紀上太郎、容揚齋の三人合作。その内容を申し上げますと、奥州逆井村の百姓與茂作の姉妹も貧苦のため江戸新吉原で遊女となり全盛を謳はれてゐるこ、郷里から妹の信夫が姉を尋ねて来て偶然の機會から姉妹も邂逅します、姉の宮城野は妹の口から父の横死を知つて敵討ちを決心しましたが揚屋の享主宗六から曾我物語を例にして却て懇ろに見されるさいふ筋で御座ぬます。この

實説は松平陸奥守(仙臺侯)の家老片倉小十郎の劍術の師範に田邊志摩さいふ筋があつて享保三年中白石在領内足立村の百姓四郎左衛門のために行列を破られたので四郎左衛門を無禮討にしたがこの時四郎左衛門に娘があつて深くこの事を無念に思ひ陸奥守の劍術師範瀧本傳八郎の許に傳手を求めて姉妹共に奉公し六年間劍道を修業し瀧本の助太刀で享保八年仙臺白鳥明神の境内で首尾よく敵志摩を討ち取つたさいふ筋であつた。す。

(床本) 雷門の段 (口)

東西く、何さ何れも様方。先このこよりで徳利を釣りまするわ。即是をなぞらへて。夕立の節。天より

大東洋行 大東洋行 大東洋行

大東洋行 大東洋行 大東洋行

大東洋行 大東洋行 大東洋行

大東洋行 大東洋行 大東洋行

大東洋行 大東洋行 大東洋行

大東洋行 大東洋行 大東洋行

大東洋行 大東洋行 大東洋行

大東洋行 大東洋行 大東洋行

三味線

大東洋行 大東洋行 大東洋行

大東洋行 大東洋行 大東洋行

大東洋行 大東洋行 大東洋行

大東洋行 大東洋行 大東洋行

大東洋行 大東洋行 大東洋行

金貸勘九郎 吉田扇太郎
 大黒屋宗六 吉田玉松
 妹おのぶ 桐竹紋十郎
 茶店亭主 吉田利男

新吉原揚屋の段

切 竹本鍛太夫
 豊澤新左衛門

人形

傾城宮城野 吉田文五郎
 禿しげり 吉田文二郎
 女郎宮里 吉田市松
 女郎宮柴 吉田文作
 妹おのぶ 桐竹紋十郎
 大黒屋宗六 吉田玉松

神鳴りも落せした太鼓釣の体でござ
 ります。サヨウ。只今お目に掛けま
 したは。古めかしい事計。扱是から
 ごらんに入れまするも。先第一籠抜
 比翼拔。夫より段々珍しい手品盡し
 扱先一升入の徳利を呑込まするも八
 疊敷の大金玉と成まする。其大金玉
 を根元よりふつりさねじ切て。浦川
 へドブンと投込まするも。たちまち
 の内に姿へんじて。登龍と成升る藝
 當。末々をお樂に御ゆうくりと御
 覽の程をば願て置き升る。ヤ。こふ
 しやべつて計居りましたは。私のい
 ざびひあびりまする。少々ばかりお
 みようか錢を願つて。腹中を丈夫に
 してやらかしませふ。お立ち合の内か
 ら。西の方から十二文東の方から十
 文。向ふからも十文。ハイ／＼コレ

ハ／＼お武家様やお町人様方は格別
 錢ばなれの宜しい事は又格別と。御
 前づいせふ口合に二文三文四文錢な
 み大体な事ではないと。めん／＼笑
 ひ催して我家／＼へ立歸る。跡にご
 じやうは錢揃へ。有難／＼。今日も
 先五百に成た。ドリヤ息つきに一盃
 と酒屋をさして急ぎ行。浅草と云へ
 ど誓も浅からぬ。けふ観音の御参り
 下向の其中に人附合も吉原で。大福
 屋宗六さいやみけのない立嶋や茶屋
 の床几に腰打かけ。イヤコレ亭主
 ちと待合す人も有。座敷も借
 りたい。ハイ／＼夫は／＼お安い事
 マアこちらへお通りと。亭主が案内
 に宗六は茶屋の内へご入跡へ。佛に
 は後を見する尻。は勘九郎さいふ
 ならず者。我物顔を大道を股一ぱい

に來かゝりて。エ、又どじようめが
 けつからぬ。コレ亭主。爰へ店出す
 どじやうと云やつ。どつちへぞ行な
 つたか。イヤたつた今迄店出して
 ましたが。大方酒でも呑にいた物で
 ござりませう。エ、いまくしい。
 酒所でも有まいに。おれが催促に來
 る事を知つてはづしやがつたに極つ
 た。けふはしやしむり取扱かにや置
 かんのおちやま、床几にどつさり腰か
 くればお茶一つ汲んで出す。茶碗
 取る間も白眼廻し。コリヤヤイ亭主
 モウ時分は何時頃じやぞい。ハイモ
 ウ七ツ下りでござりませうわい。エ
 いよいかげんな事をぬかせやい。我
 時計じや有まいし。しつかりと夫が
 分るもんかい。エ、こんな出ばらい
 おりやいやぢやい。味い茶一杯汲ん

で來いぞ。一寸いふ事も憎手口。聞
 かぬ振して亭主も出花。汲やしつら
 ん人心。細き枝をば力草。おのぶは
 姉に逢たさの。東へ聞けど當途さへ
 亡き父母をおいづるに。順禮姿
 ぼくご尋ねさまよいこゝかしこ。
 立休らひてコレ申御亭主様。問たい
 事かござり申すさ。吉原で名の高い
 女郎サア。何ぞ云めす知ていさるな
 ら。教へてくんさいチャアと。云ふ
 に亭主は打諷め。ム、見れば娘の順
 禮衆。年端も行かぬに一人かいのふ
 そふしてマア吉原で。名高い女郎
 と云ては知ぬが。夫はごこの名は何
 ぞいふ。サア名を知申せば夫へ行申
 す。うんらが姉さあを尋申チャア
 是は又こまつた物。それではさんご
 分らぬわいの。ヤ幸奥にごさるお

客。吉原邊の旦那見ゆる。一寸尋
 れて見てやるふ。ちまの問そこにと
 云捨て亭主は
 (床本) 雷門の段(奥)
 終始聞居る勘九郎が猫撫聲で傍によ
 り。コリヤ。わりや姉を尋れる者さ
 云ふが其姉に逢はしてやるうかいヤ
 ア。そんなら逢はしてくれめすか。
 ム、逢はしてやるくはやるが。コ
 リヤよふ聞けよ我が尋る其姉に逢ふ
 と思へば吉原といふ所へ奉公をせに
 やならぬぞよ。ハテこかいな者でも
 戀人があれば居申は。サ、そこちや
 てな。其奉公するには大分むつかし
 いマアこうぢや此おれを我が伯父ぢ
 やと云れば奉公にも置かず。又姉に
 も逢れぬぢやによつて。今からおれ

を伯父ぢやさいへよ。ム、合點か
く。サアくそんならけいこの爲
爰で一寸云て見や。アイサ。かしこ
い者ぢやなア。姪よ。伯父サ。ム、
そふぢやノヲ姪よ。伯父サ。チ、そ
ふぢやよふ覺へる。テモマアよい子
ぢやなア。アハ、い、い。そんならお
れが連て行。サアサ、い、い。歩めく
アイヤコレ。勸九郎待た。ム、おれ
を呼だのは誰ぢやぞい。イヤ誰でも
ない。宗六ぢや。ヨウコレハ角町の
親方。此勸九郎を呼かけたば何ぞ目
でもござんすかいの。イヤ外の事で
もないが。コリヤ悪いぞよん。高
の知れた代呂物。笠の臺が飛ぼふぞ
よ。イヤコレ親方そんないやみを云
はるな。此娘はおれが姪他人のかま
ふ事なサ是で云分有ならばおれも

正鉢結さにや置ぬわ。コレ親方。氣
の短い。去連はお氣の短い。コレ氣
の短い賣まいさいふにこそ。一寸元
値にはづれるけれど。エ、何ぞせふ
しよ事もないぞ。矢立取出し證文を
したる。申コレ伯父サア。あの人に
奉公すりや姉サアに逢れ申かよ。ム
いよいよ委細はおれが吞込だ。可
愛そふに何にも知ぬ此娘をイヤサ可
愛らしい代呂物を。買はづそふとし
たばいさ。いひつ、渡す五十兩。證
文請取讀終り。サア此からはこつち
の子ぢや。こわい事も何にもない。
姉にもおれが逢してやる。せかすこ
歩行も手を取れば。エ、嬉しうござ
る伯父サア。觀九郎をば伏拜めば、
つばで紛らすとんぐり目玉。出ぬ涙
より宗六が。不便と思ふ目の内に。

泣ぬ涙のしのぶげか娘引連立歸る後
には一人勸九郎が金いたゞいて舌な
めすり。テモ扱も近年にない此上首
尾手もぬらさず五十兩さばこいつは
程よく當つたわい。アハ、い、い、ド
レ、く此勢に一ばいせふそふぢや
く、一人えみ。金懐へ勸九郎は吞
屋をさして急ぎ行。よしずの影に最
前より。聞居るごじようむそりこ
出。テモごめつそふな勸九郎め。何
所の者やら知ぬ者を。おれが姪ぢや
の何のさぬかして。人の子を。引大
枚の金設け一体常から商賣なして何
をして喰やがると思ふて居た。マ悪
いやつちやなア。あんな奴を生して
置てはきつい殺生。チ、そふぢや。
是迄むごふさいそく仕おつたかはり
代官所へ訴人してやる。こふつと待

よ。夫れもよいがアノ懐に持てけ
 つかる五十兩。あいつをおれがせし
 めるに忽ちあいつがぐにやぐに
 さ成おるは。そこで我等がほつばが
 ぬくもると云物ぢや。イヤこいつは
 上分別ぢやわい。併しあの金を奪取
 には何ぞよいこんたんが有そな物
 ぢやがな。ム、此間一寸聞ばあいつ
 の親父は死ぬる小悴もてくれたそふ
 な。所へおれが持込んで地藏様にな
 つてぬつと出るはよいが。そのこし
 らへに困つたわい。どうした物ぢや
 ろうなア。チツト。あるく。幸さ
 つきに地藏爺が賣仕まい。荷物茶
 店へ預けていんだあれをかふして斯
 うするは。そこできやつがだまされ
 てワツト泣るは。所をおれが善か
 なく云てやらかすは。もし行そ

こなふたら元々ぢや。おつと品玉の
 種が出来た。ハ、ア我ながら適
 智恵者ぞ。ぢやうは後先見返して
 又もよしすへ忍び入。斯きは知す観
 九郎。ほろ酔機嫌の千鳥足。エ、酔
 ふたぐ。エ、きつふ酔たわい。
 マア斯酔た所か何ぢや有ふな。マア
 ざつと極樂世界。イヤけふの程のよ
 さ。けふはおれが誕生日ではなし。
 親父の連夜は一昨日の晩ぞ。併、懐
 に入れて置た五十兩。もし懐中でづ
 いこふは召されぬか。おつと有ぞ
 く有難い。先有難山吹の御開帳さ
 見返す向ふへすつくりさ。ごしやう
 は總身給の粉の。顔もべつたりうご
 んの粉。袈裟も見せたるつきぐの
 襦袢も千手觀音の。やどりもかゆき
 古頭巾。錫杖突立悪身して。ソモ

出来合の地藏尊。觀九郎は歸りしや
 うぬは。コリヤ何々者ぢや早くそこ
 をなくなれぞ。云へばおかしな聲音
 にて。ム、よきかなく我こそは。
 さいの河原の地藏尊は我事なり。
 十ナにも足らぬ幼子の。中にもそち
 が悴めば。一重二重と積石を苛責の
 鬼の鐵棒で。突こはされてアレナコ
 レナぐぐぐ。地藏様アノ鬼こ
 わいさ逃げて来る。其外持遊さつま
 芋。買たいさいふ度毎に。さい錢迄
 も貸してやる。汝も哀れと思へやこ
 衣の袖に泣地藏袈裟で涙をぬぐひけ
 る。さしも我強き觀九郎も。我子の
 かせに縛られて。恩愛の涙はたぐ
 ぐ。ア悲しい咄しをエ、聞ま
 した。扱はお前様がアノさいの河原
 のお地藏様でござりますか。私か所

の小僧めが参りましてきつふ御厄介
になりますか。承ればおさい錢を
使ひますは餘りて勿体ない。ム、
使ふ共くは迄さい錢の、高む十一
兩二歩二朱。只今我へ戻してたも。

ハイ、返します共く。幸こ、
にさ懐より以前の財布取出し。封
押切て。エー、一ツ。二ツ。南無三皆
小判で御ざります。はしたむなふ
て困つた物よ。儘よ十二兩上ます程
にどうぞ一歩二朱おつりを戻して下
さりませ。こわん、ながら差上れ
ば。ム、よきかな、早速つりもや
つたけれど。所々の出店を皆はいさ
れて當時我等すかんびん。ごふでま
だ、小遣ひもふ五兩だけ預けて置
きや。ハイ、イヤモウお地藏様の
おつしやる事。宜しお願ひ申しま

する。さ又差出せばよきかな。こ
去りながら。日頃汝も悪黨故。子の
罪親に報ひきて。此世を去りし我が
親。汝に是も傳言有。エ、扱も
情ない。シテ。親父は何ぞ申て

おりましたへ。チ、よきかな、冥
途へ行く時に迎ひに來た。火の車の
人足賃も金七兩。地獄の釜の油の入
用二石八斗八升。劔の山へ登る時三
千七百本の脇差の借賃。其外花代。
抹香代。えんまの帳面三十三兩。是
非共なければ成ぬ程に。受取てくれ
ま云たぞよ。エ。是々申。何ば親の
云附てもそれは餘り大そふな物入。
まそつこ減少は成ますまいかな。イ
ヤ、一文もまからぬ。サアそこ
がお地藏様お世話ついでに、五兩位
でどうぞあながまへ切なされて下

さりませぬか。エ、モ。ねぎりこ
ぎり邪魔くさい。しちりけつばいへ
けさうんばん。エ、じやさいふて
金が出來れば其方を。只今冥途へ連
行ぞ。ア、めつそふなく。そん
なら金を。じやさいふて餘りだ。何
高いさいふのか。ア申し。何ぞ
高いぞ申しませふ。誠に、お安ふ
ござります。そんなら金を今渡すか
サア。夫ば。連れて行ふか。サア、
サア、夫ば。連れて行ふか。サア、

サア、夫ば。連れて行ふか。サア、
行く心か。ア、めつそふなく。亡
者に成てたまるものかいな。ア。何
させふしよ事がない。折角まふけた
金なれど。命替りもつふやき。
財布の金と其儘に。地藏の前に差置
て。左様なら是で五十兩。どうぞお
連れなされぬ様に。ム、良きかな

「アイヤ申。お前の聲はごふやら聞いた様な。ム、夫々もしやお前はごしようでは。エイヤ。コレ。よきかな。さい錢變じて般になり。

地藏變じてごしようなる。最早私も歸るぞよ。歸る所を見るなよ。ハイ。見は致しませぬ。見るなよ。見は致しませぬ。見るなよ。見は致しませぬ。見るなよ。

見は致しませぬ。見るなよ。見は致しませぬ。見るなよ。見は致しませぬ。見るなよ。見は致しませぬ。見るなよ。見は致しませぬ。見るなよ。

見は致しませぬ。見るなよ。見は致しませぬ。見るなよ。見は致しませぬ。見るなよ。見は致しませぬ。見るなよ。見は致しませぬ。見るなよ。

見は致しませぬ。見るなよ。見は致しませぬ。見るなよ。見は致しませぬ。見るなよ。見は致しませぬ。見るなよ。見は致しませぬ。見るなよ。

「夢では有まい。カウツト先づ爰へ日の有内に來たは順禮の田舎娘をだまして賣て五十兩。懐へ入たはそれが嬉しさに一ぱい呑に往て戻つた所へ。しろう坊がうせやがつて。

イヤアノ。お地藏様がお出なされまして。五十兩取りくさつてじやないお上申まして。地藏はなくなるコリヤやつぱり夢かいな。アイヤ。夢

ではない證據が有る。さじやうに貸た金の催促せふと思ふて今日爰へ證文持てきた筈じやが。是か有げ夢ではない。ドミチツト有ぞん。併し

こふ云時節なれば念の爲一寸讀んで見たいが薄暗がりで見えるかいな。よまればよいが。チツトよめるは

「エ、借受證文の事。一ツ金子十兩借用申候處實正也然る上

は其元殿入用の節何時にても返濟仕るべく候。後日の爲依て件の如し是があれば夢ではない何時でも十兩は取れるさいふ物有難い。ア、證文。ハアコリヤやつぱり夢かいな。

新吉原の段

入相の、鐘さへ早く暮れ果て、廓の中は萬燈會、歌舞の菩薩の色揃へ。わけて全盛宮城野が、部屋は上品奥二階、箆筒長持鏡臺の埃取迄綾錦、福さなりけるありさまなり。此君の一字なり共次の間から、宮里宮柴打連て。詞大夫様御機嫌わへ、ホンニさつきに貸本屋が参じて、先度の曾我物語の次じやさいふて置いていんだぞへ。イヤ申し宮柴様、今日

のお客は仲の町の蔦屋から、へから
んだ二人一座、宮城野様はもさより
お前も早ふ身仕廻して。オ、せわし
な、今身仕廻をするはいな、併し差
合な顔はないかへ。イ、エ、これも
侍衆、一人のお方は器量よし
今一人は髻むつちや、目の大きい熊
か人がさいふ様な、ごちらへ札が落
うやら、いやな事ではないかいなさ
何國の浦も客噂、そしるも廓のな
らはしかや。詞ア、コレ、そんな事
いふて遣手衆が呵るぞへ。オ、呵つ
たて、あたおかしい、イヤおかし
次手に、きのふ旦那様が、淺草で抱
へて戻らしやんした奉公人、おかし
い物いひではないかいな。サイナア
遠い國から姉を尋ねて上つたこの話
し、宮城野様の慰みに、連れてきてお

目にかげう、お前もお出で連立つて
行く後かげ見送つて。詞テモ扱も、
わざ／＼ひとり物いふて、マアよい氣
ではある程にの。コレ／＼しげり、
そなた其處らかたづけやま、いひ付
る間もありやなし、新造二人が伴ひ
に、いやがる者をむり無体、突出さ
れたる田舎の娘、傍きよるきよるつ
ひに見ぬ、錦の小より三つ蒲團、興
さめ顔に。詞オヤ／＼女郎さあ
達、人が寝そべつて居る處を、用さ
ア有來さらへま、二階さあぶち上て
こりやマア何たる所だ。ごこもかも
光り申て、おしやくの櫛さあ見る様
に、塗こべえた簞笥さア、其上に夜
の物も金布たもじやア、蒲團も蘇放
染の色よき、私らアねまつたら、
あくこの肌さア引か、つてうつ切

べい、おやつかなたまげ申す、
ま言ければ、打轉る程おかしさかく
し。詞コレそこなお子、お前の故郷
國所、爰へどうしてお出た譯、咄し
て聞かさんしよば、お力さもならう
にさ、なぶるさ知らずしく泣。
詞オ、やさしな詞おいやり申す、私
ら國さア奥州、だ、アやがアまに様
子有つて別れ申して、お江戸さあは
あらく盛る處だア聞き、其うへ姉
さア此吉原の名高い女郎さアに成つ
て居さるさのはなし、女わらじの身
さして敵ない思ひをして、尋ねてく
るも、海山物語りの有事、聞いて哀
れを添てたべ。詞オ、モ何を言ふじ
や、ら、すつきりさ譯か知れぬ、そ
して吉原で名高い女中を姉様さば、
雲つかむやうな尋ね物。サアそれだ

から頼み申すは。昨日観音さまで目
 眼のおつかない人が、連て行つて逢
 はしてやらうと、籠さまに乗せてく
 る所を、是の御亭の世話さまに成り
 申して夕から居申す、脚かけ申すも
 他生の縁、ほんで御座るわよ、赤は
 らばたれ申さぬぢやア。ホー、聞け
 ばきくほごおかしい咄、そして今の
 赤はらさは、あられもないと若い同
 士、糖もくづるゝ高笑ひ。知る人ぞ
 する宮城野が、押しづめて申しお二
 人、浪花の葦も伊勢の濱荻、所々で
 かはる物言、其様に笑はぬ物。詞今
 あの手の言つてじや有つた、だゝア
 やびアまさいふはな、爰で言ふさゝ
 様かゝ様、又赤はらさいふてじやは
 嘘ばつかぬさいふ事じやわいな、扱
 つてもむをれよふ御存じ。オ、知つ

たもむりか憂臥は、夜毎日毎にかは
 る枕、心つくしの果は愚か、奥のこ
 るくのお客にも、馴親しんだ身の一
 徳。詞オ、其のお客で思ひ出した、
 奥のお客がやかましかる、私も追付
 けそこへ行く、先へお出てよい様に
 コレくしげり、仲の町の井筒屋へ
 行ての、昨日の返事聞いておじや、
 早うくご云ふ下から、遣手の政が
 例のしやぎり。詞奥のお客のお待か
 れ、何咄して居さんすぞいのう。オ
 いせはし、そんならわしらも奥へ行
 て、御客選らみのえようもいはず、
 寝そべる度にア、何やら、オ、それ
 赤はらたれて氣に入つて、日から頼
 もご口々に、いふて座敷へ行くふり
 を、見やる宮城野のぶが傍。もし
 やそれこそ摺よつて。詞さつきにか

らの咄しを聞けば、姉を尋れる人さ
 うな、奥州はごころの生れ、何さい
 ふ所じやへ。詞アイ奥州は白坂近在
 迸井村さいふ所。フン其迸井村さい
 ふ所に、奥茂作さいふお人が有らふ
 かの。アイサ、其奥茂作さいふのは
 めらしがだゝア。そんならわしは妹
 さ、緋り寄るを突退けて詞イヤく
 く、がアまの常に云はしやるには
 姉さまの方にもしるしが有る、それ
 を證據に名乗合ひ、委細心底打明ろ
 さ、云めした、それが有るなら早う
 つん出し、見せてくんされ姉さまさ
 なつかしなから油断なき。オ、伶俐巧
 なる人、疑やるも尤もさ、立て箆の
 袋棚、襖開けばうやくしう、淺草
 寺の觀世音、扉表具におしならべ、
 かざり置いたる筒守り、見るに妹も

疾く遅し、首にかけまく壺井の守。

詞コレ、此姉が國を出る時

か、様も大事にせいご下さんした、

此守も、様は楠家の御浪人故、河

内の國壺井八幡様のお守、それを持

つて居やるからは、妹じやく、コ

レ、よう顔見せてたもいのう。

オ、姉さアでござるかいの、逢ひた

かつたご諸共に、嬉しなつかし纏り

寄り、外に詞は泣く計り。斯ぞさ

ざや宮城野が、座敷へ出ぬをふしぎ

さに、來かゝる亭主宗六が、様子有

りげな部屋の體、忍んで事を立聞

さも知らず姉妹ひそひそ話し。詞

オ、妹、よう尋ねて來てたもつた、年

端も行かぬそなた、さ、様成さ、か

く様なりさ、いづれぞ付いてお出

であらう、もし道中ではぐれてかき

間

はれてわつご聲を上げ。詞ア、コレ

、斯うめぐり逢ふからは、

悲しい事も何にもない、泣いては濟

まぬ、サアどうぞ、尋ねる姉の心

もそい。詞エ、遠國隔つた姉さア

それで何にも聞かないナ、だ、ア五

月田植の時分、代官志賀壺七さいふ

悪侍に。ヤアヤア、何さいやる

打切れてお死にやり申した。ヤア

懺り差込む癪。詞さつこモウ悪い時

そしてどうじや其跡は、サアおら

けもすでの事殺さる、所、庄屋の伯

父が駈つて來て、りきんでみても肝

心の、證據なければだ、アは犬死、

雉子と鷹なりや敵討の勝負もならず

すこらく、そんだの言號の御亭に

も對面はしたれども、是も此江戸さ

あへ歸り申す、跡はおらだけさア

まさばかり、頼ない身に下地の大病

ヤアお煩ひでもあつたかいの、シテ

御本復なさつたか。イエ、六月十

六日に悲しや終にお死にやり申した

ヤア、御養生も叶はなんだか。ハ

ア、話しさあ聞いてさへ、そない歡

かつしやる物、じきに見さらへたお

らだけが心、エ、コレ、泣かつしや

るは道理だければ、頼に思ふ姉さア

又病氣おこしては猶か濟ない。イヤ

、イヤ、中々煩ふ様な事じ

やない、そしてどうじやく。サア

なじよにもかじよにもおらだけ一人

庄屋の伯父さまが引取つて、奉公し

ろさ云ひめすけど、何の奉公所かい

口惜いさくやしいで、跡先思はず且

那寺へかけこんで、詞坂東順禮する

さいふて、笈摺もらひ國元を、つ

走つたもそなたに尋ね遇たら、姉妹
 心一致に仕申して、だゝアの敵討
 ちたいばかり、道中すがるの艱難も
 そなたにあはふが樂しみに、詞が
 に苦勞さは思はなんだ、併し逢ふた
 らかつぱりさ、しよつ骨が抜けた様
 な、コレそない歎かつしやる手間で
 妹ばるく尋ねて、よう来てくれた
 めこがめらしこいふてくんさい姉さ
 アも、あやも泣き入る稚氣に、長の
 旅路の憂苦勞、思ひやるせも宮城野
 に、つゞくはすゑの松山を、袖に涙
 越す涙なり。歎きの中も姉は猶、妹
 が脊を撫おろし。詞オ、其様に思や
 るも尤も、併しそなたは父母に、長
 う添やつた身の果報、此姉を見や

のう、年貢にせまつて、こゝ様は、
 水牢、其苦を助けうづつかりに、コ
 レ此廓へ身を賣つたを、思ひ返せば
 十二年、そなたは五ツ子顔さへ見知
 らず、こゝ様の御最期や母様の死目
 にも、逢はぬこいふ悲しい不孝なは
 かない事があらうかいの、斯うした
 事さは露しらず、此妹は健な知ら
 ぬ、こゝ様かゝ様お煩ひでもあらう
 なら、よもや知らしてたもらふ物、
 便のない杖柱、首尾よう年を勤め
 たら、國へ歸つてお二人に、樂させ
 まして、ごうしてご、色や浮氣を籍
 んで、勤め大事と言號の、殿御の事
 も、そなたの事も、戀しなつかし思
 ふのを、たのしみ暮したかひもなう

名乗逢ふたは嬉しいが、悲しいはな
 し聞く姉が、心も推してたもいのこ
 手を取交はず姉妹が、涙々を立聞く
 も貰ひ泣して立わけの、暖簾もぬる
 ばかりなり。つもる話は富士の山
 かすく多き涙の隙。詞こんな事聞
 ふはしか、借て讀んだる曾我物語、
 兄弟の人々も、終には父御の敵討
 コリヤ泣いてゐる所じやないわいの
 ア、是肝心の事を忘れてゐた、此姉
 の言號の夫、此江戸にあやしやんす
 この話し、其お方の名所、定めて覺
 えてゐやらうのう。そりやせはしさ
 に、何も聞かない。オ、モそれを知
 らぬこいふ事があるものかいの、そ
 ないふ事なら敵の顔も。それ知ら

いでよい物か。目眠のでつかかな鼻の
ひらたい男ぶり、モウよいく壁に
耳、御浪人こそなされたれ、由緒た
しい武士の娘。オゝめらし姉妹じ
やて、おのれやれ敵討いで置かう
か、オゝよういやつた、出かしやつ
た、幸ひ奥の大騒ぎ、あれに紛れて
此家を立退き、さうじやくと妹を
帯しめ直し我身も共に、小襦かいし
よげ身ごしらへ、立退かんさする所
を、暖簾引切かけ出る亭主。コリヤ
ごこへ。オゝ旦那様のいつの間に。
おりや最前から、アいや、たつた今
爰へ来た、か、わがみ達は敵、サア
かたい約束の男も有る故、こゝをか
け落、コレわるいぞやく、そして

マア其田舎娘を知つて居やるか、ア
イ、イーエ。知るまいてい、昨
日浅草でかへて戻つたわいのう。
旦那様私らむ今の咄し。サア聞い
たでもなし、聞かぬでも。それ聞か
れたら赦さぬぞ、突出す懐劍、さす
がの姉妹鏡臺の、鏡追取りてうく
はつし。詞ヤ何ぞ違ふた物か、違は
ぬ物はそれ姉妹ナ、此鏡臺の鏡に移
る二人の顔、似たりや似たり、花あ
やめ杜若、其五月雨のくらき夜に、
敵を討つたる曾我兄弟、假名本の曾
我物語、爰にあり合ふこそ幸ひ、お
れが讀んで聞かそう、光陰おしむべ
き時、人を待ざるこそわり、日間行
駒つながぬ月日重なりて、一滿は十

三歳に成にけり。詞ナ此道理、河津
の三野祐重といふ有名な勇者、大名
の息子殿でさへ、五ツや六ツの比よ
りも、思ひ立れた親のかたき、なみ
大ていの事でなければ討れぬ者じや
コレマ聞きや、大名の後室共云はれ
る人が、曾我の大郎祐信殿へ、二度
の嫁入せられたも、謀、又息子の箱
王丸を、いさしなげに坊主にせうこ
言はれたも、敵工藤祐經に油斷させ
う爲計り、其年月の憂艱苦、詞無念
口惜い事の有るぢやう、是迄、何ぼ
も芝居の狂言に取組んでして見せる
繼爺の祐信殿も大名、役に立すの貧
乏人さ、後ゆびをさくれたも兄弟の
子供衆に、實父の敵か討せたい武士

の意氣地、こりや是陰徳と云ふ大義心、其上鬼王床司左衛門といふて、伊東家の老臣もあつて、幼少な子供衆に、晝は終日劍術稽古、夜もすがら机の上、忠孝の道を教へ、成人の後に及んで、兄貴を十郎祐成、弟御を五郎時致と名乗らしたも、北條殿といふ烏帽子親が有つたさかい、近いたこへは、おれが様な不粹むくつけない親方じやと思ふてたもるし、こつちも又抱の奉公人じやと思へば、何事によらず引けを取らしさむないア、こんな事は言はいでも知れた事じやが、今の様な咄しを聞けば、おりや見通したい、コレ爰をよう聞きや、首尾ようそなたも逃果てか

らが、悲しい事は遠國生れ、しつかりとした心當もなうて、江戸中をうろつきやるを、内人の者共も見付、何所そこにあますといふ事を聞いてア、ふいらい打捨て置けさは、親方の身でどうもいばれぬ、そりやモわがみ達計でもない、此廓へくる奉公人に親孝行か、夫のためでない物は一人もない、あれも孝行じや、これも貞女じやと、それなりけりに仕廻ふては、こつちもおやま商賣取置かねばならぬ、おれに成人の息子でもあつて、抱の新造呼出したり、色狂ひに身を打つと聞けば、ヤイ極道めばいまくつてのける勤當じやと、強異見する親の身が、人様の大事の息

子殿が見えるさ、きやつ放錢じやわいの、コレ頼もしさうなお客じや程に、随分大事にかきやと、智恵を付る、マ此様な得手勝手な商賣はなげれど、こりや是浮世の身過世過、さういふ身分な此おれでも、慈悲な情といふ事は、不斷心に忘れはせぬ。まちよつといふて見様なら、此惣六は最前いふた、鬼王床司左衛門じやと思や。外に烏帽子親の北條殿といふ様な、後楯でも出来てから、ヤさつきの様に思ひ込んで、突かいつた懐劍、おれにさへつゝい擲き落される様な事では、まさか敵に出合ふた時すつぼんの間にも合ぬほごに、おれがいふ詞に隨ひ、コレ、此道をも

稽古して、鍛錬の熟した上では、ぐつこぐつ尻持つ合點。コレ欠落の尻もつて行かふこはいふまい、急ぐ所ではない程に、大事の勤め、欠落しようとは無分別、お客大事に勤めてたも、合點がいたかこ、つごくに、曾我物語の引くり、讀切講釋一方を、頼もしげある亭主なり。二人は飛立つ忝涙、身にも胸にもあり餘。エーありかたう御座んすこ、姉が拜めば妹も、只伏拜む許りなり。詞オー嬉しいのは尤も、義を見せざるは勇なし、わがみ達の様な奉公人見立て、召かへたさいや、仰山なむ、おれが目鐘もおよそ違はぬ、禮いふ事も何にも及ばぬ。是

人の目鏡に悟られぬ様、随分共げはひ化粧も美しうして奥の座敷へ、ソレ遣手の政はぬか、湯をもつて来てやれいやい、しげりはぬかか呼出して、言ひ付るのも賣物に、花も美もある響の惣六。生料の淀まぬ座敷は大騒ぎ、牽頭末社も弾く三味に乗つて呑むやら調ふやら、現たはひの喜見城、意見上手の親方、こもる情に宮城野が、妹を部屋に奥座敷引別れてぞ、三重
M 入にける。



中 奥州安達原

敷妙使者の段

中 竹本相生太夫

豊澤猿 糸

矢の根の段

次 竹本大隅太夫

鶴澤道 八

袖萩祭文の段

切 豊竹古靱太夫

鶴澤清 六

敷妙使者の段
矢の根の段
袖萩祭文の段

この淨瑠璃は寶曆十二年九月の竹本座に初演されたもので近松半二、竹本三郎兵衛、竹田和泉、北窓後一等の合作で全五段物です。後三年の合戦を主題に平兼盛の『陸奥の安達原の黒塚に鬼こもれりさいふは誠か』の古歌を潤色したものです。環宮守護の役を承つてゐる謙杖直方に二人の娘もあり、妹は八幡太郎源義家の妻に、姉は安倍貞任の妻になつて姉妹敵味方に分れてゐたのも奇しき運命ごこで、八幡太郎に亡ぼ

された安倍頼時の二子、貞任、宗任は親の仇さあつて弟は南兵衛といふ下郎に扮し、兄は桂中納言教氏になりすまして、環宮の御所に忍び義家を窺ふが謙杖は環宮御行方不明の言解に自及し、兄弟は義家にそれと看破されるが義家の寛仁大度に戦場再會を約して引別れる。貞任の妻袖萩は盲になつて親謙杖のもさをたづねます。其處に親子恩愛の熱情も溢れ出で涙を流させます。

(床本) 敷妙使者の段

心の内こそ哀なれ平の謙杖直方環宮の御行衛知らぬ築紫のほこきす夏去り冬のいつしかにすでに今年の日の数も春待ばかりかれ残り枯果つる庭の檜皮ぶき落葉の軒さぶきかか

人形

敷妙御前 吉田扇太郎

謙杖直方 吉田玉次郎

妻濱夕 吉田小兵吉

外ヶ濱南兵衛
實は安倍宗任 吉田玉松

桂中納言
實は安倍貞任 吉田榮三

娘袖萩 吉田文五郎

おきみ 桐竹紋司

八幡太郎 吉田光之助

仕丁大ぜい

腰元大ぜい

へて殿間の女中仕丁もなく老の忠義の一筋に竹の園生の侍もつもの白髪に雪折れて妻の濱ゆふ只二人夫婦の人なにいまでもかりける椽先に立出なふ殿お年寄の雪ふりに庭に出て何なさる寒氣か入ふにもふおはいりちさ火にお寄さきり炭のせうに成まで女夫合サレバく宮様行方なく成賜へば此御所は明屋敷我々夫婦が斯様に御番は致せ共肝心の主なれば玉の御殿も鳥の塙さ成果今日なども宮おはしますならば仕丁共に木の葉の雪を拂はせて御遊びなされうものをこふさ思ひ出して子供眞似する雪なぶり天地の中にさへましまさば奪ひ返して此恥辱すゝかんもの心は雲にも入りたれど都の中を身動きなれば空しく胸をいる斗り不便なは

娘敷妙日本の智者と呼ぶ八幡殿に連添なむら不覺を取た此親殿夫の手前恥かしく嘸肩身がすばらふさそも此春より一夜さも實にれた夜はおじやらぬさ奥齒もれくるまばら聲アいふござりますはいの弓取の不覺さ言ふは軍の中の憶病こりやほんの災難敷妙も事おつしやるに付けて思ひ出すは姉娘の袖萩親にもしらす忍び男を拵へての家出憎いやつと思ふたも早一昔其時はまた十六の後先なし年も行たればさぞ今頃は悔しう思ふて居るのであるごにうるたへ居る事ぞエー又姉めが事ごごくア思ひ出すも穢かしい不孝者といはふか武士の家の不義放埒再び顔も見まじさ思ひしにまだ業か見てぬやら朱雀堤の橋の上でエー橋の上で何さした

へサアいや何ん共せぬたごへ橋の上
 でのたれ死しならふも不便な共思は
 ぬお身は又何ぞ思ふ氣かイーエ何
 さも存じませぬチ、身共は結局心地
 よく思ふはいご口は憎てい身を背け
 物事つゝまぬ夫婦中涙一つは隠しあ
 ふ腰元共む取次の間敷妙様御出さ娘
 なむらも案内は武家の行儀の表門、
 遠親子の中座敷チ、此頃は便もなし
 心地でも悪いかさ謙杖殿も案じてじ
 やによふおじやつたサア、愛へテ
 モ美しう髪結やつたご子供のように思
 ふは母ア、イヤ申けふ参つたはお見
 舞ではない謙杖様へ夫八幡太郎義家
 が使者でござりますム、ハテかはつ
 た表向きの用事ならば家來は越さで
 そなたを使者さばア、コレ、奥だ
 まりやれ何にもせよ使者さ有娘は

内證いざお使者御口上の趣承はら
 んご有ければ義家申越仔細環の宮お
 行衛なき事御かしづきの謙杖殿誤り
 據なく日延の日數も今日限り若も
 言譯なきににおいて罪を正す義家が
 役舞舅の容赦は致さず勅諭を以て取
 圍敵味方ご成申さん其時必ず遺恨に
 ばし思されなき爲申遣はす使者の口
 上あら、斯の通りでござんすこ語
 る中より謙杖直方いそ、立て一間
 の内柳箱に簀つたる簀ご思しく携へ
 出扱々八幡殿は天晴仁有る大將かな
 元來、某は平家八幡殿は源氏舞舅ご
 成は希なる事ごそちを嫁らした其時
 より聳引出に赤籠一ご流れ遣はし八
 幡殿より此白籠一流れ取かへて所持
 せしは兩家合体の其印此度の我誤り
 に付ては言がいなき舅よしなき縁を

組しよご思はれんは必定大方娘ご縁
 切て此籠を取戻しに來るで有ふ若去
 られたら其思ひはいか斗りごふぞ此
 白籠のやはり此家に止る様にさ此頃
 神前に据置毎日祈るかひ有て今日娘
 を表向の使者さして差越れし八幡殿
 の心底たごへ舞舅敵味方に成迎も敷
 妙は去ぬご有情の謎老人が心を察し
 心づかひの御親切逢ては禮も言はれ
 ぬ義理お使者歸つて申されふは仰越
 さるゝ趣き一々承知仕る委細の心底
 ば對面の上申聞いお出を待ご傳へら
 れよお使者大義ご式禮も弓矢の面裏
 門口八幡太郎參上ご白衣ながらに入
 賜へばコハいつの間にさ敷妙も不審
 立そに立母親此頂絶し一家の參お
 茶よお菓子ご賑々し直方邊に目をく
 ばり懷中より一通取出し親い中にも

胸中を斗り兼ね今日迄は御殿にも包しが宮の御行衛尋ねべき手がかりさ
いふは此状契約の如く環の宮を密に盗出しくれよと畫の内侍へ頼の文体

名は誰共なければ共必定安倍の頼時が餘類貞任宗任兄弟の族奪い取て儕れ等も味方を集る柱にせん爲さあれば御命に別條なしと心の安堵はしなむらも言譯立ぬ身の落度我心を推量有

ホウウさこそ我推察も其こそ此程奥州より捕へ来る鶴殺しの科人つら魂尋常ならず肩口に二つの瘰是こそ兼て聞及ぶ目印疑ひもなく安倍の宗任一人は手に入しが今一人の兄貞任此兩人さへ捕なば宮の行方明白たらんこ則彼宗任を此館へ引せ来る禁庭の御沙汰なき中に詮議肝要たるべしと力を付くる時しもあれ桂

中納言様御出也とせしらすればソレ氣遣ひ私の内意が勅諒が女儀は次へ改むる座席に心残れ共母と娘は立て行く。

(床本) 矢の根の段

娘は立て行く中納言教氏卿衣冠の袂にかほり来る雪より出でて雪より白き白梅一枝小四方に取乗せ持参ある諫杖には此間公の御ふしん蒙り嘸心を痛められん鬱氣をばらす此梅まだ冬籠の枝ながら進上申す此花と諸共喜悅の眉を開かれよと直方が前にさし出し義家朝臣のおわするも、彼詮義の一條ならん殊更親しき一家の中御心底さつし入るコハ卿の御詞をも覺えず一家は一家政道に依佑なき義家詮義の手がかりになるべき科人

先達て捕え置くヤアヤア義家が家来共鶴殺を是へ引けと呼はり給ふ一聲に鶴の科人出おらふと權威の下部は蠅虫と見下て破布子の繩付ながら眼中威勢備つて實に大將と大將の見参こそ見えにけれ鶴を打つたる科人外も濱の南兵衛とは假の名奥州の住人安倍の頼時が次男宗任とも言はるゝ勇士夫れ程のへろへろ繩引つ切は安かるべきに態と下部に引出きるゝは義家に鬱憤を言はんす爲な聞て得させんサア何と語れいかにこのたまえば是は又思ひかけもない。そんなむつかしい名は生れてから聞いた事もござりませぬ博奕打の南兵衛に違ひなければ元よりお前様に勿体ない鬱憤とやら一分とやらきなかまかけ値は申ませぬ兎角命が惜しいばつか

りごうぞお慈悲に繩さいて下さりませ
 せよ泣かぬ計りの白々しさム、然らば
 備座の匹夫下郎に違ひないなヨリ
 ヤこの旗を見知つて居るか是こそ我
 父伊豫の守奥州追討罰の折柄押立て
 給ひし白旗其時宗任が親安倍の頼時
 大将めがて放ちし矢先ぬらひはづれ
 てこの旗に請留即時に踏折捨てられ
 し其矢の根はコレサ爰にム、テヘハ
 い、頼時連が拙き運にて源氏に敵
 對叶はぬ事今にも其餘類あらば却つ
 て敵の此矢を以て斯の通りさてうご
 打つ鐵は庭の手水鉢じろりこ見やつ
 てヤ是は扱危ない事をこそらさぬ顔
 教氏卿連み出でよし手練は兎も有醫
 誠の宗任なり共匹夫下郎に等しき男
 大望の企思ひもよらず奥州の果に
 生れ草木の名も知らぬ鹿猿同然の族

斯云が無念成ばコレ此花の名を知つ
 つるかま白梅取つて指出し東夷の
 目にはよも知まじ知つたらば云て見
 よやと嘲弄ある宗任ぐつせき上南
 兵衛さ云ふ下郎でござれば花の名は
 いかにも存せぬ併そふおつしやる教
 氏卿も以前は流し者に合て配所の島
 守やうく此頃めし返されかむり装
 束かけたれば逆正眞の山猿の冠相手
 になる口は持たぬ身が返答はコレ斯
 と傍に立たる件の矢の根口にくわへ
 て我れと我が口つんざく血汐の
 紅何かはあやも白旗に鐵の筆のさ
 らく文字あざやかに染なすば東
 夷の名にも似ぬ三十一文字の言の葉
 に座も白梅の枝折て冠傾き見へけ
 るがム、詞争ひむやくしと和歌を
 以ての返答我國の梅花の花さは見つれ

共大宮人はいかや云らんホ、面白し
 く我に歌を詠かけしは返歌せよと
 の事ならん去ながら最前汝かいふ如
 く此教氏は父の卿諸其幼少より鳴へ
 趣き鄙に育ちし恥しき雲の上に座を
 列ながら我さえも得詠まぬ歌を斯く
 即席に詠叶へし器量骨柄間に及ばず
 安倍宗任に違なしア言はれぬ歌で蛙
 は口から我と我手に白状せし淺はか
 さよご一言に勝色見する梅花の頓智
 術に乗り無念の宗任口にくわへし鐵
 の手裏劔大将目むけ打返すをてうご
 留たる源氏の白梅ホ、ウ尤ごふこ
 そ有べけれ生捕るも捕らぬも時の運
 命恥さな思ひそ猶此上に義家が尋問
 ふべき仔細有こなたへ引けと引立て
 させ奥の間さして入給ふ教氏傍を打
 詠め謙杖の傍近く扱々心つかひさ

つし申す未だ言譯の筋も有ざるやハ
ソア夫故にこそ心を痛め罷有ホーさ
こそあらん夫に付今日貴殿に心ざし
たるこの梅ばまだ寒中に室にて温め
咲せし花天の自然に有られ共春を待
得て咲く花より早き詠めを人の賞翫
又散る時も其通りしほみかぢけて見
苦しうならぬさきに此枝の如くさつ
ぱりと切れば却つて香も深し花に限
らず身にも又切り時々大事左様には
思はれずやム、御心深き此一品ちり
かゝつたる老の枝切れさ給はる天の
賜 花物云れど御謎に白梅の腹切刀
造に落手仕るハ、天晴明察大江維

立ち入りける。

(床本) 袖萩祭交の段

只さへ曇る雪空に心の闇の暮近く一
間に直す白梅も無常を急ぐ冬の風身
にこたゆるは血筋の縁不便やお袖は
さばく親の大事さ聞つらさ娘お
君に手を引れ親は子を杖子は親を走
らんこそすれど雪道に力なくくたご
り来て垣の外面にア、嬉しやたれも
見咎めはせなんだのイ、エ門口に侍
衆おれふつて居やしやつた間にチ、
賢い子じや謙杖様は此春から主のお
屋敷にはござらず此宮様の御所にさ
聞てごふやらかふやら爰迄來事はき
たけれど御勘當の父上母様殊に淺ま
しい此形で誰取次でくれる者も有ま
いお目にかゝつて御難儀の様子ござ

ふぞ聞たやござぐればさばる小柴垣
ム、爰はお庭先のしほり門戸をた
くにもたゝかれぬ不孝の報ひ此垣一
重が鐵の門より高ふ心から泣聲さへ
も憚つて鏡戸にくひ付泣居たり謙杖
は斯さもしらず垣の外に誰やら人聲
アレ女子共はおらぬかさいひつゝ自
身庭の面外にはそれさなつかしさ恥
しさもまた先立ておほふ袖萩知らぬ
父明けて悔くり戸をびつしやり何の
御用も腰元共濱ゆふも庭に立出て謙
杖殿何ぞいのイヤ何でもない見ぐる
しいやつかうせおつてアレ腰元共追
出せばやあんなもの見る物でないこ
つちへお來やれくさ夫の詞は氣も
付すマ何をきまこ言つしやるム
犬でも這入ましたか何心なく戸
を明けてよく透せば娘の袖萩は

つさあきれて又ばつたり娘は聲を聞
 知れど母様かとも得も言ず母はかは
 りし形を見て胸一べいにふさがる思
 ひ押さけく定めぬ世言なら
 テモ扱もくく思ひかげもないア
 コレくばい何いやるイヤさあや
 つばり犬でござんしたほんに憎い犬
 め親に背た天罰で目も潰れたな神佛
 にも見離され定て世に落果ておらふ
 さは思ふたれご是は又あんまりきつ
 い落果やう今おもひ知おつたかご餘
 所にしらすも涙聲様子しられば腰元
 共さつても慮外な物もらひなら仲間
 衆にはもらはいでお庭先へむさくる
 しいさつこゝ出やせり立られハイ
 くくごふぞ御了簡なされてまち
 つさの間ハテしつこいさ女中の口々
 ヤレ待てくれ女子共ヤイ物もらひお

あしがほしくばなせ歌を諷はぬぞ願
 ひの筋も何なりと諷ふて聞せご夫の
 手前ちつこの間な隙入たさあいご
 言へご袖萩久しぶりの母の前琴の
 組さば引かへて露命を繋ぐ古糸に皮
 もやぶれし三味絃の罰も慮外も願す
 おれがひ申奉る今のうき身の恥し
 さ父上や母様のお氣に背きし報ひに
 て二世の夫にも引別れ泣潰したるめ
 なし鳥二人が中のコレ此お君ごて明
 て漸十一の子を持てしる親の恩しら
 ぬ祖父様ばく様を慕ふ此子がいちら
 しさ不便と思し賜はれご後諷ひさし
 せき入娘孫ご聞より濱夕が飛立斗り
 戸の透間抱き入たさ絶たさ祖父もか
 はらぬあひたさを隠してわざごさか
 り聲ヤアかしまして小歌聞たふない
 女共も奥へいてお客人に付て居よ、

サ皆往けくイヤサばい何うちんく
 早く畜生めを擲き出して仕廻やれさ
 アコレ腹立は尤なれご夫は餘りハ
 テ扱隙入る程爲ならぬ武士の家で不
 義した女郎め擲き出すごはまだ親の
 慈悲長居せばうぬぶち放そふか親の
 恥を思ふて名を包むはまだしもご思
 ひの外今ごなつて身の置所もなさの
 訛言恥顔もかまはずよくうせたな但
 は親へ顔當にわざご其形見せにうせ
 たかにつくひやつごいかりの聲袖萩
 悲しさやる方なくなんくのせいも
 ん勿体ない去りながらそふ思し召も
 御尤大恩を忘れた位我身ながらあ
 いその盡た此体お詫申したさてお聞
 き入か何の有そりや思ひ切てはおり
 まするお屋敷の軒迄も來られる身で
 はなけれ共お命にかゝる一大事ご聞

て心も心ならず顔おしぬぐふて参り
ました不孝の罰で目はつぶれる此子
をつれて爰の軒では追立られかしこ
の橋ではぶち擲るゝ愛目にあふても
此身の罪にくらぶればまだんぐんゝ
業の果し様も足ぬさモ未來が猶しも
悲しい此上のお願ひには娘のお君お
目見へと申すは慮外只の非人の子と
思し召たつた一言お詞をおかけなさ
れてくだされと歎けばお君も手を合
せ申且那樣奥様外に願ひはござりま
せぬお慈悲に一言物おつしやつて下
さりませと言馴れし袖乞詞に濱夕が
可愛や〜／＼な子心にさへ身を恥
て祖父様共ばい様共得言はぬ様にし
をつたは皆儂の徒故畜生の様な腹
から見事犬猫も産をらず生れ落るこ
乞食さす子をアレあの様におさなし

う産付さまは何事ぞあんまり憎ふて
おりや物が言れぬ〜とむごう言の
はかはいさの裏の濱夕幾重にもお慈
悲〜と泣ばかり諫杖猶も聲あらゝ
かヤア親が難儀にあはふかあふまい
か女めがいらざる世話同じ兄弟でも
妹の敷妙は八幡殿の北の方さ呼る
て手柄姉めは下郎を夫に持げ根生迄
か下主女めと恥しめられてわつと泣
ノチ下主下郎さはお情ない夫も本は
筋目有侍黒澤左中さは浪人の假の
名別れた時の夫の文に筋目も本名も
書てござんす是見てたべさ差出すを
取次紙のはしくれも蛇の種にもなれ
かしと思ふは母より直方が讀文体の
奥の名に奥州安倍貞任さばなむ三寶
扱は貞任と縁組しかさ心もそゆるに
懐中の一通取出し引合せば扱こそ同

筆ハアはつと斗り當惑の色目を見せ
じとすんど立ヤア穢はしい此状彌
以てあふここならぬサア奥こちへハ
テぐすつかすも早おじやれさ尖い詞
にせがまれて母もせびなく立て行な
ふコレ暫しモウ逢ふさは申ませぬお
身の難儀の其譯をさふぞ聞して下さ
りませ申〜と延上り見れど言の垣
覗き早暮過ぐる風につれ折から頻に
ふる雪に身は濡鷺の芦垣や中を隔る
白妙も天道様のお憎しみ請し身はい
さわれご様子聞れば何ぼでもないなぬ
〜と泣聲も嵐と雪に埋れて聞へぬ
父さ恨み泣次策〜に降つもる寒氣
に肌も冷切ば持病の瘡の差込でかつ
げと轉へばお君はうろ〜さする脊
中も釘氷涙かた手に我着物一重を
ぬいで母親に着せてしよんぼり白雪

をすくふて口にふくまずれば漸々顔
 を上げテ、お君もふよござる此又冷
 る事はいのそなたは寒ふはないかや
 イエ／＼わたしは温ふござりますテ
 いよふ着て居やるかドレン／＼アそ
 なたはコリヤ裸身着物はさふ仕やつ
 たそいのふアイ餘りお前が寒からふ
 ご思ふてハ、ア親なればこそエ、マ
 子成はこそわしが様な不孝な者が何
 としてそなたの様な孝行な子をもつ
 た是も因果の中とてだきしめ／＼泣
 涙絶兼て垣越に襤ひらりと濱夕が
 ナ、さつきにから皆聞て居る儘なら
 ぬ世じやな町人の身の上ならば若い
 者じやもの、徒もせいじやそんない
 孫産んだ娘ヤレ出かしたご呼入て、
 聲よ舅ご言べきに抱たふてならぬ初
 孫の顔もろくに得見ぬは武士に連添

浅ましさを諦て逝でくれヨ、こい
 ふ中に奥濱夕ご呼聲にアイ／＼そこ
 へ参ります娘よ孫よもふさらば可愛
 の者やご老の足見返り／＼奥へ行く
 折しも庭の飛石傳ひ雪明りにうかッ
 ひ寄安倍の宗任戸を引明ればアこは
 ご立退お君をじつごさらへコリヤこ
 はいこそはないうそちが伯父の宗任じ
 やア宗任様ごは夫貞任殿の弟御チ
 いついに逢れご兄嫁の袖袂殿ア、そ
 んならお前に聞たら知るである夫婦
 別れる其時に夫に預けた千代童は息
 災で居るかいなチ、其千代童はの傷
 寒で死んだわいのエイハアチ、歎き
 は理り何かに付て一家の敵は八幡太
 郎、あなたも兄貞任殿の妻ならば今宵
 何ぞぞ近寄て直方ご首討れよエイ
 アノさ、様をチ、生置てば我々ご大

望の妨けコレ此懐飯でご手に渡す難
 題何ぞ障子の内曲者待ご大將の聲に
 悔り折あしくそちへ／＼ご忍ばせて
 胸をすへてごつかご座し繩引切て逃
 出んご存ぜしに見付られたは天命ご
 腕押廻せば義家公繩には有で真紅の
 糸結びし金札宗任が首にさつくご打
 かけ賜ひ綱にもれたる鱗を助くるは
 天の道康平五年源の義家はを放つ
 ミナソレ其札此上もなき關所の切手
 にほこつ、
 日本國中を放しがいご仁者の詞にハ
 アはつご雪に頭は下ながら庭の善悪
 閉隠す氷を踏で別れ行夫の最期を濱
 夕が白梅の腹切刀三方に乗る露涙
 夕々にも同じ袖袂ご死より外はなくな
 くも歸る戸口に父謙杖、鏝しつかご
 座に直り、三方取て覺悟の矢の根取
 ごはしらぬ袖袂が娘に見せじご突込

懐劔はつと驚き取付お君聲立させし
ご抱しむれば母は夫が片手に押へま
た女めは逝おらぬが氣強くば言ふ物
の年寄たれば何時しれぬ聲成共よく
聞て置とそれこは言ぬ暇乞こは露程
も秋萩が扱はお心相らざしかう成
果た身の上ごふで追付のたれ死是が
お聲の聞納めでござりませうと親こ
子が一所に死さば神ならぬ障子おし
明立寄教氏母はかけおりヤアそなた
は自害しやつたかコレ謙杖殿も御切
腹エイヤノこゝ様も娘もこ一度に驚
き轉びおりあきれ涙にわかちなし手
賃を見届け中納言貞任に縁組れし御
邊所詮死で叶はぬ命袖萩さやらんも
死すば成まいハア健氣なる最期天
聽に達し申べしと冠高くしづく
ご心残して立出る衣紋に薫る風なら

であやしや聞ゆる鐘の聲コハいぶか
しご主戻りあたりになり心目を配る一二
の對の屋隈々に太鼓の音の喧しハ
テふしぎや此明御殿に陣鐘を打立る
は何者成ぞごふり返る一間の内より
高らかに八幡太郎義家はに有奥州の
夷安倍貞任に見參せんご立出賜ふ御
大將つゝゐるでかけ寄る二人の組子弓
手妻手へはつたご蹴飛しヤアう心得
ず柱中納言教氏を貞任ごは何をもつ
て。ホーウ此義家天眼通は得ざれ共
過つる大赦の砌り柱中納言なりご名
乗來る曲者つづくゝ面体を窺ふに我
稚き時見覺し安倍頼時にさも似たり
扱こそ貞任に極まつたり宮の御行衛
十握の寶劔をも取隠し猶二色の御寶
を奪ひ親が根ざしの大望を達せん工
みサあらがはれぬ證據は是ご白旗を

取出し賜ひ最前汝も弟宗任ご別れ
程へし兄弟の對面梅の花によそへて
かけたる謎早くも悟つてナコレ此歌
我國の梅の花さば見つれ共ごつゝ
し上の白梅の花ば花の兄我國さば我
本國奥州の兄ならんご兄弟一致の血
判に白旗を穢し源氏を調伏此上にも
返答あるやサハハハ何さくご差
付られ貞任無念の髮逆立エ口惜や
なア我一旦浪人ごなつて都の様子を
窺ひしが官位なくては大内へ入込れ
ずご浪人赦免の折を幸ひ嶋にて死せ
し範氏ご偽り始めて逢た舅謙杖に腹切
せしは詮義の種の一通をサ取らん爲
所詮我謀むなしくなれば親の敵八
幡太郎運を一時に決せんご太刀に手
をかけ詰寄ればハアせいたりな貞
任汝獅子王の勢ひ有共斯八方に敵を

受けサ遁るべきや又其方も一命は宮
 寶劔の御有家白狀する迄助け置命な
 ぐらへ父頼時の甲ひ軍は又重れて弓
 矢の情は相互ひ夫婦の操も節儀は一
 ツ貞心厚き袖袂が最期の際に喉乞こ
 なさけの詞に袖袂がノチなつかしの
 貞任殿最前からよふ似た聲さば聞な
 から六年ふりで廻り合顔見ること叶
 はぬか死る今ばにぞふぞして此眼が
 明たいコレお君さゝ様のふさ稚子を
 見るに遠の貞任も俱に血を吐く親々
 が恩愛の涙ばら／＼大將あはれ
 み思し召し、親の縁きれたるお君義
 家が子に養はんこ仰に謙杖有難涙い
 かなれば某は敵さ味方を聳にもつ
 因果も思ひめぐらせば代々不和なる
 源平を先祖に脊て縁組だ我誤りを白
 旗の此白梅を血に染て元の平家の寒

紅梅娘父上イザ一所に駕殿さらば我
 夫さらば謙杖殿かゝさまのふさ別れ
 の涙母の濱夕稚子も一度にわつさ濡
 る袖御大將も直垂の袖射削つて餘り
 の矢先竹に忽ちすつくご宗任最前見
 遁し歸りしは兄弟本意を遂ん爲優曇
 華まさりの親の敵サ、勝負／＼
 ご詰かゝるを貞任暫しご押さゝめ晋
 の豫讓は衣をさく此白幡をまつ此如
 く手に取ば八幡が首提げんば案の内
 敷妙の身には大切な夫婦の縁を繼目
 の旗ソレ大事に召れ濱夕ご渡すば舅
 の幡天蓋ひるかへしたる梅花の赤旗
 奥州に押立／＼父頼時が甲ひ軍一先
 此場は宗任來れハツア實尤兄弟人
 雪持笹は源氏の旗。竿一矢射たるは
 當座の腹いせ首を洗ふて義家お待ち
 やれチ、互ひに勝負は戰場／＼

先夫まで桂中納言教氏卿御苦勞ぞ
 ふご式禮におさらばさらばご敵味方
 ちやくする冠裝束も故郷へ歸る袖袂
 雁の翅の雲の上母にわかれて稚子か
 父よご呼ば振返り見やる目元に一時
 雨はつご枯葉のちりん／＼嵐心弱れ
 ご兄弟もまた取直す勇聲よるべ涙に
 立ちかたて幾重の思ひ濱夕ご身にふる
 雪の白妙になびく源氏の御大將安倍
 の貞任宗任が武勇は今に隠れなし。



白木屋の段

竹本文字太夫
野澤勝平

人形

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 親 | 娘 | 髮 | 下 | 丁 | 佃 | 番 |
| 庄 | お | 結 | 女 | 稚 | 屋 | 頭 |
| 兵 | 才 | 才 | お | 三 | 喜 | 丈 |
| 衛 | 駒 | 三 | 芳 | 太 | 藏 | 八 |
| 吉 | 桐 | 桐 | 吉 | 吉 | 吉 | 吉 |
| 田 | 竹 | 竹 | 田 | 田 | 田 | 田 |
| 玉 | 紋 | 政 | 文 | 榮 | 玉 | 榮 |
| 次 | 十 | 龜 | 之 | 三 | 幸 | 三 |
| 郎 | 郎 | 龜 | 助 | 郎 | 幸 | 三 |

次戀娘昔八丈

鈴木 白木屋の段
ケ 森の段

安永四年九月に初演された松貫四、吉田角丸の合作です。實説となつてゐる江戸新材木町白子屋の娘お熊が爛れたる愛慾の葛藤から罪を犯し享保十二年十二月二十五日鈴ヶ森の露ご消えた事蹟を脚色したものです。原作は七段物になつてゐます。お熊が引廻しの時に上に黄八丈の大格子を下着に白無垢髪は島田で薄化粧した美しさは浮世繪から脱け出したやうだつたと言書残されてゐます。

(床本) 白木屋の段

鹿オドリ いふもさらなる繁華の地、

人の心も國がらに、自然に廣き武藏野の、月日もしげく立つやく、家居隙無く諸國から、入込む人さ出る人さ、出家侍諸商人、百萬石もけんべきも、擧違ふたる繁昌は、金の生る木の植所、角引廻す家立や、所久しく住馴れて、人の思はく財産も、聖い商賣白木屋さ、門に印の杉ならで、軒に並ぶる材木は、幾年経りし老舗なり。主人庄兵衛は日外より引籠つたる目の病ひ、店を預かる丈八がもたれかゝつた帳箱に、勿體つける番頭顔詞コリヤ小僧よ、通り町の尾張屋へ往て、今朝の小割さ貫十挺の代金、只今つかはされませさ、此書付もつて請取つて来い。ソレ又芝居へ這入て居るな。アイ、合點さ云捨て、さつかは急ぎ走り行く。後

鈴ヶ森の段

竹本南部太夫
野澤吉彌

人形

| | | |
|----|------|-------|
| 親 | 庄兵衛 | 吉田玉次郎 |
| 同 | 女房 | 吉田玉七 |
| 娘 | お駒 | 桐竹紋十郎 |
| 髪結 | 才三 | 桐竹政龜 |
| 番頭 | 丈八 | 吉田榮三 |
| 代官 | 提彌藤次 | 吉田玉市 |
| 番 | 太 | 桐竹紋太郎 |
| 番 | 太 | 吉田玉徳 |
| 奴 | 角 | 吉田萬次郎 |
| 奴 | 内 | 吉田覺三郎 |
| 見 | 平 | 吉田覺三郎 |
| 物 | 大 | ぜい |

には一人丈八が、滅多無性に飲む煙草、雁首傾け思案顔、思ひ内にあれば色勝る憂き思ひ、屋敷の勤いっしかに、思ふに別れ思はずも、呼び返へされし親の内、今宵の事の氣にかり、若其人の來よかしと、表の方へ立出る。姿ちらりとお駒様々々申しちよつここちらへお出なされませ、ア、今夜は御様がお出ぢやげにござりますな、へ、へ、へ、嘘そお嬉しうござりませうなア、ほん／＼にあたお目出たい、ア、あたいま／＼しい事でござりますわい。アノまアほんに嬉しさうな顔わいの。エ、丈八の何にいやる、私やそんな事聞きたうない、耳が穢れる穢らほしい、聞えませぬはさ、様か、様、わしが心にどの様な、義理約束があら、

うやら、問ひ談合もある事が、事々好みしなされかた、斯う云ふ事を露ほども、知らせたい聞かせたい、ごうせうぞいのごうせうと、目には涙の玉あられ、我身にうけて丈八が、首筋元からじいわ、じわ／＼／＼詞ハア、われは包むと思へ共、穂に現はれしかへエこればしたり、ア面目ない詞これ迄も幾度か、モウ云うか／＼と口迄はぞろ／＼出たけれど、云ひ出しかれてをりました、ごうぞお前に夢になごしらせたいと思ふから詞マア／＼番頭様共云はれる身が、コレ淺草の地藏様へ、七日が間跣足まゐりを致し、またハイ申し申し地藏様エ、私因果でござります、何卒此懸叶ひます様にござります、一心かけて願ふたらサア、地藏様の

御利生と云ふ物は、イヤモさんごも
争はれぬ物ぢや、お前様が私に夫程
心中立、今夜の聲が嫌ぢやさばコレ
嬉しいぞへ、忝いぞへ、コレく私
やさつきにから手を合して拜んでば
かり居りますわいな。エ、何のこつ
ちやぞいの。なんのそなたにあほら
しい私も立つるはついこゝらに、コ
いついこゝらにア、エ、矢張お
れぢや、己より外に誰も男はな
いもせぬ物、夫に又近所の若い者の
噂にも、アノ白木屋の娘はきよさい
物ぢや、あいつはマア脊はすらりこ
高し、器量はよし、色はくつきりこ
白し、ア、白い子ぢや、白子ぢや、
アリヤ白木屋ぢやない、白子屋のお
駒ぢやと云いやんすぞへ、マお前そ
れ程に仇名する評判娘、そつちから

も氣があるとはエ、忝い難有いこ
めつた無性に嬉しがり、手ほめうぬ
ぼれ有頂天、詞丈八殿く、おかみさ
んが召しますと、呼び立てられて詞
オ、エ、エ、さんごもごんな事では
あるわいコレお駒様、まだ云ひ殘し
た事がある、後にくご目さ仕方、
しすまし顔で走り入る。お駒も胸へ
さしのぼる、癪を押へて奥へ行く。
すぎはいは實に剃刀の刃を渡る、オ
三も今は主親に、捨られ果ての髮結
の、一日所定らず、忙むしさうに
ちよこく走り、下女のお菊が手に
持つた三寶拭きく、詞コレ髮結殿、
小僧殿を呼びにやつたに、つい來て
くれたがよいわいな。サア直に參じ
ませうと存じましたが、お向の稚の
月代、何彼の例の髮惜しみ、漸し

まふてたつた今、ハアさうして旦那
にはごちらへぞお出でなされますの
でござりますかへ。イヤごこへも行
きやなされぬが、今夜ごちのお駒様
に、聲様がはいる故、大抵忙しい事
ぢやない。エ、ナ、何とお仰有り
ます、今夜内かたのお駒様に聲様が
アノそりやお前ほんかへ。オ、此人
わいの、なんの其様に悔りする事か
あるぞいの、ヤほんにお駒様もこな
様に直して貰ひたい、早う呼んで來
てくれさ云ふてゝあつた、ドリヤ知
らしませうと入にけり。見送る才三
が思案顔、詞ハテ合點のゆかぬ、これ
迄のお駒が親切、浪人の身を色々
世話してくれた志、夫に今夜の聲
入は、ハア、こりやさうから性根が
くさつてあるわい、エ、さう云ふ事

さは夢にも知らず、だまされたか口
 惜しい、もう此上は破れかぶれ、云
 ふてく云ひやぶらうか、アいや
 くく大事をかへた我身の上、
 ア、兎にも角にも世の中の、變り易
 いば人心、ハテどうかなこいつ置い
 つ、胸はもやく立つ居つ。お胸は
 下女が知せば、聞く心は飛立て
 ぞ、そらさぬ顔に一ト間より詞オ、
 髮結殿、さつきにから待かれて居た
 わいのこ、後先見廻し詞オ三様、へ
 エ逢ひたかつた逢ひたかつた取組
 り、譯も涙にあやもなき、取て突退
 け睨みつけ詞なんぢや逢たかつた、
 なんのまあおのれがあれに逢たかる
 今夜舞の來る事も、何も彼も聞いて
 居る、言譯も何も聞かぬぞ、見下げ
 果た畜生め、犬め、狐め、狸め、よ

う人をばかしたな、ものを云ふも穢
 らはしいと、胸倉さつて引しやなく
 り、踏んづ叩いつ突飛し、睨みつけ
 たる目に涙、お胸は顔をふり上て詞
 思ひおけない今宵の様子、聞かしや
 したら腹が立さ、嗚ぞ憎からう去乍
 ら、そりや聞えませぬオ三様、お前
 が私が其中は昨日や今日の事かいな
 屋敷に勤めた其中に、ふつき見初め
 た恥かしい、戀のいるはをたもさか
 ら、そつと私か心では、天神様へ願
 かけて、梅を一生斷つたぞへ、其お
 蔭やら嬉しい返事、二世も三世も先
 の世かけて、誓ひし仲ぢやないかい
 な、今宵の事をしらせまし、問談合
 もせうものぞ、待かれてあるものを
 あんまり酷い愛想づかし、たいて
 腹が癒るならば、心任せにした上で

もう堪忍をしてやるぞ、云ふてたん
 のうさせてたべさ、男の膝に絶付き
 餘所を憚る忍び泣き、眞實見えてい
 ぢらし。オ三も今さら手持なく詞
 さう云ふ事であらうさは、おれも思
 ふて居たれ共、今宵舞が來るぞ聞き
 腹の立つたもそなたが可愛さ、我々
 ても此様子、姿をやつし苦勞をする
 も、紛失の茶入をば、尋ね出した
 斗り、云ふて何處を尋るあてども
 なし、それ故にそこ爰さ、所をかゆ
 る町髮結、何から何迄そなたの世話
 眞實な氣は知つてある、ヤもう堪忍
 してたも、こらへてたも、コレ人
 見りや悪い、ヤサ泣顔しやんな、泣
 きやんなさ、脊撫さすれば娘氣の、
 そんなら疑ひ暗れたかへ、オウ嬉し
 やさ抱付き、割なき仲ぞ睦まじし。

奥の障子をそろ／＼と、探り出でたる親庄兵衛、藤七殿々々来てぢやないか、オ、大儀々々ア、晩にはちつと客もあり、月代が剃つて貰ひたいソレ、娘よ湯を取つて来てくれと、何氣なけれご氣味悪く、うち／＼もぢ／＼手盤に、汲んで來る間に剃刀を合す目と目に見えわかぬ、親は白髪の月代と、俱に氣をもむ顔と顔、云ひたい事も口なしの、離れ難なき二人が心詞サアマア／＼／＼髪もよいわ、頭はごうなと束れて下され、ヤコリヤ娘よ、ついて乍らちよつこいふて聞かす事がある、コ、愛へ來い／＼、扱てまア碌々に得心もさせず、今夜の智入、親甲斐の無理我まゝと、定めて恨んでもいようし、又若い者の事ぢやによつて、エ、エな

んぞかうそこらにむつちかくぢや／＼とした事もあるものぢや、けれご爰をよう、ヤ髪結殿、こな様も傍に居る不祥ぢや、ちつこの間ぢやと思ふて、聞いて下され、元わしも腹からの町人でもない、去るお屋敷に勤めて居たが、若い時の後先なし、色と酒さにつかひ果たし、お手討に極つたを、御主人の若旦那御誕生のお祝ひに、奥様が命乞ひで、何事なうお暇下され、トントモそれからばう／＼流浪の中、縁でかな此家に手代奉公、前の親旦那が不便を加へて下さつて、ヤ何にコリヤ跡をやる男の子とてまなげれば、幸ひ娘にわれを妻合し、此家督を譲るほどに、随分商ひ精出して、位牌所を潰さぬやうに、又娘が事頼むぞよと、他人の

あれに身上をほつかりと下さつた大恩、アノそちが母は女房とば云ひながら、マ、マ、おれが爲には、アリヤ大事の御主様ぢや、おのれやれ遺言の通り家に疵はつけまいと、身を粉に碎いて精出しても、サア時の天災は遁れぬ、此前の大火事にころりさ丸焼、あつちこつちする中に引負に合ひ、かけにはさられ、其上五年前からナコレ目を煩ひ、さう／＼内瞳と云ふものになつて、何から何迄左りまへ、問屋の仕切も不埒になりアこれはマどうせうぞいと思ふた所アノ今夜來る喜藏と云ふは、元は知らぬが近年の出來分限、講釋場でつい近付になつてから、念頭にしてくれて、ノ、マ、マ、問屋の諸将も付けたがよいと、金放り出してくれた

其時は、ア、若い人ぢやがテモ親切な人もあればあるものぢや、マ何かはしらす 忝いと悦んでゐる矢先、おれをひそかに内へ呼んでな、斯う身を入れて世話するも外ではない、そちの娘お駒を女房にもらひたいこのつ引ならぬ云ひかた、イヤと云や金戻せと云ふぢやわい、モどうも仕様模様もなく、マ、い、心得たご突延し、一寸遁れにだまして置いて、その中にはおのれやれ金濟ましてと思ふに任せぬ世間の不景氣、この月の差入から、金を戻せさいら立の催促、エなんのべちに、いつそ此屋敷諸道具も賣代なし、親子三人着のまゝ、出て行かうさと思ふたむ、サ愛をよう聞てくれ、あの女房を路頭に迷はしては、過ぎ行かれた親旦那の

お位牌へ、どうも顔が逢されぬ、マせつない所ぢやぞい、サ其せつない所ぢや程に聞き分けて、コリヤ娘此親が手を合す、ヨ、どうぞ今夜の所を機嫌よく素直に 孟 してくれい。ヨヨ、最前ちらり二人の様子、サ聞たでもなし又聞かぬでもない、水の流る人の行末、お歴々のお方でも賤しい業をする者も、コリヤ辛抱の一つぢや皆己やよう呑込である、いやぢやあらうと察してゐるが、爰又一番親が頼みぢや、ヨコリヤ娘どうぞ辛棒してくれと、義理と恩愛百千筋、からまる胸の白髪のお親父、恥も厭はず見えぬ目に、餘る涙の痛ばしさ、娘は始終聞くにつけ、勿體ないさは思へ共、思ひ切られぬ身の因果、なんごいらへもないじやくり

オ三郎も俱涙、詞事を分けてお仰有る事、一つは親御へ御孝行、お前様の心の内はナ、呑込んでおりますほどに、マアあいとお仰有りませ、サア、申し、サ、い、アイ、一言が百千萬の憂き思ひ、身を震るはして咽び泣き 詞 オ、い、よう得心してくれたな、イヤモ嬉しい、ア、何これ藤七殿、こなさんもいかい世話でごんす、コリヤ娘よ、親や夫婦の爲には、勤奉公さへするぢやないか、ハテ此金の濟迄の事ぢやと思ふてな、孟 さへして給ふたら、それからばわれが身持次第ぢや、先第一朝は持起されて、晝時分に起きて朝飯を喰べ、夜は又大勢人寄して何時共なう夜を更し、犂めが云ひ居る事をつべこべと口答へ、小遣

錢は湯水つかふ様にどつこまきち
らし、ソレ忘すれども針やなご手に
さるなよ、ぼろそ引すらうがだんな
いわ、見ぬ顔して居い、ヨ、毎年す
る八百屋お七の狂言、二た親が片意
地から、あたら娘を火放けにして、
今の世迄も浮名を流す、アリヤアレ
娘子ばかりへのみせしめぢやない、
世間の偏屈な親にも、手本にせいそ
の見せしめぢやわい、これを思へば
お七が親の久兵衛も、定めて何ぞ深
い義理、ア、その身にならねばしれ
ぬが浮世、髪結殿、大儀娘後にさし
ほく、心と思ひやむ目より、見
るめいたばしうばへには、見えれど
見ゆる子故の闇、親の心の内腫やみ
さぼく奥へ入にけり、見送る目さ
へ泣きはれて、ものをも云はず二人

共、抱合ひたる俱涙、理りせめて哀
れなり。表に繁き雪踏の音、人こそ
あれと耳に口、後にく二人は、
奥で勝手へ別れ入る。早黄昏の店さ
し時、くれぬ中より箱提灯、立派に
出立つ細身の脇差、無論勿体のむれ
くそ鬘、花舞風のつくだや喜藏、丁
稚が案内に主の庄兵衛、目は不自由
でも覺えの店、探り出迎ふ響應ぶり
詞ヤこれはく、舅殿嗚今晚はお取込
みでござりませう。ア扱て先づ何か
の義お得心下され我等も大慶、此祝
言が調はれば、いやなむらお取かへ
申した金の催促、それでは折角取續
いた此城木屋の家を遺してしまふ様
なものぢや。かれこれ氣の毒に存
じたが、マアく今晚の内祝言で物
事が丸う行くぞ申すもの、かう申せ

ば、マなんこやら如何なれど、仲人
も金、ナ金づくめにして参る拙者、
アかう申せばいかんなれど、此城木
屋の内にはち過ぎた舞様、へい、
イヤかう申せばいかんなれど、此
喜藏が簞になれば、城木屋の財産は
萬代不易と云ふものぢや、さうでは
ござりませぬが、舅殿と、扇子ばち
く身をふかす、むつさはすれど詞
コレハく丁寧な御挨拶、そなたか
らお仰有らidemもしてある借用金
併し金の借貸は相對、金で娘は進ぜ
ぬぞや、さー、いへばもの事に角
が立つ、マアく夫はほつておいて
座敷へござつて、娘やかにも。い
か様左様致さうと、互の底に一方身
イザ、御案内と勝手から、出る手代
の丈八が、詞ヤア舞と云ふは。コリヤ

「サ、い、コリヤ、いかにも舞は
 此喜藏、何にも云ふなく。ハアコ
 リヤなんてござりますか。アノ爰な
 お手代かな、いかにもこちの番頭丈
 八さ云ふ者でござる。ム、いかさま
 呑込のよささうな、サ、い、コリヤ
 呑込のよささうな、お手代殿
 ム、ちやが、い、變つた所で逢
 ふたなあ。ヤア舞殿、何んさいはし
 やる。アイヤかばつた、サ、舞殿
 にかはつて、今から此喜藏が、此内
 の旦那様ぢや、サ、此内の旦那ぢや
 によつてこれからは、おれが目をか
 けて使ふてやるは、旦那手代が始
 ての目見得、コリヤこれを祝儀にし
 つかりさ、渡して置くと、内懐か
 ら取出す、ふくさ包を手に渡し、詞ソ
 レ祝儀ぢや納めておけ。アイヤこれ

「舞殿、何も心遣ひさつしやるな
 丈八、ソレようお禮をいやれ。ア、
 いや、禮も何にも言ふ事はない、
 ナ何にもいふな、後にゆるりさ、舞殿
 マア奥へいて。いかにも」詞サア
 「ござれさ打ち連れて、一間へこ
 そは入りにけり。見送る手代が小首
 を傾け、詞ハテ扱てめんようなアノ喜
 藏めは、去年の春吉原で茶入をかた
 つた仲間内、いつが間にやら、ムテ
 モマアふらい出世をひろいだな、夫
 はさうさ此包んだものは、コリヤマ
 ア何やぢ知れぬて、ヤアこりやはれ
 其時騙つた凱歌の茶入、ム、ア、こ
 れをおれに渡したは、あいつが素性
 を云ふてくれなと頼みの心、ア、ム
 いそいつはマアいふてくれななら云
 ふてはやるまいが、云はずにおれが

黙つて居ると、アノ娘を彼奴が女房
 に、ヤこいつはつぼぢや、ハア、コ
 リヤマアア、どうしたらよからうぞ
 いつそ此茶入の事代官所へ訴人せう
 が、イヤ、マア、おれが身から
 してあやが抜けぬわい、こいつはど
 うぞよい思案もありそうなものぢや
 が、オ、夫れよ、アノ娘を連れて爰
 をついでするが上分別、ムさうぢや
 ござ打うなづき、暖簾おし上げ入
 りにけり、奥は今宵の稀人さ、勝手
 はばた、膳拵へ、笑ひの聲もつら
 き身に、傍見廻し娘のお駒は奥より
 ぬつと丈八がお駒さん、チ、お駒
 さん、そこにかいなアあいたかつた
 ぐ、エ、この人はいのなんじや
 いの私しにびつくりさしやつたはい
 のぐ、ごころかいの、サア

くく身ごしらへをさんせいの
くムウ身ごしらへさはなんじやいの。
なんじやいのさは曲がないむこ
めおぼつをせしめぬ間におまはんを
連れて此家をかけ落サアく早よふ
ま言ひつゝしのびの身ごしらへ幸
傍に人はなしコレ此ひまにつれての
き野々末山の奥でなご二人ひつそり
暮しましよ。おまはんを女房にする
ならばたごへからだは捨られて引ま
はしにあふまでもだんないくコレ
だじない。エ、此人はいの何言や
る私しやごごへも行事いや。何じや
ごごへも行く事いや。そんならやつ
ぱり此家でおれを且しゆにする氣じ
やの。ヤそんならまたんせ、しよが
あるこふなばれくいつそ算めをこ
ろりさいはしたればからぬおまは

んご女夫。こんなゑにしが唐にも有
るかさげつかるはいアハ、何れ
きるくしなまんすぞ、こふなばれ
く今奥へいて何じやのふ。マアね
ごころで盃ごさ、其酒に毒を入あ
いつころりさやりさへすりや。あご
ばらやまぬさいふ物じやい。おりや
一ぱしり生薬やで何でも毒を買てく
るそれをかならずかんなべエ。わす
れておまはん呑んすなドリヤ一走り
ま表の方一人呑込みかけり行く。何
をいふのも氣はそる夫の爲ご帯引
しめ心を定め奥の方行は女の棟ぞご
捨て一間へ急ぎ行く。

(床本) 鈴ヶ森の段

三重
M 急ぎ行く。人の身の捨所さ
か、名にふりし、鈴ヶ森の仕置場所

青竹にて矢來を構へ、あたりいきら
めく抜身の鎧、げばれぬ役人馳違ひ
科人今やご待ちかけしは、此世から
成る地獄の責、いまわしくも亦た恐
ろし。あはれ見に寄る諸見物、あ
すこや爰に立集り、何んご此科人も
モウ來さうな物ぢやなア、おれば牢
屋を引き出す直ぐに通町へかけ
ぬけ、それから河岸へ廻はつて、以
上四度見たが、扱て美しい娘ぢやわ
い、あれをころつごやるさいふは、
あつたらものぢや無いかいの、ア
イヤく何んば顔が美しうても心は
鬼ぢや、丙午ぢやあるまいし、男を
殺すさいふごさ、ごこの國にマあ
る物ぢや無い。オイくく左様一
圖に云はしやんな、女ご男を殺すご
は、モ、よくく堪忍のならぬわけ

ありや密男、オツトぎつこいしよ、や密女房事で有うも知れぬと、噫取々口々に、あんまり待つて寒なつた白水の茶屋で一がいしやうサアくごされど打連れて、皆々かしこへ走り行く。子を思ふ闇より闇に目も分かず、只さへ暗き父親の、手を引く妻も諸共に、涙に見えぬ道筋を、現さもなく走ることも、夢路を歩む心地して、やうくかしこにたどり着き見れば、殿しき竹垣に、さも恐ろしき抜身の鏡、あれで我子を殺すか、思へば氣も消へ心消え、わつこ斗りに泣き出す詞コレく嬢、爰がモウ鈴ヶ森か、今のそなたの泣き聲は、モウお胸は殺されたか、コレく早う聞かして下されと、問へば女房が涙聲、イエくまだ娘は來やせぬけ

れど、殿しい構へを見るに付け、可愛い娘を殺すか、思へば胸もはりさく苦しみ、私は身も世もあられぬと、歎げ、ばいさい父親は、オ、道理ぢやなく、はやい、今朝も門を引かれると聞いた時、かけ出て會ひたう思ふたれど、近所の衆にさめられて、内で泣いてばかり居たわいのう、今日も親子一世の別れ、せめて最期の暇乞、又一つには娘めが、云ひたい事もあるならば、聞いて迷ひがばらしてやりたさ、お主の爲さば云ひ乍ら、花の様なる子を殺す、おれが心を推量しや、こんな事知つたら、あらゆる神や佛様御信心申たらちつこは利生もあらうもの、外に佛へ願かけたら、難行ぢやと思召し、娘を救ふて下さるまいと、如來さま

ばつかり念じて居たのが、今では悔しい、未來は奈落へ落ち共、娘が命助け、下され南無如來様、なむ如来殿、エ、如來め、サ、い、い、斯う云ふがお腹が立たば、ごうぞ娘が助かるやう、お慈悲ぢや願ひ上げますと、愚に歸つたる親心、母は猶更正体無く、才三ごのが盗まれし、茶入さやらお出るならば、助かる筋も有らうか、夫斗りを樂しみに、げふよあすよと待つ甲斐も、情ない今日の今、死ぬる娘の心の内、思遣つていぢらしい。病み煩ひて死んでさへ子を先立し親の身は、悲しうてならぬもの、蝶よ花よこなでし子を、科人にして殺すは、モ、よく、前世的因果か、狂氣の如く身を悶え夫婦手に手を取交はし、絶え入り消

え入る憂き涙、餘所の見る目も哀れ
なり。跡をおひく下女男、ヤア旦那様、おかみ様、歎きは道理さり
乍ら、御怪我があつては猶ほ大事、
マア、おいでで手を引いて、暫く
かたへに介抱す。思ふ事、叶はれば
こそ憂き事の、戀と義理との諸手綱
二上り不惑やお駒は夫の爲、かゝる
憂き身の縛り繩、首にかけてたる水昌
の、珠數の數さへ消えて行く説教屠
所の羊のあゆみより、はかなき身ぞ
と觀念し、力無く引かれ来る。
代官堤彌藤次お駒に向ひ、最前屋敷
にて、役人中より申渡されし如く、
仔細あるそば云ひながら、假にも夫
を殺したる科は遁れず、重き刑にも
行はるべきを、お上の御慈悲を以つ
て、死罪に仰せつけらるゝ、まつた

今生にて申残すことあらば、何によ
らず云ひ置けよ、彌藤次よきに取り
計らばん、有難う存じ奉れど、云
ひ渡せば、顔を上げ詞何事も皆な私
が心でかゝる身の罪科、露いさゝか
もお上へ對し、お恨みはござりませ
ぬ、有難う存じますと、覺悟極めし
健氣さに、不惑と見やる諸役人、涙
紛らす斗りなり。お駒は顔を振りあ
げて詞御見物様、いづれも様、夫を
殺す大罪人、さぞ憎いやつ、大膽者
徒ら者ぞ、皆様のお憎しみも有うけ
れど、云ふに云はれぬ譯あつて、夫
殺しの科人ぞ、死恥さらす身の因果
不惑と申し一遍の、御回向願ひ上げ
まする、世上の娘御様むたは、此駒
を見せしめと、親の赦さぬ徒らなご
必らず必らず遊ばすな、エ、可愛い

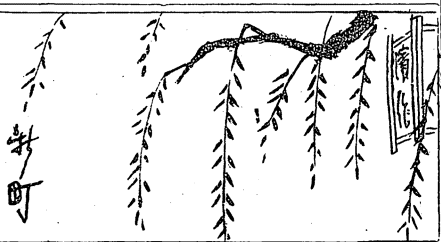
夫へ義理立てば、二親に歎きをかけ
また親々へ從へば、言ひ交はした夫
へ立たず、果は斯うした淺間しい、
此世からなる劔の山、身を切裂かれ
憂恥ぢを、さらす、定まる因縁づく
約束事と諦めても、二世の契りのそ
の人と、一世に限る兩親の、もしや
群集のその中に、見えはせぬかと伸
び上り、伸び上りても竹垣の、透間
がくれの人群れに、目も泣き腫れて
見え分かぬ、心を思ひ諸見物、濡れ
ぬ袂は無かりけり。群集押分け兩親
は、竹垣に取つき絶り、詞コレコレ
お駒や、さ、様も此母も、親子一世
の暇乞ひぢやもの、来て居いでよい
物かいのう。コレ、娘、さぞ
や此頃の憂苦勞、娘も顔も、ア、瘦
せたであらうな、どう様にして居る

事ぢや、エーおりや顔が一目見たいわい
 くくやい。イヤく、わしやこな様
 の見えぬのが羨しい、見すばらしい娘
 の形、見て居る母が此の胸は、裂けるわい
 のさ、ごうご伏し、前後不覺に取亂す詞さ
 の様、かゝ様、よう来て下さんした、わし
 や逢ひたかつた、逢ひたかつたくわいな
 オ、逢ひたい筈道理ぢやく、親父殿や此
 母より、まだくそなたが逢ひたう思やる
 ア、コレくかゝ様、もう云ふて下さんす
 な、聞く程戀しい床しいお人の、お顔が目
 先にちらくさ、片時へんじも放れぬわい
 な、放れぬわいな。私かこういふ心から、
 お年寄られたお二人へ、ごんな歡きをかけ
 まする、必らずく泣かすとも、娘でも何

んでも無い、アリヤ前生の敵ぢや、憎いや
 つ不幸者さ、思ひ切つてぶつくりさ、歎き
 をやめて下さんすが、少しは冥途の罪ほろ
 ぼし、私か死んだその後でも、必らずくよ
 く思ふて、煩ふて下さんすなへ。ソレ
 く其様にしほらしい、孝行なこ言ふて
 たもる物、くよく思はいでかいのうく
 く、何の跡に片時も生きて居られう、二
 人乍ら追ひつき、未來で逢ふはいのう。ア
 コレコレ申、其様におつしやる程、私か身
 に罪も重なる。申かゝ様、今のお人も見え
 たなら、私か事は是非も無し、ごうご實を
 詮議して、御出世なさを冥途から、樂し
 んで居りますさ、よういふて下さんせい。
 エ。エ。まだ其上氣にかゝるは、私か死ん

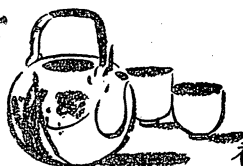
北店・即席・にぎすし
 南店・即席・御料理
 電話新町四二六二番

濱 町



だ後(あと)にても、彼(か)のお人(ひと)が爰(こゝ)へ來(き)て、淺間(あさま)しい形(かたち)を見(み)やしやんしたら、ひよつこ愛想(あいさく)が盡(つ)きようかこ、私(わし)や、夫(こゝろ)ればかりが悲(かな)しいと、今(いま)死(し)ぬる身(み)の今(いま)までも、おぼこ娘(むすめ)のあごなさを、思(おも)ひやりつゝ、二親(ふたごころ)は、前後(ぜんご)正(せい)体(たい)打ち倒(た)れ、せき上げく叫(こゝろ)び泣(な)き、音(ね)は濱(はま)邊(べ)に打(うち)寄(よ)る、浪(なみ)に波(なみ)ます涙(なみ)なり。果(はて)しはあらしこ下(しも)部(べ)共(ども)、時(じ)刻(こく)移(うつ)ると引(ひ)立(た)てる、二人(ふたり)の親(おや)は竹垣(たけがき)に、隔(へだ)てられたる親(おや)子(こ)の分(わか)れ、見(み)物(もの)群(ぐん)集(じ)は口(くち)々に、宗(しゆ)旨(じゆ)くの手(た)向(むか)草(くさ)。折(せ)もこそあれ才(さい)三(さん)郎(ろう)、丈(ぢやう)八(はち)に繩(なわ)をかけ、群(ぐん)集(じ)押(お)分け矢(や)來(らい)の内(うち)、御(ご)預(よ)けの茶(ちや)入(い)の盜(たう)賊(ぞく)、喜(き)藏(ざう)に紛(まぎ)れなき由(よし)、此(この)丈(ぢやう)八(はち)が白(はく)狀(じやう)故(こ)、再(た)び茶(ちや)入(い)も我(わが)手(た)に入(い)り、又(また)喜(き)藏(ざう)丈(ぢやう)八(はち)兩(りやう)人(にん)は、此(この)才(さい)三(さん)郎(ろう)が親(おや)の敵(かたみ)、お上(かみ)へ委(ま)細(さい)申(まを)しあげ、お

胸(むね)が命(いのち)救(きう)免(めん)の狀(じやう)、御(ご)披(ひ)見(けん)あれさ差(さ)出(だ)せば、彌(や)藤(とう)次(じ)取(と)つて押(お)ひらき、詞(ことば)成(な)程(ほど)々々紛(まぎ)れなき赦(ゆる)しの趣(おもむ)き、親(おや)の敵(かたみ)さあるからは、喜(き)藏(ざう)丈(ぢやう)八(はち)兩(りやう)人(にん)は、才(さい)三(さん)郎(ろう)に心(こゝろ)任せ、お胸(むね)は直(す)ぐに兩(りやう)親(おや)へ、御(ご)赦(じや)免(めん)成(な)るぞとありければ、はつご計(はか)りに庄(ぢやう)兵(へい)衛(ゑ)夫(ふ)婦(ふ)、夢(ゆめ)に夢(ゆめ)見(けん)る心(こゝろ)地(ぢ)して悦(よろこ)び涙(なみ)ぞ道(みち)理(り)なり。お胸(むね)が繩(なわ)目(め)さくくくご解(と)けて結(むす)びし戀(こゝろ)娘(むすめ)、千(ち)代(よ)も變(かは)らぬ御(ご)惠(めぐ)み、重(おも)くくて黄(わう)八(はち)丈(ぢやう)、昔(むかし)語(ご)りぞ今(いま)こゝに、傳(た)へくし筆(ふで)の跡(あと)、世(よ)々に傳(た)へていちじるし



大及御池橋

茶筌

電話新町二六三番



赤坂並木より古寺迄

切 喜太八 彌次郎兵衛道中膝栗毛

赤坂並木の段より
古寺の段まで

彌次郎兵衛 豊竹つげめ太夫
喜太八 竹本鏡太夫
和尚 竹本文字太夫
親父 豊竹富太夫
仙松 豊竹千駒太夫
竹本龜久太夫

野澤勝 市
竹澤團 六
豊澤猿太郎
鶴澤友衛門
鶴澤清二郎

この淨瑠璃は十返舎一九の名作「東海道膝栗毛」の趣向をそのまゝ、脚色したものでこの段の内容は彌次郎兵衛と喜太八が赤坂並木で失敗し喜太八は寺へ遁げこんであるが彌次郎兵衛が死人の姿で尋ねて和尚に愚弄されるがそれは悉く狐に化されてゐたといふ面白い彌次喜太道中記です。

(床本) 赤坂並木の段より

古寺まで

(謡) M いでや此春の景色の麗に

おふさきするさの稀人も袖ふりばへて
面白や(狂言)是は關の東に住む喜太
八彌次郎兵衛と申者にて候扱も此
度都方を一見せばやと思ひ立て候
殊更けふも早ひくれて道を急ぎ候
程に宿を取らばやと存じ候
(ドリ) 東路をいつしか後に三河路や
あた二川も打ち過ぎて歩むに馴ぬ旅
づかれ物岩穴の觀世音御燈のかげも
ほのぐらき御油の宿をも出放れて並
木原にぞ着にける。喜太八かたへに
荷をやつとこささおろしア、ヤレ
くくたびれたく此マ彌次
様は何をしてゐるんだろア、早くく
ればよいにナア後の茶店で聞けば何
でも此松原にはわるい狐が出るこの
事だがア、くらさばくらし提灯はな
し何だかうそ氣味のわるい事だなア

人形

彌次郎兵衛 吉田榮 三

喜太八 吉田文五郎

和尙 吉田小兵吉

親父 桐竹門造

粹仙松 桐竹紋司

此彌次様はなせ遅い(ナゲブシ)わら

じむ切れたか門止かご後を見やりつ

延上りまつ毛をぬらす後より彌次

郎兵衛は喜太八がかねての憶病知つ

たればおどしてやらんさ小隠れし思

ひ付たる狐の面手拭のはし引結び顔

へすつばり引かぶりさし足拔足後よ

りワイ。ア、申し、御免なさりま

せ、く、く、わるい狐さば申しませぬ

よいおきつ様でござります御免、

さいふ鞆はばの根も合す膝がた、

彌次郎兵衛俄に作り鞆ヤイ、く、く、

ヤ、ライノヤイ、ヘイ、く、ヘイ、く、

くのおへ、ら、ヘイのヘイ、く、く、

儂憎い奴、けふもかごかき共、錢を

一本ちやらめかし酒肴をおこりし事

よもや忘れはしをるまい。ア、申々

お前様はよふごぞんじでござります

なアほんのそれはでき心慾氣ではご

ざりませぬア、イヤ、く、く、ぬかす

まい、く、まだ有る、く、鹽井川では故

もなき座頭の肩におぶさつて川を渡

りあまつさへ座頭の買つた其酒を盗

喰ふコナ横道者めがア申々其かわり

尻が割れて酒代は皆わつちが拂やし

たから其勘定は濟で御せエやすぬか

すまいまだ有、く、日坂の泊りでは信

濃みこのば、アが所へ夜這にうせ佛

壇の中へすててふてんのでこなさお

つこちた其騒ぎを儂も連の佛の様な

彌次郎兵衛にぬり付け儂はぬく、く、

しらぬ顔重々の不屈者めが其かわり

には是をくへご傍に有り合ふ馬の糞

杖につ、かけ差出せばエ、其馬のふ

んを私にチノエ、いやか、じやご

申して夫れがマア、喰れば連行くサ

坂はてる／＼鈴鹿はくもるエ、喜太公てめへも何かやれよおれは今おどろかされて聲もなにも出やしれエやそんな事云はずにやれよ笑つちやいやだよ何笑ふもんかいそんならやろよ土山間の間の土山雨ふるハ、うんまごさごつこいしよア、コウ／＼彌次様／＼アノ向ふの方に何だかコウ白い物がちら／＼見えるはアリヤマア何だ有ふなム、アレカアリヤらいさものちんちよふよナニ大黒様のちんちくりん何をいつてやがるんだい、甲の提灯だエ、そんなら爰は墓所かエ、きびの悪るい何だかコウ首筋がぞつ／＼とする様だエ、コリヤ折りわるふまた雨じやいま／＼しいまつぶやき／＼行先へちよ／＼／＼小坊主が形にも似ざるばつてう笠徳利片手に歩みくるそれを見るよ、り喜太八がソリヤこそ出たは化物じや彌次さんゆだんせまいぞやさぶる／＼ふるへば

彌次郎兵衛幸ひ有合ふ天秤棒腕に任してぶちのめせばアイタ／＼／＼アレ／＼／＼やアイ誰かひごいめにあはせるはヤイトいふ聲聞き付けかけくる親仁此体見るより悔りし彌次が胸ぐらしつかさ取り此悴には何さか有つてかはいそふにぶちのめした有様にサアぬかせ聞かぬ／＼せせちかへば喜太八見るよりコリヤたまらぬゆるせ／＼さ一人に後をも見ずして木の根につまづいてひざぶすりむいて赤い血を流して、こすり／＼逃て行くヤイ／＼／＼コリヤチイ喜太八おれ一人を残して置いて逃るこは胴懸じやエ、／＼／＼是は／＼おまつさんで御座りますかエ、お前のお子様共存じませす只化物じやこ心得まして打ましたは大きな産相眞平御免下さりませイ、ヤ聞かぬ／＼折角買にやつた五合の酒雫も残らすこぼしてしまいいさい者をむごらしうひごいめに合

化粧タイル

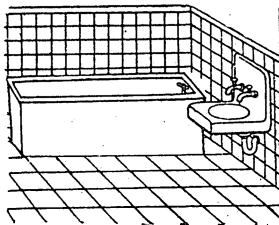
水道衛生工事

洗面、浴場、

水洗便所設計

汚水浄化装置

特許無臭便所



西區立賣堀北通二丁目
新一橋

岡部 商會

電話新町 一六六九
二二七六

阪急 夙川

岡部商會支店

電話西宮 一九七六

はせたなごぐつと緋ればア、申し／＼マ、
 ー、それで咽の佛様かだいなしになりま
 す。ちよゆるめて／＼下さりませ五合の
 ー酒がこぼれたとは五合どうだんお氣の毒
 に存じます代は私が出しますから一升のお
 願ひかん貳升とおつしやつてくださりませ
 きつとお禮に三升いたし升から四升いはす
 ご御了簡五升でござり升エ、しやれ所かい
 ア、御腹立は御尤疵養生代にはかうやく代
 を出しますからごふぞ赦して下さりませ
 ム、夫なれば赦してやらふサア金出せハイ
 いくら出しましよナチ、命はりに安い
 けれど十兩にまけてやるエ、十兩さんだ事
 おつしやります十六文のかうやくを百員付
 けても一分であまるごふぞ二歩にまけて下
 さりませイ、ヤならねエ二歩がならさ三歩
 インヤそんなら四歩エ、しぶさいやつじや
 ならぬはい／＼夫じやおまへでできない相談

じやい、値じや高いちごまけれエム、そん
 なら十兩の内を一兩まけて九兩わいエ、十
 兩の内を一兩まけて九兩とは面白いハ、
 ー、しかし間夫代でも七兩二歩はあたりま
 へぢやエ、ヤア知らざ半分値さごふぞ夫で
 御了簡さばごんあなたいム、五兩にまけい
 か五兩なら安いものじやがまけてやるはサ
 ア金よこせエ、エ、サア金よこせエ、現金
 かへ知れた事じやハイ／＼、只今勘定い
 たします／＼エ、かふさエ、私が咽のいた
 いくるしみが、あけて四九八九と四九廿六
 匆と八九七兩二歩と五兩の金を差引して三
 兩と六匆お前の方からおつりを下さりませ
 エ、さまん、のたは言モウ了簡がウヌなら
 ぬわいエ、又じや／＼、又しまつたア、申し
 金上げます／＼、實は道中が物そふで御座り
 やすから金ば胴巻に入れて腹にまいてござ
 りますおさつさんお前さん一寸手を貸てお

冬寒さを温いか

南一温泉料

獨特の温泉で爽快な気分を
 善美な湯宿に盡す。



四ツ橋

お電話の話御用は

南
 5番・701番・711番
 (長)132番・5291番
 西630番

のみさな

南一温泉料

くんなきいチ、そふで有る、そんなら出
 してやるこれか、ホーア、そりやしらみ
 紐でござります。なんだきたないやらふだ
 なそんなら是か、ア、ク、ク、ク、くすぐつた
 い、く、そりやへそだ、何だへそだてめエ
 のへそは大き出べそだなア、ハ、ハ、ハ、ハ
 ー、ー、其下の方にきんが二兩包んでござ
 りますそれおまにはエ、いま、く、しいべら
 棒めそんならいつそ此きんをさ方に任せ引
 摺みぐつこしむればア、イ、タ、く、く、く、死
 るはい、く、く、ハ、ア、と斗りにうんさ其ま
 くいきはたへにけり遠の親仁も惻りしなむ
 三死だは是幸ひと彌次郎兵衛が帯ぐる、く
 ますつぼりはいだる丸裸墓所の方よりさつ
 かばと經帷子につの帽子手早にきせてサア
 く、これでちつさは腹おいたかうやく代の
 其かはりさ着物荷物を引さらへ千松よこい
 こそ手をひいてあし早にこそ立歸るしだいに

更くる夜嵐のぞつさ身にしみ彌次郎兵衛息
 吹かへし起上りチ、寒く、こ、はマ、ごこじ
 やしらんでおれはマア一体ごふしたのじや
 エ、こふごエ、マア御油の宿を放れて狐の
 まれをしたはト夫から小僧をぶつたはト喜
 太八は逃たはトそこで咽喉をへ上げられた
 はト夫から後ばさん夢中で何にも覺えが
 れエンだがコイツハ夢か知らんてチ、さむ
 く、イヤ、く、向ふにはかしが有るはいし
 て見りや夢ではないはいハテごふしたんだ
 るふと撫廻し、く、ヤア、く、く、おれが着て
 いるはコリヤコレ經帷子じやそふして額に
 ごましほが當てるヤア、く、く、そんなら
 おれは死だのかハア悲しや扱はきんをへ上
 げられそれで死だかハアヤア、く、そんなら
 爰はめいごの道かいやい、く、ア、淺ましい
 心細い身に成つたこんな事ならか、アにも
 さつくりさ暇乞して置ふ物こんなに早ふ死

あなれたる名畫の封切

華麗嬋妍の

レヴエウ

・道頓堀・

座 竹 松

ふさは知らなんだくめいどの道はいくら
 と聞いたがほんにコリヤ眞くらがりだごふ
 ぞ極樂へ行きたい物じやが十萬億土まやら
 言が大体では行かれまいア一心細いく斯
 成る事共露しらす嘸や後にて女房がけふは
 御ぶじの便りも有るかあすはつかひの人も
 やま日をかぞへ指を折り待こまれたるかひ
 もなふ死んだ言ふ事聞たなら嘸悲しかる口
 おしかる逢たかつたで有らふのになぜ逢は
 してエコレ下さんせぬぞいな魂魄あの世
 に返るなら最一度かアの顔見たや夫迄も
 なく今こゝでおれが死だら後篇に嘸や一九
 がこまるで有るそれも悲しくかアもかは
 ゆし心一つを二道にめいどの闇に迷ふさは
 何の因果ぞ情ないごふぞ今一度生かへりか
 アの顔が只一目みたいわいのご身をもた
 へすより上げたる水ばな涙と涎一時に落
 て流るゝ三つせ川末は漲る風情也アア迷

ふたぐアノ鐘の音は髓にお寺極樂浄土の
 導引頼みお十念でも授からふチそふじや
 く立上り鐘鳴方を知るべにてたどり行
 こそはかなけれ。(文彌)かくさもしらす喜
 太八は漸運れ此寺へ一夜の情丸癡して夢
 さなく又現さも泣寝入つたる折こそ有あは
 れよのばかなき物はかけらふの(文彌)あり
 やなく彌次郎兵衛死だと思ひつめたさ
 をこらへかれたる雨涙火かけしるべに立よ
 つてさも哀れげなるこばねにて申し私
 は娑婆の者お願ひ有て参りましたごふぞお
 願ひ申ますさいふ聲聞き付け和尚は立出で
 誰じやく何用じやま戸口の鐶表にも和
 尚様私は今すぐ死たてのほやく亡者で
 御座りますごふぞお願ひ申しますさいふ聲
 寝耳に目覺す喜太八起るご明ける門の口彌
 次郎兵衛も姿もくら紛れさらへる袖のふり
 合せ和尚ご心へ彌次郎兵衛をむりに引込み

は座中の走師

のみじなお

劇郎五家迺我曾

いさ下ひ笑おさんうてし流を涙でひ揃おんさ皆

取りちがへ戸口を内からびつしやり引立ッ
 リヤこそ亡者が来おつたぞ和尚様 必ず外
 へ出まいぞや戸口はおれが押へて居るア
 門に居るは幽霊じやて儂を入れてよいもの
 かさいふもむた〜膝わな〜寺のじしん
 でどうぶるひエ〜何だかコウまつくらがり
 では何にも分らぬ火打ちいづくさくらがり
 をさぐる手先に火打箱がち〜ふるふ附木
 の光りヤアコリヤ和尚じやない幽霊じや
 く〜ア〜赦し賜〜く〜さ着物をあ
 たまへすつぼり引かぶり正体さらになかり
 ける彌次は恨のふるひ聲ノウ恨めしい喜太
 八め儂おれがしめ殺されるを見捨て能も逃
 おつたなア〜赦し賜〜く〜イヤ〜く〜恨
 の魂魄此世に残り汝もめいごの道連れにい
 ざ連行て思ひむらさん来れや喜太八サアこ
 いと付廻されて喜太八も氣も魂もきへ入
 る斗リヤア〜く〜そんならお前は殺され

て迷ふてきたかハア悲しやそふさはしらす
 今迄も此彌次さんはごふしてぞと案じて後
 へ戻らふにも何分こはくて一足も後へかへ
 れる事かいのせふ事なしに此寺頼み泊ても
 らふた斗リじや是迄のよしみを思ひ恨をば
 らして浮んでたべなむあみだ佛〜く〜南
 無妙法蓮華經〜おんあほきやべろしやの
 おまかほたらばにはんごはちんばらばらば
 りたや助け給へ天理王の令高間ヶ原にイヤ
 く〜く〜修羅のくげんも其方故只恨めしや
 ひやめしやお茶のめしや麥飯やさろ〜にな
 らく〜連行くこ又立よれば身をちいめア
 アレ人殺し助けてたべ和尚様〜のふと呼
 はりわめけば戸を蹴放し和尚はかけ入り押
 し隔て珠數さら〜く〜押しもんで東方には
 五三一南方にはぐんだり夜及明王西方でん
 く〜九馬の三北方句二は五六十中央だんま
 りふさい明王五千有りや所詮ふけん〜泊

新成美團お名残公演

二十月興行の

座

角

正午五時半回開演

れや〜浮めや〜と祈りける胸に當りし彌次郎兵衛赦させ賜へア、うくるしや我こそ東の都に住む彌次郎兵衛と言ふ者なり御油の宿の泊りにはすれ不慮のさいごを遂げたりしが日頃からの念佛ざらめいめいごの闇路に方角知れず何卒出家の御情けに彌陀の御國へ御導引頼み上げます〜と涙さ鼻を横なでに恐れ〜て願ひける和尚うなづき善哉〜冥途の道の引導は差當たる愚僧の役。去りなからふせない經は讀むたし地獄のさたも錢次第布施物持參召されしかと聞いて彌次郎兵衛あたまをかき成程御尤路銀も少々有つたれど御油の宿にてすつぱりはがれ身はちやんぶらのすかんびんどふぞお慈悲に結縁にて、彌陀の御國へ御いんどうお授けなされて下さりませアイヤ〜近年世から悪ふて寺から里の力持それ故けんきんかけれなし。錢なき衆生は助からず

七里けんばいぜかせ〜ハアそれは何共ゼひかないコレ〜喜太八今聞く通りの此仕合せどうぞ貴様が持っている路銀をおれにかしてたもエ、めつそふな〜此金かしてたまる物がエ、さんだ事〜ム、そんならいやかエ、恨めしやア、コレ〜貸はいの〜と肌につけたる胸巻をぐる〜ばづし和尚の前さもおしそふに差出しハイ〜申し和尙様此金は私が命代りの金なれどコウ見込まれたらしよこまぬいどうぞ是にて御引導授けてやつて下さりませ。チ、善哉〜去りながらコリヤコレわづか二三兩十萬徳土の道なれば宿々泊りのはたご代きちんにしてもたらぬ〜其上三づの川の越錢ば、アの運上極樂の東門番への心付四十九日や五十兩合せて百兩百ヶ日の追善供養御茶湯代にもたらぬ〜じやと申してモウ夫切一文もござりませぬ身に付いた物さては

い白面にきぬ屈理

切封の畫映ネキ帝

座天辨 堀頓道

ひぜ……料覽観いすやトツアに位本様皆

きつとお氣に召す
今日の帝キネ映畫
を御覽下さい。

千手観音様ばかりム、そんならそこで裸に
 なり着物残らずぬがつしやれエ、夫じゃお
 前寒ふてこらへられませぬはいのム、そんなら
 死人はこなたの連なれば連ていんでも
 らひませよエ、めつそふな事おつしやりま
 すはいな然らばぬがつしやれじやと申しして
 是がマアそんならおれがおはれうかア、コ
 レ、こんだ事、幽霊をおふてごふ成る
 物がそんならぬぐかサア夫はサア、
 エ、是はまた情けないムテ何んぞせふ
 せひがないア、ぬぎます、
 くに帯ぐる、と布子諸共引丸め差出し
 ハイ仰せに随ひ脱ましてござります、善
 哉、然らば道引致さん、珠數取り上げて
 勿体らしく汝元来しやれきのごとく臨終正
 念ちや、むちや、足は飛ぶに任せ歸る
 を知らずこいつ元來江戸子にてちんばら
 くばらばり込み金銀財寶芥の如く遣ひな

くし女郎小郎下女藝者後家尼人の女房まで
 ちやらくらこんたん手くだをもつておんこ
 ろ、せんだりまきやアおんころ、せんだく
 だく婆アのおふまくさんまんだのふだアさん
 せんだくじやこいつは、一たいどうらくじや
 なむ三寶めつぼうかいむ中さん、らつび
 らんぐはい五十三次股にかけ道中たつしや
 しやれ悪口喧嘩口論其くせ聞た風めつたむ
 せうつよい顔お先まつくら大きに憶病それ
 故丸裸やみくも言語同斷何ぞいふと畜生呼
 ばり馬牛犬猫ちんあしたに道を聞て夕に死
 す共何ぞいさばん丸はだか明朝さめらつて
 すべて夢のごとく恐るべし、此行先ばこ
 もかぶり行たい所へつ、と行けと衣装路銀
 を引さらへ一間の内へ入るよと見へしが和
 尚が姿、忽ち有りし家居も一時にきへて
 後なく明烏只ほうぜんと彌次郎兵衛どふし
 てこ、喜太八も互ひに顔を見合せて、あ

お笑ひのさまらぬ
いきな舞臺へ

松竹

家庭劇

（ごうぞ）

浪花座

十二月興行

正午と
五時半
二回開演

きれ果たる馬鹿らしきアコレ〜彌次様
 お前の形はソリヤ何さいふ形じやチャ〜
 〳〳こりやどふしたんだるおいら夕ア
 死んだはづだがカノ親仁めにすつばつこは
 がれて仕舞ふた、サアわしも坊主に皆取ら
 れ裸百貫一文なし今の坊主はごこへいたの
 やつぱりあいつも狐で有ふ大そふにばかさ
 れたぜ、イヤコレ喜太八ごうぞ仕様有は有
 るまいかごうと言ふたら乞食より外に思案
 はないはいなアアコリヤヤ、イそんな心細
 い事いふなやいそれださいふてごうなる物
 かお前も裸おれも裸かうも有ふか 狂歌 M
 ぞふせうぞ何んさおしやうにみなさられや
 う〜じゆばん一つ喜太八さハごうだい中
 々うまくやりやがつたそんならおれも一つ
 やつてやるふエーこふつこ M ゆうべまで
 かされ着てゐた彌次郎兵衛けふかたびらに
 なつた哀れさ。ハ〜ヤ夜があけたにこん

なさまでうろ〜してもいられまい何かよ
 い思ひ付は有るめエか有〜コレこゝには
 うきの古いのがある。是でおれが奴ふるか
 らお前は其下駄の古いので拍子を打ちなさ
 へそふして成りさも行ふじやないかイヤコ
 イツハちゑだ面白い、そんなら喜太八ふり
 だせろさつかけべい(行列)ハレワイサノサ
 夕アもさん〜化された裸で道中も成る物
 か成つてもならないでもしよこさむないハレ
 ワイサノサコレワイサノサ馬鹿な宿入り大
 鳥毛ヒン〜ドウ〜しやん〜夢ぢ
 をたごるこゝちにて膝栗毛逆世の人の笑ひ
 の種を成りにけり。

吉例顔見世興行

東京・四條

・晝部午前十時開幕・

南 座

・夜部午後五時開幕・

名人人形淨瑠璃

(文樂合本)

定價金八拾錢

趣味の淨瑠璃社

